
草原と平穩の国の物語

絹野帽子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

草原と平穏の国の物語

【Nコード】

N03470

【作者名】

絹野帽子

【あらすじ】

「ある日、家に帰るとエルフ族のメイドさんがいた」……キャラクター達の会話形式で進む異世界ファンタジーものです。

これは別所で連載しているものを改めて投稿しています。性的な台詞がたまにあるので「R15」としていますが、直接的な描写はないので、多分全年齢に近いです。

キャラクターと設定

キャラクター

第1話での登場人物のデータです。

男主人

【種族】：人間族 【年齢】：24歳 【性別】：男性

【一人称】：僕

【設定】：

- ・ 本作品における主人公ポジション。
- ・ 独身で「草原と平穏の国」の王宮に勤めている。
- ・ ややヘタレ。

長ミミ

【種族】：エルフ族 【（外見）年齢】：22歳 【性別】：女性

【一人称】：私

【設定】：

- ・ 本作品におけるヒロインポジション。
- ・ 男主人の家にいきなり現れたメイドさん。
- ・ 少々系クールの予定。

美女妹

【種族】：人間族 【年齢】：23歳 【性別】：女性

【一人称】：不明

【設定】：

- ・ 男主人の妹で美女らしい。

各種設定

第1話を読むにあたって、ちょっとだけ覚えると便利な設定です。

大陸と国家

「草原と平穩の国」「森林と調和の国」「鉾山と武勇の国」「砂漠と神秘の国」に分かれる。

男主人は「草原と平穩の国」に住んでいる。

人間族

寿命は70年くらい。どの国にもいる種族。

エルフ族

寿命は200年くらい。「森林と調和の国」に多い種族。

大体20代で一時的に老化が止まり、平均的に150年は若い姿のままである。

共用語

大陸全土で使える言葉。方言もあります。

古代語

魔術学とかに使われる言葉。カタカナで英語チック。

第1話『家に帰ったら、長ミミさんがいた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「……………」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「えっと…………もう一度、言ってくれる？」

【長ミミ】「では、こほん…………お初にお目にかかります。エルフ族の長ミミと申します、ご主人様」

【男主人】「えっと、ご主人様？ 誰が？」

【長ミミ】「ユー（男を指差し）」

【男主人】「ミー？（自分を指差し）」

【長ミミ】「イエス（こくり）」

【男主人】「なんで、古代語？」

【長ミミ】「ご主人様は、少々共用語が不自由なのかと思ひまして」

【男主人】「いや、古代語よりは得意だけど…………」

【長ミミ】「冗談です」

【男主人】「そう…………えと、共用語お上手ですね」

【長ミミ】「恐れ入ります」

【男主人】「……………なんで、僕の家にいるの？」

【長ミミ】「メイドですから」

【男主人】「僕は、長ミミさんを雇った覚えはないんだけど」

【長ミミ】「がーん、ひどい、あの時の言葉は嘘だったのですね」

【男主人】「えええっ!？」

【長ミミ】「私を抱きしめながら、『一緒に来る？ 僕が面倒を見てあげるよ』と言って下さった優しい言葉」

【男主人】「え、それは誰!？」

【長ミミ】「お酒とは怖いものですね…………」

【主人公】「いや、僕そんなに酔わないのに!? 嘘っ!」

【長ミミ】「嘘です」

【主人公】「なんで嘘をつくの!? 騙す必要がどこにつ!?」

【長ミミ】「ふふふ……」

【主人公】「いや、そんな無感動に笑われても、どうしていいかわからないし!!」

【長ミミ】「私の真の雇い主である美女妹様のご指示です」

【主人公】「あーあー、納得。美女妹に派遣されてきたのね(ぐったり)」

【長ミミ】「末永くよろしく弄ばせて頂きます、ご主人様」

【主人公】「ああ、こちらこそよろしく……できるかあ!!!!」

第2話『朝起きたら、長ミミさんがいた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様」

【男主人】「んーあー……（ごろん）」

【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様」

【男主人】「……もうちょっと、寝かせて（ごろん）」

【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様 スリー」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様 ツー」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様 ワ……………」

【男主人】「……待ったあー！！ なんで“カウントダウン減数詠唱”が混じってるの！？」

【長ミミ】「ちつ……………」
「ご主人様、これは魔術の詠唱などではなく、ただの『メイド式起床法』です」

【男主人】「舌打ちされたっ！？」

【長ミミ】「朝です。起きてください、ご主人様」

【男主人】「あー、もー、なんかどこからどうツツコンでいいやら……とりあえず起きるよ」

【長ミミ】「お召し物はこちらにご用意しましたので、着替えたら食堂にいらしてください」

【男主人】「（けどまあ…………いいなあ、和むというか…………）」

【長ミミ】「今日の朝食は、とりえずパンとスープ、サラダを用意しました」

【男主人】「（なんていうか、そう、生活に潤いがある…………）」

【長ミミ】「卵の方は目玉焼きにしようと思いますが、焼き方はい

かなさいますか？」

【男主人】「じゃあ、片面焼きの半熟で（もそもぞ）」

【長ミミ】「かしこまりました……ところでご主人様、一言よろしいでしょうか？」

【男主人】「ん、なに？」

【長ミミ】「妙齡のレディの前で服を脱ぐのはどうかと思います。意外と遅いのですね」

【男主人】「!?!?!?（赤面）」

【長ミミ】「おや、照れてらっしゃるのですか？」

【男主人】「突然妙なことを言われたから、驚いたただけだ!！」

【長ミミ】「では、そういうことにしておきましょう」

【男主人】「うつつ……………」

【長ミミ】「ああ、申し忘れておりました。おはようございます、ご主人様」

【男主人】「……………うん、おはよう」

第3話『触っていい? と、長ミミさんに聞いた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「(じい)……………」

【長ミミ】「ゝゝ(ピコピコ)」

【男主人】「(じいゝゝ)……………」

【長ミミ】「……ご主人様、何か仰りたいことがあるのなら仰ってください」

【男主人】「え、いや、なんでもないよ」

【長ミミ】「ウザッ」

【男主人】「ぐはっ……(ばったり)」

【長ミミ】「その心に傷を負った演技もウザイですから、で、私の耳がどうかしましたか?」

【男主人】「気付かれてたっ!？」

【長ミミ】「何を驚いてるんですか、ネットリした視線で見ているにせよ」

【男主人】「え、いや、ちょっと……ピコピコ動くのが可愛いなあ
って」

【長ミミ】「!?!? ……えっと、恐れ入ります(ぺこり)」

【男主人】「その耳ってさ、自由に動かせるの?」

【長ミミ】「人間族の方にはよく聞かれるのですが……そうですね、足の小指くらいの感覚で動かせます」

【男主人】「へえゝ……(ウズウズ)」

【長ミミ】「質問は以上でしょうか?」

【男主人】「あ、その、耳に触らせてもらっていい?(ウズウズ)」

【長ミミ】「耳ですか?」

【男主人】「ダメ?」

【長ミミ】「ちなみにエルフ族の女性は、異性が耳に触ると子供が
できます」

【男主人】「えええっ!？」

【長ミミ】「嘘です。ご主人様も子供がキャベツから生まれてくる
と信じる初心なネンネじゃあるまいし」

【男主人】「華麗に騙されたっ!!」

【長ミミ】「そんなに触りたいのですか？」

【男主人】「え〜と……」

【長ミミ】「ちなみに、エルフ族は耳を弄られても安易に性的興奮
は催しません」

【男主人】「そ、そうなの？」

【長ミミ】「生まれつき耳の感覚が鋭敏なエルフもいますが、それ
人間族の人も変わらない程度です」

【男主人】「うっ」

【長ミミ】「エルフは耳を弄るだけで簡単に気持ちよくなるという
のは幻想です。『エルフメイドさん桃色事変』をやるうと思ったら、
普通に深い愛情と信頼と、継続的な経験が必要です」

【男主人】「ぐふっ……」

【長ミミ】「ご主人様、成人向け小説の読みすぎです」

第4話『気付いたら、お弁当派になっていた』

草原と平穏の国：王宮（執務室）

【男主人】「ん〜（背伸び）。さて皆、そろそろ昼休みにしようか（こそこそ）」

【副官女】「……………（じい）」

【部下男】「……………（じい）」

【男主人】「では、いただきます」

【副官女】「……………（じい）」

【部下男】「……………（じい）」

【男主人】「お、今日はサンドイッチにオムレツか……って、君たち何か用？」

【副官女】「ええっと、その……………」

【部下男】「ズバリ聞きますけど、男主人様」

【男主人】「ん、何？」

【部下男】「いつの間に奥さんもらったんですか？」

【男主人】「はい？」

【部下男】「いや、ここ数日、昼に食堂の定食じゃなくて美味そうなお弁当食べてるじゃないですか？」

【男主人】「そうだね」

【部下男】「で、オレらの知らない間に結婚でもしたのかと……ラブな新婚ですか？ 新妻とイチヤイチヤですか？」

【副官女】「ら…………らぶらぶ……………」

【男主人】「とりあえず、君たちが何を想像しているのか問い詰めたいが。なぜ恋人ができたとか、そういう発想にならない？」

【部下男】「いや、男主人様のことから、王子様の命令で、いきなり結婚してもおかしくないかなとか」

【男主人】「色々否定できないのって、どうよ……（がつくり）」

【部下男】「じゃあ、違うんですか？」

【男主人】「あー、当たらずとも遠からずというか」

【副官女】「ええっ！！ 新妻とイチヤイチャなのです!？」

【男主人】「それは違うっ！！」

【副官女】「うう……………良かった（ポツリ）」

【男主人】「妹の指示でね。家に使用人がやってきたんだ」

【部下男】「ああ、なるほど。というか今まであの家に使用人の一人もいない方が変でしたし」

【男主人】「んでもって、毎朝お弁当を持たされていると」

【部下男】「それは、なかなか愛されていますねえ」

【男主人】「愛されているというか、からかわれているというか……なるほど、そういう意味か、これ」

【部下男】「はあ？」

【男主人】「いや、弁当を渡される時、“犬が縄張りを主張するのと同じ行為です”と言われたからさ」

第4話『気付いたら、お弁当派になっていた』（後書き）

新規登場したキャラクターの簡単な設定です。

副官女

【種族】：人間族 【年齢】：17歳 【性別】：女性

【一人称】：私

【設定】：

- ・王国軍第十一師団の高等仕官。主に部隊の書類仕事を担っている。
- ・どうやら男主人を慕っているらしい？

部下男

【種族】：人間族 【年齢】：23歳 【性別】：男性

【一人称】：オレ

【設定】：

- ・男主人の弟分的なポジション。男主人との付き合い副官女より長い。

- ・王国軍第十一師団における唯一の一般兵。

第5話『長ミミさんが、ゼリーを作っていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「んー　これ、美味しいね」

【長ミミ】「桃のゼリーです。ご主人様が甘いものが好きと聞いたので用意してみました」

【男主人】「ゼリーか……　そういえば、ゼラチンって、そこはかとなく卑猥な言葉な感じがしない？」

【長ミミ】「いえ、まったく」

【男主人】「いや、だって、ゼラチンだよゼラチン！　是裸チンって書くともう超絶卑猥じゃない！？」

【長ミミ】「あえて言わせてもらうなら、卑猥なのはご主人様の頭の中です」

【男主人】「ふっ……　ところで、明日、僕は休日なんだけど、長ミミも休みでいいよ？」

【長ミミ】「逃げましたね」

【男主人】「戦略的転進と言ってもらいたい」

【長ミミ】「まあ、それで休日の話ですが……　私は特に必要ありません」

【男主人】「それだと体が休まる時間がないんじゃない？」

【長ミミ】「いいえ、こう見えてもそれなりに自由な時間がありますので」

【男主人】「そうなの？」

【長ミミ】「はい。ご主人様は、食事の好き嫌いもなく、掃除もほとんどで文句は仰いませんので」

【男主人】「実際、長ミミの出してくれる食事はどれも美味しいからね。一緒の食卓についてくれるともっと嬉しいけど」

【長ミミ】「その件につきましては、『私流メイド道』に反するの
で申し訳ありませんが……」

【男主人】「それについて無理強いをするつもりはないよ。こうし
て話し相手になってくれるだけでも十分だからね」

【長ミミ】「恐れ入ります」

【男主人】「でもさ、実家とかに顔を見せなくて良いの？」

【長ミミ】「それこそ必要ありません。私の生家は「森林と調和の
国」にあります。両親は逝去しておりますので」

【男主人】「あー、ごめん、ちょっと考えなしだった」

【長ミミ】「大丈夫です。もう7年も前の話ですので……」

【男主人】「……………7年前？」

【長ミミ】「ええ」

【男主人】「それって」

【長ミミ】「はい、ご想像のとおりかと」

【男主人】「そっか……」

【長ミミ】「ご主人様。お気になさらずに、ゼリーの代わりに
かがですか？」

【男主人】「まだあるの？　じゃあ、もうちょっともらおうかな」

【長ミミ】「はい、しばしお待ちください」

第6話『男主人、休日は訓練をしていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「ご主人様、お茶の準備が整いました。少しご休憩いたしませんか？」

【男主人】「……トランスレイト オン イレイス アワー エネ
ジー……《魔力沈静》ロストアウト」

【長ミミ】（何度見ても綺麗な光ですね……）

【男主人】「……ふう、もうそんな時間か」

【長ミミ】「一人でゴソゴソなさっているところに声をかけて申し訳ありません」

【男主人】「ツツコまないからな、あれはあくまで魔術のトレーニングだからな」

【長ミミ】「ええ、一人で汗や色々なものを垂れ流してた所……お茶のお誘いは野暮でしたか？」

【男主人】「……ツツコんで欲しいの？」

【長ミミ】「そんな……私の口から何を言わせたいのですか、ご主人様？」

【男主人】「あああつ！！ なんだろっ、この敗北感っ！」

【長ミミ】「のた打ち回って楽しんでるところ申し訳ないのですが、そろそろテーブルに付いてください」

【男主人】「いや、誰のせいだと……」

【長ミミ】「お茶を蒸らし間は少々暇ですので、お陰様で良い気分転換になりました（トポトポ……）」

【男主人】「ん？ このクッキーは？（サクサク）」

【長ミミ】「今朝方、私が焼きました」

【男主人】「へえ、昨日の桃のゼリーも美味しかったけど、これも

美味しいね」

【長ミミ】「ありがとうございます」

【男主人】「料理もお菓子も上手だし、綺麗だし、長ミミだったら僕んとかじゃなくて、もつと良い所で働けるんじゃない？」

【長ミミ】「ご主人様、そんなお世辞を言われましても、お茶のお代わりくらいしか出せませんが」

【男主人】「いやいやお世辞じゃなくて、本心でさ」

【長ミミ】「……天然ですか（ポソ）」

【男主人】「ん？ 何か言った？」

【長ミミ】「いえ、お給金については美女妹様に十分よくして頂いてますから」

【男主人】「そっか、それならいいんだけど……何か困ったことない？」

【長ミミ】「それでは1つお聞きしてよいでしょうか？」

【男主人】「ん、何が聞きたいの？」

【長ミミ】「ご主人様は、なんで私を追い出さないのですか？」

【男主人】「えーあー……………」

【長ミミ】「ご主人様ほどの地位と財産でしたら、使用人の1人や2人雇っているのが普通です。なら、逆に使用人を雇うのを嫌っていたと考えるのが正しい答えかと」

【男主人】「そうだね、まあ、誰かと一緒に住む覚悟がなかった、ってことかな」

【長ミミ】「ということは、今はその覚悟ができた、と？」

【男主人】「分からない。けど、妹の方は大丈夫だと考えたから君を送ってきた……んじゃないかな」

第7話『長ミミさんは、知っていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「はあ、疲れた……ただいまあ」

【長ミミ】「お帰りなさいませ、ご主人様。今日は、随分とお疲れですね」

【男主人】「ああ、仕事の方でちよつと問題があつてね……」

【長ミミ】「まったく王子様の女癖の悪さにも困ったものですね」

【男主人】「ッ！？　なんでそれをつ！？」

【長ミミ】「『メイドさんネットワーク』通称MSNの最新情報ですから」

【男主人】「何それ、なんか怖っ！？」

【長ミミ】「古参の『近所のおばちゃん井戸端会議』通称KOIと国を二分する諜報組織です」

【男主人】「いや、もう……」

【長ミミ】「MSNの最新情報によれば、王子様の正式な愛人は5名。しかし、今回は王子様の愛人を自称する女性による騒動……裏では、王弟派の残存勢力が関与して“いた”……という噂ですね」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「おや？　どうかされましたか？」

【男主人】（なんで過去形なの？　と訊けない僕）

【長ミミ】「無理はよろしくないですよ、ご主人様」

【男主人】「な、なんでもないよ？」

【長ミミ】「しょうがありません。その悩みをスッキリ解消させましょう」

【男主人】「いや、別に……」

【長ミミ】「そもそもMSNとKOIの抗争の歴史はあまり古くな

く、ここ10年の……」

【男主人】「え、そっち!？」

【長ミミ】「ご主人様、人が説明している間は静かにすると教わらなかったのですか？」

【男主人】「知ってるけど。いや、別に謎の組織の抗争とか言われてもね」

【長ミミ】「……これは、失礼しました。勘違いしていたようです」

【男主人】「勘違いというか、見当違いだったというか」

【長ミミ】「王子様の愛人のプロフィールが知りたかったのですね？」

【男主人】「……あ、それはちょっと知りたい」

【長ミミ】「では、夕食が終わりましたら詳しく……早くしないとシチューが冷めてしまいます。ご主人様」

【男主人】「とりあえず、滅多なことではできない、ということは分かった」

第8話『言われた瞬間、想像しちゃっていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「ふ〜んふん〜」

【長ミミ】「随分とご機嫌ですね、ご主人様」

【男主人】「厄介な仕事が一段落したからね。明日からは、ゆつくりできそうだ」

【長ミミ】「なるほど、それは良かったですね」

【男主人】「それに美味しい食事と美味しいお酒、気分は上々だね」

【長ミミ】「恐れ入ります」

【男主人】「これで後は……ごほんごほん。このソテーは僕好みだね」

【長ミミ】「良い川魚の切り身が入りましたので」

【男主人】「うん、この葡萄酒との取り合わせも完璧だ」

【長ミミ】「その葡萄酒は「森林と調和の国」で作られた5年物です」

【男主人】「なるほど……鮮烈な葡萄の香りが良いね」

【長ミミ】「ところで、ご主人様。今宵は夜伽などを御所望なのでしょうか？」

【男主人】「そ、それは言っていない!!」

【長ミミ】「でも言いかけたよね。私は自称優秀なメイドですので」

【男主人】「自称って付けると、とっても怪しいよねっ!」

【長ミミ】「そうですね。私がお相手するならば、一晚50万イエーンほどでいかがでしょう?」

【男主人】「高っ!」

【長ミミ】「そうですか? 相場には疎いものでして」

【男主人】「一流と呼ばれる娼館でも3日は楽しめるよ」

【長ミミ】「ふむ、ご主人様は市場価値が分かる目利きでいらっしゃる」

【男主人】「それって、遠回しに皮肉ってる？」

【長ミミ】「もう少し具体的に言うならば、“随分とお詳しい”のですね」

【男主人】「ぐっ……しょうがないんだ。あのバカ王子の部下をやってる詳しくもなるんだ……ツケを払いにくこつちの身にもなってみろっ……！」

【長ミミ】「しかしながら、エルフ族の初物ならば、このくらいが相場かと思うのですが？」

【男主人】「ぶふっっ……！」

【長ミミ】「………想像しましたね？（にこり）」

【男主人】「………（汗）」

第9話『副官女の想像を、超えていた』

草原と平穏の国：王宮（執務室）

【男主人】「それじゃあ、10日ほど留守にするけど、その間はよろしく頼むね」

【副官女】「はい、任せてください！ 男主人様もお気をつけて！」

【部下男】「お土産楽しみにしてまーす」

【男主人】「了解、向こうの葡萄酒が何かを買ってくるね。では」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ボタン……

【副官女】「……………はあ」

【部下男】「何も心配する必要はないと思いますけど……………それとも寂しいんですか？」

【副官女】「さ、寂しい！？ そ、そんなことない……………あ、心配しないなんて、部下男は薄情者ね！！」

【部下男】「いやあ、男主人様にとっては、それほど心配しなくても……………」

【副官女】「い、いくら、男主人様が優秀な魔術師だとしても、もし戦いになったら……………」

【部下男】「いやいや、いつそ戦いになった方が楽ですよ。相手の戦意を喪失するまで叩き潰せば良いだけなんですから……………」

【副官女】「多勢に無勢という言葉があつて、男主人様は1人しかいなければ……………ああ、やっぱり私も今から追いかけて……………」

【部下男】「むしろ、オレらがいる方が邪魔になりますから……………つて、そうか、副官女さん、もしかして、男主人様の實力を知らないとか？」

【副官女】「実力は知っています！！ この国で一番強い魔術師！
！ それなのに、まったくそんな素振りを見せず、優しくて素敵な
方！！」

【部下男】「本人に言ってやれば良いのに……それで、その強さが
どのくらいかってことですよ？」

【副官女】「…………… ということ？」

【部下男】「それに、今の言葉は正しくないですね。現時点では大
陸一の魔術師と呼ばれていますよ」

【副官女】「大陸一？」

【部下男】「そもそも、オレらの所属部隊は何処だか知っています
？」

【副官女】「私をバカにしているの！？ 栄えある王国軍第十一師
団よ！」

【部下男】「バカになんてしてません。その構成人数は？」

【副官女】「男主人様と私と貴方の3人でしょ！」

【部下男】「…………… で、違和感に気づきませんか？」

【副官女】「今の話のどこが変だというのよ？」

【部下男】「王国軍の部隊編成規則に従うなら、師団を名乗るのは
1万以上の兵士の所属が必要なんです。それに、王国軍は数年前ま
で第十師団までしかなかった。いくら王位継承第一位の王子様直属
の部隊だからといって、それだけで師団って言うのは酔狂が過ぎま
す」

【副官女】「それがどうかした？」

【部下男】「簡単に言えば、匹敵するんですよ。男主人様1人を戦
力へ換算した場合、兵士2万人以上にね」

第10話『扉を開けたら、王子様がいた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミミ】（……………5日目、もうなのか、まだなのか）

【長ミミミ】（早くても10日ということは、それ以上かかる可能性もある）

【長ミミミ】（この家に来て、ここまで長く独りになるのは、初めてですね）

SE（ノッカーの音）：コンコンコン

【長ミミミ】（ご来客？ ご主人様のいない時にタイミングの悪い）

SE（扉を開く音）：ガチャ、ギイ

【長ミミミ】「……………」

SE（扉を閉じる音）：ギイ、ボタン

SE（ノッカーの音）：コンコンコンコンコン

SE（扉を開く音）：ガチャ、ギイ

【王子様】「この家のメイドはどういう教育を受けているのかな？ 普通、お客を無言で締め出す？」

【長ミミミ】「夢か幻か妖精さんのイタズラなら良かったのに」

【王子様】「はっはっは、相変わらずだね」

【長ミミミ】「ええ、王子様も相変わらずのようで、では、お帰りください」

【王子様】「ちょっ、待って！！　なんで、そう人を締め出そうとするかな！」

【長ミミ】「誠に残念ながら、ご主人様は不在のため、怪しげな人間を屋敷に入れることはできません」

【王子様】「怪しくないでしょ！？　ボクほど身元のはっきりしている人間はいない！！」

【長ミミ】「とりあえず、十割中十二割くらい怪しいです。もう、体から溢れんばかりに」

【王子様】「まさかの全否定！？」

【長ミミ】「まったく、無言で締め出すというから、一言付けて締め出そうとしたのに、ワガママな」

【王子様】「え、何かボクが悪い流れになってない！？」

【長ミミ】「ご主人様が不在なことは、ご承知でしょう？　何をしにいらしたのですか？」

【王子様】「いやー、男主人がいなくてキミが寂しがっているんじゃないかなと」

【長ミミ】「寂しがっている女性ならば、王宮にもいらっしゃるのでは？　あまり奥様を放置するものじゃないですよ？」

【王子様】「そんな健気な子じゃないけどねえ。それにキミとボクとの関係じゃないか」

【長ミミ】「別に、私と王子様の間に特殊な関係があるとは記憶していませんが」

【王子様】「そこまでいくと、いつそ清々しいね！」

【長ミミ】「その点については、ご主人様にも高く評価されておりますので」

【王子様】「一応関係あると思うんだけど……………ねえ、婚約者殿？」

第10話『扉を開けたら、王子様がいた』（後書き）

新キャラクターの紹介です。

王子様

【種族】：人間族 【年齢】：24歳 【性別】：男性

【一人称】：ボク

【設定】：

- ・「草原と平穏の国」の第一王子。王位継承権の第一位。
- ・女性大好き。
- ・既婚者らしい。でも貴族の一夫多妻は違法ではないようです。

第11話『その頃、男主人が活躍していた』

草原と平穏の国：悪領主邸

【男主人】「（ゴクゴク）ほうほう、この葡萄酒は美味しいですね」
【悪領主】「そ、そうでしょう。領内でも特に厳選された葡萄酒ですからね」

【男主人】「ところで、もう一杯頂いてもいいです？」

【悪領主】「どうぞどうぞ！」

【男主人】「グラスに注がなくても結構。そうですね、そちらのグラスのをもらえませんか？」

【悪領主】「は、いや、こちらはワタシの飲み掛けで??」

【男主人】「いえ、なに……………僕は混じり物がない方が良いので、特に“毒味”はあまり好きじゃないですし」

【悪領主】「なっ!？」

【男主人】「入っていたのは、黒鈴蘭の根あたりが妥当かな、お手軽で無味無臭の神経毒」

【悪領主】「な、何を仰ってるのでしょうか?（汗）」

【男主人】「そんなに緊張してちゃ、奇襲は成功しませんね。大方、僕のグラスにだけ塗っていたんでしょう？」

【悪領主】「……………ですから、男主人殿は一体何を?（汗）」

【男主人】「結論から言えば、僕に普通の毒は効きません、魔術によつて中和できますから。いつまで待っても無駄ですよ」

【悪領主】「魔術!? 詠唱は何時の間に行なった!？」

【男主人】「さあ、僕がその質問に答える必要があります?」

【悪領主】「ぐっ……………」

【男主人】「今回の筋書きとしては、『監査担当の者は、領地に入る直前に不幸にも盗賊の餌食になった』とか?」

【悪領主】「……………」

【男主人】「罪状については、とりあえず、殺人未遂で良しと。後は余罪で何回分の極刑になるやら」

【悪領主】「……………」

【男主人】「大人しくなつたな？ 大体こついう時は命乞いをされるか……………つと」

SE（金属音）：キュッイン

【悪領主】「くそっ……………」

【男主人】「実力行使に出てこられると。まあ、こつちの方が手っ取り早いけど」

【悪領主】「いまだ、かかれっ！！……………どうした、早く出て来い！！」

【男主人】「まったく、どいつもこいつも典型的な悪役の言動過ぎて、少し飽きてくるな」

【悪領主】「何が起こつてるっ！？」

【男主人】「僕がすでに制圧しているからだよ。ああ、そうだ……………」

……………命乞いや実力行使はあつたけど、僕を抱き込もうとする人はいなかったつけ、試してみます？」

第11話『その頃、男主人が活躍していた』（後書き）

一応のキャラ紹介。

悪領主

【種族】：人間族 【年齢】：32歳 【性別】：男性

【一人称】：ワタシ

【設定】：

- ・王国西側の一地方の領主に任じられている貴族。
- ・何かしらの不正を行っていたらしい。

第12話『釣った魚のエサについて、話していた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】 「婚約者候補になるかもしれない、です。言葉は正しく使って頂きたいと具申いたします」

【王子様】 「まあ、ボクとしてはどっちでもいいけど」

【長ミミ】 「ええ、私としてはこっちでないと困りますので」

【王子様】 「ほんと、つれないね」

【長ミミ】 「釣った魚にエサを与えそうにない人には、魚も釣られたくはないだけでは？」

【王子様】 「ほほう、男主人は魚のエサやりが上手なのかい？」

【長ミミ】 「いえいえ、ご主人様は、与えたつもりもなく与えるタイプですので」

【王子様】 「あつはつはつは、随分と好かれたものだ」

【長ミミ】 「先に言っておきますが、この感情は好いた惚れたなどではございませんから」

【王子様】 「それじゃあ何だと言うんだ？」

【長ミミ】 「さあ、私とその質問に答える必要はありますか？」

【王子様】 「くつくつく、微妙に男主人が言いそうな台詞だな、それ」

【長ミミ】 「???? ご主人様が言うような、ですか？」

【王子様】 「ああ、結構皮肉屋な所があるからな」

【長ミミ】 「それは、本当にご主人様ですか？」

【王子様】 「ん？ ということだ？」

【長ミミ】 「ですから、その、ご主人様が皮肉屋という部分です。少しご主人様には似合わない言葉でしたので」

【王子様】 「ほ」

【長ミミ】「……何か仰りたいのですか？」

【王子様】「いや、なかなか相性が良いのかもしれない、思っ
てな」

【長ミミ】「何の相性でしょう？」

【王子様】「キミと主人さ」

【長ミミ】「私とご主人様がですか？」

【王子様】「うん、キミと主人の相性は良いのさ、きっと。キミ
には、だいぶ心を許しているようだからね」

【長ミミ】「……………」

【王子様】「ふふん、初めてだな、そんな顔を見るのは。主人に
はやっぱ勿体無いか（微笑）」

第13話『帰ってきたら、余計疲れていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「ただいまー」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「ん？ どうしたの？」

【長ミミ】「申し訳ありません、どちら様でしょうか？」

【男主人】「えええっ！？ いやいや、僕だよ！」

【長ミミ】「なるほど、僕様でいらっしやいますか」

【男主人】「僕様って！？ 名前は男主人だけどー！」

【長ミミ】「それは申し訳ありません、オトコシユ・ジンダケード様」

【男主人】「微妙に名前つばいけどね！ 違うからね！ 何これ、新しいイジメっ！？」

【長ミミ】「はい。10日かけて練りに練ってみました」

【男主人】「認めたしっ！！」

【長ミミ】「さて、感動の再会も済ませましたし、お帰りなさいませ、ご主人様」

【男主人】「いやもう、疲れたよ……」

【長ミミ】「出張お疲れ様です。さっさと中に入って休まれたらいかがでしょう？」

【男主人】「さりげなく出張のせいにしてるけど、止めは長ミミだからね？」

【長ミミ】「私の半分は愛で出来ております。人生に疲れたご主人様に止めを刺すのも愛ゆえに」

【男主人】「そんな痛い愛はいらないし！！ まだ人生を悲観するほど生きてもないから！！」

【長ミミ】「ああ、ご主人様が帰ってきたんだな………と、悦びに浸る私」

【男主人】「ああ、帰ってきたんだなあ、と心が打ちひしがれているよ、僕は……」

【長ミミ】「出張はとても大変だったのですね。心が落ち着く香りのお茶を淹れましょう」

【男主人】「もおいしいけど。ところで、留守中に何かあった？」

【長ミミ】「変わったことですね。特には……」

【男主人】「そ、ならいいんだけど」

【長ミミ】「あっ」

【男主人】「何かあった？」

【長ミミ】「そういえば、盛りのついた犬が迷い込んできましたが……」

【男主人】「……それで？」

【長ミミ】「そのまま追い払いました」

【男主人】「それだけ？」

【長ミミ】「それだけです」

第14話 『問題はないけど、書類が溜まっていた』

草原と平穏の国：王宮（執務室）

【男主人】「久しぶり、二人とも、僕の留守中に問題なかった？」

【副官女】「はい、何ら問題はありません！」

【部下男】「オレの方も、急ぎ報告するようなことないです」

【副官女】「あ、ただ、目を通していただきたい書類が結構溜まっています（書類の山を示す）」

【男主人】「あれ……全部……？」

【副官女】「それでもできるだけ減らそうとはしたんですが……その……」

【部下男】「文官の連中が堅物でして、『この書類には、師団長の署名が必要です。ない場合は受け取れません』と」

【男主人】「役人根性の石頭揃いだからなあ……」

【副官女】「申し訳ありません……」

【男主人】「あ、いやいや、そんな硬くならないで。……そもそも、君が謝ることじゃないから」

【部下男】「そうそう。まったくカタイのは街壁とアレくらいで十分だつてのに」

【副官女】「何か言いました？（キツ）」

【部下男】「え〜と……あつ、その手に抱えてるブツは？」

【男主人】「これ？ 頼まれてた土産物。向こうでご馳走になってね、美味しかったから土産にしてみた。はい」

【部下男】「お、西の所領の高級葡萄酒じゃないですか！ ありがとうございます！」

【副官女】「え？ あ、あの、私にもですか!？」

【男主人】「うん。片方だけつてのも悪いしね。二人にはいつも頑

張ってもらってるから、そのお礼」

【副官女】「ありがとうございます！ 今日の記念に一生大事にします！」

【男主人】「その葡萄酒は、今が飲み頃だから、早めに飲んだ方が美味しいと思うけど……」

【副官女】「じゃあ、早めに大事にして飲みます！」

【部下男】（うーん……指輪をもらったわけでもあるまいに……）

【男主人】「まあ、喜んでくれて嬉しいよ」

【部下男】「またお願いしまーす」

【男主人】「はいはい。ところで、これから王子様のところに今回の報告に行くけど？」

【部下男】「あ、じゃあ、オレも一緒に行きます。事前に頼まれていた件と合わせて報告したいんで」

【男主人】「そうだね。向こうで一緒に聞いた方が早いかな、そうしよう」

第15話『王子様の前で、報告していた』

草原と平穩の国：王宮（王子執務室）

【王子様】「で、ボクの分の高級葡萄酒は？」

【男主人】「ありません。そもそも貴方の立場なら、高級葡萄酒なんて好きなだけ入手できるでしょう！！」

【部下男】「男主人様、いつものことです。気にしたら負けです」

【男主人】「ふ、君には苦勞をかけるね」

【部下男】「そいつあ、言わない約束ですよ、男主人様」

【王子様】「小芝居はその辺にして、とりあえず報告してくれ」

【男主人】「はい、まず西の所領の悪領主は殺人未遂と不正収賄と脱税の罪状で更迭しました」

【部下男】「不正金の見積もりについては、こちらです」

【王子様】「は、まったく、これだけの金のために人生を終わらせなくてもねえ」

【男主人】「金という毒はヒトを簡単に狂わせますから。ただ王子様は、その立場から“これだけの金のために”とは言ってはいけません」

【王子様】「ん、ボクの失言だった、許せ。それで裏は？」

【男主人】「残念ながら、確たる証拠は掴めませんでした」

【王子様】「個人的な見解でいい。オマエが考えていることを聞きたい」

【男主人】「悪領主が王弟派であったのは間違いないのですが……（視線を部下男に向ける）」

【部下男】「近年、他の王弟派との連絡を取り合った形跡はありませんでした」

【王子様】「つまり、今回の件は完全なる単独行動と？」

【男主人】「いえ、国外の貴族と……連絡を取り合っていた可能性が残っています」

【王子様】「西の所領だったか。……さらにその西とすれば「鉾山と武勇の国」だな、わが国とは因縁浅からぬ」

【男主人】「あくまで可能性の話です」

【部下男】「残念ながら、こちらの方でも証拠となりえる情報は掴めていません」

【王子様】「その辺りについては諜報部も動くように手配しとく。引き続き二人ともこの件は頼むよ」

【男主人】「了解です」

【部下男】「御意」

【王子様】「……ところで、キミのこのメイドさんは元気かい？」

【男主人】「王子様も長ミミを知っているのですか？」

【王子様】「うん、キミの出張中に顔を見に行つて少しお喋りをしたんだけどね」

【男主人】「そんなこと一言も……ああ！ 盛りのついた犬！」

【王子様】「ぶっ!？」

【部下男】「は???？」

第16話『長ミミさんから、試されていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「ご主人様、私の目を見て正直に仰ってください」

【男主人】「うん、何かな？」

【長ミミ】「お嫌いなのですね？」

【男主人】「ええーと……」

【長ミミ】「目を逸らさない！」

【男主人】「はいっ！」

【長ミミ】「お嫌いなのですね？」

【男主人】「……………そんなことはないですよ（棒読み）」

【長ミミ】「ご主人様、私は怒っているわけではありません。ただ、少し悲しいだけです」

【男主人】「うっ…………」

【長ミミ】「もう一度言わせていただきます。私は少しだけ悲しいのです」

【男主人】「わ、分かってる」

【長ミミ】「では……………」

【男主人】「…………（ごくり）」

【長ミミ】「どうすれば、良いか分かっていますね？」

【男主人】「いや、その…………」

【長ミミ】「ご主人様、男らしくないです」

【男主人】「ううっ」

【長ミミ】「これは…………言わば、私に対するご主人様の信頼を図る
試金石のような物」

【男主人】「な、なんか大げさじゃない？」

【長ミミ】「決して大げさなことではありません。ご主人様は、私

が仕えるに値する傑物だと思っております」

【男主人】「け、傑物っ……」

【長ミミ】「そして、ご主人様と私の間には、様々な試練を経て築かれた絆があると信じております」

【男主人】「なんかもう、その試練の大半が君の自作自演だった気がするけど……」

【長ミミ】「誤魔化さないでください。さあ、ご主人様、決断を！」

【男主人】「わ、わかった……食べる」

【長ミミ】「素晴らしい御決断です。例えばご主人様がニンジンを嫌いであっても、私の料理を残すのは許しません、ええ」

第17話『あっさりと、騙されていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「あー、久しぶりに食べたあ……」

【長ミミ】「お疲れ様です。口直しにプティングをどうぞ」

【男主人】「なんか、今とつても子ども扱いされてない？」

【長ミミ】「気のせいではないでしょうか」

【男主人】「長ミミはさ、嫌いなものはないの？」

【長ミミ】「嫌いなものですか？」

【男主人】「うん、食べれないものとか」

【長ミミ】「ほとんど、ないと思いますね」

【男主人】「ほとんどって言うと、いくつかはあるんだ？」

【長ミミ】「ご主人様、そんなに私のことを知りたいのですか？」

【男主人】「い、いや単純に好奇心というか……？」

【長ミミ】「私はメイドですから、嫌いなものはないのです」

【男主人】「メイドだからって……クモとかヘビとかは平気？」

【長ミミ】「ヘビは少し硬いのが難点ですね。クモはまだ食べたことがありません」

【男主人】「いや、食べる話じゃなくて……ってか、ヘビは食べたんだ」

【長ミミ】「見た目で嫌う女性はいますが、きちんと下拵えすればれっきとした食材ですし」

【男主人】「その、見た目で嫌う女性つてのは少ないんだけどね」

【長ミミ】「ちなみにゴキブリも冷静に対処できます。毒蜂と違って危険性は少ないですから」

【男主人】「怖いもの知らずだね」

【長ミミ】「まあ、ご主人様、私にも怖いものはあります」

【男主人】「そうなの？」

【長ミミ】「あえて言うのでしたら、ですけれど……」

【男主人】「うんうん？」

【長ミミ】「えつと甘いチエリータルトが怖いです」

【男主人】「へえ、甘いのが苦手なのか」

【長ミミ】「それから、渋い紅茶があればもつと怖いです」

【男主人】「……………お見逸れしました。今度、土産に買って参ります」

【長ミミ】「あらあら、今からとっても怖いです」

第18話『長ミミさんが、腕の中で震えていた』

草原と平穏の国：男主人邸

SE（落雷）：ドーン！！　ゴロゴロ……

【長ミミ】「（ビクッ）！！」

【男主人】「ん？　もしかして、雷が苦手？」

【長ミミ】「い、いえ、そんなことはありません。私はメイドですから……今のはちよつと、急に大きな音がしたので驚いただけです」

【男主人】「別に隠さなくてもいいと思うけど」

SE（雷鳴）：ピカッ……………

【長ミミ】「！！（ぐっ）」

SE（落雷）：ドーン！！　ゴロゴロ……

【長ミミ】「ほ、ほら、全然、大丈夫です」

【男主人】「いや、あからさまに気張っていたよね？　大きな音が苦手なの？」

【長ミミ】「あ、そういえば地下室の掃除がありました。失礼しま

……………」

【男主人】「ドーン！！！」

【長ミミ】「#×　#！！？？！！？（へたん）」

【男主人】「やっぱ、ダメなんだ？」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「最近、君のことがちよつと分かってきたよ。変なところ

ろで見得っぱりだよね?」

【長ミミ】「……………え……………う……………(じわ)」

【男主人】「つつ!?!」

【長ミミ】「やらあ……………ドーンやなのぉ……………(うぐっ)」

【男主人】「え、えええっ、なななっ、なんで!?!」

【長ミミ】「ごしゅしんらま……………ドーン言っただ……………、ドーン言っただ……………あ……………(えぐえぐ)」

【男主人】「ご、ごめん、僕が悪かった。えと、謝るからっ!?!」

SE(落雷)：ドーーーン!!　ゴロゴロ……………

【長ミミ】「やー!?!?!」

【男主人】「わ、わわわ……………大丈夫、落ち着いて!?!(ぎゅっ)」

【長ミミ】「……………んんっ(ぎゅっ)」

【男主人】「ね、大丈夫だから……………こうすれば聞こえないでしょ?」

【長ミミ】「(ぎゅっ……………」

【男主人】「……………うつっ、や、柔らかいっ……………」

第19話『お弁当が、赤く染まっていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「……………ふっ」

【部下男】「うわー、見事に真っ赤なお弁当ですね」

【男主人】「ニンジンのサラダ、ニンジンのグロッセ、ニンジンジャムのサンドイッチ……………」

【部下男】「それ、イチゴジャムじゃなくてニンジンのジャムなんですか？ オレ初めて見ましたけど」

【男主人】「彼女のお手製っぽいから」

【副官女】「彼女って、その、例の使用人さんですか？」

【男主人】「うん」

【副官女】「ええっ！？ だって、使用人さんよね？ ただの使用人さんじゃなかったということ？ 何あの愛情たっぷりなお弁当は

！！……………は、もしかして、いわゆる行儀見習いだっただけ、お手つき済みの未来は団長婦人様っ！？ 私も明日から……………いや、相手の得意な戦場で交戦するのは下策、なら、どうしよう！？」

【男主人】「（小声）……………彼女、どうかした？」

【部下男】「（小声）いや、気にしないでください」

【副官女】「とりあえず、私も負けませんから！ 頑張りますから

！」

【男主人】「おお、頑張ってる！」

【副官女】「はいっ！！」

【部下男】「あゝ、なんだろう、この微妙な居たたまれなさは……………」

【男主人】「ところで、二人とも、これ食べない？」

【部下男】「あー、オレらが食べちゃまずいのでは？」

【男主人】「そんなことはないさ」

【部下男】「だってそれ、男主人様への“罰”でしょ？」

【男主人】「うえっ!？」

【副官女】「罰? なんのことが説明して」

【部下男】「いやー、そのー、使用人の娘さんを辱めた罰で、苦手なニンジン尽くしのメニューを食べさせられてるという話で……」

【副官女】「お手つき済み確定!？ ああっ……（ふらふら）」

【男主人】「おおい！　なんでそんな僕の個人的な情報が駄々漏れなんだっ!？」

【部下男】「いや、オレ、MSNのメンバーですんで」

【男主人】「マジで存在するのか、『メイドさんネットワーク』…

…」

第20話『家に帰ったら、猫ミミちゃんがいた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「お帰りなさいませ」

【猫ミミ】「おかえりなさい」

【男主人】「ただいまー……………」

【猫ミミ】「ねーねー、早くゴハンにしよー」

【長ミミ】「そうですね。今日は海産の干物が安かったので魚介スーぷにしてみました」

【男主人】「……………」

【猫ミミ】「わーい、おっさかなおっさかなー」

【長ミミ】「ふふふ……………私たちは、ご主人様の食事が終わってからですよ」

【男主人】「……………誰？（指差し）」

【猫ミミ】「ん？ あたし？」

【男主人】「うん」

【猫ミミ】「あたしは獣人族の猫ミミだよ！」

【男主人】「へえ、あ、僕は男主人ね……………だから誰っ!？」

【猫ミミ】「長ミミさんにチンピラから助けてもらったの！ 今日からメイドさん見習い！」

【男主人】「そうなことがあったの？ 大丈夫だった？」

【長ミミ】「助けただなんて……………ちよつと虫の居所が悪かったから八つ当たりついんです（もじもじ）」

【男主人】「……………怖っ」

【長ミミ】「ご主人様、念願のハーレム生活への第一歩ですね。がんばっ」

【男主人】「誰もそんなもの目指してないよっ！ しかも全然応援

する気もないくせに！」

【長ミミ】「もちろんですとも、エッチなのはいけません（キツパリ）」

【男主人】「ううつ……で、本当のところは？」

【長ミミ】「いえ、どうも孤児の上、ほとんど人攫ひとさらいに近い形で街に連れて来られたようです」

【男主人】「あ……頭が痛い問題だね」

【長ミミ】「ご主人様がダメと仰るのですしたら、即行即座に着の身着のまま屋敷から追い出しますが……」

【猫ミミ】「えええっ！？ 追い出すの……？（涙目）」

【男主人】「どんだけ冷血な男なんだよ、僕はっ！ とりあえず、全て長ミミに任せるよ」

【長ミミ】「かしこまりました。立派なファイターに育ててみせます」

【男主人】「メイドじゃないのっ！？」

第20話『家に帰ったら、猫ミニちゃんがいた』（後書き）

新キャラクターの紹介です。

猫ミニ

【種族】：獣人族 【（自称）年齢】：15歳 【性別】：女性

【一人称】：あたし

【設定】：

- ・孤児だったため自分の正確な年齢は分からない。
- ・なかなか魅力的なボディの持ち主らしい。
- ・訳あって男主人邸の見習いメイドさん。

第21話『朝起きたら、猫ミニちゃんがいた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「……んゝ（こそこそ）」

【猫ミニ】「うにゅゝ……」

【男主人】「んゝ……（ぎゅ）」

【猫ミニ】「みゅゝ……」

【男主人】「（……あれ？ なんだろ、こう……）」

SE（扉を強く開いた音）：バシューーン！！

【男主人】「うおおお！？」

【長ミニ】「……………おはようございます、ご主人様」

【男主人】「あ、ああ、おはよ……う？（汗）」

【猫ミニ】「うづん、まだ眠い……（もぞもぞ）」

【長ミニ】「……………」

【男主人】「……………」

【長ミニ】「……………ご主人様、辞世の準備は整っておりますか？」

【男主人】「待った！ 誤解だ！」

【長ミニ】「いえ、ここは二階ですが？」

【男主人】「古典的なボケだね！ 間違えという意味でっ！！」

【長ミニ】「過ちを認めましたね、その潔さは認めましょう」

【男主人】「そうじゃなくてー！ 僕は手を出してない！！」

【長ミニ】「ふふふ、分かっております」

【男主人】「そう、それなら……」

【長ミニ】「男の方はみんなそう仰るのですよね？（微笑）」

【男主人】「分かり過ぎてるー！？ できれば、もっと僕のことを

分かって!!」

【長ミミ】「もちろん、ご主人様のことを分かって、からかっております。ほら、起きなさい（ゆさゆさ）」

【猫ミミ】「うー……あれ？ あたし、なんで？」

【長ミミ】「ご主人様を起こしに行つて何時までも戻つてこないの
で、心配しましたよ……“色々”と」

【猫ミミ】「あう、ごめんなさいー」

【男主人】「色々……便利な言葉だなあ」

【長ミミ】「大丈夫です。私はご主人様を信じておりますから」

【男主人】「なんか、その信じられ方もイヤだ！」

【長ミミ】「まったく、ご主人様はワガママですね」

第22話『長ミミさんは、気付いていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「ご主人様、少しお時間を頂いてよろしいでしょうか？」

【男主人】「ん？ どうしたの、改まって」

【長ミミ】「お聞きしたいことがあります……その魔術の話なのですが」

【男主人】「僕が答えても問題がない範囲ならいいけど、……魔術技法は国の機密に触れることもあるから」

【長ミミ】「申し訳ありません」

【男主人】「いや、謝ることじゃないけど。で、何が聞きたいの？」

【長ミミ】「婉曲的に言えば、“汚れを取る魔術”を知りたいのですが……」

【男主人】「ふゝむ」

【長ミミ】「……分かりますか？」

【男主人】「“洗濯に使う”ってわけじゃないよね？」

【長ミミ】「それはそれで便利そうなのですが……」

【男主人】「《魔力除去^{デイスベル}》系と呼ばれる魔術があるよ。術者の力量にも関係してくるけど、基本的に等級の低い単純な魔術しか打ち消すことができない」

【長ミミ】「……」

【男主人】「理論上は、全ての魔術が魔力によって起こされる現象である以上、魔力で打ち消すことは可能だけど、何事も『起こしたことを元通りに無かった事にする』のは大変なんだ」

【長ミミ】「ご主人様でも、ですか？」

【男主人】「うん。多分、長ミミが期待しているレベルは無理」

【長ミミ】「そうですか……」

【男主人】「猫ミミのことが、そんなに気になる？」

【長ミミ】「……やはり、分かりますか？」

【男主人】「まあね。むしろ、長ミミがよく気づいなあと思うよ」

【長ミミ】「ふふふ、私は完璧なメイドですから」

【男主人】「エルフ族なら先天的に魔術師の素質があるからね。どこまで分かっている？」

【長ミミ】「いえ、“何かがおかしい”というのを感じただけです」

【男主人】「そこまで分かれば十分。後は僕に任せておいて、昔に同じようなことがあったから、多分大丈夫」

【長ミミ】「かしこまりました。お任せいたします」

【男主人】「ずいぶん、あっさりとしてるね」

【長ミミ】「ご主人様は、怒られないとニンジンを食べられないようなお子様で、少しエロくて、その割には女性に弱いややヘタレですが……私は信じてますので」

【男主人】「なんだかなあ。ま、その期待には、応えられるように頑張らせてもらうよ」

第23話『王子様に、欺かれていた』

草原と平穩の国：王宮（王子執務室）

【王子様】「それで？ 上手くいったの？」

【男主人】「8年前と基本は同じでしたから、魔術による“騙し”と“移し”で何とか」

【王子様】「《条件殺戮》キリングスイッチだっけ？」

【男主人】「よく覚えていますね」

【王子様】「まあ、あの時はボクも当事者だったし」

【男主人】「あの時から、貴方は貴方でした……………はあ」

【王子様】「はっはっは、溜息を吐くと幸せが逃げちゃうよ」

【男主人】「誰のせいですか誰の！！」

【王子様】「そっと自分の心に手を当てて考えてみればいい……………」

……

【男主人】「何かカツコイイことを言っても誤魔化されませんから！」

【王子様】「で、やっぱり、今回はお前狙いか？」

【男主人】「そうですね。僕が猫ミミに淫らな行為に及んだら、さつくりあの世行きでした」

【王子様】「よくもまあ搦め手が好きな連中だ」

【男主人】「もう危険性はないと思われるので、猫ミミは我が家で引き取ります」

【王子様】「ん？ 背後組織は？」

【男主人】「潰しましたけど、あ、許可が必要でしたか？」

【王子様】「いや、それなら構わないさ」

【男主人】「雇用主に関しては、改めて何らかの対処します。どうも先日の悪領主の件とも絡んできそうです」

【王子様】「ふむ、協力が必要そうなら言ってくれ、頼んだよ」

【男主人】「……了解です」

【王子様】「何か浮かない顔があるが、まだ何かあるのか？」

【男主人】「いえ、なんで僕にこんな罫を仕掛けられたのかだけが不可解で」

【王子様】「そりゃ、異種族の娘相手に、夜な夜なハッスルしている変態だと思われてるからだろ」

【男主人】「僕ってそんな風に思われてるんですか？」

【王子様】「ボクが指示して情報操作したからな！」

【男主人】「何をいい笑顔で認めてるんですか！ え、その話は初耳ですけど！？」

【王子様】「『敵を欺くには味方から』というじゃないか」

【男主人】「僕にとっては、貴方も敵だあ！！」

第24話『猫ミミちゃんと、寝ていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「はい、それじゃあ横になって……」

【猫ミミ】「……長ミミさんから、なんだかイイ匂いがする」

【長ミミ】「ハーブの香り袋です。気に入ったなら、今度あげますよ。じゃあ、私に身を任せて」

【猫ミミ】「ううつ（もじもじ）」

【長ミミ】「ほら、照れなくていいから」

【猫ミミ】「あ、長ミミさん柔らかい……」

【長ミミ】「ふふふ、猫ミミちゃんだって柔らかいですよ」

【猫ミミ】「うにゃ〜」

【長ミミ】「それに綺麗な色、薄いピンク色ですね」

【猫ミミ】「あ、や、やっぱ止めっ……!？」

【長ミミ】「逃がしません。初めてなら、少し怖いかもしれませんが、大事なことです。私がいっしょにやらせてもらいます」

【猫ミミ】「ううつ（びくびく）」

【長ミミ】「ほら、大人しくしなさい。大丈夫、優しくしてあげるから」

【猫ミミ】「大丈夫？」

【長ミミ】「任せてください。手先は器用な方ですから、獣人族の方のは初めてですが……少し形が違っただけで大体同じです」

【猫ミミ】「信じる……」

【長ミミ】「では、穴の周りからゆっくりといきます」

【猫ミミ】「んっ、んんっ……」

【長ミミ】「そんなに硬くならないで、体を楽にして……少しずつ中にいれますよ。痛かったら言ってください」

【猫ミミ】「ふっ、ふっ……んあっ」

【長ミミ】「痛かったですか？ 一度抜きますね」

【猫ミミ】「痛くなかったけど、こう、むずむずして……」

【長ミミ】「少しスッキリしました？」

【猫ミミ】「うーん、ちょっと変な感じ。まだ何かが中に入ってるよーな」

【男主人】「とりあえず、君たちの言葉だけを聴いてるとすっごくモヤモヤするんだけど」

【長ミミ】「どうやら、ご主人様も耳掃除が必要なようですね」

第25話『猫ミミちゃんに、してもらっていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「ねえ、やっぱ、やめない？」

【長ミミ】「ご主人様、潔く猫ミミの相手をなさってください」

【猫ミミ】「ご主人さま、よろしくっ!!」

【男主人】「じゃあ、お願いするけど……」

【長ミミ】「もう少し嬉しそうな顔をしてはいかがです？ 猫ミミの初めての相手なのでから」

【男主人】「いや、だから、少し困るというか」

【長ミミ】「ごちゃごちゃ言っただけでさっさと準備してください」

【男主人】「じゃあ、よろしく？」

【猫ミミ】「うんっ！ 頑張る！」

【長ミミ】「猫ミミちゃん、デリケートな部分ですから、十分に優しくして」

【猫ミミ】「こ、こうかな……？」

【長ミミ】「そうそう、どうですか、ご主人様？」

【男主人】「うん、悪くないかも……あ、そこ、少しだけ強めにこすって」

【猫ミミ】「このくらい？」

【男主人】「そうそう、いい感じ、上手上手……」

【猫ミミ】「よ、よかった……」

【長ミミ】「ほら、片方だけじゃなくて、反対側も」

【猫ミミ】「うん！」

【男主人】「あー、気持ちいいかも……」

【猫ミミ】「」

【長ミミ】「あ、油断すると……」

【男主人】「いつつ!!」

【長ミミ】「ほら、猫ミミちゃん、気をつけないと」

【猫ミミ】「ごめんなさい! 痛かった?」

【男主人】「だ、大丈夫だから、気にしないで。ありがとう、随分スッキリしたよ」

【猫ミミ】「うん!!」

【長ミミ】「最後に穴の周りを拭って終わりです。お二人ともお疲れ様」

【猫ミミ】「ふう、緊張したあ。次もあたしが耳掃除してあげるね、ご主人さま!」

第26話『噂は、羽が生えて飛んでいた』

草原と平穏の国：有名娼館

【妖艶女】「あら、男主人様じゃないの。今夜こそは、アタイたちを買いに来てくれたのかい？」

【男主人】「残念ながら、今回もただの使い走りだね」

【妖艶女】「やだやだ、まったく残念だなんて欠片にも思っていないクセに、そんなだから変な噂が立つんだよ」

【男主人】「変な噂？」

【妖艶女】「なんでも異種族の娘を地下牢に閉じ込めて、毎晩あんな事やそんな事してるんだって？」

【男主人】「はっはっは」

【妖艶女】「そういう趣向がオツケーな娘もいるけど？」

【男主人】「変な気を回すなっ！！」

【妖艶女】「十分間に合ってる……と？ 随分な入れ込みようじゃないの、熱い熱い」

【男主人】「あのさ、妖艶女、分かっけて言ってるよね？」

【妖艶女】「はて、なんのことだろね？」

【男主人】「その噂は、すでに尾^{おひれ}緒どころか翼が生えて空を飛んでるし……」

【妖艶女】「いずれ炎を吹く立派なドラゴンになりそうだ（ケラケラ」

【男主人】「はあ……とりあえず、ほい、今月分の“ツケ”ね。（ジャラリ）足りてる？」

【妖艶女】「ひのふの……んつと、これだけで十分。残りは帰って帰ってくれ」

【男主人】「はいはい。で、今回は一つ僕の方から頼みたいことが

あるんだけど」

【妖艶女】「改まってなんだい？ あんたはお偉いさんなんだから、ただ命令すればいいじゃないか」

【男主人】「少しばかり危ない話だからね。こればかりはお願いするしかないしさ」

【妖艶女】「あー、ほんとイヤな男だよ。そう言われた方が断りにくいつてのに」

【男主人】「妖艶女は、ほんとイイ女だと思うね」

【妖艶女】「そう思うなら一晩くらいアタイを買ってみろってんだ」

【男主人】「あいにくと、娼館のナンバーワンを買えるほどの甲斐性はないさ」

【妖艶女】「で、頼みたいことって？」

【男主人】「西の客と少し長めに“お喋り”して欲しい」

【妖艶女】「“お喋り”するだけでいいのかい？ “閨に入ったり

”、“伽の相手”はしなくても？」

【男主人】「うん」

【妖艶女】「近いうちに何かあるのかい？」

【男主人】「何も無ければ良いけどね……ほんと、そう願うよ」

第26話『噂は、羽が生えて飛んでいた』（後書き）

新規キャラクターの紹介です。

妖艶女

【種族】：人間族 【年齢】：27歳 【性別】：女性

【一人称】：アタイ

【設定】：

- ・有名娼館のナンバーワン。
- ・なんか色々と裏の仕事を請け負っているっぽい。

第27話『家に帰ったら、娘がいた』

草原と平穩の国：男主人邸

【長ミミ】 「（ごによごによ）」

【猫ミミ】 「（ごによごによ）」

【男主人】 「ただいま……？」

【長ミミ】 「……お帰りなさいませ、ご主人様」

【猫ミミ】 「……………（ふるふる）」

【男主人】 「んっ、どうかしたの？」

【猫ミミ】 「……『お父さん！ 今日会った女の方は誰っ！！』」

【男主人】 「え、何っ？ 何が起こってるの！？」

【猫ミミ】 「『あたしが何も知らない子供だと思ってるの？ お父さんフケツよっ！ 大っ嫌い！！』」

【男主人】 「ぐふっ……………意味不明だけど、そのセリフは、すっごく精神的に刺さる！！」

【長ミミ】 「ふふふ、お仕事で疲れて帰ってきたご主人様へのささやかな気分転換です」

【男主人】 「いやもう、気分転換を通り越して、心が痛いよっ！ 僕は未婚者なのに！！」

【猫ミミ】 「『お父さんが、あの女の人と別れるまで親子の縁を切るから！！』」

【男主人】 「まだ続いてた！？」

【猫ミミ】 「……………ねねっ！ 何点くらいだった？ あたしのハクシンの演技！」

【男主人】 「え……………、そんな満面の笑顔で質問されても……………」

【長ミミ】 「猫ミミちゃん、どうやら、今日の演技ではご主人様に合格点をもらえなかったようです。満点を目指して、明日も挑戦し

ましょう」

【猫ミミ】「おー！」

【男主人】「本人を目の前で、奇襲の計画を堂々と……」

【長ミミ】「ご主人様、隠し子バージョンと愛人バージョンのどちらが好みでしょうか？」

【男主人】「そんな二択しかないの!？」

【長ミミ】「明日こそ満点を目指して頑張りますから（キリッ）」

【猫ミミ】「あたしも頑張る！（グッ）」

【男主人】「ごめんなさい、もう、満点あげるから、普通に家に帰らせて」

第28話『嬉しいから、泣いていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「あ、猫ミミ、ちょっとこっち来て」

【猫ミミ】「はい？」

【男主人】「いつもお仕事ご苦労様です。はい、これ」

【猫ミミ】「銀貨……？」

【男主人】「少ないけど、今月分の給金」

【猫ミミ】「え？ これをあたしに？」

【男主人】「うん、猫ミミの分だよ？ 長ミミと違って僕が雇ってることになってるから」

【猫ミミ】「……………」

【男主人】「金額については長ミミと相談して決めたからね」

【長ミミ】「はい、衣食住の面倒を見ている分を差し引いた金額になってます」

【猫ミミ】「ありがとうござい……（ほろ）」

【男主人】「えっ!？」

【猫ミミ】「あ、あれ？ あははっ、へ、変だな（ごしごし）」

【男主人】「何か悲しいことが？」

【猫ミミ】「ううんっ、逆、嬉しいのに……（えぐっ）」

【男主人】「（小声）長ミミ、猫ミミはどうしちゃったの!？」

【長ミミ】「はあ、ご主人様……そんなだから、女心が分からないと言われるのです」

【男主人】「うっ……………」

【長ミミ】「ここ数日の間、ずっと張り詰めていた緊張が解けたのでしょう」

【男主人】「緊張？」

【長ミミ】「見知らぬ街に連れて来られ、あげく訳の分からない陰謀に巻き込まれていたのです」

【男主人】「ああ……………なるほど」

【長ミミ】「ですから、ご主人様は優しく抱きしめてあげてください、ほらっ」

【男主人】「…………えっと、猫ミミ？ もう大丈夫だから、ね？（ぎゅ」

【猫ミミ】「…………うぐっ（ぎゅ!!」

【男主人】「少なくとも僕の家にいる時は安心していいから（背中ぽんぽん」

【猫ミミ】「うあああああぁん!!!!」

第29話『長ミミさんに、信じられていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「猫ミミちゃんをベッドに寝かし付けてきました」

【男主人】「ご苦労様。僕が運んでも良かったのに」

【長ミミ】「猫ミミちゃんは身軽ですから……それにそもそも女性の部屋に本人の許可なく入ってはいけません」

【男主人】「あ、いや、猫ミミの場合、女性っていうか。まだ女の子というか」

【長ミミ】「女性は生まれた時から女性なのです。これは一般常識です」

【男主人】「はい」

【長ミミ】「ご理解していただけて良かったです。さて、ご主人様、お茶はいかがですか？」

【男主人】「あ、淹れてくれる？」

【長ミミ】「かしこまりました。少々お待ちください」

【長ミミ】「……お待たせしました（トポトポ）」

【男主人】「（ズズッ）ん？ お茶の葉を変えた？」

【長ミミ】「いえ、今日は少し濃い目に淹れただけです」

【男主人】「ふーん、ところでさ……」

【長ミミ】「なんでしょうか？」

【男主人】「猫ミミのことなんだけど、様子がおかしいことに何時から気づいてた？」

【長ミミ】「ほぼ最初から、でしょうか」

【男主人】「なんで僕に言ってくれなかったの？」

【長ミミ】「なんとなく、としか言えません」

【男主人】「なんとなく？」

【長ミミ】「ええ、以前も申し上げましたが、私はご主人様のことを信じているのです」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「ですから、いつか今日のような日が来ても、ご主人様なら受け止めてくれると」

【男主人】「でも、それはさ、結果論に過ぎないよ？」

【長ミミ】「差し出がましい意見かもしれませんが……私もご主人様に助けられたので」

【男主人】「ん？ ああ、かみな……」

【長ミミ】「ご主人様、それ以上思い出されると、明日のスープとサラダが真っ赤に染まりますよ？（ニコリ）」

【男主人】「あの罰料理は止めてー！！」

第30話『お師匠様が、やって来ていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【白髪女】「ふう、まったく年は取りたくないもんだねえ。王都に
来るだけで億劫おくうでしょうがない」

【男主人】「い、いえ、師匠はいつでもお若くてお元気です（カチ
コチ）」

【白髪女】「おやおや？ いっぱしの世辞が言えるようになったも
んだ」

【長ミミ】「（トポトポ……）」

【白髪女】「修行が辛くて涙流してた小僧が、師団長とは……時の
流れは早過ぎるねえ（しみじみ）」

【長ミミ】「どうぞ、ミルクと砂糖はそちらの壺から好みでおいれ
ください」

【白髪女】「ありがとう、いただくよ。……（こくこく）……美味
い。お前さん、いい腕してるねえ」

【長ミミ】「お褒めいただきありがとうございます」

【男主人】「それで、師匠は本日はどんな用があつて？」

【白髪女】「用がないなら、弟子の顔を見に来ちゃいけないっての
かい？」

【男主人】「そんなことはありません！ 師匠でしたらいつでも歡
迎します！」

【白髪女】「そうかいそうかい、じゃあ、しばらくの間この家で厄
介させてもらおうかい」

【男主人】「うえいつ……？」

【白髪女】「ひさしぶりに王都まで出て来たんだ、しばらくこっち
に居ようかと思ってねえ」

【男主人】「師匠のためでしたら、一流宿の部屋を押さえますけどっ!？」

【白髪女】「宿代がもったいないじゃないかい、その分は夕食の酒代にしとくれ」

【男主人】「そ、そうですか……? (汗)」

【白髪女】「何を怯えてるんだい。そりゃあ昔はちよいと厳しく修行をつけてたけどねえ」

【男主人】「あ、あれが“ちよいと”………生死の境をさまよったのが何回かも覚えてないのに……」

【白髪女】「今は自主鍛錬してるんだろ? だったら、アタシがとやかく言うつもりはないよ」

【男主人】「そ、そうですか……」

【白髪女】「まあ、どうしてもって言うなら老体に鞭を打って、指導するのも考えるけどねえ」

【男主人】「あは、あはは……」

【白髪女】「それでアタシは泊まらせてもらっていいのかい?」

【男主人】「はい! 師匠でしたら、我が家だと思って、何日でもご宿泊ください!!」

【白髪女】「それじゃあ、10日ばかりお世話になろうかねえ。お嬢ちゃん達もよろしく頼むよ」

第30話『お師匠様が、やって来ていた』（後書き）

新キャラ紹介。おばあちゃんキャラも結構好きです。

白髪女

【種族】：人間族 【年齢】：58歳 【性別】：女性

【一人称】：アタシ

【設定】：

- ・ 男主人の魔術の師匠。
- ・ のんびりした口調とは裏腹に修行は厳しいらしい。

第31話『女三人で、語っていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「白髪女様、本日のお昼はいかがなさいますか？」

【白髪女】「アンタに任せてもいいかねえ？」

【長ミミ】「かしこまりました。では、その様にいたします」

【白髪女】「うーん、なんか堅苦しいねえ。お客様扱いなのは分かるけどさ」

【長ミミ】「ご主人様から、ご主人様と同じように扱って欲しいと言いつかっておりますので」

【白髪女】「もう少し砕けた口調でさ、呼び方も「白髪女さん」くらいにならないかい？」

【長ミミ】「……その方がよろしいのでしょうか？」

【白髪女】「うんうん、お客様かもしれないけど、もう少し親近感が欲しいねえ」

【長ミミ】「……………」

【白髪女】「それとも、若い子は、こんなおばーちゃんの相手はイヤかい？」

【長ミミ】「そのようなことはありません、けども……………」

【白髪女】「じゃあ決まりだ。おーい、そっちの、えつと猫ミミちやんだっけ？」

【猫ミミ】「は、はい！　なんででしょう！」

【白髪女】「男主人は良くしてくれてるかい？」

【猫ミミ】「うんっ！　あたしは孤兒なんで、本当の家族はいないんだけど、お兄ちゃんみたいで嬉しいの！」

【白髪女】「まあ、性格は良い男だからね。じゃあ、今日からアタシが猫ミミちゃんのおばーちゃんだ」

【猫ミミ】「おばーちゃん？」

【白髪女】「うんうん、主人の妹ならアタシにとっては孫みたいなもんさ」

【猫ミミ】「え、え？」

【白髪女】「主人がお兄ちゃんなら、アタシはおばーちゃん、ほら、呼んでみな」

【猫ミミ】「お、おばーちゃん……………あう（テレ）」

【長ミミ】「あの……………」

【白髪女】「アンタもおばーちゃんって呼んでも構わないんだよ？」

【長ミミ】「いえ、その、白髪女様……………」

【白髪女】「白髪女さん、もしくは、おばー様なら許すけどねえ？」

【長ミミ】「……………白髪女さん、ピラフとサンドイッチのどちらがお好きですか？」

【白髪女】「よしよし、じゃあサンドイッチにしてくれるかい？
庭で一緒に食べようじゃないか」

第32話『長ミミさんが、言い負けていた』

草原と平穏の国：男主人邸（裏庭）

【猫ミミ】「はむはむ、おいしいー」

【白髪女】「ふむ、生ハムを刻んでフレッシュチーズと混ぜ合わせてるんだねえ。これは美味い」

【長ミミ】「白髪女さん、その、なんで私たちまで一緒に食事をしているのでしょうか？」

【白髪女】「そりゃ、アタシが命令したからだろうねえ？」

【長ミミ】「なんでそんな命令をされたのでしょうか？」

【白髪女】「そりゃ、一緒に食事をするためじゃないかい？」

【長ミミ】「……………」

【白髪女】「ほら、アンタも食べなよ。この何の実か分からないジヤムのサンドイッチも美味いよ」

【長ミミ】「それはニンジンのジャムです」

【白髪女】「なるほど、言われてみれば確かにニンジンの風味がするねえ」

【猫ミミ】「ご主人さまはニンジンが嫌いなんだって、だから長ミミさんが色々頑張ってるんだ！」

【白髪女】「ああ、ヤツの食わず嫌いを直すためかい。アタシも一時期頑張ったんだけど、全力で抵抗されたねえ」

【長ミミ】「ええまったく嫌いだからといって、こっそり残すだなんて子供っぽい」

【白髪女】「もっともアタシも無理やり食べさせようとしたから、お互い様かねえ」

【猫ミミ】「あたしは何でも残さず食べるよ！」

【白髪女】「猫耳ちゃんは偉い偉い。アタシは長ミミほど手間を掛

けたりはしなかったけど」

【長ミミ】「……その、悔しくありませんか？　せつかく作った料理が残されると」

【白髪女】「なるほどねえ。ただ料理を仕事と割り切っていれば、そんな気持ちにはならないもんだよ」

【長ミミ】「私はあくまでメイドの仕事として料理をしています」

【白髪女】「うん、確かに料理はメイドとしての長ミミの仕事なんだろうねえ」

【長ミミ】「それは、先ほどの言葉と矛盾をしませんか？」

【白髪女】「もう少し詳しく説明が必要かい？」

【長ミミ】「よろしければ、是非」

【白髪女】「じゃあ、交換条件だ。ほら、一緒に昼食を楽しんで、デザートが終わったら話してあげよう」

【長ミミ】「……………いただきます」

第33話『白髪女さんが、冗談を言っていた』

草原と平穏の国：男主人邸（裏庭）

【白髪女】「ふう、ごちそうさま。ああ、そうだ。猫ミニちゃん、お使いを頼んでいいかい？」

【猫ミニ】「おばーちゃん、何をすればいいの？」

【白髪女】「お小遣いをあげるから、猫ミニちゃんの好きなオヤツを3人分買ってきてくれないかい？」

【猫ミニ】「えっ？ あたしの好きなオヤツでいいのっ！？」

【白髪女】「ああ、猫ミニちゃんのお奨めのヤツをお願いするよ。とりあえず、これだけ渡しておくからね」

【猫ミニ】「わかった！ じゃあ、行ってくるね！（しゅたっ）」

【長ミニ】「……白髪女さん、さきほどの言葉の意味を聞いてよろしいでしょうか？」

【白髪女】「簡単な言葉遊びでねえ。アンタの料理には、仕事以外の気持ちが混ざっていると云うことさ」

【長ミニ】「私は別にご主人様に惚れていたりはしませんが」

【白髪女】「気持ちと言うのは、何も男と女の愛情ばかりじゃないだろう？」

【長ミニ】「それは……そうですが」

【白髪女】「ああ、アンタには男主人に対して話せない、いや話すつもりがないことがあるみたいだねえ」

【長ミニ】「！？ 白髪女さん、貴方は私の何を知っているのですし
ようか？」

【白髪女】「例えば……アンタの父親だけど、なくなっていない
みたいだねえ」

【長ミニ】「！！」

【白髪女】「……とまあ、軽い冗談さ」

【長ミミ】「じょう……だん？」

【白髪女】「ああ、軽く“カマを掛けてみた”だけで、本当は何も知らないのさ」

【長ミミ】「そんなことはありません、実際に私のお父さんが死んでいることを知っていました」

【白髪女】「アタシはさ、ただちよつと人として長く生きているだけだよ。誰だって人に話せないことの1つや2つ抱えてるものさ。それに父親の件だって“なくなっていない”と言ったんだ……“死んでいる”とも“生きている”とも受け取れるだろう？」

【長ミミ】「……そうですね」

【白髪女】「しかし、今みたいな会話でもいくつか汲み取れてしまふモノもあるというわけだねえ」

【長ミミ】「……………」

【白髪女】「そんなに顔を強張らせることはないさ、すくなくてもアタシはアンタのことが気に入ったからねえ。何か困ったことがあれば、力を貸してもいい気になっているくらいにはさ」

【長ミミ】「ありがとうございます」

【白髪女】「何か話したいことがあれば話してみな。多分、花壇に話しかけるよりは有意義だからねえ」

第34話『白髪女さんの、噂をしていた』

草原と平穏の国：王宮（執務室）

【男主人】「よし、次の仕事は……？」

【副官女】「ええと、今ので来月に必要な分の書類までほとんど終わちゃいましたけど」

【男主人】「ぐっ、しょうがない。訓練場にも行こうかな……」

【部下男】「男主人様。三日前からオレらを先に帰して、ずっと残業してますけど、何かあったんですか？」

【男主人】「今日は、おうちに帰りたくないの……」

【部下男】「うーわー、気になる女の子に言われたい文句ですが、それ。本当にどうしたんです？」

【男主人】「……師匠がうちに來てるんだけど、聞いてないのか？」

【部下男】「げっ、鬼婆がっ！？ うわ、本気で申し訳ありません！」

【男主人】「知ってると思ってたんだけど、もしかして初耳か？」

【部下男】「そりゃあ、もちろんじゃないですか！ もし、それを知ったら即日に男主人様のお屋敷へ挨拶に行きますよ！ 逆になんで教えてくれなかったんですっ！？」

【男主人】「こっちだって、知ってるから何も言ってこないのかと思っただよ」

【部下男】「うわー、じゃあ今日はこれから酒場で土産を買って、男主人様のお屋敷に……」

【白髪女】「ああ、酒を持ってくるなら明日の方が嬉しいねえ」

【男主人】「……！！？」

【部下男】「出たあっ！！ え、なんで王宮内に堂々が入っているんですか、お祖母様！？」

【白髪女】「ふふふ、権力を持った知り合いってのはいいもんだねえ。紙つぺら一枚で入場自由さ」

【男主人】（……そんなでいいのか王宮の警備っ!?!）

【白髪女】「若い頃のアタシは、夜会の華と呼ばれるほどモテたんだから、当時のコネってやつかねえ」

【部下男】「そ、それで、お祖母様はどんな御用で王宮までいらしたのでしょうか？」

【白髪女】「いやなに、久しぶりに王都の酒場で一杯といきたくてねえ。可愛い孫と弟子をつき合わせようと思ったんだけど……ところで、鬼婆ってのは……」

【男主人】「（言葉を遮って）もちろん、つき合わせて頂きます、師匠！」

【部下男】「お祖母様！ オレの行きつけの店ですが、お祖母様好みの葡萄酒を置いてまして！」

【白髪女】「そうかいそうかい。お嬢さん、悪いけどこの二人を先に帰らせてもらうけど、いいかい？」

【副官女】「は、はい……いつてらっしゃいま……せ？」

第35話『男主人が、問い詰められていた』

草原と平穏の国：酒場

【白髪女】「それじゃあ、かんぱーい（ゴクゴク）」

【男主人】「乾杯……（ちびり）」

【部下男】「乾杯……（ごくり）」

【白髪女】「あー、この一杯のために長生きしてるねえ。（ひよいパク）ん、この揚げ物も美味いねえ」

【男主人】「それで師匠、僕たちは何のために呼ばれたのでしょうか？」

【白髪女】「久しぶりに愛しい弟子とのこういう場所での語らいを楽しみにだねえ」

【男主人】「でしたら、わざわざ王宮まで来る必要はなかったと思うのですが……」

【白髪女】「抜き打ち視察ってのは、事前に知らせるもんじゃないんだよ」

【部下男】「何を視察するつもりだったんですか！？」

【白髪女】「まあまあ、とりあえずアンタに聞きたいことがあるんだけどいいかい？」

【男主人】「ええ、なんでしよう？」

【白髪女】「誰を嫁さんにする気なんだい？」

【男主人】「……はい？」

【白髪女】「きちんと責任は取りなよ。避妊してればいいってもんじゃないからねえ」

【男主人】「ちょ、ちょっと待ってください！ 何の話ですかっ！？」

【白髪女】「恋バナ？」

【男主人】「可愛く言っても似合いませんから、師匠！！ 大体誰を嫁するんですか！」

【白髪女】「長ミミは夫を立てるいい奥方になりそうだねえ。猫ミミは元気な子を生みそうだ。もちろん異種族婚は難しいかもしれないけど、そこは愛で乗り切れ。あと、さつき王宮で見た娘も満更じやなさそうじゃないかい？ 不誠実なのは、アタシが許さないよ」

【部下男】（そつえば、お祖母様はこういう方だった……恋愛至上主義で、妙な所で勘が鋭いし）

【男主人】「まず断っておきますけど、長ミミたちはあくまで使用人で、恋人でも愛人でもありません！ それに王宮のつて副官女のことですか？ あくまで大事な副官ですよ、彼女は！」

【部下男】（副官女がこの場にいないくて良かった……絶対ややこしいことになってた）

【白髪女】「それでもアタシの弟子なのかねえ。アンタほどの家禄なら、いつそ「3人とも幸せにしてみせる」位は言うもんだよ？」

【男主人】「言いませんっ！！ それに、今は恋愛とかしているしている時じゃないですから！」

【白髪女】「まだまだ青いねえ。恋愛は“する”もんじゃない、“している”もんさ」

【男主人】「……………本当に何のために呼ばれたんですか？」

【白髪女】「アンタの将来を心配してかねえ？」

第36話『男主人が、心配されていた』

草原と平穏の国：酒場

【白髪女】「さてと……ステージ オン フェイク サウンド……
スモールワールド
《虚像世界》」

【部下男】「これは《結界作成》リミテッドエリア系の魔術ですか？」

【男主人】「うん、このテーブルに座っている僕たち以外には、僕たちの姿が認識できなくなっているはず」

【白髪女】「あ、しまった。アンタたちに任せればよかったねえ。無駄に疲れなくてすんだ」

【部下男】「いやいや、オレは、そんな高等魔術は使えませんから」

【白髪女】「そうなのかい？ 情けない。アタシの孫ならこのくらい“ボディラング代用詠唱”で使いな」

【男主人】「それ、結構無駄言ってますけど。で、結界を張ったということとは本題に入るのですね？」

【白髪女】「そうだねえ。正直に答えてくれると嬉しいんだけどねえ」

【男主人】「何をですか？」

【白髪女】「アタシの力が必要かい？」

【男主人】「……………何のために？」

【白髪女】「遅くても半年、早ければ来月には、戦争が始まるんだろ？」

【部下男】「なっ！ 何を言ってるんですかお祖母様！！」

【男主人】「はあ……部下男、語るに落ちてる」

【白髪女】「もうちょと部下には心理戦の基礎を教え込んでおくんだねえ」

【男主人】「というか、勘弁してください師匠……どこに自分の弟

子と孫に心理戦を仕掛ける人がいるって言うんですか」

【白髪女】「何事も経験じゃないかい」

【男主人】「まあ、いいです。師匠もある程度の情報は、既に掴んでいるんでしょう？」

【白髪女】「そうだねえ。こう見えても西の情勢には気を配っていたからねえ」

【男主人】「こっちは、武具と兵糧、それと傭兵の流れを追っていましたが、ほぼ確定ですね」

【白髪女】「7年前の戦争で消えずに燻っていた火種がまた煙を上げだしたって所かねえ」

【男主人】「付き合うほうは溜まったものじゃありませんけど……」

【白髪女】「アンタは、また“心”を削って削って削り減らすつもりかい？」

【男主人】「削るも何も、喪った物は減らしようがありませんから」

【部下男】「男主人様……」

【白髪女】「はあ、やれやれ……難儀だねえ」

第37話『部下男は、決意していた』

草原と平穏の国：酒場

【男主人】「えっと、師匠……すみませんけど、そろそろお開きにしませんか？」

【白髪女】「ふむ、アタシはちよいと孫と会話がしたいんで、先に帰ってくれるかい？」

【男主人】「（小声）部下男……健闘を祈る」

【部下男】「（小声）男主人様……明日からは病欠でよろしく願います」

【男主人】「（ちゃらり）師匠、酒場の払いはこれで払ってください。では、お先に失礼します」

【白髪女】「さて、ありがたくご馳走に預かせてもらおうかねえ」

【部下男】「で、お祖母様、わざわざオレを残した理由ってのは？」

【白髪女】「アンタが男主人について何を知ってて、どんな考えかを確認しとこうかと思ってねえ」

【部下男】「お祖母様以上のことは知らないと思いますけど」

【白髪女】「アンタと男主人が出会ったのは、男主人がアタシの弟子になった翌年だから……12年も前かい」

【部下男】「一応、男主人様はオレの兄弟子ってことになりますね」

【白髪女】「そう言うなら、そうなるねえ」

【部下男】「7年前の『焦森戦争』では、男主人様が小隊長、オレがその部下で……」

【白髪女】「男主人が味方側には“救森の魔術師”、敵国にとっては“不死の魔人”と呼ばれる活躍を見せた」

【部下男】「それだけだったら良かったんですが……」

【白髪女】「宮内で王子派と主権を争っていた王弟派には面白くな

い話だった」

【部下男】「王子様と幼馴染で右腕と呼ばれる男主人が“榮譽”と“権力”を手に入れてしまう可能性」

【白髪女】「そして、忌まわしい男主人邸虐殺事件……生き残ったのは男主人と義理の妹だけ」

【部下男】「実行犯は男主人様によって殲滅されましたが……」

【白髪女】「主犯と思わしき貴族が次々と謎の死を遂げ、事實は闇の中に……」

【部下男】「やったのは男主人様でしょうか？」

【白髪女】「さてねえ。アタシたち以外にも、そう考えた人は少なくはないだろうねえ」

【部下男】「あの時、オレは男主人様の力になれなかったこと、止められなかったことを悔やみます」

【白髪女】「しょうがないさ、男主人が持つ膨大な魔力は、人が持つ能力としては異常過ぎる」

【部下男】「だけど！ 男主人様はオレらと同じ普通の人間です！
！」

【白髪女】「ああ、普通だからこそ、戦争で起こした自らの大量殺人について、心を痛めていたねえ」

【部下男】「……………少なくともオレは男主人様について行きます」

【白髪女】「やれやれ、アタシもしばらくは寿命を迎えるわけにもいかないようだねえ」

第38話『長ミミさんが、起きて待っていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「お帰りなさいませ、ご主人様」

【男主人】「あ、まだ起きてたんだ……先に休んでいてよかったのに」

【長ミミ】「『べ、別に男主人君のために起きていたんじゃないんだからね!』」

【男主人】「うえい？」

【長ミミ】「『勘違いしないでよね。私は男主人君のことなんて、好きじゃないもん!』」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「ふう、ご主人様も思わず魅入ってしまう迫真の演技だったようですね。イチコロですか？」

【男主人】「……思わず呆氣に取られたんだよ!!」

【長ミミ】「ちっ、ガセネタを掴まされましたか」

【男主人】「態度悪っ!?　というか、どんなネタだったんだか」

【長ミミ】「ご主人様は『表面的につれない態度で迫ればイチコロだねえ』と、演技指導も頂きました」

【男主人】「演技指導した人は分かったけど……長ミミは何がやりたかったの？」

【長ミミ】「ご主人様をイチコロにして手玉に取る悪女になるためのステップ1?」

【男主人】「なんで疑問系なのは置いといて、ステップ2は実践しないように!!」

【長ミミ】「ええ、ステップ2の担当は猫ミミちゃんらしいので」

【男主人】「猫ミミに何を仕込んだっ!？」

【長ミミ】「ご主人様、私はご主人様の自制心を信じております」

【男主人】「え、なにそれ、自制心が必要なの！？ あ、酔いが急に醒めてきた」

【長ミミ】「ヒントは『お風呂場でトッキドキ大作戦』とだけ、具体的な内容については秘密です」

【男主人】「いや、もう、なんか、グレイゾーンどころじゃなくな
い！？」

【長ミミ】「ええ、エッチなのはいけません」

【男主人】「だったら止めよう！！」

【長ミミ】「私に白髪女さんと猫ミミちゃんのタッグを止めれるだ
ろうか？ いや、無理だ」

【男主人】「反語法で言わなくても、いや、僕も無理っぱいなあ」

【長ミミ】「でしょう？」

【男主人】「なんか君がそんなに満足げな顔をしているのか、とっ
ても問い詰めた気分だよ」

第31話『男主人は、少し酔っていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「ご主人様、どうぞ水です」

【男主人】「ありがと……（ごくごく）……ぷはっ」

【長ミミ】「お代わりはいかがですか？」

【男主人】「ん、もう十分」

【長ミミ】「かしこまりました」

【男主人】「……………あのさ、一つ聞いてもいいかな？」

【長ミミ】「なんででしょうか？」

【男主人】「君は何者なのかな？」

【長ミミ】「…………ご主人様、酔っていらっしゃるのですか？ それとも若年性痴呆ですか？」

【男主人】「別にボケてない…………けど、まだ少し酔ってるかもね」

【長ミミ】「ふむ、私は私ですが、何を持って私と証明するのか……とても難しい命題ですね」

【男主人】「別に哲学的な質問をしているわけじゃなくてね」

【長ミミ】「私は、エルフ族のメイドの長ミミです…………では、いけませんか？」

【男主人】「いけない、って訳じゃないんだけどさ。僕のこと知らないわけじゃないんでしょ？」

【長ミミ】「ええ、ご主人様のことならホクロの数まで…………」

【男主人】「それは嘘だよな？ いや、嘘だと言ってくれろ！？」

【長ミミ】「では、嘘ということでは」

【男主人】「長ミミは、微妙に僕の不安を煽る天才だね！」

【長ミミ】「と、このくらいにはご主人様のことを知っていると自負します」

【男主人】「じゃあ、僕が大量殺人者であることも知っているんだよね？」

【長ミミ】「ええ、一昼夜で敵軍の兵士1万とんで88人を殺した“救森の魔術師”様」

【男主人】「怖くないのか？」

【長ミミ】「何が怖いのでしょうか？」

【男主人】「僕は簡単に人を殺すことができるんだよ？」

【長ミミ】「ご主人様、嘘は私の担当ではありませんでしたか？」

【男主人】「嘘……？別に嘘なんか言っていない」

【長ミミ】「殺せるのは本当でも、“簡単に”だなんて、そんな悲しい嘘をご主人様の口から聞きたくありません」

第40話『長ミミさんと、約束を交わしていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「……………」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「ありがとう、と言っべきなのかな？」

【長ミミ】「どういたしまして、と答えるべきでしょうか？」

【男主人】「長ミミは、偶然うちに雇われた、ってわけじゃないよね」

【長ミミ】「ご主人様……セリフが疑問系ではなく、断定系になっております」

【男主人】「うん、確信しちゃったから」

【長ミミ】「確信しちゃわれましたか」

【男主人】「妹か君か、どっちは分からないけど……長ミミは、僕を救いに来てくれたんだね？」

【長ミミ】「あら、そこで疑問系なのですか？」

【男主人】「外れてたら、ちょっと恥ずかしいし」

【長ミミ】「では、思う存分恥ずかしがってください、“外れ”です」

【男主人】「え、ほんと？ うわ、何か僕って自意識過剰っ！？」

【長ミミ】「美女妹様の意図は別として、私はわざわざ外国までご主人様を救いに来たものではありません」

【男主人】「うわー、恥ずっ！ なに訳知り顔で語っちゃったの、数瞬前の僕っ！！」

【長ミミ】「私は、ご主人様と交わした約束を果たしてもらいに来たのです」

【男主人】「……約束？」

【長ミミ】「はい、ご主人様は綺麗すっぱり根こそぎに忘れられているようですが」

【男主人】「ええっと、ごめん、僕と長ミミって、以前に会ったことがあるの？」

【長ミミ】「あるのです。もしかしたら忘れられてるかも、と予想していたので凹んだりはしていません」

【男主人】「うううっ……（悩み）」

【長ミミ】「この設問に時間切れはありません、明日でも明後日でも一年後でも回答をお待ちしています」

【男主人】「……ヒ、ヒントは？」

【長ミミ】「もちろんノーヒントです」

【男主人】「すっごく気になるんだけど!!」

【長ミミ】「ご主人様、どうぞ頑張っと思って出してくださいませ」

第41話『副官女は、色々悩んでいた』

草原と平穩の国：王宮（執務室）

【副官女】「きよ、きょうは部下男が遅いですね。寝坊でしょうか」

【男主人】「あ、今日は病欠で休むっていう連絡を事前に受けてるよ」

【副官女】「男主人様、事前につて、それはズル休みというのでは……」

【男主人】「ほら、昨日突然来たお婆さんがいたでしょ？ 僕の師匠で、部下男の実祖母なんだけど」

【副官女】「あ、そうだったのですか」

【男主人】「でまあ、なかなかの女傑だね。その人との付き合いで、少しね」

【副官女】「事情があるのでしたら、単純に責めるわけにはいきませんね」

【男主人】「だから、部下男はしばらく休むことになったから」

【副官女】「そ、それは、数日間は部屋で二人つきりなのですね……二人つきり、あうう」

【男主人】「そうなっちゃうね、仕事が大変になるかもなんで、ごめんね」

【副官女】「い、いえ、色々とがんばります!!」

【男主人】「色々……？ まあ、やる気があるのは助かるけど、ふあ（欠伸）」

【副官女】「色々とは気にしないでください！ ところで、先ほどから眠そうですね！（汗）」

【男主人】「うん、ちよっと昨晚は寝れなくてね」

【副官女】「何かあったのですか？」

【男主人】「いや、ちょっと長ミミ、あ、うちの使用人なんだけど、その長ミミのせいで眠れなくてね」

【副官女】「!?!?!」

【男主人】「まったく、こっちが降参してるのに許してくれないんだから……」

【副官女】（【長ミミ】「うふふん、ご主人様、まだまだ許しませんわ」）

【男主人】「明日も明後日も一年後でも、って言われてもなあ……まったく参っちゃうよ」

【副官女】（【長ミミ】「今日はここまでにしますけど、明日も明後日も楽しみましょうね」）「ダメです!」

【男主人】「ん?」

【副官女】「男主人様……今晚、お屋敷にお邪魔してもよろしいでしょうかつ!」

【男主人】「い、いいけど、どうしたの?」

【副官女】「私……がんばりますから!」

【男主人】「????」

第42話『三人が揃って、見合っていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「……………」

【副官女】「……………」

【妖艶女】「……………」

【男主人】（女三人寄れば、姦^{かしま}しいと、昔の方は言いました……く、
空気が重いつ）

【長ミミ】「……………」

【副官女】「……………」

【妖艶女】「……………」

【男主人】「えーと……………」

【長ミミ】「ご主人様」

【男主人】「は、はいっ！」

【長ミミ】「玄関で立つて話すのもなんですので、皆様と晚餐を一緒するということでもよろしいでしょうか？」

【男主人】「よろしくお願いいたしまする」

【副官女】「え、あ、そんな悪いです！」

【妖艶女】「そりやちようど良いね、アタイは遠慮なくご馳走になるよ。お酒はつくかい？」

【長ミミ】「そちらの王国軍の方、ご遠慮なさらずに、ご主人様の許可も頂きましたので歓待させていただきます。そちらの胸元がはだけた服装のお方、葡萄酒でよろしいでしょうか？ エールなども用意できますが」

【副官女】「…………じゃ、じゃあ、ご馳走になります！」

【妖艶女】「あんまり歓待されるって感じの口調じゃないね」

【長ミミ】「そのように聞こえましたら申し訳ありません。この口

調は生まれつきと職業柄ですの」

【妖艶女】「ふふん、葡萄酒を頂こうかね。シヨウガ入りの水割り
で頼むよ」

【長ミミ】「水割りですか……なんでしたら、氷割りも用意できま
すが？」

【妖艶女】「ほお、なら、そっちで。シヨウガはなしで願ひする
よ」

【長ミミ】「かしこまりました。そちらの方も飲み物はいかなさ
いますか？」

【副官女】「えーと、じゃあ同じもので……」

【長ミミ】「はい。それでは、皆様、まず食堂でお待ち下さい。ご
主人様？」

【男主人】「は、はいっ！」

【長ミミ】「皆様の分の食事を用意してまいりますので、お二人と
ご一緒に仲良く楽しくご歓談下さい」

第43話『女の戦いが、始まっていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【妖艶女】「それじゃあ、まあ、男主人の健康とかを適当に願って、乾杯（カラン）」

【副官女】「か、乾杯……（カラン）」

【男主人】「一応、ありがと……（カラン）」

【妖艶女】「綺麗な氷だね。これは男主人が作ってるかい？」

【男主人】「いや……多分、長ミミが自分で作ったんじゃないかな」

【妖艶女】「エルフ族なら魔術を使ってもおかしくないけど……それでメイドとは、随分と酔狂な話だね」

【副官女】「え？　なんでですか？」

【妖艶女】「……あんだ、王国軍での男主人の部下なんだろう？（呆れ）」

【副官女】「そ、そうですが……」

【妖艶女】「魔術を使える人は少なくはない。ただ、製氷を行なえるほど精密な魔術を使える人、となると話は別だ。それほどの腕の立つ魔術師なら、王国軍に王立研究所、大商会のお抱え魔術師と引く手は数多^{あまた}さ」

【副官女】「そのくらいの魔術なら、私も使えますけど……？」

【妖艶女】「……男主人、この子はどこの箱入り娘だい？　自分が庶民と違っって自覚がないだろ？」

【男主人】「生粋の王国貴族の家柄だね。本来なら僕の部下に納まっているような子じゃないんだけど」

【副官女】「男主人様、家は関係ありません！　私は自分の意志で男主……じゃなくて、第十一師団への配属を希望したんです！　そりゃあ、配属の際にちよっとお父様にお問い合わせ……（も

じもし」

【妖艶女】「いいとこの嬢ちゃんってのは、間違ってないんだね」

【副官女】「……さつきから、黙って聞いていれば、そういう貴女はどちら様ですか？」

【妖艶女】「おや、アタイは妖艶女っていうんだ。男主人は、うちの娼館のお得意さまでね」

【副官女】「娼館………ということは、男主人様と………!？」

【男主人】「誤解されてるかもしれないから言っておくけど、僕は客として行っているわけじゃないからね」

【副官女】「失礼しました。男主人様の言葉を信じます」

【妖艶女】「はんっ、あんたも娼婦を見下すような人種なのかい」

【副官女】「貴女がどこで何をしようと、別に………そういう職業が必要であることは習っていますし」

【妖艶女】「その口調が見下してるってんだよ」

【副官女】「見下しているつもりも、見下しているとも言っていないが？ “私が貴女を見下している”と感じている貴女こそ、自分自身のことを見下しているんじゃないやありません？」

【妖艶女】「ほー、結構言うねえ、お嬢ちゃん。ふふふ、気に入ったよ」

【副官女】「あら嬉しいです。うふふ、私も貴女とは上手く付き合えそうです」

第44話『主人は、気が休まらないでいた』

草原と平穏の国：主人邸

SE（食事の音）：カチャカチャ……………

【猫ミミ】「ねえ、長ミミさん、どっちがホンサイで、どっちがオメカケさん？」

【長ミミ】「あらあら……………」

【主人】「ぶはっ…………げぼげぼっ」

【副官女】「ななななっ!？」

【妖艶女】「ぷっ…………ふふっ、ねえ主人様、アタイがホンサイでお嬢ちゃんがオメカケさんでどうだい？」

【主人】「いいっ!？」

【妖艶女】「そうかい、“イイ”かい」

【副官女】「冗談じゃありません! ど、どうしても、っていうなら私がホンサイなのが筋でしょう!？」

【妖艶女】「おやおや、アタイは主人様に質問しているんだよ? そもそも何が筋なんだか」

【副官女】「少なくとも貴女がホンサイって言うのは許せません!」

【長ミミ】「猫ミミちゃん、お二方ともホンサイではありません。あえて言うならアイジンさんってところですね」

【猫ミミ】「なるほど! じゃあ、あたしたちと一緒にだね!」

【長ミミ】「そうなりますね」

【副官女】「ええええっ!」

【妖艶女】「おやおや…………どおりでアタイがいくら誘っても効かないわけだ」

【主人】「いや、訳知り顔で納得しないで欲しいんだけど……………」

【副官女】「男主人様っ！！ やっぱり「うふうん、ご主人様、まだまだ許しませんわ」ですか！？ 違いますよね！ 違うと言ってくださいー！！」

【男主人】「副官女、落ち着けっ！！ 何がどう違うかが分からない！」

【長ミミ】「猫ミミちゃん、ご主人様は大好き？」

【猫ミミ】「うん、大好き！ だって、あたしのこと痛くしたりしないし、優しくしてくれるから！」

【副官女】「痛くしないで……や、優しくっ！？」

【男主人】「あああっ！！ 長ミミも人に誤解されるような話題をっ！！」

【長ミミ】「ご主人様は猫ミミちゃんがお嫌いなのですか？」

【猫ミミ】「えっ……ご主人さま、あたしのこと嫌いなの？（泣きそう）」

【男主人】「いや好きだよ！ うん、猫ミミはちゃんと屋敷の仕事をしてくれるイイ子だからね！」

【長ミミ】「『ご主人様、私のこと嫌いなの？』（嘘泣きそう）」

【男主人】「とりあえず、今限定で大っ嫌いだー！！」

第45話『男主人は、報告を受けていた』

草原と平穩の国：男主人邸

【妖艶女】「あつはっは、まったく面白いもんを見せてもらったよ」

【男主人】「別に見せもんじゃないんだけどね……はあ」

【妖艶女】「“お喋り”の報告だけに来たつもりだったんだけどね。ご馳走さん」

【男主人】「いえいえ、お粗末さま」

【妖艶女】「とりあえず、西は傭兵の募集について目処がついたみたいだね。早ければ15日後、遅くとも20日後には進軍を始めそうだよ」

【男主人】「開戦は回避できない……か」

【妖艶女】「王子様は最近とんとご無沙汰みたいだけどさ？」

【男主人】「王宮の議会では『戦争が起こるはずがない』と頑なに主張する方が何人かいてね」

【妖艶女】「……7年前の過ちをまた繰り返す気か。そんな主張をするヤツが本当にいるのかい？」

【男主人】「コレが嘘や冗談だったら、どれだけ良かったか」

【妖艶女】「どうするんだい？」

【男主人】「さてね。僕は王子様直属の師団長だからこそ、独断で動くことはできない立場だからね」

【妖艶女】「王子様の声が掛かったら動けるように準備万端で待機ってか？」

【男主人】「いや、王子様一人の独断でも動かせないのが軍隊つてヤツなんだよ」

【妖艶女】「はっ、面倒なことだ……ケンカは最初の一発が肝心だろ？」

【主人公】「ぷっ……分かりやすくいいね」

【妖艶女】「この世で分かりにくいのは、酒飲みの説教と男女の恋愛模様だけで十分さ」

【主人公】「……ところで、なんでにじり寄って来るのかな？」

【妖艶女】「……ふふふ、分かりやすく態度で示してるのさ」

【主人公】「……そういうことはしないって言う話じゃなかった？」

【妖艶女】「……アタイ、少し酔っちゃったみたい」

【主人公】「嘘つけっ！！ 飲み勝負を挑んできた騎士を3人連続で潰したって話を知ってるからな！！」

【妖艶女】「あらま、古い話を持ち出して、酔ったのは主人公様との雰囲気せいさ……アタイに恥をかかせんなよ」

【主人公】「……… 今晩中に僕を落とせるにいくら賭けた？ 1千イェン？ 1万イェン？」

【妖艶女】「うっ！ やだねえ、いつもの冗談じゃないか、あははは」

【主人公】（長ミミ、アドバイスありがとう……）

第46話『副官女は、落ち着かないでいた』

草原と平穩の国：男主人邸

【猫ミミ】「ねえねえ、副官女さん、少し落ち着いたら？」

【副官女】「……男主人様とあの妖艶女さんが二人つきりで……落ち着けるわけが」

【猫ミミ】「大丈夫だよー、長ミミさんが大丈夫って言ってたんだから」

【副官女】「そのどこが大丈夫の根拠なんです!!」

【猫ミミ】「んー、副官女さんもご主人さまが大好きなんだねー!」

【副官女】「あわっ!? な、なにを、仰いますかっ!？」

【猫ミミ】「副官女さんにご主人さまって、いつからの知り合いなの?」

【副官女】「そ、そうですね……私が生意気な貴族の娘だった頃、夜会でお会いして……」

【副官女】「この無礼者っ!! 名を名乗りなさい!」

【男主人】「いやあ、東公爵の娘様に名乗るほどの名前はないな」

【副官女】「私の父を知っていて、その態度を取るとは、よほどの覚悟があるのでしょうか!」

【男主人】「皮肉も通じないか……君は東公爵の娘じゃない自分を考えたことがあるか?」

【副官女】「は?」

【男主人】「若い貴族の子息から持て囃され、美辞麗句と共に謡われる君が、本当の君か?」

【副官女】「何を仰りたいの?」

【男主人】「彼らは君なんか見ていないぞ? 名前も必要ない“東

公爵の娘”を見てるんだ』

【副官女】「……………」

【男主人】「なんてな、僕も似たようなものだけど………… 名前を知られてないことがこんなに嬉しいとはね。おっと、王子様も一段楽しみたいだな。それでは良い夢を、可愛らしいお嬢さん』

【副官女】「…………と、それから色々あって、男主人様の名前と立場を知ってね」

【猫ミミ】「本当にご主人さまとの話？　なんか………… ちょっと違う感じがする」

【副官女】「もう4年前の話です。それに猫ミミちゃんは、きっと最初から身内だったから」

【猫ミミ】「???」

【副官女】「ふふふつ、今度一緒にお茶しましょう？　その時にゆっくり聞かせてあげるわ」

第47話『妖艶女と、乾杯していた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「ご主人様から言付けを伺いました。私をお呼びでしょうか？」

【妖艶女】「ああ、呼び立てて悪かったな。とりあえず一杯付き合ってくださいかい」

【長ミミ】「……では、一杯だけ」

【妖艶女】「何について乾杯しようかねえ」

【長ミミ】「ご主人様の女難^{じやなんばら}抜いを願って、ではいかがでしょう？」

【妖艶女】「ぷつ、それじゃあ、アタイたちの出会いと男主人の鈍感さに乾杯（グイッ）」

【長ミミ】「乾杯（コクコク）」

【妖艶女】「ぷはー、お、あんたも行ける口だね。もう一杯……」

【長ミミ】「ありがとうございます。それで、本題は何でしょうかな？」

【妖艶女】「そう急かすなよ。あんたに確認したいことがあってね……“棘の氏族”って知ってるかい？」

【長ミミ】「……“森林と調和の国”における有力六氏族の1つです。集落が国の南、隣国との境に位置するため、国では最も好戦的な氏族と記憶しております」

【妖艶女】「ほあ、眉一つ動かさないと見事なもんだ」

【長ミミ】「質問はそれだけでしょうか？」

【妖艶女】「おいおい、アタイがカマを掛けてるんだから、少しくらいは反応してくれよ」

【長ミミ】「はて？ カマを掛けられるような覚えはありませんので」

【妖艶女】「主人が主人なら、使用人も使用人だ……ふてぶてしい
つたらない」

【長ミミ】「お褒めいただき有難うございます」

【妖艶女】「誰も褒めてないって……その様子じゃ、喋るつもりは
ないんだろうね」

【長ミミ】「私が“棘の氏族”に所属している、と言うことですか
？」

【妖艶女】「って、喋るのかい！」

【長ミミ】「妖艶女様が聞きたそうでしたので、特別に隠している
つもりはありませんし」

【妖艶女】「この時期に、わざわざ王都まで……あんたほどの力が
ある魔術師が来たのは偶然か？」

【長ミミ】「さて、これから起こることは全て偶然で、起こったこ
とが必然ではありませんか？」

【妖艶女】「やれやれ……確かにこれじゃあ、男主人様の手に余る
わけだ」

【長ミミ】「あえて言うとしたら、私はご主人様を裏切ることだけ
はありません」

【妖艶女】「ふんっ、嘘つきは“自分が嘘つきだ”ってはいえない
んだよな」

第48話『副官女は、良い様に弄ばれていた』

草原と平穩の国：男主人邸

【長ミミ】「……………」

【副官女】「……………」

【長ミミ】「副官女様、何か私に訊きたいことがあるのではないですか？」

【副官女】「え、ええ、そうね……………」

【長ミミ】「例えば、私とご主人様との関係、とか？」

【副官女】「！？」

【長ミミ】「分かりやすい反応は、女性としては可愛らしいのですが、軍人としては如何なものでしょう」

【副官女】「ばっ」

【長ミミ】「馬鹿にはおりませんし、副官女様の名誉を傷つけるつもりはありません」

【副官女】「ごっ」

【長ミミ】「誤魔化そうという意図ではありません。副官女様とは良い関係を気付けたいと思います」

【副官女】「あっ」

【長ミミ】「愛しています、と言われましても、ちょっと困りますが……………」

【副官女】「……………そんなこと言うはずないでしょ!!」

【長ミミ】「はい、気持ちをほぐすための冗談です」

【副官女】「なんかすごい疲れたんだけど」

【長ミミ】「それで、私とご主人様の関係なのですが、擬音で表現するならば“ぬちよぬちよ”とか？」

【副官女】「ぬ、ぬちよぬちよ!？」

【長ミミ】「さらに“ちゅくちゅく”の“ぐつちゅぐつちゅ”みた
いな？」

【副官女】「う、ううつ……」

【長ミミ】「いけません、副官女様！ 戦いは諦めたら終わりです
よ！」

【副官女】「え、え……」

【長ミミ】「私とご主人様が直接言葉にしにくいような関係だと仮
定して、それが何だと言うのです？」

【副官女】「でも……」

【長ミミ】「副官女様のご主人様に対する気持ちは、その程度のも
ののですか？ 違いますよね？」

【副官女】「もちろんよ！ そうよね、簡単に諦めちゃダメよね！」

【長ミミ】「その意気です。頑張って男主人様を追い詰めてくださ
いませ」

第49話『王子様に、からかわれていた』

草原と平穩の国：王宮（王子執務室）

【王子様】「さくやは おたのしみ でしたね」

【男主人】「腹心の部下の家に諜報部員を差し向けるのは止めていただけませんか！？ 他国の諜報部員と気配が混じって、ものすごく困るんですが……！」

【王子様】「貴方の事は、何でも知りたくって、あ、言っちゃった！ きやはっ」

【男主人】「わーい、一回殺したーい」

【王子様】「王族に対する反逆罪は極刑だから気をつけるよ。そんなつまらん事で腹心の部下を失いたくない」

【男主人】「ええ、ご心配なく。殺害現場には魔力反応しちちのシミ1つ残したりしません」

【王子様】「いやあ、ボクは優秀な部下を持てて幸せだな」

【男主人】「私も心優しい上司を持てて、嬉し泣きしそうですよ」

【王子様】「でだ、誰を嫁さんにする気なんだ？ きちんと責任は取れよ」

【男主人】「……あれ？ なんか、その質問って2度目ですか？」

【王子様】「いや、初めてだろ？ まあ、冗談だけどさ」

【男主人】「そろそろ仕事に戻りたいのですが……」

【王子様】「待て待て、わざわざ呼びだしたのに雑談だけして帰るな」

【男主人】「雑談、雑談ねえ……それで本題は？」

【王子様】「悪領主が行方をくらませた」

【男主人】「誰ですか、それ？」

【王子様】「おい！」

【男主人】「いえ、ただの冗談です」

【王子様】「嫌味なヤツだな」

【男主人】「きつと上司に似たんでしょね。というか、王都の監獄に収容されていたのでは？ 詳しい話を聞かせてもらえませんか？」

【王子様】「議会に王弟派から悪領主の赦免願いが出され、極刑は無し。北の監獄送りとなるはずだった」

【男主人】「はずだった、ですか」

【王子様】「ああ、護送の馬車が王都を出る直前に賊に襲われてな…… まさか、王都で襲つてくると考えておらず、護衛の気も緩んでいたらしい。嘆かわしいが、単純に責めるわけにはいかないな」

【男主人】「それで？」

【王子様】「衛視が駆けつけた時、悪領主の死体は見つからなかった。賊に連れ去られたか、どさくさに紛れて逃亡したか。悪領主はアレで武門の出だからな。7年前の『焦森戦争』でも、それなりの武功を上げている」

【男主人】「どっちにしる面倒なことにならなければいいのですが」

【王子様】「とりあえず、覚えておいてくれ」

第50話『男主人は、溜まっていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「長ミミーーーー!!」

【長ミミ】「お帰りなさいませ、ご主人様。ご帰宅早々、溜まっていっしょやるのですか？」

【男主人】「ああ、ストレスで堪忍袋が表面張力ぎりぎりの満杯って感じかな!？」

【長ミミ】「ストレス発散のために私を……」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「で？」

【長ミミ】「いえ、結構、本気でお疲れていっしょやるようなので少々自粛を」

【男主人】「いつもそうしてくれると助かるんだけど」

【長ミミ】「無理です。これは、気になる女の子にイジワルしちゃう男の子みたいなものなので」

【男主人】「それだと、僕が気になる女の子で、長ミミがイジワルしちゃう男の子？ 普通逆じゃない!？」

【長ミミ】「ご主人様が私にイジワルされるのですか？ えっと、その、心の準備が…… もじもじ（棒読み）」

【男主人】「自粛はっ!？」

【長ミミ】「短い任期でした」

【男主人】「あああつ、すごく久しぶりに弄ばれてるよね、僕っ!？」

【長ミミ】「それで、本日は何かあったのでしょうか？」

【男主人】「そうだ! 副官女に何を吹き込んだっ!?! いや、大

体分かってるけど!？」

【長ミミ】「私とご主人様との男と女の間係を仄めかす冗談を少々」

【男主人】「やっぱいい!？」 おかげで、仕事中はすっごく微妙な雰囲気、今日なんてっ!」

【長ミミ】「誘惑に負けて、押し倒しそうにでもなりましたか？
エッチなのはいいません」

【男主人】「むしろ逆だよ！ なんであんなに積極的なのかな!」

【長ミミ】「……いい加減、ご主人様は副官女様の好意を認めては
いかがでしょう？ ご主人様は、自分自身で考えるよりも、ずっと
魅力的で、価値の有る男性であることを理解してください」

【男主人】「それは……」

【長ミミ】「ご主人様、メイドの長ミミとして言わせていただきます。
副官女様は……お嫌いですか？」

【男主人】「……………悪い、夕食はいらない。このまま寝る」

【長ミミ】「かしこまりました」

「幕間」『主従1』

鉦山と武勇の国：皇宮（鉄皇女執務室）

【鉄皇女】「愚かな戦争が始まるわね」

【黒騎士】「ええ、仰るとおり」

【鉄皇女】「結局の所、愚かな兄たちによる愚かな兄弟喧嘩じゃない」

【黒騎士】「この国は……闘争の連続によって統一された歴史があります」

【鉄皇女】「今更、建国史を学び直す気はないわよ。25年前にお父様が初代皇帝になりましたで終わる話」

【黒騎士】「結局、この国は、侵略と制圧によって成長してきた……と言うことです」

【鉄皇女】「7年前の戦争は、初めての国外への侵略戦争とはいえ、勝てる戦争だった」

【黒騎士】「ええ、たった1人の魔術師に戦況を覆されるまでは」

【鉄皇女】「ワタクシは、惨敗兵を見て気付いたわ。この国は根本的に破滅に向かっている、と」

【黒騎士】「鉄皇女様……」

【鉄皇女】「ワタクシは、この戦争は良い機会だと思っているわ。付いて来てくれるわね」

【黒騎士】「貴女様の御心にままに」

【鉄皇女】「ところで……訊いてもいいかしら」

【黒騎士】「はい？」

【鉄皇女】「何時になったら、ワタクシはアナタの物になるのかしら？」

【黒騎士】「俺は鉄皇女様に終生の忠誠を誓っておりますが」

【鉄皇女】「アナタがワタクシの物じゃなくて、逆よ……なんで襲い掛かってくれないの？」

【黒騎士】「お戯れを、鉄皇女様と俺では年の差があります。それに俺は、鉄皇女様が乳飲み子である頃から知っているんですよ。良くて妹としてしか見れません」

【鉄皇女】「8つなんて問題ないじゃない。お父様の新しい側室は、私よりも2つも年下らしいわよ」

【黒騎士】「皇帝様には、その血筋を残す使命がありますから」

【鉄皇女】「そうね。ワタクシの血を残すために、アナタの血が欲しいって言ってるのよ」

【黒騎士】「……………」

【鉄皇女】「アナタの初恋は、ワタクシのお母様だって、ほんと？なら、ワタクシがアナタの好みから外れているってわけじゃないんでしょ？」

【黒騎士】「っ！？　あまり、メイドたちの噂話を信じませんように」

【鉄皇女】「あら、時として女の噂話もバカにならなくてよ」

「幕間」『主従1』（後書き）

いきなりの登場ですが、「草原と平穏の国」以外の視点を書くために必要なキャラクターです。

後々に「草原と平穏の国」サイドのキャラクターと出会う予定。

鉄皇女

【種族】：人間族 【年齢】：16歳 【性別】：女性

【一人称】：ワタクシ

【設定】：

- ・「鉾山と武勇の国」の第一皇女。兄が二人いる。
- ・黒騎士を慕っているらしい。

黒騎士

【種族】：人間族 【年齢】：24歳 【性別】：男性

【一人称】：俺

【設定】：

- ・鉄皇女を補佐する立場にいる。

第51話『猫ミミちゃんは、知らないでいた』

草原と平穏の国：男主人邸

【猫ミミ】「おはようございますー！ ご主人さまー！」

【男主人】「……ん、あ、もうちよつと寝かせて……」

【猫ミミ】「えつと、『あんまりダダをこねると寝込みをいただきます』よー！！」

【男主人】「頂くなつ！ お願い、長ミミに言われた台詞をそのまま言っんじゃありません……」

【猫ミミ】「お寝坊さんなご主人さまがいけないんだよ？」

【男主人】「くっ……そんな純粋な目で見ないで、僕の負けだからっ！」

【猫ミミ】「あたしの勝ちー。でも、ダダをこねると、なんでシチユーを食べるのかな？」

【男主人】「うん、まあ、煮込みじゃなくて寝込みね。詳しい意味は長ミミに教えてもらって」

【猫ミミ】「ご主人さまは教えてくれないの？」

【男主人】「長ミミのほうが色々と教えやすいと思うから……着替えは、それ？」

【猫ミミ】「うん。ところでご主人さま、その、長ミミさんとケンカしたの？」

【男主人】「なんでそう思った？」

【猫ミミ】「んつと、長ミミさんがね。ご主人さまのことを呼ぶ時に少し変だった」

【男主人】「喧嘩っていうか、うーん、なんだろ？」

【猫ミミ】「……？」

【男主人】「猫ミミは、僕のこと好きって言うてくれるけど、僕と

結婚したい？」

【猫ミミ】「結婚……うーん、ご主人さまとなら、結婚してもいいよ？ アイジンだし……」

【男主人】「あー、アイジンの正しい意味も今度、長ミミに教えてもらおうね……」

【猫ミミ】「う、うん？」

【男主人】「僕はね。“誰かと結婚したい”って思えないんだ。いや、小さい頃は違ったはずだから、思えなくなった、かな？ 今の僕は誰かと一緒になるのが怖い」

【猫ミミ】「なんで？ ご主人様はあたしたちと一緒にいるよ？ それに……あたしに、この家に居る時は安心していいって言ってくれた……よ？（うる）」

【男主人】「あー、ごめん、ちよつと言い方が悪かった！ その、泣かないでっ！（ぎゅ）」

【猫ミミ】「うくっ……（ぎゅ〜）」

【男主人】「結婚するってことはさ、その、家族を……子供を作ることなんだ。それでね、ぼくは、その事から逃げ出したいんだ。だから、ちよつと長ミミに怒られちゃってね」

【猫ミミ】「長ミミさんに怒られたの？」

【男主人】「多分ね」

【猫ミミ】「だったら、ご主人さま……ごめんなさい、しないとダメだよ？」

【男主人】「ぷっ……そうだね、怒られたら、ごめんなさいしないと、だね」

第52話『男主人は、反省していた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「おはようございます、ご主人様」

【男主人】「おはよう」

【長ミミ】「最近はお疲れのようでしたので、本日の朝食は軽めのスープにいたしました」

【男主人】「昨晚は……」

【長ミミ】「昨晚は……」

【男主人】「え、あ、どうぞ、そっちから……」

【長ミミ】「いえ、ぜひともご主人様から……」

【男主人】「それじゃあ、僕からでいい？」

【長ミミ】「はい」

【男主人】「まず、昨晚は感情的になってごめん。猫ミミにもさつき言っただけど、僕は自分の血を残すのが怖いんだ。だから、女性、そういう好意を素直に受け止めきれない」

【長ミミ】「申し訳ありません。そのことについては……」

【男主人】「事前に聞いてた、かな？ さっき、少し冷静になって考えたら気付いてね」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「長ミミが悪いわけじゃないんだ。全ては僕の問題。それに今は、仕事で少し厄介な問題を抱えてて、恋とか愛とか言っている余裕もなくてね」

【長ミミ】「美女妹様と白髪女様から、聞きました」

【男主人】「んっ？ 妹と師匠から？」

【長ミミ】「ご主人様の事情などについて、美女妹様と白髪女様から色々と聞きました」

【男主人】「色々、か。変なことまで聞いてなければいいけどなあ（苦笑）」

【長ミミ】「白髪女様からは、“戦争”が起こるかもしれない、とも」

【男主人】「師匠……そんな軍事機密ギリギリのことをあつさりと……」

【長ミミ】「『あの馬鹿弟子は、自分が何時死んでもいいと考えてるねえ。だからさ、アタシは願ってることがあるんだよ。いつか、アイツが生きたいと思う何かがあればねえ』とも」

【男主人】「師匠が？」

【長ミミ】「恋人ができれば、生きていたいと思う原動力になるかなと……」

【男主人】「それで、僕と副官女をくつつけようとした？」

【長ミミ】「浅はかな考えでした」

【男主人】「その……、長ミミは僕のことを男として嫌いなのかな？ 普通、自分が、つてならない？」

【長ミミ】「ご主人様、その話は……いずれゆっくりとお話します。お仕事に遅れますよ？」

第53話『男主人は、自分を恐れていた』

草原と平穏の国：王宮（執務室）

【男主人】「おはよう」

【副官女】「……おはよう……」ございます（視線逸らし）

【男主人】「……うん、副官女、ちょっと話をしようか」

【副官女】「あ、あの、申し訳ありません。昨日はちょっと、やりすぎたといえますか?!」

【男主人】「そのことで謝ろうと思ってね」

【副官女】「えっと、それはつまり……断れたという事です、よね？」

【男主人】「んー、結果としては断ることになるかもしれない、けど。あのさ、少し話をしようか？」

【副官女】「は、はい」

【男主人】「僕が“救森の魔術師”と呼ばれる原因となった『焦森戦争』について、簡単に言える？」

【副官女】「発端は7年前「鉦山と武勇の国」による「森林と調和の国」へ侵略目的の進軍、我が国から当時の第五師団が「森林と調和の国」への援軍として派遣されました。」

その時の第五師団の師団長が王子様で、男主人様は小隊長の1人だった」

【男主人】「その結果は？」

【副官女】「第五師団が用いた大規模な火計により、「鉦山と武勇の国」の軍が壊滅的な損害を受けて撤退。その火計の発案者が男主人様だった……えと、どこか間違えてましたか？」

【男主人】「いや、一般的にはそれで正解。けど、そこに一部の人が知らない事実があってね」

【副官女】「じじつ？」

【男主人】「僕は発案者というだけでなく、火計の実行者であったこと……それも1人だけの」

【副官女】「えっ……？」

【男主人】「詳しい説明は端折るけど、僕が敵軍に潜り込み、敵の指揮官の一部を暗殺し、命令系統を乱す。その後、僕の魔術により、敵の駐屯地の三方から火を起こして……森一つを焼き尽くした」

【副官女】「……！！……？」

【男主人】「戦時中に僕が直接手に掛けた人数は20人もいってないと思う。けど、その時の火計による死者は1万88人と公表されている。もちろん、それ以上の負傷者がいただろうね。副官女は、僕が怖い？」

【副官女】「……怖く、ないです」

【男主人】「僕は怖かったよ。大量に人を殺せてしまう、自分の力が……実際、人からバケモノと呼ばれたことも少なくない。

敵軍が僕のことを“不死の魔人”と呼ぶのも理解はできる。殺そうと思っても殺せない、それどころか一方的に殺される側にとっては、まさに不死身のバケモノという呼称はぴったりだ」

【副官女】「私は、男主人様が怖くもないし、バケモノでもありません……！」

【男主人】「………」

【副官女】「人が人である以上、人を殺すのはいけないと思いますけど、人が人を殺すのを許容してしまう戦争は、実際にあって……、だから……、すみません、上手く言葉にできなくて、でも絶対何かが違うんです」

第54話『男主人は、人を嫌いになれないでいた』

草原と平穏の国：王宮（執務室）

【男主人】「副官女は随分と優しくなったよね……いや、僕も丸くなったから、お互い様かな？」

【副官女】「む、昔のことは言わないで下さい！」

【男主人】「僕の両親は共に魔術師だったけど、決して優秀と言えるほどの力があつたわけじゃない。僕が持つ膨大な魔力は、血統からすれば突然変異みたいなものでね」

【副官女】「その……男主人様のお父様はお母様を疑ったりはしなかったのですか？」

【男主人】「むしろ両親は、子供の僕が恥ずかしくなるくらい愛し合ってた。父は、僕の異常さを気付いてすぐに封印を施し、王宮に僕の力を隠したんだ。今だからこそ、父の正しさが分かるし、その判断に尊敬すらしてる」

【副官女】「素敵なお両親だったんですね……」

【男主人】「東公爵夫妻も素敵な方々だと思うけど」

【副官女】「まあ、自慢の両親とは言いにくいですが、……優しい両親ではあります」

【男主人】「僕のこの力が、子どもに継がれるかどうかは分からない。けど、僅かでもその確率があるなら、子供なんかは欲しくない。むしろ、子供が作ることが想像できない。僕は一人で生きて死のうと思ってた」

【副官女】「……………」

【男主人】「僕はあの戦争で、一度“心”を失くしたんだ。いや、失くしたんだと思い込んでいただけだったかな」

【副官女】「……………」

【男主人】「ダメだよねえ。僕は、人が嫌いじゃないんだ。長ミミや猫ミミが来て、家に一人じゃなくなつて、余計に感じちゃつてさ」

【副官女】「私じゃ、ダメだったんですか？」

【男主人】「ううん、副官女や部下男、妹や師匠、一応、王子様がいてくれたから、僕は人を嫌いになりきれなかったんだと思う。その僕の歪みを長ミミに指摘されちゃつてね」

【副官女】「長ミミさんですか……」

【男主人】「容赦ないよ。人が必死に目を背けていた事実をいきなり突きつけるんだ」

【副官女】「なんて言われたんですか？」

【男主人】「『副官女様は……お嫌いですか？』だつてさ、咄嗟に言い返せなかった」

【副官女】「私の……ことを？」

【男主人】「嫌いじゃないよ。好きか嫌いかのどつちかなら、多分好き。けど、それが男女の愛かと問われれば、分からない……単純に自分が親になる自信がないだけなのかな」

【副官女】「分かりました。じゃあ……」

【男主人】「ただね、あんまり挑発されると……僕も我慢が効かなくなるというか、そういう欲がなくなつたわけじゃないから……魔術で純粹に行爲だけを行うことができるから、気をつけてね？（にっこり）」

【副官女】「き、気を付けますっ！！（真っ赤）」

第55話『猫ミミちゃんが、孤児院に通っていた』

草原と平穏の国：孤児院

【猫ミミ】「こんにちわー」

【老院長】「おう、猫ミミちゃん、いらっしやい」

【猫ミミ】「これお土産です……（バスケット差出し）」

【子供達】「猫ミミ姉ちゃんだー」「これ食べていいの？」「ねえ、おままごとしよー」

【老院長】「こらこら。いつぺんに迫るじゃない、オヤツは決まった時間じゃ」

【猫ミミ】「あはははー、みんなイイ子にしないとオヤツ抜きだからねー」

【子供達】「わかった！」「クッキーかな？」「オレ、あのフワフワしたケーキがいいな」

【猫ミミ】「と、ごめん、あたしはちょっと老院長さんとお話があるから、後でね！」

【老院長】「ふむ、それじゃあ院長室で聞こうかの」

【年長娘】「どうぞ、お茶です」

【猫ミミ】「ありがとう　年長娘はいいお嫁さんになるね！」

【年長娘】「あ、ありがとう……お姉ちゃん、老院長様、では失礼します（ぺこり）」

【老院長】「そういう猫ミミちゃんも、いいお嫁さんになると思うかの」

【猫ミミ】「えー、そうかな？　そうだと嬉しい……かな」

【老院長】「猫ミミちゃんには感謝しとるよ。猫ミミちゃんが来ると子供達が嬉しそうじゃ」

【猫ミミ】「うん、あたしこそ老院長さんには感謝してるよ。本当なら、あたしが育った孤児院の院長さんに感謝するべきなんだけど……あそこにはもう戻れないから」

【老院長】「“情けは人の為ならず”という言葉知ってるかの？」

【猫ミミ】「え？……人に優しくしちやいけないってこと？」

【老院長】「うんにゃ、どちらかと言えば逆じゃな。人に優しくすれば、優しくされた人は別の人に優しくすることができる。そうやっていくと、全員が優しくなれて、自分も優しくされる……と僕は解釈しとる」

【猫ミミ】「とっても素敵なことだね」

【老院長】「猫ミミちゃんが優しいから、周りのみんなも猫ミミちゃんに優しくなるといことじゃな。それで猫ミミちゃんの話と言うのは、やはり昨日の人のことかの？」

【猫ミミ】「うん、どうなった？」

【老院長】「明け方に一度目を覚ましたが、すぐに気を失ったの。じゃが、命の心配はなさそうじゃ」

【猫ミミ】「そっか、良かった」

第55話『猫ミミちゃんが、孤児院に通っていた』（後書き）

孤児院には3歳から12歳くらいまで、20人くらいの子供がいる設定です。

主要なキャラクターは次の通り。

老院長

【種族】：人間族 【年齢】：62歳 【性別】：男性

【一人称】：儂

【設定】：

・「草原と平穏の国」の王都の下町にある孤児院の院長。

・孤児院の運営自体は比較的马シな方だが、決して余裕があるわけではない。

年長娘

【種族】：人間族 【年齢】：12歳 【性別】：女性

【一人称】：わたし

【設定】：

・現在、孤児院で世話になっている子供の中で一番の年長者。

・普段から老院長の手伝いをしたり、年下の子供達の面倒を見ているしつかりモノ。

第56話『二人で、猫ミミちゃんの話をしていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「あれ？ 猫ミミは？」

【長ミミ】「猫ミミちゃんでしたら、本日は休日です。しっかりと自分の分の仕事も覚えてくれましたし、元々、この家の家事は私一人でも十分でしたから、今は数日ごとに休日を取らせています」

【男主人】「ん、その辺りは長ミミに任せてるからね。猫ミミはどこかに出かけてたの？」

【長ミミ】「最初の頃は街の観光をしていたみたいですが、最近は通える場所ができたみたいです」

【男主人】「いいことだね」

【長ミミ】「ええ、今日も手作りのクッキーを持って、嬉しそうに出かけました」

【男主人】「……………え？」

【長ミミ】「いかがなされましたか、ご主人様？」

【男主人】「それって、もしかして、デート……………とか？ あ、相手は、どこのどいつだっ！？」

【長ミミ】「ご主人様落ち着いてください。年頃の娘を持つ父親みたいなことを言っています」

【男主人】「いや、だって、嬉しそうに手作りのクッキーを持って、だなんて……………」

【長ミミ】「手作りのクッキーが恋人の証なら、私とご主人様は新婚夫婦になってしまいます」

【男主人】「いや、それは……………」

【長ミミ】「『ご飯にする？ お風呂にする？ それとも、わ・た・し？』とか、言われたいのですか？」

【男主人】「うつ……」

【長ミミ】「言いませんけど」

【男主人】「なら、訊くなー!!」

【長ミミ】「猫ミミちゃんの行き先は下町の孤児院です。どうも、以前に世話なっていた孤児院を思い出すそうで、最近はおヤツの差し入れなどをしているようです。クッキーの材料費も自分の給金から出していました」

【男主人】「知ってるなら、最初からそう教えてくれればいいのに……」

【長ミミ】「ところでご主人様、私からもご主人様にお訊きしたいことがあります」

【男主人】「なに？」

【長ミミ】「猫ミミちゃんから“寝込みのいただき方”を教えてくださいと言われたのですが？」

【男主人】「……」

【長ミミ】「ご主人様が、私から教わるように言われたようですが？」

【男主人】「……」

【長ミミ】「ご主人様、私も“子供の作り方”なんかを実践を交えず、具体的に口頭でご主人様から教えていただきたいな、と思いますか？」

【男主人】「……何の嫌がらせだー!!」

【長ミミ】「愛の嫌がらせです」

第57話『猫ミミちゃんは、人を助けていた』

草原と平穏の国：孤児院

【赤髭男】 「うつ……………ここ、は？」

【猫ミミ】 「あ、起きた？ 水飲む？」

【赤髭男】 「んん…………、ああ、もらえるだろうか？」

【猫ミミ】 「はい、どうぞ」

【赤髭男】 「（ごくごく）ぶはっ、げほっげほ……………」

【猫ミミ】 「大丈夫っ？ 一気に飲むからだよ（背中をさする）」

【赤髭男】 「ありがとう、うん、大丈夫だ……………ところで、ここは何処でキミは誰だろうか？」

【猫ミミ】 「ここは下町の孤児院で、あたしは猫ミミだよ。おじさん？」

【赤髭男】 「ワタシは、あ…………赤髭男と言う。そうだ、気を失う前にキミを見た覚えがある…………命を救ってもらったようだ。礼を言う」

【猫ミミ】 「助けたのは、あたしだけじゃなくて、老院長さんと孤児院の子供達もだよ。みんなで倒れてたあなたを運んだの」

【赤髭男】 「いや、それでもキミが人を呼んでくれたのだろう？」

だから、キミがワタシの命を救ってくれたのは、間違いない事実だ」

【猫ミミ】 「どういたしまして、かな」

【赤髭男】 「何か礼をしたいと思うが…………今は、何も持ってなくてな」

【猫ミミ】 「別に何もいらないよ」

【赤髭男】 「しかし…………」

【猫ミミ】 「赤髭男さんを助けたのは、あたしのワガママだから、

赤髭男さんが助かればいいんだよ」

【赤髭男】「それは、ワガママじゃないだろう」

【猫ミミ】「自分が助けたいから助けた、だから、ワガママなんだって。この間、あたしもある人に助けてもらったの。その時にその人に言っただ、カッコ良かった？」

【赤髭男】「その人の真似だって事はバラさなかったら、キミがカッコ良かったかもな」

【猫ミミ】「あ、そっか、そうだね！ あはははっ」

【赤髭男】「くっくく……」

【猫ミミ】「そうだ、お腹は空いてない？ 何かもらってこようか？」

【赤髭男】「……いただいてもいいだろうか？ 何も礼をできないが」

【猫ミミ】「うん、待ってて！」

【赤髭男】（ワタシは……何をしているんだろうな）

【赤髭男】（いや、むしろ、これから……一体何をすればいいんだろうか？）

第57話『猫ミミちゃんは、人を助けていた』（後書き）

キャラクターの紹介。赤髭男も、重要なキーパーソンになってくれるかなあ。

赤髭男

【種族】：人間族 【年齢】：32歳 【性別】：男性

【一人称】：ワタシ

【設定】：

- ・ボサボサ髪の無精髭を生やした男。
- ・道で倒れていた所を、猫ミミに拾われ、孤児院に運ばれた。

第58話『猫ミミちゃんは、聞かないでいた』

草原と平穏の国：孤児院

【猫ミミ】「おまたせー。はい、どうぞ」

【赤髭男】「ん、ありがとう……（もぐ）むう……」

【猫ミミ】「（じい）……」

【赤髭男】（食えない味じゃないが……いや、この部屋の様子からすれば、この味も妥当か）

【猫ミミ】「味……どうかな？」

【赤髭男】「う、ん……少し味が薄いかもしれないが、今のワタシにはちょうどいい（もぐもぐ）」

【猫ミミ】「つまり、美味しくないってこと？」

【赤髭男】「いや、美味しいよ、ほら（がつつ）……うっ（胸をドンドン）」

【猫ミミ】「わわわ、急いで食べるからー!!」

【赤髭男】「げほげほ、は、はあ……」

【猫ミミ】「別に正直に言っただけなのに、赤髭男さんって、今はボサボサしてて浮浪者さんみたいだけど、本当はお金持ちとか貴族さんじゃない？」

【赤髭男】「なんでそう思った？」

【猫ミミ】「生まれた時から、美味しそうな物だけを食べて育ってきましたよ、みたいなことか？ 後、少し雰囲気をご主人さまと似てるところかな？」

【赤髭男】「戦場では、もっとひどい食事で過ごしたことでってある」

【猫ミミ】「……やっぱ、美味しくないと思ったんだ？」

【赤髭男】「ごほんごほん……、ん、ご主人様？ ここは孤児院だ」

と聞いたが、キミは誰かに仕えているのか？」

【猫ミミ】「うん、あたしはね。この街の生まれじゃなくて、色々あってこの街に連れてこられた所を、ご主人さまと長ミミさんに助けてもらったの。だから、いつもはお屋敷の方でメイドさんをしてるから、孤児院にはお休みの日にしか来れないんだよ」

【赤髭男】「そうか……」

【猫ミミ】「で、赤髭男さんは何者なの？」

【赤髭男】「死に掛けていたワタシを助けてくれたことは感謝している。しかし……」

【猫ミミ】「やっぱ、今の質問はナシ！！」

【赤髭男】「な、なし？」

【猫ミミ】「うん、だって、あたしのワガママだもんね。赤髭男さんは、赤髭男さんでいいよ」

【赤髭男】「……………なんで、そこまでワタシのことを信じられる？」

【猫ミミ】「ん、倒れていた赤髭男さんがね。あたしに言ってたんだ」

【赤髭男】「何を？ すまないが、記憶がおぼろげで……ワタシはキミに何と言ったんだ？」

【猫ミミ】「“生きたい”って……」

【赤髭男】「生きたい……」

【猫ミミ】「うん、“生きたい。このまま死ぬものか”って、そう悲しそうに言ってたよ」

第59話『静かな日々は続いていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「……………（トポトポ）」

【男主人】「ありがとう……………（ズズッ）」

【長ミミ】「……………（ペコリ）」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、バタン

【男主人】「……………（ズズッ）」

【男主人】「……………（カキカキ……………」

【男主人】「……………（ズズッ）」

【男主人】「……………（カキカキ……………」

【男主人】「……………（サクサク）」

【男主人】「……………（ズズッ）」

【男主人】「……………（カキカキカキカキ）」

SE（扉を叩く音）：コンコンッ

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、バタン

【猫ミミ】「失礼します。お茶のお代わりを持ってまいりました！」

【男主人】「ん……………お疲れさま（カップを前に）」

【猫ミミ】「……………（トポトポ）」

【男主人】「ありがとう……………（ズズッ）」

【猫ミミ】「……………（ペコリ）」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、バタン

第60話『戦争が、始まっていた』

草原と平穏の国：王宮（王子執務室）

【王子様】「（報告書を黙読し）……戦争が始まったぞ」

【男主人】「……事前の情報より若干遅かったですね」

【王子様】「軍の総大將は弟皇子らしい、7年前の総大將だった兄皇子とは異母弟で、母親同士が随分と仲が悪く、それをそのまま引き継いだような兄弟関係らしいな」

【男主人】「そうですか」

【王子様】「進軍の開始が遅れたのは、兄皇子側からの妨害工作が原因みたいだ」

【男主人】「どこも似たような物ですね……ウチとどっちがマシでしようか？」

【王子様】「“隣の芝生は青く見える”と言うが、他所（よそ）の“一国”に迷惑かけてない分、ウチのほうがマシじゃないか？」

【男主人】「もっとも、うちの方がマシと感^えじるのは、勝者としての余裕もありそうですが」

【王子様】「否定はしないさ」

【男主人】「それで？ 戦争に関して、議会の決定は、どうなりましたか？」

【王子様】「ああ、やっと軍の派遣を決定したよ。北の第三、第四、西の第六の3軍だ」

【男主人】「それって……」

【王子様】「あからさまに王国軍の王弟派ばかり、というより、直接叔父上の息が掛かっている団だな」

【男主人】「いよいよ進退きわまりですかね」

【王子様】「叔父上には、そろそろ早めの隠居と洒落込んで貰わな

いとな」

【男主人】「まだまだ若いでしょうに、確か今年で42歳位ではありませんでしたか？」

【王子様】「ボクらより1世代違うじゃないか、そろそろ世代交代の時期だと思うのさ」

【男主人】「否定はしませんけど」

【王子様】「くつくつく……おぬしも悪よのお」

【男主人】「いえいえ、王子様ほどでは……と返せばいいんですけど？」

【王子様】「よし！」

【男主人】「はあ……それじゃあ、僕の方は引き続き、いざと言う時の根回しをしておきます」

【王子様】「ああ、頼りにしている」

【男主人】「もしもの時の……覚悟は決めたので」

【王子様】「覚悟な……よく聞け。あの時のように1人では行かないよ、絶対にだ」

【男主人】「それは……」

【王子様】「何、ボクが一緒に行くとはまでは言わない、が、お前1人に全てを背負わせるつもりもない」

「幕間」『主従2』

鉦山と武勇の国：皇宮（鉄皇女執務室）

【黒騎士】「……以上が、弟皇子様の軍の報告になります」

【鉄皇女】「そう、出立こそ遅れたのに進軍自体は順調みたいね」

【黒騎士】「ずいぶんと他人事のように仰いますな」

【鉄皇女】「あら？ 出立が遅れたのは兄皇子派による妨害工作のせいでしょう？」

【黒騎士】「ええ、そういうことになっておりますが」

【鉄皇女】「なら、そういう態度をとっていいじゃない。弟皇子って、プライドばかり高いバカで好きじゃないのよね。根暗で陰険な兄皇子に比べれば、愛嬌がある分、まだマシかもしれないけど」

【黒騎士】「まあ……どっちもどっちかと」

【鉄皇女】「「草原と平穏の国」も援軍を出したと言ってたわね。それで戦況はどうなるかしら？」

【黒騎士】「はい、草原軍2万5千ですね。総大将は弟大公だとか……森林軍3万5千とあわせて6万、対する俺らが鉦山軍は7年前の3倍近く8万5千です」

【鉄皇女】「今回は小競り合いでは済まなさそうね。ところで、例の“不死の魔人”は？」

【黒騎士】「報告によれば、今回の援軍には従軍をしてないようです」

【鉄皇女】「なんで？ 鉦山軍にとっては恐怖の象徴でしょう。いるだけで、士気を下げれるはずよ」

【黒騎士】「あちらも派閥争いがあるようでして、簡単に言えば第一王子派と弟大公派に分かれているようです。“不死の魔人”は第

「王子の懐刀的な立場だとかで」

【鉄皇女】「ふうん、ワタクシにとってのアナタみたいなものかしら？」

【黒騎士】「まあ、そうかもしれません」

【鉄皇女】「となると、少し計画を練り直す必要があるかもしれないわね」

【黒騎士】「それと気になる情報が一つ……」

【鉄皇女】「なにかしら？」

【黒騎士】「その“不死の魔人”の関係者が、我が国に入っているらしいのです」

【鉄皇女】「……信憑性は？」

【黒騎士】「調査を継続させていますが、この情報を持ってきたのは俺の手下の中で最近頭角を現してきた有望なヤツでして、信じてよいかと」

【鉄皇女】「……」

【黒騎士】「いかがされました？」

【鉄皇女】「アナタが直接出向いて調べてもらえないかしら？」

【黒騎士】「貴女様の御心にままに」

【鉄皇女】「ふふふつ、面白くなりそうね」

第61話『赤髭男は、迷っていた』

草原と平穏の国：孤児院

【赤髭男】「老院長殿、薪割りが終わった」

【老院長】「おお、ご苦労様」

【赤髭男】「他に何か仕事はあるか？」

【老院長】「いやいや、お客に雑用ばかりさせるのもなんじゃしの」

【赤髭男】「ワタシは客人ではない。命を救ってもらい、その上、何も聞かずに置いてもらっている。正直な所、ただ何もしないでいると居心地が悪い。やれることがあれば、やらせて欲しい」

【老院長】「……しかしの」

【赤髭男】「何か問題が？」

【老院長】「いや、僕らには問題はないが、子供達の遊びにも付き合ってくれとるし……生まれてこの方、子守りなぞ、したことなかったじゃろ？」

【赤髭男】「確かに子守りの経験はないが……」

【老院長】「それにな。お主は、あまり目立たない方が良いんじゃないかの？」

【赤髭男】「！？」

【老院長】「僕もまだまだ耄碌もろろくしとらんでな。こう言つては悪いが、僕はお主が子供好きの善人だとは思つとらん。自身のためには、簡単に他人を利用する……そんな性分じゃろ？」

【赤髭男】「……………」

【老院長】「そう怖い顔するな。老人の戯言じゃ、ただ、伊達に年を食つてないでな……お主は、まるで若い頃の自分を見ているようにゃ。何の因果か、この年になって孤児院のジジイなぞやつとるが」

【赤髭男】「……ワタシと老院長殿が似ている、というのか？」

【老院長】「若い頃の、と言ったじやる。今の僕は子供達から好かれる素敵院長様じゃ」

【赤髭男】「ワタシは……」

【老院長】「無理に話さんでもええぞ。逆に話したいならいくらでも聞いてやるがの」

【赤髭男】「そこまで……ワタシの危うさを分かっている、ここに置いてくれる？」

【老院長】「猫ミミちゃんの頼んできたからじゃ」

【赤髭男】「猫ミミちゃんが？」

【老院長】「あの子は面白いの。僕が出会った孤児の多くは、もつと独特な目付きをしておった。何かを諦観したような死んだような目か、憎悪から生まれたような暗くギラついた目……だけど、猫ミミちゃんは全てを許して、受け入れるような、そんな目をしてる」

【赤髭男】「分からなくもない……」

【老院長】「その猫ミミちゃんがな、お主を助けて欲しいと、この孤児院に来て二度目のお願いをしたんじゃ。一度目は“また来てもいいですか？”じゃったしな。実質初めてのお願いと言えようか」

【赤髭男】「何故、ワタシにそこまでしてくれる」

【老院長】「さあ、それは僕にも分からん。ただ、少なくとも……ここ数日、お主の事を見ておつたらな。善人ではないが、根っからの悪党と言っわけでもないことが分かるしの。

それに、居心地が悪いのはタダで飯を食らうことじゃなく、そんな自分の変化に戸惑つとるからじゃ。今のお主は人を害するほどの気概を持ち合わせてないじゃろ」

【赤髭男】「ああ……その通りかもしれない。ワタシは、自分を失っている……」

第62話『赤髭男は、自身を振り返っていた』

草原と平穏の国：孤児院

【赤髭男】「ワタシは……これでも、幼い頃は神童と言われててな。親の欲目やそんな親に取り入ろうとしていた大人の世辞もあったんだろう」

【老院長】「子供が可愛い親はそういうもんじゃ」

【赤髭男】「実際の所、ワタシの才能は常人よりちょっとマシな程度だったろうな。ただ、生まれた家が貴族だったんで、高い教育と訓練、質の良い武器にだって恵まれた」

【老院長】「それは、何も悪いことじゃあるまい」

【赤髭男】「ああ、ワタシの運が良かったただけだ。それでも7年前の『焦森戦争』には、中隊長の一人として参戦し、高い戦功だって収めた。最も、最後の火計によってもたらされた戦果に比べれば、些細な物だな」

【老院長】「順風満帆の人生のようじゃが」

【赤髭男】「戦争から帰ってしばらくし、両親が事故で亡くなってな……急遽家を継ぐことになった。父が金のためにやっていた悪事、それによって繋がっていた人脈などを含めてな」

【老院長】「悪事？」

【赤髭男】「税を誤魔化したり、領内の一定の有力者を優遇することに対する見返りなど。ワタシの血肉は他人の犠牲の上に成り立っていた」

【老院長】「それを悔いておるのか？」

【赤髭男】「後悔……とは違うな。それが当たり前だと思ってた。

……が、欲で繋がった関係は、欲の前には簡単にはどけてしまう。ワタシを追っているのは、そういう悪事の共犯だ」

【老院長】「……つまり、裏切られたと？」

【赤髭男】「端的に言えば、そうだな。口封じとばかりに命を狙われ……逃げ出した方がいいが、ワタシは死んでおくべきだったんじゃないだろうか、と思うわけだ。そもそも、命欲しさに逃げ延びた方がいいが、何をしたかったわけでもない。」

ワタシは終わりを迎えてもいい、と思ってた。しかし、どうやらワタシはまだ死にたくなかったようだ。猫ミミちゃんに言われたよ、ワタシは生きたがっていると」

【老院長】「獣と人の違いはな、獣は子を生なすために生きるが、人はそれだけじゃ生きられぬ。人はの、何かを成そうとせずには生きられぬのじゃ」

【赤髭男】「何かを成す……」

【老院長】「ああ、そして、何かを成そうとする人は、しぶとく生き汚くなる」

【赤髭男】「……ワタシは何かを成せるのだろうか？」

【老院長】「さあ、ただお主は、既にこの孤児院にとって必要な者になっておるということじゃな」

【赤髭男】「……感謝する。老院長殿」

第63話『男主人は、迫られていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「……少し張り切りすぎたか（ふぁ）」

SE（扉を叩く音）：コンコンッ

【男主人】「ん？」

【長ミミ】『長ミミです。お邪魔してよろしいでしょうか？』

【男主人】「……どうぞー？」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、バタン

【長ミミ】「失礼します」

【男主人】「どうしたの？ 何かあった？」

【長ミミ】「……お疲れの所、申し訳ありません」

【男主人】「いや、いいよ。こんな夜更けに寝室に押し掛けてくるほど用件なんでしょ？」

【長ミミ】「……（するり）」

【男主人】「なっ!？」

【長ミミ】「ご主人様のお情けを頂きたく……」

【男主人】「……」

【長ミミ】「私の体では……満足いただけないでしょうか……」

【男主人】「……はぁ（溜息）」

【長ミミ】「ご、ご主人様？」

【主人公】「君は何処の誰なのかな？」

【長ミミ】「……え、棘の氏族”の長ミミですけど」

【主人公】「《幻影崩壊》^{イメージブレイク}」

【黒ミミ】「はっ!？」

【主人公】「いやあ、焦った……《誤認幻影》^{フェイクイメージ}は、使用魔力が微弱すぎて感知しないことがメリットだな。対象を演じ切れるなら《偽装幻影》^{ミイイメージ}よりも、ずっと有効だ。しかし、ダークエルフの暗殺者に狙われるとはね。心当たりはないんだけど」

【黒ミミ】「なぜ見破れた……」

【主人公】「んー、真似できるくらい。長ミミを観察していたんだろ？ 気付かないもんかな」

【黒ミミ】「………」

【主人公】「まあ、いいや……背後関係はきちんと白状してもらうつもりだよ」

第63話『男主人は、迫られていた』（後書き）

というわけで、新キャラです！。

黒ミミ

【種族】：エルフ族 【（外見）年齢】：25歳 【性別】：女性

【一人称】：アタシ

【設定】：

- ・ 男主人の寝室に現れた刺客？
- ・ エルフ族の中でもダークエルフと呼ばれる褐色色の肌をした血脈。

第64話『男主人は、噂されていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「……………」

【黒ミミ】「……………」

【男主人】（さて、どうしたものかな……………逃げ出す様子もないし、仕掛けてくる様子もない）

【黒ミミ】「……………一つ聞きたい」

【男主人】「こっちは、色々と聞きたいけどね。それで？」

【黒ミミ】「今、長ミミは幸せか？」

【男主人】「はっ？ いや、ちよつと待って、君は長ミミの関係者なのか？」

【黒ミミ】「答えろ、そうしたら、そっちの聞きたいことは一通り答えてやる」

【男主人】「いや……………まいったな、想定外の質問だ。長ミミが幸せどうかなんて、本人以外には分からないんじゃないか？ 少なくとも不幸そうには見えないけどね」

【黒ミミ】「ふんっ、使えない」

【男主人】「ふっ、そのえぐるような言葉のナイフ。君が長ミミの関係者で間違いがなさそうだな」

【黒ミミ】「それで、何が聞きたい？」

【男主人】「あー、まず、名前と所属。それと僕の寝室に長ミミの振りをして潜り込んできた理由？」

【黒ミミ】「黒ミミ、“棘の氏族”、長ミミの主が色ボケという噂の真偽を確かめるため」

【男主人】「ふむ……………つまり、長ミミとは同郷ってことか。というか、どんな噂を聞いてきたんだか」

【黒ミミ】「やはり噂とは当てにならない」

【男主人】「ま、そうだな」

【黒ミミ】「……色狂いの変態という噂だったが、ただのヘタレか」

【男主人】「いたたたっ！ 僕のデリケートな部分がとっても傷ついた！？」

【黒ミミ】「ふんっ」

【男主人】「結局、君は一体何のためにわざわざこの国までやってきたんだよっ！？」

【黒ミミ】「そう取り乱すな。アタシをしばらくこの家で雇って欲しい。長ミミだったら、アタシの身元を保証してくれる。返事はそれからでも構わない」

【男主人】「分かった。雇おう」

【黒ミミ】「はっ！？ アタシが言うのもなんだが、オマエは底抜けのお人良しか馬鹿なのか？」

【男主人】「長ミミのことは信じている。仮に長ミミが何らかの魔術で操られたり、脅されていれば、すぐに分かるしな。そもそも、そんな方法で身元証明をしろ、と言っている時点で疑いはないさ」

【黒ミミ】「……屁理屈もいい所だな」

【男主人】「とりあえず、また明日来てくれないか。今日はもう眠い、詳しい話は今度だ」

第65話『男主人は、思い出しそうに困っていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「おはようございます、ご主人様」

【男主人】「ん、おはよう」

【長ミミ】「今日の朝食はロールパン、サラダ、ポーチドエッグ、オニオンスープです」

【男主人】「あー、そうだ、長ミミはダークエルフの黒ミミって人知ってる？」

【長ミミ】「……知っておりますけど、黒ミミさんが何か？」

【男主人】「いや、大したことじゃないんだけど。昨晚、寝込みを襲われそうになってね」

【長ミミ】「……それは、普通は大したことと言いませんか？」

【男主人】「そうかな？ まあ、それで結局、雇って欲しいって言うていたから、今日から雇うことになると思うんだ。細かい所は任せていいかな？」

【長ミミ】「ご主人様……寝ばけていらっしゃいますか？ 私には前後の話がまったく繋がっていないように聞こえるのですが？」

【男主人】「うっ、そこはそれ、話の間を汲み取ってくれ」

【長ミミ】「……………（じい〜）」

【男主人】「長ミミ、その視線は何かかな？」

【長ミミ】「そういうご主人様こそ、先ほどから、先ほどから視線の向きがいつもと違った動きを見せているような気がいたします。私と目を合わせないようになっていると言いますか……私を見ないようにはしていませんか？」

【男主人】「……………そんなこと、ないですよ？（棒読み）」

【長ミミ】「はっ、もしかして、ご主人様。煩惱を抑えきれず、あ

んな小っ恥ずかしい過去を語っておきながら、目の前にある豊かな肉体に思わず飛び掛ってしまったのですね。まさに、ミツバチトラップ！」

【男主人】「いやいや、飛び掛ってないし！ 罾は回避したし！というか、ハニートラップって言いたかったのかな！？」

【長ミミ】「……こほん」

【男主人】「飛び掛っていませんよ？」

【長ミミ】「むしろ、そこで飛び掛っていたら、ご主人様じゃありませんし、ニセモノを疑います」

【男主人】「ぐっ……」

【長ミミ】「ん？」

【男主人】「……………」（視線を逸らす）

【長ミミ】「ご主人様、素直に話すか、誤魔化そうとして失敗するか、お選び下さい」

【男主人】「それ、どっちもNGだよねっ！！」
ノーグッド

【長ミミ】「私的には、ベリーグッドVGって感じですが、ワガママなご主人様に第三の選択肢、誤魔化そうとして失敗して素直に話す、というのはいかがでしょう？ 2つの答えを合わせた欲張りな選択肢です」

【男主人】「うん、最悪だっ！そこは聞かずにそっとしておいて欲しいっ！！」

第66話『長ミミさんは、少し警戒していた』

草原と平穏の国：男主人邸

【黒ミミ】「さて、久しぶりだな、長ミミ」

【長ミミ】「……お久しぶりです。ここに来たのはお義父様の命令ですか？」

【黒ミミ】「ああ、偉ミミ様からの任務だ」

【長ミミ】「私の様子を見に来た……ということでしたら、黒ミミさんでなくても良いはずですし、そもそもこの家に雇われる必要はありませんね」

【黒ミミ】「一応、長ミミの様子見つても指令にはあるけどな。

この家にいるのは想定外だった。オマエは、王子付きの侍女をやっているんじゃないのか？」

【長ミミ】「となると、狙いはご主人様でしょうか？」

【黒ミミ】「アツサリと無視するなよ。しかし、『ご主人様』という呼び方が堂に入ってるじゃないか」

【長ミミ】「ええ、今の私はメイドですから、ご主人様のことはご主人様と呼んでいます。それで、ご主人様へ害を与えるつもりはないのですか？」

【黒ミミ】「大雑把に言うなら、アタシは“救森の魔術師”の動向を探ってくるように言われているだけだ」

【長ミミ】「それはつまり、ご主人様を今回の戦争において、自軍の持ち駒として扱おうという魂胆こんたんですか？」

【黒ミミ】「さてな、細かい点ではいくつか指令は受けているが、そこまでは言われていない。あと、いくら身内とはいえ、これ以上は話さないぜ。もっとも、ほとんどがアタシの独断での裁量に任されているんだが」

【長ミミ】「……………」

【黒ミミ】「睨^{にら}むなよ。ああ、昔の長ミミは可愛かったのになあ。

“お姉ーちゃん”とアタシのことを呼んでくれた頃が懐かしい”

【長ミミ】「確かに、長ミミさんからは“お姉ーちゃん”と呼ぶように言われていましたが、実際には“黒ミミ姉さん”と呼んでいたと記憶しています”

【黒ミミ】「年下のクセに相変わらず、可愛くない性格してるな”

【長ミミ】「年下と言われても、黒ミミさんから見れば、人間族は例外を除いて全員が年下でしょう”

【黒ミミ】「人の歳についてアレコレ言うなよ”

【長ミミ】「先に歳の話をしたのは黒ミミさんでしょう。私が少しばかり生意気な性格だとしても、それと年齢は関係ないと思います”

【黒ミミ】「まあ、いいや、この家でしばらく世話になるんだ。よろしく頼むぜ”

【長ミミ】「はい。それでは、まず、この服に着替えてください”

【黒ミミ】「……………は?”

【長ミミ】「ご主人様から伺っておりませんか？　メイドとして雇われたのですよ?”

第67話『主人は、難題から逃避していた』

草原と平穏の国：主人邸

【主人】「……………」

【長ミミ】「……………」

【猫ミミ】「うわぁ……………」

【主人】「……………黒ミミがこの料理を？」

【長ミミ】「ええ、ご主人様が、黒ミミさんの家事の腕前を見たい
と言つので……………」

【黒ミミ】「アタシが腕を振るつたんだ。ほら、たとえ食え」

【主人】「なかなか、野趣やしゆあひ溢れる料理だね」

【長ミミ】「ご主人様、とりあえず……………毒物は使われていませんの
で、ご安心を」

【黒ミミ】「毒物って何だよ！ 毒物って！！ そんな高価なもの
使つかつ！！」

【主人】「み、見た目はちょっと悪いかもしれないけど……………そこ
までは僕も考えてなかったよ？ うん、毒を食べても魔術で解毒で
きるし？ と言つか、安かつたら使つの？（汗）」

【猫ミミ】「なんか、変な匂いもするよー？」

【主人】「……………酸っぱい匂いというか香ばしい匂いというか……
人がせつかく考えないようにしてたのに……………」

【黒ミミ】「オマエも黙って食えや」

【主人】「よし……………（ぱくり）」

【猫ミミ】「わっ！ 食べたっ！」

【主人】「（もぐもぐ）……………あれ？」

【猫ミミ】「だ、大丈夫っ！？ ご主人さま！？（あわあわ）」

【長ミミ】「猫ミミちゃん、安心して……………見た目と匂いはアレだけ」

ど……」

【男主人】「……少し甘酸っぱくて苦味もあつて、不思議な味だけど、不味いか美味いかで言われれば、やや美味しい……」

【黒ミミ】「ふんっ、料理くらいできるんだよ」

【男主人】「いや、これを料理って言うには、コックさんに申し訳ないというか……（もぐもぐ）」

【猫ミミ】「ご主人さま、美味しいの？」

【男主人】「不思議と食べれる味になつて……」

【長ミミ】「それがご主人様、慣れてくるとたまに食べたくなる味になります」

【男主人】「あー、確かにこの味は変にクセになるかもしれない」

【長ミミ】「問題は、黒ミミさんが料理をすると、大体この味になつてしまうのです」

【男主人】「……なんでだよ!!」

第68話『黒ミミさんが、訓練していた』

草原と平穏の国：男主人邸

【猫ミミ】「黒ミミさん……何やってるの？」

【黒ミミ】「ん？ 猫ちゃんか。こうやって（しゅぱっ）」

【猫ミミ】「わ、すごい！ 鉄の棒が板に刺さった！ 黒ミミさん、大道芸人みたい！」

【黒ミミ】「だ、大道芸……一応、“手裏剣術”っていう武芸の一種なんだけどな」

【猫ミミ】「しゅりゅけんじゅちゅ？」

【黒ミミ】「手裏剣術だ」

【猫ミミ】「しゅりけんじゅちゅ、しゅりけんじゅちゅ……言いにくいよー！」

【黒ミミ】「しゅ、り、けん、じゅ、っ」

【猫ミミ】「しゅ、り、けん、じゅ、っ……言えたっ」

【黒ミミ】「おー、偉い偉い」

【猫ミミ】「ねね、あたしもそれ投げてみていい？」

【黒ミミ】「まあいいけど、難しいぞ？」

【猫ミミ】「やってみたい！」

【黒ミミ】「じゃあ、ほらこれ、こう持って……振りかぶって放つ！（しゅぱっ）」

【猫ミミ】「ふむふむ」

【黒ミミ】「まず、試しに投げてみる。最初は前に向かって水平に飛ばせるように」

【猫ミミ】「こうやって、えい！！（ぶんっ）」

【黒ミミ】「あっ……………」

【主人公】「（遠くから）いてえええ！！　なんで空から棒鉄が！？」

【黒ミミ】「力を入れすぎだ、見事にすっぽ抜けて飛んでいったな」

【猫ミミ】「あわわっ、い、今の声、ご主人さまだよな？」

【黒ミミ】「問題ない。油断していたアイツが悪いんだ」

【猫ミミ】「も、問題ないのかな？　謝ってこないと」

【黒ミミ】「それより、ほら、これをやるから、暇な時にでも練習しな」

【猫ミミ】「わーい、ありがと！！　じゃあ、ちよつと謝ってくるね！」

【黒ミミ】「……………やれやれ、この国は、まだ平和なんだな」

第69話『部下男も、頑張っていた』

鉦山と武勇の国：宿屋

【部下男】「ただいま戻りました。お祖母様」

【白髪女】「ん、街の様子はとうだったかい？」

【部下男】「どうもこうも街全体の空気がピリピリしてますね。戦場は、此処より遠いというのに」

【白髪女】「国自体の情勢が不安定なんだろうねえ」

【部下男】「それと、面白い話をいくつか……どうも、この数ヶ月の間、皇帝が公に姿を見せていないようです」

【白髪女】「ああ、その話ならアタシの方でも聞いてきたよ」

【部下男】「そこへ今回の戦争……」

【白髪女】「明らかに要因の1つだろうねえ」

【部下男】「次期皇帝の座を狙った、弟皇子によるデモンストレーションのようなもの？」

【白髪女】「うちの国も似たような物じゃないかい」

【部下男】「ええ、今回の援軍は、全て王弟派の息が掛かった軍で決まったそうです」

【白髪女】「ふんっ、まったく、7年前に王子の率いた軍が戦場で大活躍したのが、そんな簡単なことに見えたのかねえ」

【部下男】「元はと言えば、王弟派の……少数の援軍しか派遣しないことで、「森林と調和の国」に対する王子の印象を悪くし、あわよくば戦死をすれば、という画策でしたのに」

【白髪女】「畏に仕掛けたエサを取られた獵師ってのは、間抜けだねえ」

【部下男】「もっとも、男主人様という牙を隠し持った猛獣だった、と言っことですが」

【白髪女】「さて、ついつい昔のことを話し込んでしまっね。今、これからの話をしようか」

【部下男】「そうですね。もし、皇帝が病気などで、先が長くないとなると……」

【白髪女】「確実に、この国は分裂を起こすねえ。ただし、兄皇子が弟皇子に現皇帝に継ぐだけの力量があれば別だけどさ」

【部下男】「もしくは、今回の戦争で、弟皇子の軍が多大な戦果を上げた場合ですね」

【白髪女】「ただし、戦争つてのは、国力に多大な消耗を起こさせる。普通は二の足を踏むもんだけど……この戦争の発端には、少し裏がありそうだねえ」

【部下男】「オレの方は、もう少し皇帝の様子について、情報を集めてみます」

【白髪女】「あんまり無理をするんじゃないよ」

【部下男】「もちろんです」

【白髪女】「ところで……あの娘はどうするつもりだい？」

【部下男】「うっ……」

【白髪女】「オマエに懐いているようだし、きちんと面倒を見るんだよ」

【部下男】「……はあ、なんか男主人様の気持ちが少しだけ分かった気がします」

第70話『部下男が、好かれていた』

鉦山と武勇の国：宿屋

【黒服女】「部下男様、お食事を持ってまいりました」

【部下男】「あ、ありがとうございます。黒服女さん」

【黒服女】「そんな、“黒服女さん”だなんて、他人行儀なっ！
わたしのことは“黒服女”と呼ば捨てて下さい！」

【部下男】「いや、その……」

【黒服女】「部下男様は、わたしの運命の人なのです。峠で行き倒れていたわたしに、そつと差し出してくれたサンドイッチの味、一生忘れません！」

【部下男】「だから……そんな大したことじゃないし……」

【黒服女】「それとも、アレですか！ わたしは、呼び捨てにする価値がない女だと、そう仰るのですかっ！？ 確かにちよつとばかり方向音痴かもしれませんが、こう見えても職務には忠実、思い込んだら一直線、わき目を振らずにあなた様の忠実な下僕でありたいと、はちきれんばかり思いで胸がいっぱいです！」

【部下男】（なんか今サラリとんでもない事を言つたよな！？）

【黒服女】「呼び捨てがダメならば、“黒たん”と呼んでもらつてもいいのですが！ むしろ推奨！？ ……『そんな白髪女さんが見ていますっ』『いいじゃないか、黒たん、オレとキミの仲じゃないか』『ああ、部下男様っ』『……コレが正解でいいですかっ！？』

【部下男】「……………ごめん」

【黒服女】「謝られたー！！ わたしが精一杯振り絞つた勇気を返してっ！！ いや、自分でも分かっているんですよ。ちよつとばかり夢を見ちゃったかなって、でも、少しくらいロマンを追いかけたくなるのが人間じゃないですか！！」

【部下男】「ロマンを求めるのが人間、って言葉には少しだけ共感できるけどな」

【黒服女】「ですよーね!? ああ、部下男様とわたしの気持ち、今ひとつに!!! さあ、男のロマンである、漆黒のメイドさんルックの権化たるわたしに飛び掛っててください、部下男様っ! いつでも、どこまででも、わたしは部下男様の熱く滾った^{たぎ}思いを受け止めてみせますっ!」

【部下男】「もう、何をどう突っ込んでいいんだよ!」

【黒服女】「もちろん、わたしに! 部下男様のパッションを! 真正面から!」

【部下男】「違うー!」

【黒服女】「すみません、何か粗相をしてしまったのでしょうか? それとも、これからそういうプレイをする前置き? 部下男様ったら、案外マニアックな……」

【部下男】「落ち着け! オレも落ち着くから、まず、オマエが落ち着けっ!」

【黒服女】「はい、落ち着きます!」

【部下男】「ほら、深呼吸(ぜえはあ)」

【黒服女】「しんこきゅ(すうはあ)」

【白髪女】「いつもながら楽しい娘だねえ。あ、食事は先に頂いているよ(ぱくぱく)」

【部下男】「お祖母様……人事だと思って……」

【白髪女】「残念ながら、他人事っちゃ他人事だろ?」

【部下男】「仰るとおりですけどっ!」

第70話『部下男が、好かれていた』（後書き）

こついう、支離滅裂系の妄想娘は結構好きなんです。

黒服女

【種族】：人間族 【年齢】：20歳 【性別】：女性

【一人称】：わたし

【設定】：

- ・空腹で倒れている所を部下男に助けられたらしい。
- ・部下男のことを、部下男様と呼んで慕っている？

く幕間く『草原軍1』

森林と調和の国：侵略された村

【師団長】 「襲撃を受けたばかりか……生存者の確認を」

【魔術師】 「……アクティブ リヴィン ディスカバリー ラン…

…
サーチャイフ
《生命発見》」

【師団長】 （とは言っても、数日は経っている。生きていたら、村からは逃げ出しているか）

【魔術師】 「ん？ すみません、微弱な反応が……」

【師団長】 「家畜とかじゃないのか？」

【魔術師】 「その可能性もなくはないのですが、方角的にどこかの家の地下に……こっちです」

【魔術師】 「この部屋の真下ですね。この絨毯をはがします。手伝ってください」

【師団長】 「って、ボクもかい？」

【魔術師】 「手伝わずに、何のために付いて来たんですか？ いいから、そっちを持って」

【師団長】 「はいはい……よつと」

【魔術師】 「隠し部屋ですね。少し薄暗い……、あっ！？」

【師団長】 「どうした？」

【魔術師】 「子供が倒れています。さっきの生体反応は、多分あの子ですね、連れてきます」

【幼ミミ】 「……………（ぐったり）」

【師団長】 「衰弱がひどいな」

【魔術師】 「さっきの部屋に隠されたまま、飲まず食わずで隠れて

いたのでしょうか」

【師団長】「早く、救護兵の所へ連れて行こう」

【魔術師】「いや、魔術で……ルート リヴィン フェロー……」
アロツトライフ
生命分与」

【幼ミミ】「んっ……？」

【魔術師】「良かった、気が付いたか」

【幼ミミ】「やー！……？（ぎゅっ、ぶるぶる）」

【魔術師】（今、師団長様たちの方を見て悲鳴を上げた？ そして、僕に抱きついてきた……）

【師団長】「おい、どうした？」

【魔術師】「師団長様と護衛の皆さん、すみませんが、部屋から出て行ってくれませんか？ この子は、多分、鎧を着た兵に恐怖心を抱いているようです……安心して、君を傷つける人はいないから（ぼんぽん）」

【師団長】「そうか、落ち着いたら合流してくれ」

【魔術師】「了解です」

「幕間」『草原軍1』（後書き）

一気に三人増えた。新キャラクターの紹介です。

魔術師

【種族】：人間族 【年齢】：17歳 【性別】：男性

【一人称】：僕

【設定】：

・「森林と調和の国」に援軍として派遣された草原軍に所属している。

・魔術の腕は良く、師団長からは頼りにされている。

幼三三

【種族】：エルフ族 【年齢】：9歳 【性別】：女性

【一人称】：私

【設定】：

・侵略された村の生き残り。

・言葉が少なに喋っているが、徐々に慣れてきて……

師団長

【種族】：人間族 【年齢】：17歳 【性別】：男性

【一人称】：ボク

【設定】：

・「森林と調和の国」に援軍として派遣された草原軍の師団長。

・気さくな性格で魔術師とは仲がいい。

く幕間く『草原軍2』

森林と調和の国：草原軍野営地

【幼ミミ】「……………？（ぼんやり）」

【魔術師】「ん、気付いたか……………どう？　どこか痛かったりしない？」

【幼ミミ】「っ！？（びくっ）」

【魔術師】「おっと、驚かしちゃったか。もう大丈夫、安心して……………と言っても、すぐには安心できないかな」

【幼ミミ】「……………」

【魔術師】「まず、お互いに自己紹介をしよう。僕の名前は魔術師、君は？」

【幼ミミ】「……………幼……………ミミ」

【魔術師】「幼ミミちゃんか、可愛い名前じゃないか」

【幼ミミ】「……………お父さまとお母さまは？」

【魔術師】「ごめん、僕には分からない」

【幼ミミ】「どうして……………？」

【魔術師】「僕たちが集落に着いた時には、幼ミミちゃん以外は、誰もいなかったんだ」

【幼ミミ】「……………そっか」

【魔術師】「幼ミミちゃんさえ良ければ、僕たちと一緒に「棘の大集落」まで行かないか？　そこまで行けば、幼ミミちゃんの知り合いの人も見つかるかもしれないし」

【幼ミミ】「一緒に……………？」

【魔術師】「ああ、もしかすると、君のお父さんとお母さんは、その集落まで逃げているかもしれない」

【幼ミミ】「……………ほんと？」

【魔術師】「……………」

【幼ミミ】「……………（じい）」

【魔術師】「…………ごめん、僕の希望を言ったただけだ。多分、君のお父さんとお母さんは、君を助けるために死んじやっているとと思う」

【幼ミミ】「……………うん、分かった」

【魔術師】「ごめん」

【幼ミミ】「いいの。魔術師さんはわたしを助けてくれたんだよね？ わたし、魔術師さんと一緒に行くよ。イヤって言ったら、魔術師さんが困っちゃうもんね」

【魔術師】（聡い子だ……両親を亡くして辛いのに、僕のことを気遣っている）

SE（空腹音）：クウゝ

【幼ミミ】「…………あっ（照れ）」

【魔術師】「ははっ、お腹が空いてるみたいだね。ちょっと待って、何かもらってくるから」

く幕間く『草原軍3』

森林と調和の国：草原軍野営地

【師団長】「やあ、調子はどうだい？」

【幼ミミ】「（びくつ）……………（さつと魔術師の背後に隠れる）」

【魔術師】「いきなり入ってこないでくれますか？ この子が怖がるでしょう？」

【師団長】「ふふつ、ずいぶんと懷かれたようだね……………」『この子が怖がるでしょう？』だって」

【魔術師】「何か言いたいことがあるなら言ったらどうですか」

【師団長】「まあまあ、ところで、その子の名前は？」

【魔術師】「幼ミミと言っらしいですよ」

【師団長】「ふむ、ボクの名前は師団長という、よろしくね小さなお嬢さん（ぺこり）」

【幼ミミ】「……………お、幼ミミ……………です（こわごわ）」

【師団長】「少し、魔術師と話したいことがあるんだ。ああ、このオヤツを上げるから、一人で待っててくれるかな？」

【幼ミミ】「ありがとう……………わたし、一人でおるすばん、できるよ？」

【魔術師】「偉いな（なでなで）」

【幼ミミ】「えへへ……………」

【師団長】「（ニヤニヤ）それじゃあ、まあ、少し歩こうか？」

【師団長】「しかし、キミは子供ができたなら親バカになりそうだな」

【魔術師】「僕をからかうためにわざわざ来たのですか？」

【師団長】「いやいや、あの子と村のことを聞きに来たんだ。何か

分かったか？」

【魔術師】「言うまでもないことですが。襲撃跡から鉦山軍であることが確定しました。それと、あの子についての推測ですが、あの子のいた屋敷は村で一番大きな屋敷でした。この集落の長か、その準じる立場にあった者の娘だと思われます」

【師団長】「ふゝむ……」

【魔術師】「この国の住民であるエルフ族は、血縁を非常に大事にします。それなりの大きな集落に行けば、あの子の縁者を見つけることも可能でしょう」

【師団長】「それじゃあ、しばらくの間は、このままキミが預かってくれ、いいか？」

【魔術師】「ええ、それは構いませんが……何か心配事が？」

【師団長】「いや……最近、キミお前に面白い噂が流れていてね？」

【魔術師】「???」

【師団長】「なんでも、幼い少女を自分好みの女性に育て上げて、ゆくゆくは奥さんにするらしいね？」

【魔術師】「貴方と一緒にしないで下さい！！　それと、変な噂を流すなっ！！」

【師団長】「おいおい、ボクは、もうちょっと育つ所が育っている方が好みだよ。自分色に染めたいって所は否定しないけどさ」

第71話『男主人は、意外な特技を持っていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【猫ミミ】「あれ？ これ、なんだろ？」

【黒ミミ】「猫ちゃん、どうした？」

【猫ミミ】「あ、黒ミミさん、この黒い変な形の……棚かな？」

【黒ミミ】「ああ、これは……ピアノだな」

【猫ミミ】「ぴあの？」

【黒ミミ】「ああ、鍵盤を叩いて音を出す楽器なんだが、カギが掛かってるな。……あ、主、ちょうどよいところに、このピアノは開かないのか？」

【男主人】「ん？ ああ、カギはあるけど、黒ミミが弾くの？」

【黒ミミ】「自慢じゃないが、こういった芸術的なもんは全然分かん。猫ちゃんが気になっているから、音を出してやりたいだけだ」

【男主人】「確かに自慢じゃないね……カギは、確かここに……あった」

SE（カギを外す音）：カチャカチャ

【男主人】「久しぶりに開くから、音が狂ってそうだけど」

SE（ピアノの音）：パーン、ポーン

【猫ミミ】「わあ……あたしも触っていい？」

【男主人】「どうぞ。叩く時は、弱すぎず強すぎずね」

SE（ピアノの音）：パーン、パーン、ポポーン

【黒ミミ】「このピアノは、家族の忘れ形見ではないのか？」

【男主人】「そんな大したモノじゃないよ。家族の中でピアノが弾けたのは僕だけだしね」

【黒ミミ】「は？ すまんが、主はピアノが弾けるのか？」

【男主人】「何かな？ その幻のカーバンクルを見るような眼は…
…猫ミミちゃん、ちょっとどいて……」

SE（ピアノの音）：ポロン、ポポポロポロオン……

【猫ミミ】「わぁ……すごい、キレイな曲だね」

【黒ミミ】「い、意外な特技だな………」

第72話『男主人は、迷っていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「……………はぁ（溜息）」

SE（扉を叩く音）：コンコンッ

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、ボタン

【長ミミ】「ご主人様、お呼びでしょうか？」

【男主人】「うん、まあ、ちよつと訊きたいことがあってね…………」

【長ミミ】「何でしょう？ 昨晚のハンバーグの隠し味は、“ニン”で始まる赤い野菜ですが」

【男主人】「な、なんだって、トマトソースで騙したなっ!？」

【長ミミ】「ふっ…………」

【男主人】「く、そんなに勝ち誇った顔をされると……………うわ、かなり悔しい」

【長ミミ】「ご主人様の胃袋の支配権及び統治権は、今や私のものです。“ジン”で終わる赤い野菜を食べないと禁断症状を起こすようになってしまうのも、もはや時間の問題……………」

【男主人】「いやいや！ それはなんか別の問題だよ!！」

【長ミミ】「ご主人様、近代において食事は基本的に1日3食です。1年は365日、ご主人様が後50年生きられるとして、残りの食事の回数は約5万4千回。食わず嫌いと言うのは、その約5万4千回の行為に対するデメリットではありません」

【男主人】「かなり壮大な問題になった!？」

【長ミミ】「……………それで、私に訊きたいこととは何でしょうか？」

【男主人】「長ミミのそういう切り替えの早さについていけないの

は、僕が悪いのかな？」

【長ミミ】「では、私が悪いと言うことにして、さっさと話してください」

【男主人】「すつごく理不尽なことを言われている気がする！」

【長ミミ】「で？」

【男主人】「あー、うん、この手紙を読んでもらえる？」

【長ミミ】「手紙？　どうやら夜会の招待状のように見えますが……」

【男主人】「うん、まあ、そんなようなものかな……」

【長ミミ】「夜会の主催は、弟大公様？　ご主人様にとって、明らかに敵派閥のトップのようですが？」

【男主人】「しかし、家紋が押印された正式な招待状だ。これを断るのは難しい」

【長ミミ】「そういうものなのでしょうか……」

【男主人】「それで……長ミミって、ワルツは踊れる、かな？」

第73話『長ミミさんは、考えていた』

草原と平穏の国：馬車の中

【長ミミ】「……………」

【男主人】「……………」

SE（馬車の音）：ガタゴト……

【長ミミ】「……………」

【男主人】（うおお、なんだ、この沈黙はっ！ 新手的な精神攻撃かっ！？）

【長ミミ】「…………ご主人様」

【男主人】「は、はいっ！」

【長ミミ】「いくつか、お訊きたいことがあるのですが、よろしいでしょうか？」

【男主人】「どうぞ、僕が答えられることでしたらいくつでもっ！」

【長ミミ】「ありがとうございます。では、まず、今回の夜会で気をつけるべきことはありますか？」

【男主人】「ええと、悪いけど、できるだけ僕の傍から離れないようにして……人目のある場所で襲撃をしてくるとは思わないけど、嫌がらせ位なら仕掛けてくる可能性はあるから」

【長ミミ】「多少の嫌がらせ程度、私がご主人様にしていることに比べれば些細なことだと……」

【男主人】「いや、同意したくないけどね！」

【長ミミ】「今回のパートナーに、何故副官女様を選ばなかったのでしょうか？」

【男主人】「あー、夜会には東公爵も呼ばれているみたいだから、

多分、そのパートナーになると思うんだ。東公爵の奥様が、夜会のためにわざわざ領地から出てくるのも大変だからね」

【長ミミ】「それを聞いて安心しました」

【男主人】「……………他には？」

【長ミミ】「私の身分ですが、どのようになっていますか？　まさか、使用人の娘です。と紹介するわけにはいかないでしょう……………ご主人様、どうして“やばっ、忘れてた”という顔をなさってるのでしょうか？」

【男主人】「えーあー、そこは、あれで……………」

【長ミミ】「では、私は“棘の氏族”の氏族長の末の妹で男主人様に国家交流の一環でお世話になっている、と言うことにしてください」

【男主人】「え、それって身分の詐称になるんじゃない……………」

【長ミミ】「大丈夫です。氏族長の末の妹とは、親しい仲ですので、後で知らせておきます」

【男主人】「まあ、長ミミの言うことだから、信頼するけど」

【長ミミ】「それと、最後に……………」ご主人様、まだ私に言うべきことを言っていないと思うのですが？」

【男主人】「えーと……………」そのドレス、とっても似合っている……………よ？」

【長ミミ】「まあ、及第点、というところですね」

第74話『副官女が、話を合わせてくれていた』

草原と平穩の国：夜会（広間）

【副官女】「あっ……」

【男主人】「こんばんわ」

【長ミミ】「……………（ぺこり）」

【副官女】（ええ〜！？ と、隣にいるのは、確か長ミミさんでしたっけ？ あううつ、そんな腕を組んで入場するような仲にご進展をお！？）

【男主人】「副官女は、流石にドレスが似合っているね。そういう格好も可愛いよ」

【副官女】「か、かわかわ……………（真っ赤）」

【長ミミ】（ご主人様……………鈍いと言つか、天然と言つか……………馬鹿ではないのですが……………）

【男主人】「ところで、副官女、東公爵様は？」

【副官女】「お父様は……………入場して、しばらくの間は挨拶回りで一緒だったのですが、少し込み入った話があるとかで個室の方へいかれました」

【男主人】「そうか、挨拶をしたかったんだけど……………大切な娘さんを預かっているわけだし」

【副官女】「そんな大事な人だなんて……………（もじもじ）」

【長ミミ】「……………少しニュアンスが違うようですが……………」

【副官女】「はっ！　ところで、男主人様、その、そちらの女性は……………」

【男主人】「（少しわざとらしく）ああ、そうだった、紹介が遅れた。今、我が家に逗留なさっている長ミミさんだ。隣国の氏族長の血筋に連なる方だね」

SE（周りの人々がどよめく音）：ザワツザワツ……

【長ミミ】「（少しわざとらしく）“初めまして”、護りを司りし“棘の氏族”に、其の名を連ねます森の子、長ミミと申します。この出会いを嬉しく思います」

【副官女】「……東公爵が第一子、副官女です。“初めまして”、私もお会いできて嬉しいですわ」

【長ミミ】「東の所領は、広き“海”というモノに面しているとか？ 恥ずかしながら、私はまだ“海”と呼ばれるモノを見たことはありません。聞くところによれば、国にある最も大きな湖を何十倍も大きくしたモノだとか？」

【副官女】「ふふつ、“海”は湖と比べることもできないほど、広く、また深いモノですわ」

【長ミミ】「まあ、一度見てみたいものです」

【副官女】「東の所領にいらっしゃる際には、是非私の実家をお訪ね下さい。ささやかながら、両国の友好の証に歓待させていただきますわ」

【長ミミ】「それは素敵なお誘いですね。それに、副官女様のお話をもっと聞かせていただけないでしょうか？」

【副官女】「こちらこそ、長ミミ様の色々なお話をお聞きたいですわ。男主人様、宜しければ主宰の挨拶が始まる前に少しノドを潤しませんか？」

第75話『副官女は、少し不満でいた』

草原と平穩の国：夜会（広間）

【副官女】「……………それで、どういうわけなのですか？」

【男主人】「お、おお？ 副官女、な、なんか怒ってないか？」

【副官女】「怒っていません！ ただ、何で、あの長ミミさんが、男主人様のパートナーとして、ここに居るのが理由を教えてください！」

【男主人】「えっと、今日は……というわけで、招待を断るわけにはいなくてね。長ミミにパートナーに扮してもらったんだ」

【副官女】「それでしたら、私に言ってもらっても良かったのに、その……部下として！ そう、男主人様は師団長で、私が副団長なんですよ？ もっと頼って下さい！」

【男主人】「ありがとう。気持ちは嬉しいけど、副官女は東公爵のパートナーの奥様の代理と言う役目があったんだろ？」

【副官女】「そ、それはそうでしたけど……」

【長ミミ】「副官女様、先ほどはご無礼をいたしました（ぺこり）」

【副官女】「べ、別に謝るようなことじゃないわ！」

【長ミミ】「では、ありがとうございました。とつさにこちらと話を合わせて頂いけたおかげで、周りにいた方々にも、私の演技がバズにすみました」

【副官女】「感謝ならば、受け取っておきます。けど、海を見せたいと思ったのは本当よ。いつか猫ミミちゃんも連れて、私の実家に遊びにいらして……その、良ければ男主人様も一緒に」

【男主人】「そうだね。厄介ことが一段落したら、それもいいかもしれないね」

【東公爵】「おお、副官女……こんな所にいたのか！」

【副官女】「あ、お父様……」

【東公爵】「おや？」

【男主人】「東公爵様、ご無沙汰しております」

【東公爵】「おお、男主人殿かつ。いやいや、お互い忙しいからな。会うのは2ヶ月前の会議振だな、俺の娘の仕事振りはどうだ？」

【男主人】「お蔭様で、お嬢様がいなくては、僕の仕事は始まらず終わりを迎えられません」

【東公爵】「はっはっは、そうかそうか、副官女は少し色気は足りないかもしれないが、その分、俺よりもずっと真面目で賢いからな」

【男主人】「そんなご謙遜を、お嬢様はまさに才色兼備、我が軍の麗しい花ですよ。と言っても3人だけの小さな軍ですけどね」

【東公爵】「ところで、何故こんな所にいるんだ？」

【男主人】「さて、僕も招待主に直接問いたい気分です」

【東公爵】「気を抜くなよ。それと、この夜会が終わったら近く俺の屋敷に来い……」

【男主人】「ええと……」

【東公爵】「王子様からな、事情は伝えてもらった。水臭いじゃないか、俺にも協力させろや」

第76話『弟大公が、演説をしていた』

草原と平穏の国：夜会（広間）

【弟大公】「本日は、我が屋敷に多くの方々が集まってくれたことを、私は心から嬉しく思う。

今回の夜会は、皆の日ごろの疲れを癒すため、そして、私から皆に伝えたい思いがあり、設けさせてもらった。

皆はもう既に知っているだろう。現在、我等の兄弟たる隣国が粗暴な西の国に攻めている。

そして、我等が優秀な王国軍が、友を助けるべく馳せ参じているのだ。

西の国の規模は7年前とは違い、戦いは熾烈を極めるだろう。しかし、我等は兄弟を見捨てたりはしない。我等が見捨てれば、隣国は西の国に蹂躪^{じゅうりゃん}し尽くされてしまうからだ。

いや、それだけではない。貪欲な西の国は、平和なる我等が国に、その手を伸ばし、騒乱をもたらすだろう。

私はこの場を持って、皆に誓う。西の国の愚かなる行為を決して許さないと！！

そのために、私は微力ながら力を尽くす。私の力は、本当にささやかな力ではない。しかし、ここにいる皆は、私と进行を等しくする方々だと信じている。

私一人でなしえなくとも、ここにいる皆の力を得られれば、それこそ、万軍の力を得るだろう。私は、信じている。

以上が、私が皆に伝えたいことだ……（一礼）

SE（拍手）：パチパチパチ……！！！！

【東公爵】「なあ、茶番もいいところだと思わないか」

【男主人】「ええ、これなら、近所の子供達のお飯事まじごとを見ていた方が楽しめますね」

【東公爵】「とりあえず、退屈な挨拶も終わったし、俺はしばらく適当に楽しむつもりだ……ああ、副官女は、ついてこなくてもいい。男主人殿、うちのもよろしく頼むぜ」

【男主人】「は？ え？」

【副官女】「お、お父様っ？」

【東公爵】「何、父親と踊っても面白くも何ともないだろうからな。そっちのお嬢さんには悪いがな……」

【長ミミ】「いえ、私は別にご主人様がどなたと踊ろうとも構いませんが」

【男主人】「長ミミ？」

【長ミミ】「……多分、東公爵様は、全部ご存知ですよ。私に対する視線が、そう物語っています。ですから、ご主人様が、『恋人に對して、特殊な性癖を押し付けている』とか心配する必要はありません」

【東公爵】「はっはっは、それじゃあな、帰るときにはまた声を掛けさせてもらうぜ」

第76話『弟大公が、演説をしていた』（後書き）

舞踏会編の新キャラクター2名の紹介です。

東公爵

【種族】：人間族 【年齢】：48歳 【性別】：男性

【一人称】：俺

【設定】：

- ・「草原と平穏の国」の東の領地を治める公爵。
- ・副官女の父親。
- ・体の弱い妻を大事にする愛妻家。

弟大公

【種族】：人間族 【年齢】：42歳 【性別】：男性

【一人称】：私

【設定】：

- ・「草原と平穏の国」の現国王の弟。
- ・王位継承権の第二位として、王子様派に対する派閥のトップ。

第77話『男主人は、踊り疲れていた』

草原と平穏の国：夜会（中庭）

【長ミミ】「お疲れ様でした。ご主人様」

【男主人】「ねえ、君たちは、僕をどうしたいの？ 交互に10曲連続休みなしで躍らせるって、ひどくない？」

【長ミミ】「どこがひどいのでしょうか？ 教えていただけますか？」

【男主人】「……うう、ごめんなさい」

【長ミミ】「分かればよろしいのです。それに、途中からこっそり自身に魔術を掛けて、肉体の性能を強化されてましたよね」

【男主人】「うわ、よく気付いたね。軽く強化したけど、この手の魔術って、反動で疲労がすごいんだよ……その疲労を魔術で癒す、次は精神的な疲労がくるわけで……」

【長ミミ】「そもそも、ご主人様がハッキリしないのがいけないのです。最初にどちらと一緒に踊るかで迷い、曲の長さを考えずに長々と踊り、拳句の果てにワルツのステップを踏み間違えたフリをして副官女さんに……」

【男主人】「そ、それはフリじゃなくて、本当に間違えたんだって！ 何度も説明しただろ！ 副官女だって謝ったら分かってくれたし……」

【長ミミ】「フッ……」

【男主人】「鼻で笑われたっ！？」

【長ミミ】「まあ、そういうことにはしておきますが……ところで、この後はどうなさりますか？」

【男主人】「そうだね。少し涼んだら、東公爵に挨拶をして帰ろう。猫ミミちゃんも待っているだろうしね」

【長ミミ】「かしこまりました」

【給仕娘】「お客様、お飲み物はいかがでしょうか？ 本日は、葡萄酒がお勧めですが」

【男主人】「ありがとう、それじゃあ、僕はその葡萄酒を、長ミミは？」

【長ミミ】「では、同じものを……」

【給仕娘】「どうぞ。それでは、お楽しみ下さい」

【男主人】「それじゃあ、夜会が無事に終わりそうなことを記念して、乾杯（チン）」

【長ミミ】「乾杯（チン）」

【男主人】「（コク）ん、さすがは弟大公様の夜会だね。出てくる葡萄酒もランクが違う。これ一杯で、僕が普段飲んでいる葡萄酒が数瓶、下手したら樽ごと買えるんだろうなあ……こっそり一本持つて帰ろうかな」

【長ミミ】「ご主人様……（冷たい眼差し）」

【男主人】「じょ、冗談に決まってるよ……？」

【長ミミ】「それにしても、ずいぶんと眼が本気のようにでしたか？」

【男主人】「くっ、男には避けて通れない戦いと言ったものがあるのさ」

【長ミミ】「カッコイイことを仰っていますが、葡萄酒一本分とは、ずいぶん安い戦いですね」

第78話『長ミミさんが、苦しみだしていた』

草原と平穏の国：馬車の中

【長ミミ】「……………」

【男主人】「やれやれ、やっと開放された……………」

SE（馬車の音）：ガタゴト…………

【長ミミ】「……………」（肩に寄り掛かり）

【男主人】「ん？ 疲れて寝ちゃったのか？」

【長ミミ】「……………はあはあ……………」

【男主人】「！！？？」

【長ミミ】「くっ、うつ……………」

【男主人】「お、おい、長ミミっ！？ どうしたっ！？」

【長ミミ】「……………ご、主人、様……………申し……………ません……………（離れ）」

【男主人】「離れなくていい、辛いなら僕に寄り掛かってろ！！（ぐつと抱き寄せ）」

【長ミミ】「あっ……………くあっ……………」

【男主人】（身体が異常な熱い。高熱病の症状に似ているが、発症してすぐにここまでの熱になることはない……………となると……………）

【男主人】「これは、^{アンタレス}“火蠍の毒”か？」

【男主人】「……………レジスト リヴィン リカバリイ……………^{アンチボイズン}《毒素対抗

》！……………レジスト ディクリース センス……………^{アンチペイン}《苦痛対抗》！！」

【長ミミ】「……………はあはあ……………」

【男主人】（いつからだ？ いつから様子がおかしかった！？ な

んで僕は気付かなかったんだ……マズイぞ、これが本当に“火蠍^{アント}の毒^{レス}”だとしたら、僕の魔術では解毒できない……医療魔術の専門家じゃないと……しかし、この状態だと長くは危険だ……）

【長ミミ】「ご、しゅ……」

【主人公】「無理に喋らないでいい！今は、体力を温存させて……」

【長ミミ】「わ、かり……」

【主人公】（僕が毒を受けたなら問題はなかったのに……いや、向こうも僕に毒が効かないことは知っている……だから、長ミミを狙ったのか！？）

【主人公】「くそっ、何か、何か方法はないか！！考えろっ！！」

第79話『主人は、勝負を賭けていた』

草原と平穏の国：馬車の中

【長ミミ】「……………はあはあ……………」

【主人公】（だいぶ熱が上がってる、それに保有魔力の乱れ……………間違ってなく、^{アンタレス}火蠍の毒”による中毒症状だ。

“火蠍の毒”が体内に入ると、対象が持つ魔力の流れを阻害する。その結果、保有魔力が乱れ、体温の異常な上昇などの症状を起こす……………はず。

長ミミがエルフ族であることも最悪だ……………人間族よりも保有魔力が多いために、症状の進行が早い。

下手な魔術は効果がない。むしろ長ミミに、これ以上の魔術を掛けるのは危険だし……………。

……………くつつ、もっと簡単な毒だったら、僕でも解毒できるのに……………自分が毒や病気に侵されないからと、治療系の魔術を積極的に習得しなかったツケかつ！

今は、悔やむなっ！ 悔やむのは後でもできる！

まず長ミミを助ける手段を……………ん？ 今、何か思い浮かんだぞ。

僕は毒が効かない……………これは生まれ持った体質で、原因は過剰な保有魔力による恒常性維持の副作用。保有魔力は、ヒトの体液の流れに沿って体内で循環している。

……………エルフ族と人間族の間に、肉体的な相違はほぼなく……………ということは……………。

まずは、血液の種類を確認しないと……)

SE (短剣を抜く音) : チャキ

【男主人】「……んっ (自分の左の掌を切る)。長ミミ、少し痛いけど我慢して…… (長ミミの右の掌を切る)」

【長ミミ】「いつっ!」

【男主人】「……………凝固作用が起こらない、僕と長ミミの血液は同種…… よっし!

長ミミ、僕の声が分かるかつ!? 今から、お互いの傷口と流れる血液を仲介して魔力の同調させ、二人で一つの魔力の循環を作る。呼吸を整えて、力を抜いて、僕に全部魔力を委ねてくれるか?」

【長ミミ】「わ、かりまし、た……ご、主人様を、信じ……ています……」

【男主人】(くっ……………仲介箇所が一つだけだと、循環が上手くない………僕からの魔力の流れと長ミミからの流れが衝突しあう

………ああ、これは非常事態ってことで!!)

【長ミミ】「んんっ!?!」

【男主人】(ぐっ、この流れを保て、ばっ……………!!)

第80話『黒ミミさんに、殴られていた』

草原と平穏の国：男主人邸

SE（打撃音）：バキィッ！！

【男主人】「つゝ……気は済んだかな？」

【黒ミミ】「ふん、一発で気が済むわけないだろ」

【男主人】「悪いけど、これ以上は止してくれないかな」

【黒ミミ】「アタシは、言っただよな？ 長ミミは幸せか、って？
長ミミは、幸せになる権利があると思ってるんだ」

【男主人】「ああ……すまなかった」

【黒ミミ】「ふんっ、その殊勝な態度に免じて、今回は許してやる」

【男主人】「助かるよ。あんな一撃を何発も食らったら、これからの行動に支障が出る」

【黒ミミ】「で、どうするつもりなんだ？」

【男主人】「黒幕は、分かっている……今回のことは、向こうにと
って、あくまで嫌がらせに過ぎないだろう。嫌いな相手の人形を
ボロボロにして、喜んでいるようなものだ」

【黒ミミ】「気分が悪くなる話だ。アタシらがオマエの物のような
扱いされていることも含めてな」

【男主人】「君だって、僕の噂を聞いてたんだろ？ 君もきっと僕
の愛人扱いされているさ」

【黒ミミ】「長ミミの報復をするんだろ？ アタシも協力してやつ
てもいい」

【男主人】「悪いけど、君の力を借りるつもりはないよ」

【黒ミミ】「そりゃそうか、得体の知れない暗殺師は信じられない
だろうさ。でもね……」

【男主人】「待った。それは違う」

【黒ミミ】「何が違うんだい？」

【男主人】「君の腕も人柄も信じているよ。今の状況は、相手一人を暗殺して終わるようなもんじゃないんだ。それで済むなら、僕がとつくに手を下している」

【黒ミミ】「つまり、それほどの相手ってことかい？」

【男主人】「ああ……暗殺して気が済むのは一瞬だけだ。統率を失った、相手の勢力がどんな手段に出てくるか分かったものじゃない。やるときは勢力ごと、まとめて力をそぐ必要がある」

【黒ミミ】「慎重だな。まあ、闘士はいつでも冷静であるべきだ。その姿勢は認めてやる」

【男主人】「僕は臆病なだけさ。普通の人より丈夫で、バケモノと呼ばれるくらい魔術が使えると言っても、決して万能なんかじゃない」

【黒ミミ】「自然の中で最後まで生き残れるのは、強いヤツでも偉いヤツでもなく、自分が弱いことを知っているヤツだ。

強いヤツは何も考えないし、偉いヤツは何もしようとしない。自分が弱いと知っているヤツは、生き残る方法を考えるし、何をするにも躊躇^{ためら}わない」

【男主人】「それは？」

【黒ミミ】「エルフ族の闘士に教えられる訓戒みたいなものだ。オマエに相応しいだろ？」

く幕間く 『草原軍4』

森林と調和の国：草原軍野営地

【幼ミミ】 「……………えいつ（ボスッ）」

【魔術師】 「ぐほっ。な、なんだっ!？」

【幼ミミ】 「わわわっ!？（コロッ）」

【魔術師】 「……………何やってるの？ と言うか、寝ている僕の上に飛び乗ってこなかった？」

【幼ミミ】 「……………おはようございます!」

【魔術師】 「いやいや、何事もなかったように起き上がって、朝の挨拶をしてもね!」

【幼ミミ】 「あ、まだちょっと暗いから、こんばんわ?（きょとん）」

【魔術師】 「……………幼ミミ、いい子だから、教えて欲しいんだけど、僕に飛び乗った？」

【幼ミミ】 「うんっ!」

【魔術師】 「なんで？」

【幼ミミ】 「寝てたから!」

【魔術師】 「寝てる人に飛び乗るのが、エルフ族の習慣だったりするのかな？」

【幼ミミ】 「しゅうかん?」

【魔術師】 「あー、えっと、約束のこと? 家でもそうやってたの?」

【幼ミミ】 「ううん、違うよ? えっと、ここのしゅうかん?」

【魔術師】 「軍にもそんな習慣はありません!」

【幼ミミ】 「でも、師団長さんが、魔術師さんがなかなか起きないって言ったら、布団に向かって飛び乗ればいいって……………魔術師さんは、そうやって起こされると喜ぶって、その……………ダメだったの?」

【魔術師】「ふっ……ああ、もう、分かったとも……」

【幼ミミ】「お、怒ってる？」

【魔術師】「ああ、ごめんごめん、うん、幼ミミは全然悪くないからね。むしろ、僕を起こしてくれたことは褒めないとね。でも、もう少し寝かせてくれた方が嬉しかったかな。せめて日の出が完全に終わるまで（なでなで）」

【幼ミミ】「うん。明日からはもうちょっと遅くする」

【魔術師】「あと！ 飛び乗るのはダメ！ 僕も危ないけど、幼ミミも危険だから！」

【幼ミミ】「わかった。じゃあ、揺すって起こすね？」

【魔術師】「できれば、最初からそうして欲しかったかな……目を瞑って、何してるの？」

【幼ミミ】「えっと、それで……、起こしてもらったら、チューするんですよ？」

【魔術師】「はいいつ！？ ……なんでっ！？」

【幼ミミ】「え、だって、男の人と何度も一緒に部屋で寝てたら、朝起こしてあげて、チューするんだって……」

【魔術師】「……………うん、僕はとっても重要な用事ができたから、少し出掛けてくるね？ ああ、朝ごはんは先に食べていいからね（にこやか）」

く幕間く 『草原軍5』

森林と調和の国：草原軍野営地

【幼ミミ】 「魔術師さん、わたしに魔術を教えてくださいませんか？」

【魔術師】 「理由を聞いていいかな？」

【幼ミミ】 「強くなりたいの」

【魔術師】 「魔術を覚えると強くなれるのか？」

【幼ミミ】 「だって、魔術師さんなら、魔術で熊にも負けないですよ？」

【魔術師】 「ああ、確かに、僕が魔術を使えば熊くらい一瞬で倒せるな」

【幼ミミ】 「強くなって、わたしも敵をやつつけるの」

【魔術師】 「強くなって敵をやつつけて、どうする？」

【幼ミミ】 「お父さまとお母さまのカタキをとるの」

【魔術師】 「カタキって意味は分かっているのか？」

【幼ミミ】 「お父さまとお母さまを殺した人を殺すってことだよね？」

【魔術師】 「まあ、間違えじゃないな……」

【幼ミミ】 「魔術を教えてくださいませんか？」

【魔術師】 「……………そういう理由なら、僕は教えられない」

【幼ミミ】 「なんでっ!？」

【魔術師】 「僕にとって、幼ミミみたいな子が、人を殺すのは、とても悲しいことなんだ」

【幼ミミ】 「でも……………わたしは……………」

【魔術師】 「幼ミミ、よく聞いて、君に人殺しをさせたくないのは、僕のワガママだ。だから、君に約束しよう。君の両親の仇は僕が取るよ」

【幼ミミ】「……………魔術師さんが？」

【魔術師】「うん、人を殺すのは、僕がやる。だから、幼ミミも約束してくれるかな？」

【幼ミミ】「約束…………？」

【魔術師】「人を憎んでもいい、僕のことを嫌ってもいい……………けど、二度と人を殺すだなんて、言わないでくれないか？」

【幼ミミ】「……………わたしは魔術師さんのこと、嫌いになったりしないよ？」

わたしを助けてくれたのは、お父さまとお母さまと魔術師さんだから……………他のみんなが魔術師さんを嫌いになっても、わたしは魔術師さんが好きだよ？」

【魔術師】「……………ありがとう。少し驚いたけど、嬉しいよ」

【幼ミミ】「だから、魔術師さんに約束するね。二度と人を殺すって言いません……………だから、魔術師さん、悲しまないでください。お願いします」

【魔術師】「ああ、そういうお願いなら、大歓迎だよ」

く幕間く『草原軍6』

森林と調和の国：草原軍野営地

【幼ミミ】「わぁ……………」

【魔術師】「……………トランススレイト オン イレイス アワー エネ
ジー……………《魔力沈静》
ロストアウト」

【幼ミミ】「すごいキレイだった。今のも魔術？」

【魔術師】「一応魔術かな？ 体内を循環する魔力に負荷を掛けたり消したりすることで、魔力の流れを強化したり、いざと言う時の反応を上げ……………って説明が詳しすぎるな。

簡単に言えば、訓練用の魔術って、言えば分かるかな？」

【幼ミミ】「えーと、なんとなく？」

【魔術師】「それで、僕に何か用かな？」

【幼ミミ】「用がなかったら、来ちゃダメなの？」

【魔術師】「え、いや、駄目っていうわけじゃないけど……………」

【幼ミミ】「わたしがジヤマ？」

【魔術師】「邪魔でもないけど、その、危ないしさ。できれば、僕
の天幕で大人しくして欲しいんだ」

【幼ミミ】「魔術師さんの横にいる方が危なくないよ？ わたしが
危なくなったら、また助けてくれるよね？」

【魔術師】「うー……………」

【幼ミミ】「それに、わたしは、ホイホイ何でも言うことを聞く“
つごーのいい女”じゃないんだからね！ 魔術師さんが、最近、天
幕に居てくれないのが悪い、らしいんだよ？」

【魔術師】「……………師団長に、そう言えば良いよ、って言われたのか
な？」

【幼ミミ】「うわぁ、すごい。なんで分かったの？」

【魔術師】（そりゃあ、慣れない言葉を無理やり使おうとしてるよ
うに見えたから……だけどね）

【幼ミミ】「やっぱり、魔術師さんてすごいんだね」

【魔術師】「そんなことないよ。僕なんて、まだまだ半人前だ」

【幼ミミ】「半人前？」

【魔術師】「えーと、つまり、大人じゃなくて子供に近いつてこと
かな？」

【幼ミミ】「魔術師さんは、そんなに大きいのに？」

【魔術師】「大きくなるだけなら、樹木にだってできる。重要な
は、大人になるためにたくさんの経験をして、覚悟を決めること、
かな？」

【幼ミミ】「ふーん？」

【魔術師】「さて、せっかくだから、一緒にお茶でもしようか。ゆ
っくりできる時にはゆっくりしないとね……」

【幼ミミ】「わーい」

【魔術師】（昨日の会議で話された情報が真実なら……そろそろ、
本格的な交戦が始まるはず、か）

第81話『長ミミさんは、一晩寝込んでいた』

草原と平穏の国：男主人邸

【長ミミ】「ん、んん……？」

【男主人】「長ミミ、気が付いたか？」

【長ミミ】「ご主人様……なぜ、私の部屋、に？」

【猫ミミ】「長ミミさん！ 目を覚めて、良かったー！！（ぎゅっ！）」

【長ミミ】「痛っ！ ……猫ミミちゃんも？」

【男主人】「こら、猫ミミ、いきなり抱きつくな。長ミミの負担になる」

【猫ミミ】「ああっ、ごめんなさい……！！」

【長ミミ】「右手に……包帯？」

【男主人】「覚えてないのか？」

【長ミミ】「……いえ、途中から少し曖昧あいまいですが、全部覚えていると思います……」

【男主人】「そうか、じゃあ、数日の間は療養している」

【長ミミ】「いえ、少し寝れば大丈夫、です」

【男主人】「ダメだ。強引な治療をしたから、どんな副作用を起こすか分からない。様子を見ている限りだと、上手くいったみたいだけど……しばらく様子を見る必要がある。昼に信頼ヒールできる医療魔術師も呼んでいる」

【長ミミ】「しかし……」

【男主人】「ダメと言ったらダメだ。しばらく、仕事は猫ミミに任せろ。少しくらいなら僕も手伝えるし、そもそも僕だって家事ができないわけじゃないからね」

【猫ミミ】「あたしが頑張るから！ 長ミミさんは休んでてね！！」

【男主人】「とりあえず、猫ミミも休憩すること。長ミミが起きたら、休む約束だろ？」

【猫ミミ】「はい。それじゃあ、おやすみなさい！ー！」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、ボタン

【長ミミ】「ご主人様、確認したいのですが……私は毒を盛られたのでしょうか？」

【男主人】「ああ、その通りだよ。猫ミミには、詳しい話はしていない。夜会の疲れで、ちよつと体調を崩したと言っている。右手は倒れた時にぶつけて怪我をした、ということにしてな……長ミミも、まだ少し休んだ方がいい。落ち着いてから話をしよう」

【長ミミ】「分かりました。もう一つだけ質問させてください」

【男主人】「ん、何だ？」

【長ミミ】「この記憶が正しいのか知りたくて……私が意識を失う直前、ご主人様とキスをしましたか？」

第82話『はつきりとした話を、誤魔化そうとしていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「……………」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「あ…………… 昨晚のことは、覚えてるんだよね？」

【長ミミ】「ええ、うつすらとですが…………… ただ、気を失う直前、ご主人様が私の右掌を切りつけたあたりから、記憶が曖昧です」

【男主人】「…………… 使われた毒は、“火蠍アントレスの毒”といって、服毒した物の体内に流れる魔力を狂わせるんだ。もともとは、火蠍と同じ岩山に棲む霊鳥に対して適合した毒と言われている」

【長ミミ】「なるほど、つまり、私の保有魔力の循環が阻害されて、高熱を出していたということですね？ 例えるなら、換気をしないサウナのような」

【男主人】「うん、大体そんな感じかな。魔術による治療というのは、基本的に治療を受ける人の保有魔力に干渉するんだけど、この辺りは知っている？」

【長ミミ】「ええ、“治療系”^{ヒーリング}と呼ばれる魔術系統の基本ですね」

【男主人】「今回の毒の場合、治療対象者の保有魔力の循環が狂っているため、魔術による治療はしにくいんだ。それこそ難易度の高い治療魔術の《完全蘇生》^{リインカーネーション}か《神威祝福》^{ゴッドブレス}くらいの魔術じゃないと効果がない」

【長ミミ】「ご主人様だったら、使えるのでは？」

【男主人】「いや、治療院や神殿の秘奥技とされる魔術までは使えないよ」

【長ミミ】「そうですか…………… では、私はどうして助かったのですか？ 血抜きした程度で治る毒ではないようですが」

【男主人】「あー、やっぱり気になるかな？」

【長ミミ】「……それなりには」

【男主人】「簡単に言えば、僕の魔力の循環と長ミミの魔力の循環を無理やり一つに繋げたんだ」

【長ミミ】「???」

【男主人】「水の濁った小川に、大きな川との水路をつないで、無理やり綺麗な水の流れにした……みたいなの？」

【長ミミ】「なるほど……」

【男主人】「で、保有魔力の循環は基本的に人間の体液、つまり血液なんかの流れに沿っているから……」

【長ミミ】「私とご主人様の水路を作るために掌を切りつけ……排水路を作るために、口腔粘膜による接触を行なった、というわけですな？」

【男主人】「うん、まあ、そういうこと、かな？ 理解が早くて助かるよ」

【長ミミ】「ご主人様、それは、俗に言うディープキスという行為ですね」

第83話『冷や汗を流しながら、面会していた』

鉦山と武勇の国：黒騎士邸

【部下男】「……………」

【黒騎士】「部下男殿、さあ、お茶でも飲んで気持ちをやらせて頂きたい」

【部下男】「生憎オレは、アナタの様な武人の前でリラックスできるほど、豪胆じゃないんですよ」

【黒騎士】「別に毒などは入れていないが？」

【部下男】「そりゃそうだ、毒なんか入れなくても、一瞬でオレの首を切り飛ばすくらいは可能でしょう」

【黒騎士】「別に、貴方の首を切るような命令は受けていない」

【部下男】「ヤバイ、変な汗が止まらない……本気で怒った男主人様を初めて見た時と同じくらいだ」

【黒騎士】「さて、さっそくだが、本題に入るが、よろしいか？」

【部下男】「こっちに選択権はないと思いますけど？」

【黒騎士】「ご理解頂けているようで、話が早い」

【部下男】「……………」

【黒騎士】「貴方が“不死の魔人”殿の関係者であることは分かっている」

【部下男】「ふむ、オレには“不死の魔人”なんて恥ずかしい名前の知り合いはいませんか？」

【黒騎士】「先ほどは、自分は豪胆じゃないと言っていたわりには、なかなかどうして……。訂正しよう、森林軍第十一師団所属の部下男殿」

【部下男】「こっちの素性はモロバレってことか……しかし、まだ生きている、生かされているということは、まだ絶望的な状況では

ないのか？)

【黒騎士】「話を続けよう。俺の主が、そちらの男主人殿との会談を望んでいる」

【部下男】「はあ？　どんな無理難題を言われるかと思いました
が、そんなことが可能だと？」

【黒騎士】「無論、直接あつて話すのは無理だろうが、《ビジョントーク投影通話》
《と》と言うような魔術を使えば可能だと聞いている」

【部下男】「確かに、お互いに目印となる媒介を持っていれば、不可能じゃないが……そもそも、そっちの主は、確か……」

【黒騎士】「俺の主は、この国の第一皇女である鉄皇女様だ」

【部下男】「はい、分かりました。……と、オレが素直に返事する
とでも？　何が目的ですか？」

【黒騎士】「さあ、俺にも詳しい話は聞かされていなくてな。これは俺の予想に過ぎないが、会談の内容は、今回の戦争についてになるだろう、と述べておこう」

【部下男】「……嘘だな。ただ少なくとも、戦争について話し合いたいと言うのは本当か？」

【黒騎士】「他に何か質問が？」

【部下男】「返答は今すぐには無理ですね。いつまで待てます？」

【黒騎士】「事態は常に動いているからな、回答は早めに頂きたい」

第84話『なんだか、いい感じになっていた』

鉦山と武勇の国：宿屋

【黒服女】「お帰りなさいませ、部下男様」

【部下男】「ん、ただいま、お祖母様は？」

【黒服女】「ええと、いつもの酒場に行くと仰ってました」

【部下男】「そう。それじゃあ、オレは休むから、黒服女さんも休んでいいですよ」

【黒服女】「あ、あの？ それだけですか？」

【部下男】「それだけって？」

【黒服女】「わたしに言いたいことは、ありませんか？ わたしの素性はもうバレてるんですよ？」

【部下男】「そうか、なんか変だと思ったんだけど……その口調が素なの？」

【黒服女】「どっちが素と言う訳じゃありません、昔から気になる人の前だとテンションが上がってしまうだけで……って、そうじゃありません！もしかして、わたしの勇み足！？言わなくてもいいこと言っちゃった！？恥ずかしいっ！もうお嫁に貰ってもらうしかないと思いまするか！」

【部下男】「おお、いつもの黒服女さんだ」

【黒服女】「部下男様の視線が、わたしの扱いには慣れて飽きてきたぜコイツって物語ってますね！そんな冷たい部下男様も大好きですっ！離れたくありません！！」

【部下男】「なるほど、もしかして、それは上がり症の一種なのですか？」

【黒服女】「ぐっ、やめてっ、そんな冷静にをわたしに分析ないでっ！！これが、羞恥責めってやつですかー！？今なら、恥ず

かさで九死できる！ ああ、わたしの一生はどこにつ！ できれば、部下男様の横にそつと寄り添って歩む人生を希望っ！！」

【部下男】「黒服女さんは黒騎士殿の部下ですよね。オレを見張る任務はまだ継続中なのですか？」

【黒服女】「やっぱり、バレてるー！？」

【部下男】「うん、まあ、最初からある程度は疑っていたけど……」

【黒服女】「はうっ……あ、でも、最初に空腹で倒れていた所を助けてもらったのは偶然で、任務はその後からいきなり言われただけですから！！ わたしと部下男様の出会いは、運命の必然ってやつです！！！！ もう、これは……もごっ」

【部下男】「はいはい。夜も遅いから、大声はナシでね（手で口を押さえながら）」

【黒服女】「もごももごもも、もご、もごもごごもご……！！」

【部下男】「落ち着くなら、手を離すから」

【黒服女】「もごもご！ ぷはぁ……最初から疑っていたなら、どうして、わたしと一緒にいたんですか？」

【部下男】「あー……なんだ、その……」

【黒服女】「……」

【部下男】「女の人から、好意をもたれるのが久しぶりだったんで、オレも少しだけ舞い上がってたみたいです（照れ）」

【黒服女】「っ！？（真っ赤）」

【部下男】「だから、まあ、もうしばらくは、このままの関係も悪くないかなって……少なくとも、この宿に逗留している間は、敵側とか味方側とか考えないってことにしませんか？」

第85話『ちよつとだけ、飲みたい気分になっていた』

鉾山と武勇の国：酒場

【部下男】「オレもご一緒してよろしいですか？」

【白髪女】「おや？ ずいぶんと早いねえ」

【部下男】「お祖母様が、何を想像されているかは分かりませんが……」

【白髪女】「せっかく、アタシが気を利かせたつていうのにねえ」

【部下男】「変な気の回し方をしないでください」

【白髪女】「ふんつ、どうせ、微笑みながら『しばらくは、このままの関係でいたいな』とか言つて誑たふしかしたんだろお？ ねえ？」

【部下男】「……盗聴の魔術でも使つてましたか？」

【白髪女】「図星かい。アンタは父親じゃなくて、アタシの亡くなつた旦那に似てるみたいだねえ」

【部下男】「お祖父様に？」

【白髪女】「そうそう、アタシも若い頃は色々泣かされたもんだよ」

【部下男】（お祖母様が泣く所なんて想像もつかない……）

【白髪女】「もちろん、その3倍は泣かせてやっただけだねえ」

【部下男】「あ……」

【白髪女】「なんだい、その『納得しました』って声は？」

【部下男】「はっ、いえ、別に、なんでもありません」

【白髪女】「それで、結局どうなんだい？」

【部下男】「あー、えー、その、見た目は結構好みですし、あの拳動不審さも緊張した時に出るクセみたいなものだと思えば、全然可愛いと……」

【白髪女】「……………いや、そつちじゃなくて、昼の話を聞いている」

んだけどねえ」

【部下男】「うつ……」

【白髪女】「満更でもないってわけかい。こりゃ、曾孫の顔は思ったより早く見れそうだねえ」

【部下男】「あーあー（クイツ）。げほっげほっ、こっちのお酒はキツイですね」

【白髪女】「アタシは結構好みだけどねえ。もちろん好みといっても酒の話だけどさ」

【部下男】「ぐっ……えっと、向こうが言うには、この国の第一皇女が、男主人様と魔術による会談を望んでいると言う話です」

【白髪女】「ふゝむ……」

【部下男】「どう思いますか？」

【白髪女】「メリットとデメリットでいえば、若干メリットに分があるねえ。そもそも、この国の第一皇女が男主人を騙す理由がないねえ。兄の敵討ち？ 兄妹の仲が悪いと言う噂しか聞かないしねえ、それもないだろうさ。いつそ素直に話に乗ってみるのも手だろうねえ」

第86話『白髪女は、気付いていた』

鉦山と武勇の国：宿屋

【白髪女】「やれやれ、あの程度で酔い潰れるようじゃ、アタシの孫とは思えないねえ。そういや、あの酔い潰れ方は、旦那に似てるかも……」。

ところで、アンタは酒は強い方かい？ そんな所で“聞き耳”を立ててないで、中に入っついでよ。

もうちよつと寝酒を楽しもうかと思ってるんでねえ」

SE（扉の開閉音）：カチャ、キイ、パタン

【黒服女】「……………気付かれていたのですか？」

【白髪女】「盗聴系魔術は確かに魔力の隠密性は低いけど、魔術である以上、魔力の揺らぎは絶無じゃないからねえ。分かる人は分かるもんさ」

【黒服女】「白髪女様は、最初からわたしのことには気付いていたんですか？」

【白髪女】「うん、まあ、気付いていたと言うか、感じていたっていうのが正しいかねえ」

【黒服女】「わたしも未熟ですね……」

【白髪女】「いや、アタシも全部が分かっていたわけじゃないんだよ。ただ、まとう空気ってヤツかねえ。こればかりは経験による勘としか言えないけどさ」

【黒服女】「そうですか……」

【白髪女】「別に、これから部下男の寝込みを襲いにいってもいいんだよ？ 今なら前後不覚に酔ってるし、朝起きて、アンタが隣で

寝てれば既成事実の出来上がりだ。アタシは見て見ぬ振りをしてあげるからさ」

【黒服女】「なっ!？」

【白髪女】「おやまあ、ずいぶんと初心はつだねえ」

【黒服女】「か、からかっているのですか! 部下男様といい、白髪女様といい、わたしは敵対国の諜報部員なんですよ!! なんて、そんなに親しげなんですかっ!？」

【白髪女】「そう受け取られてしまったら、すまないねえ。そもそも、なんでアタシとアンタが敵対しないといけないんだい？」

【黒服女】「それはもちろん、わたしがこの国の軍人で、白髪女様たちは「草原と平穏な国」の軍人だからです!!」

【白髪女】「はっ、つまらない理由だねえ。それじゃあ何かい? アタシは、敵国の人間らしく、ここで四方八方に魔術で爆発を起こせとでも?」

【黒服女】「そんなことは言っていないせん!」

【白髪女】「アンタの言う、敵対国つてのは、そういうもんだよ? 相手の国に住む人間と自分達は違う、だから、何をやってもいいんだ……そうとでも思わなければ、戦争なんて起こせないもんさ」

【黒服女】「それは……………」

【白髪女】「そして、そんなバカが1人か2人いれば、戦争つてのが起こってしまうのが、国と戦争の怖さってヤツだねえ。だから、アタシは、己の敵と認めたヤツと弟子以外には優しくしているのさ」

【黒服女】「……………」

【白髪女】「アンタはアンタの考えを持つんだねえ。アタシたちは、確かに敵対国の軍人かもしれないけど、アンタの敵になったつもりはまだないんだよ」

第87話『東公爵から、協力を得ていた』

草原と平穏の国：東公爵別邸

【男主人】「……………」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、ボタン

【東公爵】「よお、待たせたか？」

【男主人】「突然の訪問で申し訳ありません」

【東公爵】「男主人殿なら、真夜中に訪ねてきてもらっても構わんぞ？　ちょうど良い、夕食も食べていけ」

【男主人】「お誘いは嬉しいのですが、ひとまず、用件を……ステ
ー ジ オ ン フェイク サウンド……《スモールワールド虚像世界》」

【東公爵】「防諜にしちゃ、ずいぶんと物々しい結界だな」

【男主人】「先日の夜会ですが……僕のパートナーに“アンタレス火蠍の毒”
が盛られました」

【東公爵】「！？　そんじゃあ、長ミミ殿は……？」

【男主人】「僕の魔術による応急処置で何とか。今は少し衰弱していますが、命に別状はありません」

【東公爵】「そうか、そいつは良かった……しかし、嫌がらせに
しては、少々度が過ぎているな」

【男主人】「警告のつもりかもしれませんが。まあ、弟大公を失脚さ
せようと動いていることが、どこからか伝わったのでしょうか」

【東公爵】「相手の危機感を煽ってボ口を出させるつもりだったの
か？」

【男主人】「王子様から、どこまで聞いていますか？」

【東公爵】「大雑把な目的だけだ。弟大公派の一気に叩き潰すらし

いな。俺は大いに賛成だぜ、そっちの方が俺も色々やりやすくなるからな」

【男主人】「現状は、状況がやや膠着じょうかくしている感じです。お互い、攻め切るだけの手札が揃っていない感じですね」

【東公爵】「ふうむ……」

【男主人】「こつちとしても、後一步の所までは来ているのですが、最後の一步が詰められません……正直、今回の嫌がらせにしても、毒の入手経路を調べるだけ無駄でしょう」

【東公爵】「離反工作は？」

【男主人】「敵の勢力の切り崩しはもちろん行なっています。日和見ならまだいい方で……向こうで吸う蜜は甘いでしょうね」

【東公爵】「裏切る旨味がなければ、裏切らないよな。沈みゆく船ならまだしも、まだ、豪華客船に見える船から下りたがるものは……」

……

【男主人】「ええ、今以上の要求を突きつけられても、それでは、第二の弟大公勢力を産むだけです……こちらにとって、条件が良すぎる場合、最悪の事態での裏切られる可能性も警戒しないといけません」

【東公爵】「苦労してんなあ」

【男主人】「ははは、東公爵様にそう言ってもらえれば、苦労も少し報われます。後一手……特に相手の勢力の詳細な情報が欲しい」

【東公爵】「いざと言う時は力を貸すが、そうだな……南の方には、俺の方から働きかけてみよう」

【男主人】「助かります」

第88話『東公爵は、本気で言っていた』

草原と平穩の国：東公爵別邸

【東公爵】「ところで、うちの娘のドコが不満なんだ？」

【男主人】「はっ？ いえ、すごく有能で不満なんか、ありませんが……」

【東公爵】「いや、仕事の話じゃない。男と女が同じ部屋で同じ時を過ごしていて、指一本手を出さないなんて、お前、少しおかしくないか？ 母親似だから、ああ見えて、脱ぐと良い身体をしていると思うぞ」

【男主人】「おかしくありません！ そもそもが、一緒にいるのは仕事中じゃないですか！」

【東公爵】「何を言う、オレが若い頃は昼の仕事も夜の仕事も区別はしなかったぞ。それとも、あれか、人間族相手じゃ、モノが役立たないのか？」

【男主人】「東公爵殿……王子様から変な話を吹き込まれていませんか！？」

【東公爵】「おう、エルフ族が2人に獣族が1人、合わせて3人もの愛人に囲まれてウハウハしてるという話だろ。ずいぶんとマニアックだったんだな、お前」

【男主人】「愛人でもマニアックでもありませんっ！！」

【東公爵】「現にパートナーとして連れてきたのは、長ミミ殿だったじゃないか。お前はまだ未婚だし、夜会のパートナーに選んだけど、まったくの無関係です、とても言い張るつもりか？」

【男主人】「うっ……」

【東公爵】「まあ、そこでだ。いい年をして、未婚でフラフラしているお前に耳寄りな計画だ。」

副官女を正妻にすれば、今なら俺の領地を結納代わりにくれてやるぞ。長ミミ殿には申し訳ないが、第二夫人で我慢してもらってだな」

【男主人】「何の話をしていますか!？」

【東公爵】「いや、お前が俺の義理の息子になる計画だが？　男なら自分の城に憧れるだろ？」

【男主人】「東公爵殿、冗談も程々に……………」

【東公爵】「いや、娘のことをダシにしてまでからかうつもりはないぞ。いたって真面目な提案だ。

俺は無骨者だからよ。娘が小さい頃からどう扱っていいかわからず、不自由しないように、欲しい物は与えてやったし、ワマガマはできるだけ叶えてやった。バカな娘に育てちまったかな、と思ったさ。

ところが、ある日を境に急に良い女になりだしてな。話を聞けば、お前の事ばかり、最後に聞いたワガママが、軍の所属になってお前の部下になりたいだ。こりゃあ、気持ちちは本物だと思うだろ」

【男主人】「……………」

【東公爵】「幸いにして、俺もお前が嫌いじゃない。次期王候補の王子様の覚えも良い。他所の家に取りられるくらいなら、お前を自分の家に取り込みたいっていうのは、不思議な話か？　なあ？」

【男主人】「……………僕を少し過大評価していませんか？」

【東公爵】「お前は、自分のことを過小評価しすぎだ。俺は、お前にやるならば、娘も領地も財産も惜しくないと言ってるんだ。それがお前の価値だ」

第89話『猫ミミちゃんが、溜息を吐いていた』

草原と平穏の国：孤児院

【猫ミミ】「はあ……………」

【赤髭男】「猫ミミちゃん、何か悩み事でもあるのか？」

【猫ミミ】「えっ！？ あたしは悩んでないよ！」

【赤髭男】「嘘をついてもすぐ分かるぞ。ワタシは猫ミミちゃんの2倍生きてるからな」

【猫ミミ】「う……………」

【赤髭男】「話してみる。無理には聞き出すつもりはないが、人に話すことで解決する悩みだつてある」

【猫ミミ】「ん、別に悩みつて言うか………… 赤髭男さんは、“あんなれす” って知ってる？」

【赤髭男】「あんなれす………… “火蠍アントレスの毒” かつ！ 猫ミミちゃんは、その名前をドコで？」

【猫ミミ】「あのね。長ミミさんが、その毒を飲まされたんだつて……………」

【赤髭男】「そうか………… 親しい人が亡くなったのだな」

【猫ミミ】「え？ 長ミミさんは死んでないよ？」

【赤髭男】「………… “火蠍アントレスの毒” を飲まされて助かったのか？ それは、運が良い。それじゃあ、何を悩んでいるんだ？」

【猫ミミ】「う………… あのね、この毒を飲まされたのつて、あたしに内緒だったんだ」

【赤髭男】「内緒なら、なんで知ってる？」

【猫ミミ】「えっと、その、こっそり耳を澄ませて聞いてちゃった。

………… ご主人さまも長ミミさんも、あたしの事を思つて話をしてくれなかつたんだと思うんだけど………… モヤモヤしてて」

【赤髭男】「子ども扱いされたのが辛い？ それとも仲間はずれされたのが悲しい？」

【猫ミミ】「うーん、なんだろう……悲しいわけでも辛いわけでもなくて……」

【赤髭男】「ふむ……」

【猫ミミ】「なんか、こう、自分のことがイヤになるー！ みたいなの……」

【赤髭男】「猫ミミちゃんは、その長ミミさんもご主人様も好きなんだよな？」

【猫ミミ】「うん！ 大好き！」

【赤髭男】「……2人の力になれなくて悔しい、とか？」

【猫ミミ】「あっ……それ、かも……そっか、あたしは悔しかったんだ」

【赤髭男】「ところで、その長ミミさんはどうして助かったんだ？ 猫ミミちゃんは知らないかもしれないが、“火蠍アントレスの毒”はかなりの猛毒なんだが」

【猫ミミ】「えっとね。ご主人さまの魔術で治したんだって！」

【赤髭男】「ほう、それはすごい。猫ミミちゃんのご主人様は高名な魔術師なのかい？ それほどの腕なら、お年を召した御老人かな」

【猫ミミ】「ううん、若くてカッコイイよ！ 男主人さまって言うの！」

【赤髭男】「……男主人？ 猫ミミちゃんのご主人様は、第十一師団の男主人なのかっ？」

【猫ミミ】「ううん……、副官女さんが確かそんな事を言ってたような気がする」

第90話『運命について、語っていた』

草原と平穏の国：男主人邸

SE（扉を叩く音）：コンコンッ

【男主人】『僕だけど?』

【長ミミ】「どうぞ、お入り下さい」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、ボタン

【男主人】「ただいま、調子はどうだい？」

【長ミミ】「お帰りなさいませ。調子は完全に元通りです。そろそろ部屋の外に出て、仕事に復帰させてたいのですが、読書も飽きてきましたし」

【男主人】「そうか、それじゃあ明日から徐々に復帰してもらおうかな。だけど、しばらくの間は無理をしないように」

【長ミミ】「かしこまりました。ところでご主人様……」

【男主人】「どうした？ やっぱり、どこか具合悪いのか？」

【長ミミ】「いえ、唐突な質問なのですが、ご主人様は“運命”の存在について、どう考えていますか？」

【男主人】「ほんと唐突だね……“運命”か、“人が起こすべきこととはあらかじめ決まっている”と言う意味の“運命”かな？」

【長ミミ】「ええ、やはり、“運命”と言うのはあるのでしょうか?」

【男主人】「魔術師としては、存在すると言わざるをえないかな。魔術師の始祖が、魔術と言うのは“運命に介入する技である”として、定義したと言われているし」

【長ミミ】「ご主人様本人としてのご意見は？」

【男主人】「預言者の理屈と一緒にかな？ 預言者が、ある船が沈没すると予言する。もちろん、お客はそんな船には乗らないだろう？ 船は出港しなくなつて、結果として沈没もしなかつた」

【長ミミ】「つまり、預言者の予言は外れたわけですね？」

【男主人】「そこで預言者はこう言うのさ。『私の予言のおかげで船は沈没せずに済んだ』ってね」

【長ミミ】「……結局ご主人様は、“運命”の存在を信じていないのですか？」

【男主人】「“運命”は存在すると思うね。だって、全ての結果は“運命”の通りなんでしょ？ だとしたら“運命”ほど、便利な言葉はないよ。

だけど、“運命”という言葉を逃げ道にするべきじゃないし、逃げ道にはならないとも思っているね」

【長ミミ】「逃げ道？」

【男主人】「そう、“運命”という言葉を使うこと自体、無意味な事なんだ。その事を考えずに“運命”のせいにして、自分のすべきことを放棄するのは違つと思つてる。……こんな答えで役に立つのかな？」

【長ミミ】「はい。十分です。ありがとうございました」

【男主人】「ん、それなら良かった」

く幕間く 『従姉妹1』

森林と調和の国：氏族長宅

【幼ミミ】 「……………あれ？」

【???】 「目が覚めましたか」

【幼ミミ】 「っ！！ 魔術師さんと師団長さんはっ!？」

【???】 「幼ミミちゃんが泣き疲れて、眠っているうちに帰られましたよ」

【幼ミミ】 「じゃあ、わたしも帰らなきゃ」

【???】 「どこへ？」

【幼ミミ】 「もちろん、魔術師さんたちのところだよ」

【???】 「それはダメです。今日からこの家が幼ミミちゃんの帰る場所に、幼ミミちゃんと私たちは家族になります。だから、幼ミミちゃんを危険な場所へ行かせるわけには行きません」

【幼ミミ】 「なんで？ 魔術師さんと一緒にいれば安全だよ？」

【???】 「その魔術師殿が私の両親に、幼ミミちゃんを引き取ってもらうように頼まれたのです」

【幼ミミ】 「ウソだっ！ 魔術師さんは、一緒にいてくれるって言った!！」

【???】 「幼ミミちゃんも聞いていたはずですよ。それで盛大に泣いて、魔術師殿を困らせて、疲れ果てて眠ってしまったのです…

…」

【幼ミミ】 「ウソだウソだウソだっ！ 一緒に、ずっと、一緒だつて……」

【???】 「ずっと一緒にいることと、幼ミミちゃんを大切に思うことは同じではありません」

【幼ミミ】 「え……？」

【???】「幼ミミちゃんは、魔術師殿が怪我をしてもいいというのですか？」

【幼ミミ】「それはイヤだよ！」

【???】「なら、魔術師殿も同じ気持ちです。幼ミミちゃんに怪我をして欲しくない、危ない思いをして欲しくないからこそ、幼ミミちゃんがどんなに泣いても、危険な場所に連れて行きたくはないのです」

【幼ミミ】「でも……でも……」

【???】「けれど、寂しい気持ちを感じるのは仕方のないことです。だから、いつか戦争が終わって、平和になったら、魔術師さんたちに会いに行きましょう。私も一緒に付いて行きますから」

【幼ミミ】「あなたは……？」

【???】「まずは自己紹介をしましょうか、私だけ幼ミミちゃんの名前を知っているのは不公平ですから。」

初めまして、私の名前は長ミミといいます。

今日から、幼ミミちゃんのお姉さんです」

【幼ミミ】「お姉さん……？」

【長ミミ】「はい、私の方が年上ですから、お姉さんです」

く幕間く 『従姉妹2』

森林と調和の国：氏族長宅

【幼ミミ】「……………」

【長ミミ】「……………」

【幼ミミ】「……あの」

【長ミミ】「なんでしよう?」

【幼ミミ】「わたしと、長ミミさんは、その、家族になるの?」

【長ミミ】「はい。けど、元々私と幼ミミちゃんは血が繋がっているのですよ」

【幼ミミ】「え?」

【長ミミ】「私の母と幼ミミちゃんの母は、実の姉妹ですから、私と幼ミミちゃんは本当は従姉妹ということになりますね」

【幼ミミ】「いとこ……………」

【長ミミ】「それから、私と幼ミミちゃんが一度会っているのですけどね」

【幼ミミ】「い、いつ!?!」

【長ミミ】「乳飲み子の時なので、幼ミミちゃんは覚えてないと思いますが…………その頃は、とても小さくて可愛かったんですよ。もちろん、今も十分に可愛いのですが」

【幼ミミ】「ふゝん」

【長ミミ】「後で面白いものを見せてあげましょう」

【幼ミミ】「面白いもの?」

【長ミミ】「ええ、私たちの母親たちが若い頃の肖像画です」

【幼ミミ】「見たいな……………」

【長ミミ】「見たらきつとビックリすると思いますよ」

【幼ミミ】「ビックリ? なんて?」

【長ミミミ】「それは見てのお楽しみです」

【幼ミミミ】「じゃあ、今から見に行く……」

【長ミミミ】「その前に顔を洗って、先に食事をしましょう。気づいていないかもしれませんが、長い間寝ていたのでお腹も空いてきているはずですよ」

【幼ミミミ】「分かった。えっと、長ミミさん、井戸はどっち？」

【長ミミミ】「一緒に付いていきます。それから、長ミミさんじゃなくて、お姉さんと呼んでくれませんか？ そう呼ばれたと、妹ができて嬉しいのです」

【幼ミミミ】「え、あ……お姉さん？」

【長ミミミ】「ふむ、まあそのうち慣れるでしょう。では、行きましょうか」

く幕間く 『從姉妹3』

森林と調和の国：氏族長宅

【幼ミミ】 「いただきます……」

【長ミミ】 「はい、召し上がれ」

【幼ミミ】 「（ぱくり）あ……これ……」

【長ミミ】 「ん？ どうかしましたか？」

【幼ミミ】 「お母さまのシチューと同じ味がする……」

【長ミミ】 「それは、きつと私たちの母が、母の母から、つまり、私たちの祖母から教わった味だからでしょう。私も母から、このシチューの作り方を教えてもらいました」

【幼ミミ】 「……………」

【長ミミ】 「今度、幼ミミちゃんにも、このシチューの作り方を教えてあげますね」

【幼ミミ】 「うん……」

【長ミミ】 「気になる男の人がいたら、このシチューを作ってあげるといいですよ」

【幼ミミ】 「男の人？」

【長ミミ】 「ええ、家庭的な料理ができる女性は、それだけで“オ―ガーに棍棒”と言います」

【幼ミミ】 「えっと、お願いします」

【長ミミ】 「任せておいてください。こんなに幼ミミちゃんに思われて、魔術師殿は幸せ者ですね」

【幼ミミ】 「え、ええっ!？」

【長ミミ】 「違うんですか？」

【幼ミミ】 「なんで魔術師さんのことを考えているのが分かったの……………」

【長ミミミ】「幼ミミちゃんも、立派なレディですからね。すぐに分かりましたよ」

【幼ミミミ】「そ、そうなんだ……あれ、なんか、ムズムズする」

【長ミミミ】「照れちゃって可愛い」

【幼ミミミ】「て、照れてないよ？ ムズムズするだけだよ？」

【長ミミミ】「はいはい、それじゃあ、ご飯も食べちゃいましょう」

【幼ミミミ】「うー……（もぐもぐ）」

【長ミミミ】「ちなみに、幼ミミちゃんであつても、好き嫌いはダメですよ。私の料理を残すのは許しませんから」

【幼ミミミ】「は、はい！」

【長ミミミ】「よろしい」

第91話『猫ミミちゃんに、お願いされていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【猫ミミ】「ねえ、ご主人さま……」

【男主人】「ん？ 猫ミミ、どうした？」

【猫ミミ】「ご主人さま、明日はお休みだよね？」

【男主人】「そうだけど、どこかに遊びに行くとかはちょっと無理かな」

【猫ミミ】「えっと、遊びじゃなくてね。その……あたしと一緒に行って欲しい所があるの」

【男主人】「行って欲しい所？」

【猫ミミ】「うん、ご主人さまに会いたって言う人がいるんだ」

【男主人】「僕に？ どこまで連れて行くつもりなのかな？」

【猫ミミ】「えっと……下町の孤児院なんだけど……」

【男主人】「ああ、猫ミミがお世話になっている孤児院ね」

【猫ミミ】「えっ？ ご主人さま知ってたの!？」

【男主人】「あ、えくと、長ミミにちょっと聞いててね。僕もいずれ挨拶に行こうと思ってたんだけど……明日じゃないとダメなのかな？」

【猫ミミ】「うー……できれば、早く会いたって言うてた」

【男主人】「僕に会いたい人ってその孤児院の院長とか？」

【猫ミミ】「ううん、赤髭男さんって言う人なんだけど……」

【男主人】「赤髭男……赤髭男ねえ？ 僕の知り合いにはいないから、向こうが一方的に僕のことを知っているんだろうけど。猫ミミは何か聞いている？」

【猫ミミ】「ううん、知らない。あたしには教えられないことなんだって……」

【男主人】「一体どういう理由があつて、僕に会いたいんだろう。その人って、孤児院の人？」

【猫ミミ】「下町の路地裏で倒れていた所を、孤児院のみんなで助けたの。それから、孤児院のお手伝いとかをしてくれてて、とっても頼りにされてるんだよ」

【男主人】「倒れていた？」

【猫ミミ】「うん、最初会った時はね」

【男主人】「そんな危ない。もし、その時倒れていたのが悪い人だったらどうなると思う？」

【猫ミミ】「でも……悪い人そうじゃなかったんだよ。えっと、雰囲気のご主人様とちよつと似てるかな？」

【男主人】「僕に？」

【猫ミミ】「うん、長ミミさんとお喋りして静かになった時のご主人様にそっくりなんだよ！」

【男主人】「……………」

第92話『人と人は、どこかで繋がっていた』

草原と平穏の国：孤児院

【主人公】「初めまして、老院長殿。うちの猫ミニがお世話になっているようで」

【老院長】「いやいや、なんの、うちの方こそ猫ミニちゃんにお世話になりっぱなしじゃ」

【主人公】「ここは活気があって、良い孤児院ですね」

【老院長】「まあ、しかし、孤児院に活気なんぞないほうが世の中は平和なのじゃがのう」

【主人公】「それは確かに仰るとおりです。ところで、赤髭さんと言っのは？」

【老院長】「奥にある個室で待つておる。ああ、それと、主人公殿と余人を交えず、2人だけで話したいそうじゃが、よろしいか？」

【主人公】「ええ、その赤髭男さんが、どのような方かは分かりませんが、僕の方に問題ありません」

【老院長】「この廊下の突き当りの部屋じゃ」

【主人公】「では、失礼します……」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、バタン

【主人公】「!!!!!!」

【赤髭男】「お久しぶりですね、主人公殿。……安心して下さい、今のワタシにアナタたちへの害意はありません」

【主人公】「その言葉を信じると？」

【赤髭男】「できれば、信じて欲しいです。……その上で、ワタシ

と取引して頂きたい」

【男主人】「取引？」

【赤髭男】「男主人殿が知りたいことを、ワタシが知っている範囲で全てお話します」

【男主人】「……求める見返りは？」

【赤髭男】「ワタシが、“赤髭男”であることの証明が欲しい」

【男主人】「つまりは……アナタの過去を全て無かったことにして欲しい、という意味かな？」

【赤髭男】「そのような解釈で間違いありません」

【男主人】「では、僕は貴方のことを信じましょう」

【赤髭男】「！？ 本当ですか？」

【男主人】「嘘かもしれませんが？ しかし、ここでお互いを疑い続けていても、何の進展にはなりません。仮に貴方の情報が罠だとしても、その事実を情報として事態を推し進めるだけです。」

それに……ずいぶんと顔つきが変わりましたね。今の貴方なら話をしてもいい、そんな気分になっただけです。悪領主殿」

第93話『変わったことを、認めていた』

草原と平穩の国：孤児院

【赤髭男】「変わりました……か？」

【男主人】「ええ、少なくとも僕が見る限り、今の貴方ならば信用に足ると思わせるだけの雰囲気があります。こういうのは、僕より年配の貴方はご不快かもしれませんが」

【赤髭男】「いえ、むしろ、何か嬉しいですね」

【男主人】「それでは、本題に入る前に……その口調は、素じやないんですよね？ 喋り易いようにしてください、僕もその方がやりやすいので」

【赤髭男】「そういうことなら、ん、普通に喋らしてもらうぞ」

【男主人】「構いません。ちなみに僕の方は半分くらい、これが素なので気にしないでください」

【赤髭男】「さて、何でも話すと言ったが、何から話せばいい？」

【男主人】「……まず、弟大公を失脚させるほどの情報は？」

【赤髭男】「そこまでを期待されているなら、悪いが直接的には無理だ。まずは証拠がない。ワタシの証言だけでは、自作自演という疑惑が残り、大勢に何も影響を与えられない可能性も高いだろう？」

【男主人】「そうですね。いくら恩赦を出すとしても、一度罪人とされた貴方の証言だけで、弟大公を追いつめるのは無理でしょう」

【赤髭男】「ワタシがやっていたのは、先代からの徴税違反及び違法な収賄、その贈賄先の1つが弟大公だった」

【男主人】「弱いな……例えば、弟大公に不満を持っている相手は？」

【赤髭男】「それなら、いくつかは心当たりはあるな」

【男主人】「離反に応じそうな相手、ただ離反させた後に裏切られそうな相手は困るね」

【赤髭男】「難しいことを言う。すぐに裏切ってくれて、自分たちを裏切らない相手が欲しい、と言っているぞ」

【男主人】「理想的な条件つてのは、いつでも厳しいね（苦笑）」

【赤髭男】「ああ、逆に王子様側から、弟大公側に情報を流している相手は何人か分かる」

【男主人】「それは助かりますね。ああ、そうだ……悪領、ちがった、赤髭男殿。西との連絡を取っていたというが、相手は？」

【赤髭男】「弟皇子派の幹部の1人だ。今回の戦争に対して、王国の情報を流して欲しいというモノだな。情報の重要度によっては、数百万イェンの報酬をもらっていた」

【男主人】「報酬、ね……………」

【赤髭男】「他には？」

【男主人】「うん、悪いけど、思考がまとまらない。今日の所は、まず弟大公側の勢力について、洗いざらい話してもらおうか」

【赤髭男】「構わない。問題は無限に思えても、時間は有限だからな」

第94話『できることを、楽しんでいた』

草原と平穏の国：男主人邸

【猫ミミ】「長ミミさん、大丈夫？」

【長ミミ】「ありがとう、猫ミミちゃん、お掃除とか上達しましたね。おかげで、今日はとても仕事が楽でした」

【猫ミミ】「えへへ、長ミミさんが倒れていた分、頑張ったんだよ！」

【黒ミミ】「長ミミの方こそ、病み上がりなんだ、あまり無茶はするなよ」

【長ミミ】「ええ、倒れてしまったら、また2人の負担になってしまいますからね」

【黒ミミ】「負担とか、そういう問題じゃない。もう少し自愛しろ、アタシはオマエのことを心配してるんだ」

【長ミミ】「ありがとうございます。けど、黒ミミさん、私はこうやって家事を行なえるのが嬉しいのです。ですから、私のためを思うなら、できるだけ、私が家事ができるように手伝ってください」

【黒ミミ】「そんなに楽しいものかねえ。アタシは庭の草むしりを魔術でガーッとやるだけは、楽しいけどさ」

【長ミミ】「楽しい、と、嬉しいは、少し違います。もちろん、楽しみながら出来るなら、それに越したことはないですが……」

【猫ミミ】「あたしは楽しいよ！ だって、昔は、その日一日を過ごすのに精一杯だったけど……今は、色々なことをやらせてもらってるし、教えてもらってる。料理をしたり、掃除をしたり、洗濯をするのも楽しいよ？」

【黒ミミ】「うーん、あたしはピンとこないな」

【長ミミ】「猫ミミちゃんは、メイドになるべくして生まれたよう

な逸材ですね」

【猫ミミ】「おおー、なんかあたしって、すごいっぱい！」

【黒ミミ】「……………」

【長ミミ】「猫ミミちゃんならば、もしかしたら、100年に1人現れるか現れないかの、マスター・オブ・メイドになれるかもしれません」

【猫ミミ】「ますたー・おぶ・めいど！？　なんかすごいっぱさが100倍くらいになったね！！」

【黒ミミ】「……………」

【長ミミ】「マスター・オブ・メイドは、メイド式十八般に通じており、全てのメイド式を極めたものだけが名乗ることができる称号です」

【猫ミミ】「おおー！！　長ミミさんも、マスター・オブ・メイドを目指しているの？」

【黒ミミ】「……………」

【長ミミ】「残念ながら、私の才能では、マスター・オブ・メイドを名乗ることはできませんでした。猫ミミちゃん、私の意志を継げるのは猫ミミちゃんしかいません」

【猫ミミ】「長ミミさん、あたしに任せて！！　必ずマスター・オブ・メイドになるからっ！！」

【黒ミミ】「……………楽しいか？」

【長ミミ】「ええ、割と楽しいかもしれません」

【猫ミミ】「うん、とつても！」

第95話『男主人は、偶然を信じていた』

草原と平穏の国：王宮（王子執務室）

【王子様】「戦争の状態は一進一退を繰り返しているらしい。物量で推す鉦山軍を防衛拠点と地の利で防ぐ森林軍と草原軍の連合という流れだ」

【男主人】「7年前と同じような感じですね」

【王子様】「規模はだいぶ違うだろうがな。ところで、長ミミ殿の体調はどうだ？」

【男主人】「後遺症もなく、昨日から屋敷の仕事に復帰しています」

【王子様】「そうか、それは良かった。で、何か進展があったのか？」

【男主人】「ええ、悪領主を発見しました……そして、僕たちへの協力を取り付けました。今は、その情報の裏づけを取っている所です」

【王子様】「……話が美味過ぎるな。畏じゃないのか？」

【男主人】「いえ、それはないでしょう」

【王子様】「言い切ったな」

【男主人】「あまりに偶然が重なりすぎていて、逆に馬鹿馬鹿しくなるくらいです。この話が畏だとして、それを弟大公派の誰かが描いたというなら、いつそ、演劇の台本でも書いてる方が似合っていますよ」

【王子様】「そんなにかな？」

【男主人】「詳しい事は、いずれ茶飲み話にでも語ります」

【王子様】「ああ、早くゆつくり茶を飲みたいな。どうせなら、オマエの家でご自慢のメイドさんに注いでもらえればいいな。ボクは、まだ新しい2人は紹介してもらってないんだよな」

【男主人】「そもそも、長ミミも紹介したわけじゃありませんけどね」

【王子様】「あれ？ そうだったけ？」

【男主人】「その都合の悪いことをすぐに忘れた振りするの通じませんから」

【王子様】「ふむ、心外だな。こう見えても、この演技で何十人もやり過ごしているんだぞ」

【男主人】「そ・れ・は！ 貴方の権力が有無を言わせていないだけですよ！！」

【王子様】「おおつ、そういう見方もあるな。なるほど、やはり他人の意見というのは重要だな」

【男主人】「そのさも今初めて新しいことを知ったような振りも通じませんか」

【王子様】「なんだって、それじゃあ、後は……」

【男主人】「色仕掛けも通じませんよ？」

【王子様】「……つまらん男だな」

【男主人】「つまらなくて結構です。というか、幼馴染に何を求めているんですか？」

【王子様】「せめて、オマエが女だったら、もうちょっと楽しめたんだろうなあ」

【男主人】「今ほど男に生まれて良かったと思った時はありませんね」

第96話『人知れず、旅立とうとしていた』

草原と平穏の国：孤児院

【赤髭男】「!？」

【老院長】「おや？ こんな朝早くどうなさったかな？」

【赤髭男】「いえ、少し散歩に……」

【老院長】「ふむ、散歩というには、装いがまるで旅人のように見えるがの」

【赤髭男】「老院長殿こそ、なぜこんな時間に？」

【老院長】「年寄りの朝は早いものじゃよ。それに少々胸騒ぎがしての、まあ、原因は悪くもなく良くもなく、といったところじゃ」

【赤髭男】「……………」

【老院長】「少し待っておれ……」

【赤髭男】「？」

【老院長】「……ん、待たせたの（手に持っていた包みを渡す）」

【赤髭男】「（包みを解く）これは……」

SE（抜剣する音）：チャキ……

【赤髭男】「……剣？ 使われている素材がこれだけの質ならば、決して安物ではない？」

【老院長】「儂が以前使っていたもんじゃ。餞別せんべつにやるから、持つてくがよい」

【赤髭男】「こんな高価なものを、もらう理由がない」

【老院長】「それなら、何時か返しに来なさい。それまで預けるだ

け、ということでしょうか？」

【赤髭男】「老院長殿……ワタシがどこに行くのか、ご存知なので
すか？」

【老院長】「いや、知らん」

【赤髭男】「なら、なぜ、これをワタシに……」

【老院長】「お主は剣士じゃろう？ 手を見れば分かる。剣を持たぬ剣士ほど見苦しいものはない、と思っただけじゃ。以前のお主に剣は必要なかった、しかし、今のお主は剣を必要としている。儂の見当違いかの？」

【赤髭男】「いえ……」

【老院長】「ああ、そうだ。何か猫ミミちゃんに伝えることはあるかの？」

【赤髭男】「……それなら、ワタシはまだ生きていて良かったようだ、と」

【老院長】「ふむ、伝えておく。では、達者での」

【赤髭男】「……では（ぺこり）」

第97話『猫ミミちゃんは、変わろうとしていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「（ずずず）……そういえば、2人は？」

【長ミミ】「最近、黒ミミさんは猫ミミちゃんに稽古けいこを付けている
そうです」

【男主人】「稽古？」

【長ミミ】「ええ、黒ミミさんも教え甲斐があるといっていました」

【男主人】「そうなのか……」

【長ミミ】「なかなか筋がいいようですよ。元々獣人族は身体能力
に優れていますからね」

【男主人】「とうか、黒ミミの専門つて、アレだよな」

【長ミミ】「猫ミミちゃんの種族として、適性があるみたいですが」

【男主人】「うーん」

【長ミミ】「どうかされましたか？」

【男主人】「いや、ちよつと複雑な気分でさ」

【長ミミ】「何事もできないよりも、できることが多いほうが良い
でしょう」

【男主人】「でも」

【長ミミ】「暗殺師の技であつても、毒を知らずに解毒はできません。
ん。それに、毒も薬のうちと言うではありませんか？ 結局は使う
人の心次第……ご主人様がよくご存知のはずです。

それから、ご主人様は少々過保護すぎます」

【男主人】「そうかな？」

【長ミミ】「ええ、猫ミミちゃんを真綿で包むようにして、一生の
面倒見るつもりですか？ 多分、ご主人様が望めば猫ミミちゃんは
否とは言わないかもしれませんが……」

【男主人】「うつ……でも、それとこれとは、話が……」

【長ミミ】「少し違いかもかもしれませんが、究極的にはそういうことです。もちろん、猫ミミちゃんが誤った道に進もうとしているならば、正してやるのは身内としての権利でしょう。しかし、猫ミミちゃんが成長しようとしているのを阻むのはどうでしょう？」

【男主人】「それもそうか………ところでさ」

【長ミミ】「何でしょうか？」

【男主人】「もしも、僕が長ミミのことを真綿で包むように一生大事にしたい、って言ったらどうする？」

【長ミミ】「それは少々困ってしまいますね」

【男主人】「ほうほう？（してやったり）」

【長ミミ】「私の方も、ご主人様を真綿で包むように大事にしたいと思っていますので（さらに）」

【男主人】「……………お茶、お代わりくれる？」

【長ミミ】「はい、かしこまりました」

第98話『会談の条件を、提示していた』

鉦山と武勇の国：黒騎士邸

【部下男】「忙しい所失礼します。男主人様と連絡が取れましたので、その報告に参りました」

【黒騎士】「いや、最初にお願ひしたのはこっちだからな。先日 of 返事を頂けると思つてもいいのか？」

【部下男】「ええ、その件です」

【黒騎士】「で？」

【部下男】「魔術による会談をお受けする、というのがコチラの答えです」

【黒騎士】「それは良かった」

【部下男】「つきまして、いくつかの条件を出ささせていただきます」

【黒騎士】「それで、その条件とは？」

【部下男】「1つ目、会談に対して、両方から2名まで立会人を出す。コチラは、オレともう1人」

【黒騎士】「次は？」

【部下男】「2つ目、通話に必要な魔術の行使は、コチラが執り行う」

【黒騎士】「ふむ」

【部下男】「3つ目、会談の内容については参加者のみの機密とする。ただし、その会談の結果次第では、その制限を緩めることも考慮する」

【黒騎士】「それで終わりかな？」

【部下男】「いえ、最後4つ目、先の3つの条件のいずれかが破られる場合、会談は失敗したものとし、会談はなかったものとして扱ふ……以上です」

【黒騎士】「今度は、俺が即答するわけにはいかないようだ。時間をもらいたい。ただし、明日には返答しよう」

【部下男】「もちろんです」

【黒騎士】「ところで、もう1人の立会人は“霞の賢者”殿だろうか？」

【部下男】「……まあ、隠す必要は、ないでしょうね。ええ、オレの祖母が立ち会います。通話に必要な魔術の行使も祖母が行ないます。何か問題がありますか？」

【黒騎士】「いや、むしろ、賢者殿が立ち会ってもらった方が、問題が少なくなるだろう」

【部下男】「では、そういうことで……何か、今のうちに話しておくことはありますか？」

【黒騎士】「今すぐに話せることは、特にないな」

【部下男】「それじゃあ、また明日に」

【黒騎士】「また明日………」

第99話『妖艶女に、仕事を頼んでいた』

森林と調和の国：有名娼館

【妖艶女】「あらやだ、本当に男主人様じゃないかい」

【男主人】「客に向かって開口一番それか？」

【妖艶女】「最近、色々忙しいみたいじゃないか。こんな所で油を売ってて大丈夫なのかい？」

【男主人】「油を売りに着たんじゃなくて、買いに来ただけだね」

【妖艶女】「やれやれ……それで？」

【男主人】「今すぐに“閨に入れる”娘は何人いる？」

【妖艶女】「そうだね。ベテランだけなら2人、若手を入れて5人で所かね」

【男主人】「んー……少し足りないか。今既に“閨に入っている”ベテランも呼び戻せないかな？」

【妖艶女】「……それなら、ベテランを後3人くらいは融通できないけど。そんなに人手が必要なのかい？ アンタの所には王子様づきの子だっているだろうに」

【男主人】「いざ、という時のために万全を期したいんだ」

【妖艶女】「そこまでの仕事と？」

【男主人】「ん、ボクの長年の苦勞が実るかどうかの瀬戸際ってやつかな」

【妖艶女】「それじゃあ、しょうがないね。うち一番のお得意様をお願いだ」

【男主人】「助かる」

【妖艶女】「なあに、きちんとお金をいただくからね」

【男主人】「前金で250万イェン、後は必要経費と結果に応じて払うよ」

【妖艶女】「ずいぶん慣れたもんだねえ。相場が分かってるじゃないか……それで問題はないよ」

【男主人】「お陰様で、色々と鍛えさせてもらったからね」

【妖艶女】「一番厄介そうな所は、アタイ自身が入ってやるよ」

【男主人】「え？」

【妖艶女】「何驚いてるんだ。アタイだってまだまだ腕は落ちちゃいないよ？」

【男主人】「いや、それなら、さっきの金額じゃ……」

【妖艶女】「問題はないさ。ベテラン5人と若手3人だろ？ どうしてもっていうなら、成功報酬に色を付けてもらおうかね」

【男主人】「……了解、成功報酬は期待してね」

【妖艶女】「それじゃあ、詳しい話を聞かせてもらおうか」

第100話『妖艶女から、求められていた』

森林と調和の国：有名娼館

【男主人】「……とまあ、依頼の打ち合わせは、こんな所かな」

【妖艶女】「それじゃ、後はアタイに任せてもらうよ。何か動きがあり次第知らせればいいんだろ？」

【男主人】「うん、任せたよ」

【妖艶女】「ところで、さっきの事後報酬の話で一つ頼みたいことがあるんだけど、いいかい？」

【男主人】「ん？ 何か要望があるの？ あまり無茶は頼みじゃないければ引き受けるけどね」

【妖艶女】「そんなに無茶なことじゃないさ」

【男主人】「ふん」

【妖艶女】「あのね、この仕事が終わったら、男主人様の子が欲しいんだけどさ」

【男主人】「……僕に子供はいないけど？」

【妖艶女】「そうだね、知ってるよ。ああ、アタイにもバレてない隠し子がいれば別だけどさ」

【男主人】「子供って、どこの誰が産むんだよ！！」

【妖艶女】「ん？ 男主人様は子供を産めるのかい？」

【男主人】「産めないけどねっ！！」

【妖艶女】「だよな……いや、魔術で産めたりするのと思ったよ」

【男主人】「妖艶女は、魔術を一体なんだと……」

【妖艶女】「それじゃあ、しょうがないね。アタイが産むしかないだろ？」

【男主人】「………ちょっと待とう。話を整理したい」

【妖艶女】「整理するまでもなく、単純な話だと思うけどね」

【男主人】「まず、仕事の事後報酬の話だったよね？」

【妖艶女】「そうだね。さすがに仕事前に仕込むのはちょっと心配だしね」

【男主人】「で、妖艶女は僕の子が欲しいけど、僕に子がいないから、妖艶女が産む、と」

【妖艶女】「大雑把な筋は間違えてないな」

【男主人】「途中をざっくり無視したからね。え？　そういうことなのか？」

【妖艶女】「いや、そんな質問されても分からないよ。どういふことなのかい？」

【男主人】「あー、だから、妖艶女は、何で僕の子が欲しいんだ？」

【妖艶女】「ああ、大丈夫大丈夫、財産を分けるとかは言わないからさ……なんていうか、人恋しくなるのさ。この年で一人身だとね」

【男主人】「それなら、何も……何でわざわざ僕を指名しなくてもいいだろ。そもそも冗談か？　笑う所だったか？」

【妖艶女】「不粋な質問をしてくるね。男主人様に冗談で言える話だと思ukai？」

【男主人】「……………」

【妖艶女】「確かに、子供が欲しいだけなら……そこらの孤児院からつれてきてもいいし、適当に客の若い男を捕まえて仕込んでもいいだろうさ。けどね、アタイは男主人様の子……が欲しいんだよ」

第101話『妖艶女から、説明されていた』

森林と調和の国：有名娼館

【妖艶女】「あ、先に言っておくけど。アタイは別に男主人と結婚したり、財産が欲しいと言っているわけじゃないだよ」

【男主人】「けど、僕の子供が欲しいと言うのは……」

【妖艶女】「だから、それは、言葉どおりの意味さ。男主人様はくれるもんくれたら、後はアタイが一人で上手くやるからさ。念のため、何回か手伝ってくれると嬉しいけどね」

【男主人】「どう言うつもりだ？」

【妖艶女】「んー、よく分からないって顔だね」

【男主人】「そりやそうだろ？」「ください」と言われて「どうぞ」って渡せるもんじゃないよ」

【妖艶女】「渡せないもんかい？」

【男主人】「少なくとも僕は無理だね」

【妖艶女】「お仕事のお礼にさ、ちよちよいつとさ。減つてもすぐに増えるじゃないか」

【男主人】「な・に・が・だ・！」

【妖艶女】「いやん、アタイに何を言わせたいんだい？」

【男主人】「……………」

【妖艶女】「おや？ そんな困ったような顔をさせたいわけじゃないんだけどねえ（微笑）」

【男主人】「困ったようじゃくて、困ってるんだよ。話が唐突過ぎてついていけない（苦笑い）」

【妖艶女】「だから、今すぐにじゃなくて、今回の依頼の事後報酬について言ってるんじゃないか」

【男主人】「その報酬の要求自体が唐突だって言ってるんだ」

【妖艶女】「うゝん、もつと説明しないと分からないもんかねえ？」

【男主人】「ああ、さっぱりだ」

【妖艶女】「女心が分からない男はもてないよ？」

【男主人】「今限りで、僕の一部だけが変なもて方をして困ってるけどな」

【妖艶女】「ははは、そんなヤケっぱちな皮肉を言うほど追い詰められてるんだねえ」

【男主人】「追い詰めてる本人が……」

【妖艶女】「んー、実はさ。アタイも結構唐突な思いつきだからさ。上手く説明できないんだよねえ」

【男主人】「はあ……？」

【妖艶女】「一言で言えば、衝動的ってヤツかな？ ほら、市場で美味しそうな揚げ菓子を見つけて、思わず買い食いしたくなるような。そして、今を逃すと後で絶対に後悔する、そんな気持ちなのさ」

第102話『妖艶女が、可愛く見えていた』

森林と調和の国：有名娼館

【男主人】「揚げ菓子……オヤツ感覚つてのが、ちょっと凹むな」

【妖艶女】「うっ……わ、悪気はないんだよ？」

【男主人】「まあ、悪気はないとしてもね。もうちょっとマシな例えがなかったのか……？」

【妖艶女】「上手く説明できないんだから、しょうがないだろ」

【男主人】「ん？もしかして……緊張してる？」

【妖艶女】「誰も照れ隠しなんかしてないぞ！」

【男主人】「……………えっ？」

【妖艶女】「あっ……………」

【男主人】「……………」

【妖艶女】「……………」

【男主人】「えーと……照れ隠しなんだ？」

【妖艶女】「バカっ！改めて言うなっ！」

【男主人】「あ、ごめん……って、謝ることなのか？」

【妖艶女】「知るかつ！」

【男主人】（うーん、意外な一面が……あれ？さっきまでと違う感じにドキドキしてきたぞ）

【妖艶女】「とりあえずは、まあ、そういうことだ」

【男主人】「そういうこと、か」

【妖艶女】「さっきも言ったように、男主人様との子供が欲しいだけなんだ」

【男主人】「……それは、僕の力のことを知って言ってるんだな？」

【妖艶女】「はっ、強い子供が生まれるなら、私も守ってもらおうかね」

【男主人】「その子が化け物と呼ばれてもか？」

【妖艶女】「そうしたら、人里離れた山奥で母子2人仲良く暮らすさ」

【男主人】「本気か？」

【妖艶女】「本気さ……おっと、今日の所はもう帰ってくれないか？」

【男主人】「しかし……」

【妖艶女】「依頼が終わって、報酬をもらう時に、一緒に返事を聞かせて欲しいんだ。今、返事を聞いちゃうと、どっちであれ、依頼の仕事に影響しそうだからな」

【男主人】「……分かった。それじゃあ、後は頼んだ」

【妖艶女】「ああ、任せときなよ」

【男主人】「一応言っておくが、くれぐれも無茶はするなよ」

【妖艶女】「もちろん、分かっているさ」

第103話『好みはすべて、掌握されていた』

森林と調和の国：男主人邸

【男主人】（そういえば……………）。

目玉焼きは固焼き半熟。

サラダのドレッシングは塩と油を控えめ。

肉は鳥の胸肉か牛の赤身。

スープの出汁は干し魚。

ワインは白よりも赤。

コーヒーは砂糖なしでクリームを少し。

オヤツは酸味の強い柑橘類、もしくは甘さを控えたゼリーか焼き菓子…………）

【長ミミ】「ご主人様、何か？」

【男主人】「あ、いや、ごめん…………」

【長ミミ】「言い訳もなしに謝るということは、私に対して、きつと口に出して言えない様なことを…………」

【男主人】「言い訳はあるよ！　すぐく言い訳がしたいな！」

【長ミミ】「…………ご主人様、言い訳をするとは男らしくないですよ？」

【男主人】「どうすりや良いんだよー！」

【長ミミ】「あえて言うのでしたら、一つ面白くなる方向で」

【男主人】「ねえ、長ミミは僕に何を求めているのかな？　その所を一度聞かせて欲しいかな！？」

【長ミミ】「申し訳ありません、その希望に沿うわけには参りません。…………ご主人様が泣き出すといけませんので」

【男主人】「…………泣くことが前提！？」

【長ミミ】「勝算は五分五分です」

【男主人】「いやいや、今までの会話でどこに勝算が必要な勝負があっただよ!？」

【長ミミ】「ご主人様、メイドを前にする時は『常在戦場』の心得が必要です」

【男主人】「そんな血臭漂うメイドはイヤーだーっ!」

【長ミミ】「……で、私を見ながら、何を考えてらしたのですか？」

【男主人】「はぁ……、ちょっと最近の食事のメニューをね」

【長ミミ】「なにか不備があっただでしょうか？」

【男主人】「いや逆々、すっかり好みが把握されちゃったな、って思っただけだよ」

第104話『戦いに行く覚悟を、決めていた』

草原と平穩の国：王宮（王子執務室）

【王子様】「ふう、何とか、ここまで来たな」

【男主人】「明日の王宮議会で、弟大公の辞任に追い込めますね」

【王子様】「それだけで、表立った力の何割かは削れるだろう」

【男主人】「油断は禁物ですけどね」

【王子様】「おいおい裏の権勢も削っていくさ……それより、先に考えるべきことがある。気持ちは変わらないのか？」

【男主人】「第十一師団……いえ、僕が戦場に向かいます。命を奪う必要があるならば、力を振るいます」

【王子様】「東公爵からは、第九師団をお前と一緒にという提案が出てる」

【男主人】「あの人は……」

【王子様】「媚殿は大変だな」

【男主人】「媚殿言うな！！」

【王子様】「……今、本気でツッコんだな」

【男主人】「いや、なんかこう、イラつと……」

【王子様】「しかし、今のオマエってば、モテモテだよな。どうしたんだ？」

【男主人】「モテモテって……」

【王子様】「妖艶女に肉体関係を迫られたろ？」

【男主人】「いつものことですよ。ええ、娼館に来て女を買わずに帰るのは、酒場に来て酒を飲まないのと同じだと……」

【王子様】「誤魔化そうとしてもムダだからな。子供が欲しいって言われたんだろ」

【男主人】「この忙しい時期に、また諜報員をつ？」

【王子様】「いや、これは本人から聞いた」

【男主人】「は？」

【王子様】「だから、妖艶女本人から聞いた。それで、オマエとの子供が生まれた場合、財産権がどうなるかとか、貴族法のアドバイスをちよつとな」

【男主人】「……………はあ（溜息）」

【王子様】「おや？ まあ、変なことは言っていないぞ？ 基本的に私生児に遺産などが渡ることはないからな」

【男主人】「だからこそですよ。本気度合いが、ね」

【王子様】「ふむ……………何かやったか？」

【男主人】「身に覚えはないんですけど……………」

【王子様】「たとえば、チンピラから助けたとか、寒い日に一緒に買い食いをするとか、「かわいいですね」なんて言ったりとか」

【男主人】「……………？ やったら、マズかったですか？」

【王子様】「え、全部か？」

第105話『止めに、しっかりと念を押していた』

草原と平穏の国：弟大公邸

SE（家具を破壊する音）：ドガッ、メキッ……

【弟大公】「我が甥ながら憎たらしい。どこまで私の邪魔をつ!! それにあいつらも、私がどれだけ眼を掛けてやったと思ってるんだっ!!」

SE（家具を破壊する音）：ガンッ、バキッ……

【弟大公】「はあはあ……………そうだ、こうなったら……………」

【男主人】「こうなったら……………どうするつもりですか?」

【弟大公】「!!???」

【男主人】「弟大公様、こんばんわ」

【弟大公】「ひ、ひいつ!! わ、私を殺しに来たのか!?!」

【男主人】「……………」

【弟大公】「そ、そうだ。あいつの部下を辞めて、私に仕え直さなにかっ!?! 今なら、伯爵に取り立ててやる。すぐには無理だが、いずれは侯爵にしてやってもいい!!」

【男主人】「爵位には興味ありませんね。どんな地位をもらったところで、貴方の下である以上満足できそうにありませんから……………」

【弟大公】「ぐっ……………」

【男主人】「それに早合点をしないでいただきたい。僕は貴方の命にも別に興味はありません」

【弟大公】「そうなの、か?」

【男主人】「ええ、今の所は、という前提ですけどね。これは忠告

です」

【弟大公】「忠告……だと？」

【男主人】「いえ、少し言い方を換えます……これは警告です。今後一切、無駄な画策をしないでください」

【弟大公】「……………何を？」

【男主人】「僕の感情的にはすぐに殺してやってもいいのですが、今貴方に死なれると色々と面倒になりますからね。命だけは助けます。」

ただし、私や私の周りにいる人に害意を向けること、また、玉座に座ろうという意思をみせること……それらの素振りを少しでも見せたなら、貴方を殺します」

【弟大公】「ひいつ!？」

【男主人】「せいぜい、赤ワインを飲む時はサソリの毒に気をつけてくださいね？」

【弟大公】「あ、あれは、部下が勝手に……………」

【男主人】「何度も言わせないでください。興味はありません……………」

……貴方は、私との約束を守って、静かな余生を過ごしてください。返事は聞きませんが」

く幕間く『幼馴染』

森林と調和の国：草原軍野営地

【師団長】「この殺伐とした日常における潤いが……はあ」

【魔術師】「……そのわざとらしい溜息は、僕への当て付けですか？」

【師団長】「いやいや、キミの判断は正しいよ。うん、こんな場所にいつまでも子供がいるのはよろしくない。まったくもって正しい判断だ」

【魔術師】「含みがある言い方ですね。はっきり仰ったらどうですか？」

【師団長】「キミ、あの子を迎えに行くつもりはないだろう？」

【魔術師】「……」

【師団長】「理由は簡単、キミはあの子をあの集落の親戚に“預けた”んじゃないくて、キミ自身から“遠ざけた”からだ」

【魔術師】「そんなことは……」

【師団長】「絶対はない、とは言えないだろう？」

【魔術師】「……ええ、そうですね」

【師団長】「もっと、説明してやろうか？ キミは、一度身内と決めた人間には優しい……というか、優し過ぎる。」

問題は、その優しさが独善的になりがちな所だ。たしかに、幼ミミちゃんはある人たちと一緒にいるのが客観的にもっともいい結論だ。しかし、客観的ということは、そこにキミと幼ミミちゃんの心情を踏まえてないよな。

おっと、先に言っておくと、君の優しさを否定しているわけじゃない。むしろ、優しさとか親切心なんていうのは、元から独善的なモノだろうからね」

【魔術師】「色々と買いかぶりすぎですよ」

【師団長】「幼馴染の欲目ってヤツだ。もつとも、ボクはキミと幼ミミちゃんが喧嘩をしたら、断然幼ミミちゃんの応援をするけどさ」

【魔術師】「大丈夫ですよ。もう喧嘩をする機会もないでしょう」

【師団長】「おいおい、下手な遺言みたいに聞こえるぞ」

【魔術師】「縁起でもないこと言わないでください！」

【師団長】「戦場で、未来を語ると死ぬんだぞ。気をつけるよ？」

【魔術師】「娯楽小説の読み過ぎですよ。実際に死ぬ時は、さっくり死ぬのが世の常でしょう」

【師団長】「何を言う、ボクはこんな男くさい場所で死ぬのはゴメンだよ。老衰で美女に囲まれて死ぬって決めてるんだ」

【魔術師】「思いつきり未来を語ってますよね？」

【師団長】「おっと、今のは心の中にしまっておいてくれ、ボクとキミとの秘密さ」

【魔術師】「誰に言うつもりもありませんから、むしろ言いたくないですから、そのバッチグーというアイコンタクト代わりにウィンクとか止めてください」

第106話『戦争へ行くことを、告げていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【猫ミミ】 「黒ミミさん連れてきたよー！」

【男主人】 「ありがとう、猫ミミ。これでみんな揃ったね」

【黒ミミ】 「アタシたちを、改めて集めてどうした？」

【男主人】 「えっと、明後日からしばらく、僕はこの屋敷には帰れなくなる」

【黒ミミ】 「……戦争のせいかな？」

【男主人】 「うん、僕も出兵することになったからね」

【猫ミミ】 「え、ご主人さま……戦争に行くの？」

【男主人】 「ああ」

【猫ミミ】 「戦争って、危険で危ないのが一杯なんですよ？ だ、大丈夫？」

【男主人】 「絶対に安全とはいえないけど、こう見えても僕は結構強いからね。大丈夫だよ」

【猫ミミ】 「本当の本当に大丈夫？」

【男主人】 「まあ、多分、大丈夫じゃないかな？」

【猫ミミ】 「うゝ……」

【黒ミミ】 「それで？ アタシたちはどうするつもりだい」

【男主人】 「まずは黒ミミだけど、僕と一緒に来て見張りを続ける？ それとも、一旦戻る？」

【黒ミミ】 「アタシの一存じゃ決めれないんで、返答は保留させてもらっよ」

【男主人】 「了解。それじゃあ、長ミミと猫ミミだけ……」

【猫ミミ】 「あたしは……この家でご主人さまを待ってたい。ダメ？」

【男主人】「いや、それでもいいよ。人が住まない家は朽ちるのが早いつて言われるからね。僕がない間は、屋敷のことは副官女に頼むつもりだから、いざという時は彼女を頼つて」

【猫ミミ】「ご主人さまがいないとツマラナイから、早く帰つてきてね?」

【男主人】「ん、そうだね。すぐに帰つてこれるよう努力してみよう」

【黒ミミ】「さっきから静かだな。長ミミ、どうかした?」

【長ミミ】「……………いえ、何でもありません」

【男主人】「長ミミは、どうする?」

【長ミミ】「私も保留で、少し時間をいただけますか?」

【男主人】「ん、別にいいけど……………早いうちにどうするか決めてね」

【長ミミ】「はい、かしこまりました」

第107話『月が綺麗な晩に、想いが交わっていた』

草原と平穏の国：男主人邸（裏庭）

【男主人】「……………こんな夜更けに何をやってるの？」

【長ミミ】「月を……………」

【男主人】「月？」

【長ミミ】「何だか寝つけなかったなので、月を眺めに出てきただけです」

【男主人】「そうか……………」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「……………ご主人様、もし、私が……………」

【男主人】「ダメだ」

【長ミミ】「……………まだ、何も言っていませんけど？」

【男主人】「うん……………長ミミも一緒に戦場に連れて行って欲しい、と言っなら拒否するよ」

【長ミミ】「どうしてですか？」

【男主人】「……………戦場には魔術兵として付いていく、って言うんだろっ？」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「君との約束を1つ思い出したからね。君が誰かを殺すなら、僕が代わりに殺すって、約束」

【長ミミ】「やっと、気付いてくれたのですか？」

【男主人】「まあ、その返事を聞くまで確信できてなかったけどね。うん、だって、見た目も名前も全然違うじゃない？」

【長ミミ】「ご主人様と分かれてから7年ですよ？ 7年もあれば、乳飲み子が親の手伝いだってできる年になります。」

私の氏族では15歳で社会的に成人として認められます。そして、成人として認められると、子供の頃の名前を捨て、新しい名前をもらうのです。

この名前は……短い間、本当に僅かな間だけ、私の姉だった人のモノをもらいました」

【男主人】「姉……だった？」

【長ミミ】「生れた時から体が丈夫ではなかったそうです。20年エルフの寿命を考えれば、ありえないほどに短い生涯でした」

【男主人】「そう……あの時のあの人が……ただ、同名なだけかと思っていたよ」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「ご主人様……いえ、魔術師さん」

【男主人】「なに？」

【長ミミ】「魔術師さんは、また……私を置いていくんですか？」

第108話『柔らかな思いを、受け止めていた』

草原と平穏の国：男主人邸（裏庭）

【長ミミ】「……………」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「以前、魔術師さんは、私に『男としての僕は嫌いなのかな？』と質問しましたよね」

【男主人】「あー……そんなこと、言っただけ？」

【長ミミ】「ええ、しっかりと覚えています。その答えを聞いてくれますか？」

【男主人】「じゃあ、聞こうかな」

【長ミミ】「では……正直な所、『どっちでもない』というのが答えです」

【男主人】「……………どういう意味？」

【長ミミ】「私のことを助けてくれた魔術師さんを嫌いになるはずはありません。魔術師さんのことは大好きです。でも、これが恋愛感情かと言われると自信がありません……………」

7年も放っておかれて、少しは嫌いになりそうでしたけど……………再会した時に、自分の正体をすぐに明かせなかったのは、明かしたら、また魔術師さんが何処かへ行ってしまうような気がしたからです。

まあ、途中からぜんぜん気づかない魔術師さんに対して、意地を張っていたのは認めます」

【男主人】「分かったような分からないような」

【長ミミ】「私の気持ちは、“依存”が一番近いと思います。きっと、あの地下室で助けられた時に、私は生まれ変わったんです。

そして、鳥のヒナが最初に見た動物を親だと思い込むように……………」

私は魔術師さんのことを好きになりました」

【男主人】「依存……か。僕とは逆なのかもしれないね。僕は自身を“拒絶”したかった。」

それがゆえに副官女の好意、妖艶女の希望も、すぐには受け入れることはできなかった」

【長ミミ】「……魔術師さんは、私のことを抱けますか？」

【男主人】「ぶっ！？ いきなり何を！」

【長ミミ】「答えて下さい。お願いします」

【男主人】「昨日までだったら、大丈夫だったかもしれない。けど、今はもう無理だ」

【長ミミ】「どうして……ですか？」

【男主人】「長ミミが僕に好意を抱いているから、いや……好意を抱いてくれているだろうと感じたから、かな？」

【長ミミ】「ありがとうございます……ございます。その答えが、とても嬉しいです」

第109話『あの夜のやり直しを、求められていた』

草原と平穏の国：男主人邸（裏庭）

【男主人】「ありがとう、って言われるのも変な感じだね」

【長ミミ】「そうですか？」

【男主人】「ただの自信過剰なセリフだね。好かれているって、自分で言ってるよ？」

【長ミミ】「問題はありません。事実ですから」

【男主人】「あうっ……」

【長ミミ】「ご主人様……あまりヘタレ過ぎると、こちらから襲いますよ？」

【男主人】「えーと、冗談……」

【長ミミ】「だと思いですか？」

【男主人】「……じゃないの？」

【長ミミ】「どうして、冗談だと思えるのですか？ ご主人様は性格的に相手からの本気の押しに弱いでしょう？ 相手の弱点を突くのは、戦略の基本です」

【男主人】「さっき、恋愛感情かどうか分からないって！」

【長ミミ】「ええ、ですので……いっそもっと深い仲になれば、この気持ちに恋愛感情かどうか、分かるのではないかな、と？」

【男主人】「あは、ははは……」

【長ミミ】「うふ、ふふふ……」

【男主人】「本気？」

【長ミミ】「ほとんど冗談です」

【男主人】「良かった！ あれ、なんで、こんなにホッしてるんだろ、不思議だな……」

【長ミミ】「その代わりと言ってなんですが、お願いがあります」

【男主人】「何、かな？」

【長ミミ】「キスのやり直しを求めます」

【男主人】「魚^{きす}喜？」

【長ミミ】「無理やり聞き間違えた振りをしないでください……だつて、ズルイじゃないですか」

【男主人】「何がズルイの！？」

【長ミミ】「キスしたの……私はボンヤリと記憶が曖昧なのに、ご主人様はしっかり覚えていらっしゃるんですよ？」

【男主人】「あ、あれは、その！！」

【長ミミ】「……ズルイです」

【男主人】「うっ……」

【長ミミ】「……やり直しを求めます」

第110話『二人の影が、一つになっていた』

草原と平穏の国：男主人邸（裏庭）

【男主人】「……………」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「……………そういえば、長ミミって、僕より年下なんだね」

【長ミミ】「はい、今年で16歳になりましたけど？」

【男主人】「いや……………ずっと年上だと思っていたから、幼ミミちゃんだった頃に比べて……………」

【長ミミ】「比べて？」

【男主人】「あー、あの頃は可愛いつて感じだったけど、大人っぽく綺麗になったね」

【長ミミ】「ありがとうございます。ご主人様は、少しかっこ良くなりましたよ？」

【男主人】「それは、気のせいじゃない？　僕は全然変わってないよ」

【長ミミ】「そうですか？」

【男主人】「さてと、それじゃあ……………」

【長ミミ】「キス、しましょうか？」

【男主人】「……………なんか、おかしいよね!？」

【長ミミ】「何がおかしいのでしょうか？」

【男主人】「どうして今の流れで、僕が長ミミにキスするのが確定になってるのかな？」

【長ミミ】「それは、ご主人様がヘタレだからです」

【男主人】「ぐふっ……………」

【長ミミ】「ちなみに、頬や額で誤魔化すのもナシでお願いします」

【男主人】「ううっ……………」

【長ミミ】「月の輝きが美しい晩です。キスをするには、十分なロマンティックさだと思いませんか？」

【男主人】「そういうのがロマンティックなのは、認めるけど……」

【長ミミ】「ご主人様、男は度胸です」

【男主人】「なんか色々な物を失いそうだけど……」

【長ミミ】「失って大切さに気づくモノもあるはずですよ、きっと」

【男主人】「あああー！！ もう、何なんだ。この状況は！？」

【長ミミ】「あの、ご主人様？」

【男主人】「長ミミ……追い詰めたのは君だからね？」

【長ミミ】「えっと？」

【男主人】「お願いは、キスのやり直し……だったよな？」

【長ミミ】「はい、そうですけ……んんっ！！」

【男主人】「……くちゅ……」

【長ミミ】「……んん……」

【男主人】「ちゅ……」

【長ミミ】「んぐ……」

【男主人】「……はあっ！」

【長ミミ】「……ふあっ！（よろり）」

【男主人】「……つと、こんな感じだったかな？（軽く抱寄せ）」

【長ミミ】「はあー……すうーはあー……」

【男主人】「大丈夫？」

【長ミミ】「申し訳ありません、少しふらつきます……」

【男主人】「軽い酸欠かな。キスの間は鼻で軽く呼吸をするんだよ」

【長ミミ】「……ご主人様」

【男主人】「なに？」

【長ミミ】「今のは……その……」

【男主人】「まだ長ミミには、大人のキスは早かったみたいだね？」

【長ミミ】「ううつっ……そういうご主人様は、大人気ないです」

【男主人】「まだ物足りない？」

【長ミミ】「いえ、今晚の所は、これで我慢いたします」

【男主人】「そう？ それじゃあ、中に戻ろうか？」

【長ミミ】「もう少しの間、ここにいますので、ご主人様は先に戻ってください」

【男主人】「ん、それじゃあ、おやすみ」

【長ミミ】「おやすみなさいませ」

第111話『秘密の会談が、始まっていた』

草原と平穏の国：男主人邸（地下室）

【鉄皇女】『やっとお会いできましたわ。“救森の魔術師”殿』

【男主人】「お初にお目にかかります、鉄皇女様。その通り名は私には過ぎた名です。男主人とお呼びください」

【鉄皇女】『では、男主人殿、と』

【男主人】「失礼ながら、もう1つ宜しいでしょうか？」

【鉄皇女】『何かしら？』

【男主人】「この魔術が偽装ではないことの確認に、そちらにいる部下男に二つ質問をさせていただきます」

【鉄皇女】『ふふふ、どうぞ？ 部下男さん、こちらへ』

【部下男】『男主人様、なんでしょう？』

【男主人】「確認のためだ、質問に答えてくれ……お前の初恋の相手は誰だった？」

【部下男】『ぶはっ、こんな時になんて質問をしてくれるんですか！！』

【男主人】「いいから答えろ、答えられないなら、この通信は偽装だと見なすぞ」

【部下男】『貴方と言う人は……！！ 近所に住んでいたお下げ髪が可愛い農夫娘ちゃんです……！！』

【男主人】「ああ、やっぱりか」

【部下男】『！？』

【男主人】「うん、もう分かったから鉄皇女様と代わってくれ」

【部下男】『くっ……くっ……』

【鉄皇女】『……………くすくす、面白い主従ね』

【男主人】「楽しんでいただけたようでしたら、何よりです」

【鉄皇女】『部下男殿には、何人くらい初恋の方がいるの？ “安全、注意、危険”として、3人くらいいれば十分かしら？』

【男主人】「……いや、これは失礼を」

【鉄皇女】『いいえ、むしろ、男主人殿が慎重なようで嬉しいわ。あ、そうそうワタクシは別にアナタからの忠誠を誓われている訳でもないし、そんなに畏まらなくても結構よ』

【男主人】「ではお言葉に甘えて……しかし、よく分かりましたね」

【鉄皇女】『だって、ワタクシも同じような手段を使っていますもの。似たもの同士なのかしら？』

【男主人】「似たもの同士、ですか？ 僕としては正反対だと思いますが」

【鉄皇女】『性別も立ち位置も考え方も逆かもしれないわね。でも、ワタクシは、何かアナタと通じるものを感じただけよ。もちろん、さっきの合言葉とかね？』

【男主人】「では、次回からはもっとバレにくい合言葉を用意しておきます」

【鉄皇女】『ええ、そうした方が良いわね、きつと』

第112話『鉄皇女が、同盟を提案していた』

草原と平穏の国：男主人邸（地下室）

【鉄皇女】『では、挨拶はこのくらいにして、本題に入りましょう』

【男主人】「そうですね」

【鉄皇女】『まず、ワタクシの目的は男主人殿との同盟を組むこと』

【男主人】「同盟？」

【鉄皇女】『仲良くしましょう、と言うことよ』

【男主人】「今、私たちは国同士が戦争をしているのはご存知ですか？」

【鉄皇女】『もちろんよ。でも、それは別にワタクシと男主人殿が仲良くしてはいけない理由にはならないわ』

【男主人】「さて、私はその言葉どおりに受け取っていいものやら」

【鉄皇女】『ワタクシも男主人殿も今回の戦争を、早く終わらせた……という意味では同志となりえると考えているの。いかがかしら？』

【男主人】「……もう少し詳しくお話を聞きましょう」

【鉄皇女】『今回の戦争も、7年前の戦争も、どちらもある人物の意思によって引き起こされている、と言ったら信じられる？』

【男主人】「その質問は無意味でしょう。少なくともこの状況では、私がその話を信じられなくとも、貴女が信じていることを私も信じざるをえないですからね。そして、この話の流れからすれば、その黒幕は……」

【鉄皇女】『賢い方は好きよ。ええ、その考えは多分間違えていないでしょう。現皇帝……ワタクシの父親が、すべての黒幕よ』

【男主人】「……………」

【鉄皇女】『ふふっ…………話の途中で気づいたって顔ね』

【主人公】「……貴重な情報、でしょうね。それを私に伝えて、貴女は何を得ようとしている？」

【鉄皇女】『この国よ。……お父様でも、兄たちでもなく、この国をワタクシの物にするのよ。そのための力と準備は蓄え終わっているわ』

【主人公】「クーデターでも起こす気ですか？」

【鉄皇女】『その表現はあまり好きじゃないのよね。クーデターだと、少し野粗な感じがしない？ ワタクシが行なうのは、新しい世代による古い世代の淘汰よ』

【主人公】「……………」

【鉄皇女】『ここで、主人公殿と同盟を組む利が生まれるわ。ワタクシが事を起こした場合、出征した鉦山軍の一部に強い混乱が生じるはず、そこを上手く対処して欲しいの』

【主人公】「話が少し一方的過ぎませんか？」

【鉄皇女】『では、そちらの話も聞かせてもらおうかしら？ 考える時間は必要？』

【主人公】「いえ……時間は必要ありません、いくつかだけ、質問を……………」

第113話『男主人は、問い掛けていた』

草原と平穏の国：男主人邸（地下室）

【男主人】「国を手にすると言ったが、貴女は国を得てどうするのでしょうか？」

【鉄皇女】『さあ？ そんなことは国を得てから考えるわ』

【男主人】「……………」

【鉄皇女】『アナタは、食事をする時に、次の食事のことを考えながら、出された料理を口にするのかしら？ まず、目の前にある、温かなステーキを頼張るのが先でしょう？』

【男主人】「貴女にとっては、内戦も食事も一緒なのですか…………？」

【鉄皇女】『ワタクシにとっては、どちらも同じものよ。ワタクシが生きていくために必要な儀式………… ワタクシにも確にお父様の血が流れているという証左かしらね』

【男主人】「それが、貴女が争いを起こす理由ですか？」

【鉄皇女】『いいえ、争いはなくなることはないわ。ワタクシは、争いを起こすのではなく、争いの渦中に身を投じるだけよ』

【男主人】「そんなことはないでしょう？ 貴女が原因で起こった争いだってあるはずだ」

【鉄皇女】『否定はしないわ。けどね、この国は………… 常に争いを欲しているの。その象徴がお父様の現皇帝ね。もともと、人が2人いれば争いは起こるのよ。ワタクシが理由で起こった争いがあるというならば、男主人殿が原因で起こった争いだってあるはず』

【男主人】「……………」

【鉄皇女】『ああ、言っておくけれど、別にワタクシの意見に従わせるつもりはないわ。ワタクシは男主人殿はと、あくまで対等の関係でいたい。同盟は、お互いの意思を尊重し、お互いが最も納得

できる形で長く続ける。本来は、そういうものでしょう?」

【男主人】「対等……それは、望むべき理想ですね」

【鉄皇女】「理想は、語るだけでなく、動かなくては実現しないものだけだね」

【男主人】「あともう1つ」

【鉄皇女】「何かしら?」

【男主人】「一国の皇女が、ともすれば、次期皇帝の貴女が、なぜ同盟の相手に私を選んだんです?」

【鉄皇女】「貴女は、自分の力では、役者不足だとも思っているのかしら?」

【男主人】「ありていに言えば、疑わしいを通り越して、不思議ですね。普通ならば、王族は無理でも、將軍や公爵といった人を狙うのでは?」

【鉄皇女】「少ない消費で、最大限の効果を……あらゆる交渉ことの基本ね。今、男主人殿と手を組むことが、後々に生きてくる、とワタクシの勘が告げているのよ」

【男主人】「勘ですか……」

【鉄皇女】「ええ、ワタクシは、自分の勘を信じて3度、命の危機を免れたわ」

第114話『そして、同盟は締結していた』

草原と平穩の国：男主人邸（地下室）

【男主人】「貴女の理想とする国に、平穩はありますか？」

【鉄皇女】「……………」

【男主人】「若い少女が、悲しみに涙を流すことがない国となりますか？」

【鉄皇女】「……………」

【男主人】「10人いれば、10人が求める幸せがあるでしょう。10人全員が幸せを得ることは難しいかもしれませんが、人に不幸を与えることは簡単です。」

もう一度訊きます。貴女が行く道に、平穩はありますか？」

【鉄皇女】「あるわ」

【男主人】「……………」

【鉄皇女】「ワタクシが目指す理想の末に、平穩はあるわ」

【男主人】「それは、貴女1人の平穩ではなく？」

【鉄皇女】「男主人殿に聞くけど…………「草原と平穩の国」は、その名の通り平穩なのかしら？」

【男主人】「…………いいえ、平穩であれと願いを込められた私たちの国も、本当の意味で平穩だった時代はないでしょう」

【鉄皇女】「それは、どうしてかしら？」

【男主人】「人には欲があるから…………幸せを求めてしまうから」

【鉄皇女】「さっきも言ったけれど、人から争いは無くすることはできないわ。ただし、その争いを抑えることはできるはずよ。」

些細な争いを起こして、大きな争いを避ける。私は、恒久的な平和に興味はなく、争いの中にこそ平穩があると考えてる」

【男主人】「…………それが、貴女の考えであり、貴女が進む道、なの

ですね？」

【鉄皇女】 「ええ、その通りよ」

【男主人】 「……………」

【鉄皇女】 「今のが最後の質問で良かったのかしら？」

【男主人】 「はい」

【鉄皇女】 「そう、答えを聞かせていただけ？」

【男主人】 「同盟を組みましょう」

【鉄皇女】 「その答えを待っていたわ。それじゃあ、同盟の詳細について少し話をしましょうか」

第115話『僕の手で守りたいと、願っていた』

草原と平穏の国：王宮（執務室）

【男主人】「それじゃあ、留守を頼んだよ」

【副官女】「……はい、任せて下さい」

【男主人】「あー、言っておくけど、一緒に連れて行かないのは副官女が決して弱いと思っているわけじゃなくてね？」

【副官女】「王都にいて、ここから物資や情報の支援も重要な役割なんですよ？ それだけ、私のことを信頼してもらっている……分かつてはいるんです」

【男主人】「ん〜と？」

【副官女】「男主人様は、私が弱くないと言ってくれましたけど……すみません、私はそこまで強くなかったみたいです」

【男主人】「……………」

【副官女】「第十一師団の派兵……いえ、男主人様が戦争に向かうと言われて、初めて気付いたんです」

【男主人】「……何に？」

【副官女】「戦争で人が、いえ男主人様が死ぬかもしれないって言う事実、でしょうか？ 今まで、戦争の話を聞いても、本や劇の物語のように感じてました……」。

けど、男主人様が戦争に行くときいて、いった先の戦場で死ぬかもしれない……そのことに気付いたら、急に怖くなってきて……」

【男主人】「うちのメイドさんといい、副官女といい……僕は、そう簡単には死なないよ」

【副官女】「けど、万が一ということだってあります！」

【男主人】「万が一というなら、事故や病気で突然死んでしまう可能性だってあるじゃない」

【副官女】「それは！……そう、ですけど……」

【男主人】「僕だって、好きで戦争に行くわけじゃない……敵と言っても、同じ人間だよ。倒さないで、殺さずにすむなら、そっちの方がずっといい。」

けど、僕の手は、そんなに長くは無いんだ。僕が目だって、前を見るだけで精一杯。家族や友達とか僕が知っている人、守りたい人たちがいるから、僕は戦いに行ける。

もちろん、副官女や東公爵も、守りたい人のうちだからね」

【副官女】「男主人様……その、嬉しいです」

【男主人】「ごほんごほん……もし、何かあったら、王子様が東公爵を頼るんだよ？ いいね？」

【副官女】「はい」

【男主人】「それじゃあ、いってきます」

【副官女】「いってらっしゃいます。どうぞ御武運を」

第116話『特務隊に、配属されていた』

草原と平穩の国：王宮（会議室）

【堅騎士】「まずは、此方から挨拶しよう。某^{それがし}が、第九師団の師団長を務めている堅騎士だ」

【男主人】「僕が第十一師団の師団長の男主人です。と、言っても、今回は僕一人だけの参戦ですので、中心となる指揮系統は堅騎士殿を中心で、と考えてましたがどうですか？」

【堅騎士】「ふむ、ならば丁度良い。此方から提案しようと思っただけのことがある。提案の前に某の後ろにいる2人を紹介しよう。うちの団の騎士娘と射手男だ」

【騎士娘】「騎士娘です」

【射手男】「射手男です。噂の男主人殿にお会いできて嬉しいっす」

【男主人】（噂の……？）

【堅騎士】「この2人には、護衛を兼ねて、男主人殿の補佐を担当させる。それで指揮系統としての提案だが、男主人殿を隊長とした特務隊を結成させようと思うがいかがか？」

【男主人】「特務隊ですか？ 部隊編成規則に、そんな隊はありましたか？」

【堅騎士】「いや、部隊編成規則に示し合わせるならば、遊撃隊に近い扱いになる。遊撃隊が持つ独自裁量の権限を無制限にしたものだと考えてもらえば結構。

男主人殿を隊長とし、この2人を含めた3人を中心とした部隊となる。男主人殿の話を聞くに、そうした方が有効であるということになった」

【男主人】「なるほど……ご配慮ありがとうございます」

【堅騎士】「いやいや、某に礼を言われるのは違う。この件につい

ては、東公爵様の案だ」

【男主人】「そう……でしたか。東公爵様にはお世話になりっぱなしです」

【堅騎士】「特務隊について、細かい部分は2人が知っていますから、追々確認しておいて欲しい。何かあれば、進軍しながら話を煮詰めればいいと思う」

【男主人】「了解しました。堅騎士殿も、お2人もよろしく願います」

【騎士娘】「はっ（ぺこり）」

【射手男】「頼りしてくださいっす（ぺこっ）」

【堅騎士】「では、半刻後に出立です。行きましょう……」

第116話『特務隊に、配属されていた』（後書き）

新しいキャラの紹介です。

堅騎士

【種族】：人間族 【年齢】：34歳 【性別】：男性

【一人称】：某

【設定】：

- ・第九師団の師団長。
- ・東公爵の有能な部下の1人であり、堅実な戦術を好む。

騎士娘

【種族】：人間族 【年齢】：22歳 【性別】：女性

【一人称】：私

【設定】：

- ・今回の戦争における男主人の部下兼護衛その1。
- ・女性ながら、第九師団では上位の腕利き剣士。

射手男

【種族】：人間族 【年齢】：21歳 【性別】：男性

【一人称】：おれ

【設定】：

- ・今回の戦争における男主人の部下兼護衛その2。
- ・明るく人懐っこい青年。初対面の時から、何故か男主人を尊敬している。

第117話『噂話のせいで、憧れられていた』

草原と平穩の国：馬車の中

【射手男】「失礼するっす。おれも同席させてもらっす（ピシッ）」

【男主人】「えっと、射手男だったよね？」

【射手男】「はいっ！ その通りっす！」

【男主人】「別にそんな緊張らなくてもいいよ。もちろん、戦場で気を抜くのは危険だし、公の場では適度に硬くなった方がいいと思うけどね」

【射手男】「いえ、おれらにとって男主人様は、尊敬の対象っす！」

【男主人】「尊敬……？」

【射手男】「今回はご一緒できて光栄っす。ぜひ道中に色々ご教授お願いしたいっす！」

【男主人】「そっえば、さっきも噂のとか言ってたけど……何の話かな？」

【射手男】「それはもう男主人様は、男兵士の憧れっすから！」

【男主人】「憧れ……？」

【射手男】「もちろん、妬むヤツも少なくないっすけど、おれみたいに純粹に憧れてるやつも結構いるっす」

【男主人】「ちよつとごめん、さっきから聞きなれない単語がいっぱいあって……噂って何のこと？」

【射手男】「うちのお嬢様をはじめとし、数多くの美女と浮き名を流している男主人様は、男兵士の憧れで、希望の星っす！」

【男主人】「………はい？ えっと、まず、うちのお嬢様ってのは、何処の誰？」

【射手男】「そりゃあもちろん、東公爵様の御息女である副官女様のことっす！ 副官女様の初めての夜会で惚れさせ、今では副官女

様は男主人様に公私共に仕えているという話つすよね」

【男主人】「続きを聞くのが怖くなってきたような……他は？」

【射手男】「今では王都の色町に、この店ありと呼ばれる名店の有名娼館が経営難で苦しんでいる時に、連日連夜貸し切り、その窮地をそつと助けた。」

それに対して、見返りは求めるどころか娼婦達に一切手すら触れない。感激した娼婦達全員が、男主人様に口付けを懇願したという……男主人様は、もう生ける伝説つす！ 漢の中の漢つすよ！」

【男主人】（うおおお！？ あの時の話がそんな曲解を！？）

【射手男】「それに今回の参戦もエルフ族の姫様が流した涙を見て奮い立ったという噂つす！」

【男主人】「あ、あのな。それは所詮噂で……」

【射手男】「もちろん、こんなのは“鉦山の小石”ってことつすよね！ 分かってるつす！」

【男主人】「分かってないから！！ うわ、もうどこからツッコんだらいいんだ！？」

第118話『呼び出したら、絶妙に誤解されていた』

草原と平穏の国：草原軍野営地

【騎士娘】「失礼します。お待たせいたしました、騎士娘です」

【男主人】「おや、早かったね」

【騎士娘】「伝令を聞き、すぐさま身支度を整えて馳せ参じました」

【男主人】「むう、それはゴメン。もう少しかかるかと思ってたんで、報告書の作成が終わってないんで……少し休んでてくれるかな？」

【騎士娘】「畏まりました。では、先に準備をしておきます」

【男主人】「お茶が何かがあればいいんだけど、必要物資を優先してるから、嗜好品は届いてないんだよねえ。手持ちで持つてくれば良かったからなあ………ん？ 準備？」

SE（衣擦れの音）：シュルリ……

【男主人】「つて、なんで腰帯を解いてるの………かな？」

【騎士娘】「え？ あ、申し訳ありません！ 着衣した状態で待っていた方が良かったのでしょうか？」

【男主人】「うん、服は着たままでいてくれると嬉しいけど」

【騎士娘】「やはり、母上に言われた通り、最初から全て殿方に任せて置けば良いのですね？」

【男主人】「何か意思の疎通が上手くできていない気がするなっ！」

【騎士娘】「む、むむう………何分、経験が皆無に近く不慣れなため、ご容赦下さい」

【男主人】「いやいや、だからね……！」

【騎士娘】「えっと………では、どうすれば宜しいのでしょうか？」

【男主人】「まずは、状況を見直してみよう。僕は君に用があつて、テントまで来てもらった」

【騎士娘】「はい、伝令でそう言われましたので」

【男主人】「僕の用というのは、特務隊についての方針を相談したかつたんだけどね？」

【騎士娘】「……っ！？！？ えー、あー……理解致しました（汗）」

【男主人】「ふう、分かつてもらえたようで良かった……」

【射手男】「男主人様、お待たせしま………失礼しましたっす！
」

【男主人】「……待てー！ 戻つて来いー！！」

第119話『名誉について、問い掛けていた』

草原と平穏の国：草原軍野営地

【騎士娘】「……と、以上が特務隊の概要となります」

【男主人】「つまり、今回の戦争に対して、僕の思う通りに部隊を動かして良くて、いざと言う時は中隊規模の人数を動員でき、各種手続きは事後承諾で構わない、ってことかな？」

【射手男】「大雑把にはその通りっす。さすが男主人様、要点ばかりっすね！」

【男主人】「ずいぶんと思い切った権限を与えてくれたなあ……」

【騎士娘】「それだけ期待されているという事です。名誉なことではありませんか？」

【射手男】「そうっすよ！ おれも男主人様の補佐に抜擢されたただけで、とても名誉なことっす！」

【男主人】「名誉ねえ……」

【騎士娘】「何か思う所が？」

【男主人】「ん、いや……2人に訊くけど、“名誉ある敗北”と“名誉なき勝利”なら、どっちを選ぶ？」

【騎士娘】「もちろん、“名誉ある敗北”を選びます」

【射手男】「あー、おれは、勝つ方が嬉しいので“名誉なき勝利”っす。『勝てば正軍、負ければ賊軍』っす」

【騎士娘】「なっ！ 騎士たる者、いかなる時も名誉を損ってはいいけません！」

【射手男】「そうは言っても、勝負に勝たなければ、結局は『負け犬の遠吠え』っすよ？」

【騎士娘】「くっ、騎士の名誉と犬のケン力を一緒にするとはっ！」

【射手男】「そこまでは言っていないっす！ それに、おれはどこからも叙勲は受けてないから、騎士でもないっす！！」

【騎士娘】「むむむ…… 男主人様！ どちらが正しい回答なのか！？」

【射手男】「おれの意見の方が正解っすよね！？」

【男主人】「…… まあ、2人とも落ち着いて…… これは別に、どっちが正解というわけじゃないから。あえて言うなら、どっちも正解で不正解ってところかな」

【射手男】「正解で不正解っすか？」

【男主人】「うん、2人とも意見は正しいよ。例えば騎士娘は、名誉と誇りだったら、どっちを優先する？」

【騎士娘】「…… どちらか一方だけでも言えません」

【男主人】「射手男は、命と勝利なら、どっちを優先する？」

【射手男】「死ぬけど勝つのか、負けて生き延びるのなら、むむむう？ 難しいっす……」

【男主人】「まあ、そういうこと、かな？」

第120話『射手男が、信念を語っていた』

草原と平穏の国：馬車の中

【射手男】「ちょっといいですか？」

【男主人】「ん？ 何かな？」

【射手男】「昨日のことですけど……男主人様は、騎士娘もすでに
籠絡済ろうらくすみっすか？」

【男主人】「ぶっ……それはいい！！　そもそも、僕は噂されてる
みたいな凄腕のナンパ師じゃ、決してないから……」

【射手男】「けど、昨日おれが天幕に入った時の雰囲気はかなり桃
色だったっす！」

【男主人】「ドライアドだ」

【射手男】「……………」

【男主人】「……………（汗）」

【射手男】「（ぼむっ）……『気のせい』と『木の精（霊）』を掛
けたんすね！　スゴイっす！」

【男主人】「そうやって説明されると、そこはかとなく惨めな気持
ちになるな……その本気で尊敬しているような目が僕の心を抉えぐる……」

……

【射手男】「褒められて凹むなんて、変な男主人様っす」

【男主人】「なんて言うか、君に言われたくはないけどね！」

【射手男】「それはともかく……騎士娘も籠絡するっすか？」

【男主人】「しないっ！！　人の話をよく聞け！　僕は別に女性を
見れば挨拶のように口説く女好きでも、権力を盾に関係を迫るよう
な好色魔でもないからな！」

【射手男】「それが本当なら、噂と全然違っつす」

【男主人】「なんでそんなに噂通りの僕に夢を見る！！　この間聞

いた限りだと、なんかもう人間としてダメな部分も多かったぞ！」

【射手男】「人には出来ないことをやってしまう人を英雄と呼ぶです。そこに憧れるっす」

【男主人】「……ところで、なんで、そんなに騎士娘のことを気にする？（ニヤニヤ）」

【射手男】「なんていうか、騎士娘とは、おれが入隊してからだから、結構付き合いが長いっす。昔から、剣術バカの訓練バカでバカ代表で、傍^{はた}から見てて危^{あや}なっかしいっす」

【男主人】「バカ代表って……射手男、興味から聞くんだが、それは愛情なのか？」

【射手男】「違うっす。なんていうか、路地裏で近所の子供の面倒を見る、みたいな気持ちっす」

【男主人】「ふ〜ん」

【射手男】「それに、おれには結婚を約束した恋人がいるっす」

【男主人】「はっ？」

【射手男】「色々考えたけど、おれは名誉より勝敗より生きて帰る方が大事っす」

く幕間く 『従姉妹4』

森林と調和の国：氏族長宅

【幼ミミ】 「あれ？ お母さまが2人？」

【長ミミ】 「くすくす……私が初めてこの絵を見た時と同じ感想です
ね」

【幼ミミ】 「長ミミさん、お母さまは双子だったんですか？」

【長ミミ】 「お姉さん」

【幼ミミ】 「あつ、お姉さん……（照）」

【長ミミ】 「可愛いつー！（ぎゅー）」

【幼ミミ】 「うぐうぐ……！？！？（じたばた）」

【長ミミ】 「あつと、ごめんなさい。思わず力いっぱい抱き締めた
くなって」

【幼ミミ】 「ぷはっ！ 苦しかった……」

【長ミミ】 「幼ミミちゃんが可愛いのが悪いんですよ」

【幼ミミ】 「むう……」

【長ミミ】 「それで、えーと……あ、そうそう。幼ミミちゃんは、
私の小さい頃よりもずっと賢いですよ。ただ、母たちは双子じゃな
くて、すごく外見の似た姉妹だったそうです。

私も幼ミミちゃんもお母さん似だから、きっと私たちも良く似た
従姉妹になりますね」

【幼ミミ】 「え……わたしも長ミ、ちがった、お姉さんみたいにな
る？」

【長ミミ】 「ええ、よく食べて、よく運動して、しっかり寝ればす
ぐですよ」

【幼ミミ】 「私がお姉さんみたいになったら、魔術師さんも帰って
きてくれるかな？」

【長ミミミ】「さあ、難しいかもしれないですね」

【幼ミミミ】「……………」

【長ミミミ】「いっそ、幼ミミちゃんが、大きくなったら魔術師殿の所に押し掛けてしまえばいいんです」

【幼ミミミ】「押し掛ける？」

【長ミミミ】「そ、最初にご飯を食べさせてあげるの、できれば洗濯や掃除もできるといいですね」

【幼ミミミ】「料理、洗濯、掃除？」

【長ミミミ】「そうそう、男性は、きちんと家事ができる女性が一緒にだと喜ぶんです」

【幼ミミミ】「じゃあ、料理と洗濯と掃除を覚えたら、魔術師さんは喜んでくれる？」

【長ミミミ】「喜びますよ、きっと」

【幼ミミミ】「じゃあ、わたしに料理と洗濯と掃除を教えてくださいませんか？」

【長ミミミ】「ええ、任せなさい。王妃様付きの女官にだってなれるくらい、何処に出しても恥ずかしくないようにしてあげるから！」

く幕間く 『從姉妹5』

森林と調和の国：氏族長宅

【長ミミ】 「バターは溶けた？ それじゃあ、次は小麦粉を入れて……粉っぽさが無くなるまで混ぜる」

【幼ミミ】 「こんな感じ？」

【長ミミ】 「んゝ、もうちよつと木べらで捏ねるように混ぜて」

【幼ミミ】 「こう、かな？」

【長ミミ】 「そうそう、そんな感じ……じゃあ、ミルクを入れて、気をつけてね？」

【幼ミミ】 「はいっ！！」

【長ミミ】 「そうしたら、小麦粉が固まらないように手早く混ぜる！」

【幼ミミ】 「んっしょ、んっしょ……」

【長ミミ】 「混ぜた？ そうしたら、少しずつ煮詰めてトロリとしたらホワイトソースが完成よ」

【幼ミミ】 「あ、トロリって、なってきたよ」

【長ミミ】 「もうちよつとかな？ はい、それくらいでオツケー」

【幼ミミ】 「シチューっぽい匂いがする」

【長ミミ】 「そうね。家伝のシチューは、このホワイトソースとハーブの隠し味が重要だからね」

【幼ミミ】 「ふむふむ」

【長ミミ】 「じゃあ、さっきから肉と野菜を煮込んでいる鍋に、そのホワイトソースを全部入れちゃて」

【幼ミミ】 「はい」

【長ミミ】 「鍋は熱くなってるから、気をつけてね」

【幼ミミ】 「大丈夫！！」

【長ミミ】「入れ終わった？ そうしたら、鍋をよく混ぜて、ここで隠し味にハーブオイルを垂らします。これは、香りが強いから本当に少しかね。これ後は少し煮込んで完成ね」

【幼ミミ】「できたー！！」

【長ミミ】「お疲れ様……それじゃあ、このまま早めの夕飯にしましょう。幼ミミちゃん、そこにあるお椀をとって」

【幼ミミ】「どうぞ」

【長ミミ】「確か、まだ朝のパンが残ってたから、それと一緒に食べましょう」

【幼ミミ】「さんせい！！」

【長ミミ】「食べ終わったら、さっきのハーブオイルの作り方を教えてあげるわ」

【幼ミミ】「うん」

【長ミミ】「それでは、いただきます（もくもく）」

【幼ミミ】「いただきます！（もぐもぐ）」

く幕間く 『從姉妹6』

森林と調和の国：氏族長宅

【長ミミミ】 「1年かあ……」

【幼ミミミ】 「ん？ お姉さん、何かあった？」

【長ミミミ】 「あのね、幼ミミミちゃんが、うちに来てもう1年になるんだな、って」

【幼ミミミ】 「そっかー、まだ1年なんだ……」

【長ミミミ】 「くすっ……」

【幼ミミミ】 「どうしたの？」

【長ミミミ】 「いやー、年はとりたくないねー」

【幼ミミミ】 「???」

【長ミミミ】 「私は『もう』だったのに、幼ミミミちゃんは『まだ』だったでしょ？ 私は1年があつという間だったけど、幼ミミミちゃんは、とっても充実した1年だったんだろうな、ってね？」

【幼ミミミ】 「……んた……だよ」

【長ミミミ】 「ん？ 何々？ 今、小さく何か言った？」

【幼ミミミ】 「……魔術師さんやお姉さんたちが会えたから、とっても大事な1年だったんだよ？」

【長ミミミ】 「幼ミミミちゃん……（ぎゅー）」

【幼ミミミ】 「わわわっー!？」

【長ミミミ】 「なんて可愛いんでしょう！ 私の自慢の妹よっ！（ぎゅー）」

【幼ミミミ】 「く、くるしいー!!」

【長ミミミ】 「でも、そっかー、私のライバルは魔術師殿なのね」

【幼ミミミ】 「あうっ……別に約束破り男のことなんて、好きじゃないもん。お姉さんの方が好きだよ!」

【長ミミミ】「くすくす……」

【幼ミミミ】「ほ、ほんとだよ！」

【長ミミミ】「はいはい、光栄ですなー」

【幼ミミミ】「信じてないー!!」

【長ミミミ】「ふふふ、そんな怒った顔も可愛い……」

【幼ミミミ】「もうお姉さんなんて、知らないっ（ぷいっ）」

【長ミミミ】「あらあら、それは悲しいで………あ、れ……」

SE（人が倒れる音）…ドサッ……

く幕間く 『從姉妹7』

森林と調和の国：氏族長宅

【幼ミミ】「……………」

【長ミミ】「……………」

【幼ミミ】「……………」

【長ミミ】「んん……………」

【幼ミミ】「っ！」

【長ミミ】「……………幼ミミ、ちゃん？（ぼんやり）」

【幼ミミ】「お姉さん……………？（びくびく）」

【長ミミ】「……………あ、そっか、私、また倒れちゃったのか」

【幼ミミ】「び、びつくりしたんだよ！」

【長ミミ】「ごめん、怖がらせちゃった、ね？」

【幼ミミ】「ううん、お姉さん、その……………大丈夫？」

【長ミミ】「大丈夫だよー、ほら、元気元気」

【幼ミミ】「……………」

【長ミミ】「幼ミミちゃんこそ、ちゃんとご飯食べた？ 私は幼ミミちゃんのふつくらほっぺが好きなんだから」

【幼ミミ】「ちゃ、ちゃんとたくさん食べたよ！」

【長ミミ】「……………ごめんね」

【幼ミミ】「なに……………が？」

【長ミミ】「ずっと一緒に居てあげなくて……………」

【幼ミミ】「……………イヤ、イヤだよ！ なんで、どうして……………」

【長ミミ】「私だって……………イヤだよ。」

私は幼ミミちゃんのお姉ちゃんになれてすごく嬉しかった。ずっと……………幼ミミちゃんのお姉ちゃんでいたかったよ」

【幼ミミ】「ならー！」

【長ミミ】「幼ミミちゃん、私がいなくなつて……泣きたいなら泣けばいい、笑えないなら笑わなくてもいい……だけど、誰かを思い続けることは忘れないで？」

人を思うことができる人は、とっても幸せなことだと思うから……私はお姉ちゃんとして、幼ミミちゃんが幸せになつて欲しいんだよ？」

【幼ミミ】「だったら、だったらあ……（えぐっ）」

【長ミミ】「ごめん、ごめんね……」

【幼ミミ】「あやまらないで……わたし、忘れないから、お姉さんのことも、ずっと思い続けるから！」

【長ミミ】「幼ミミちゃん……ありがとう、思い残すことはないつばいあるけど……幼ミミちゃんやお父さんやお母さん、黒ミミさんが、私を覚えててくれるなら、もう、いいかな……これ以上、わがまま言つたら未練が残つちゃうもんね。」

たくさん喋つたから、ちよつと疲れちゃつたな。少し眠るね。おやすみ、幼ミミちゃん……」

第121話『昔の悲しみを、思い出していた』

草原と平穏の国：男主人邸

【猫ミミ】「……さん……ミミ……」

【長ミミ】「……………」

【猫ミミ】「……長ミミさん？」

【長ミミ】「あれ？ どうしたんですか、猫ミミちゃん？」

【猫ミミ】「『どうしたんですか』は、あたしの質問だよっ！ 長ミミさん、呼び掛けても気づかないし……何だかすごく辛そうな顔してたよ？」

【長ミミ】「それはごめんなさい。少し昔の……悲しいことを思い出していました」

【猫ミミ】「悲しいこと？」

【長ミミ】「大事な人と別れることになった時のことです」

【猫ミミ】「……あのね、長ミミさん。黒ミミさんと話し合って決めたんだ」

【長ミミ】「黒ミミさん？」

【猫ミミ】「うん……長ミミさん、あたし、頼りになってる？」

【長ミミ】「もちろん、とっても頼りにしていますよ。今なら、きっと何処のお屋敷だって働くことができます」

【猫ミミ】「じゃあさ、あたしがこのお屋敷を守ってるから……長ミミさん、行つてきてよ」

【長ミミ】「……どこへ？」

【猫ミミ】「もちろん、ご主人さまのところ！」

【長ミミ】「私が行ってもご主人様の邪魔になるだけです……」

【猫ミミ】「そんなこと関係ないよ！ だって、長ミミさん、ご主人さまのこと、心配なんでしょ？ 一緒にいたいんですよ？ 夜中

にキスしてたでしょ？」

【長ミミ】「み、見てたんですか？」

【猫ミミ】「うん、あたし、目がいいんだよ！（にぱっ）」

【長ミミ】「……………でも」

【猫ミミ】「あたしは『おかえりなさい』を言うために、このお屋敷で2人を待つてるから」

【長ミミ】「それなら、私も……………」

【猫ミミ】「長ミミさん、あたしは頼りにしてくれている、って言ったよね？　ここで待っているのは、あたしだけで大丈夫だよ？」

長ミミさん、お願い……………あたしの分も代わりに、ご主人さまと一緒にいてあげて！」

【長ミミ】「猫ミミちゃん……………」

【猫ミミ】「あたしだって、いつまでも守られるだけの子供じゃないんだから」

第122話『お茶会の約束を、誓っていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【黒ミミ】「話は終わったようだな」

【長ミミ】「え？ 黒ミミさん……？」

【黒ミミ】「キョトンとしてないでさっさと出るぞ。向こうは万人の兵士を率いての行軍だ。今から馬で追いかければ、十分に追いつける。もしくは、先回りをして待ち構えてもいいな」

【長ミミ】「えっと、一体何の話を……？」

【黒ミミ】「何の話をって、今の猫ミミちゃんの話をちゃんと聞いてたのかい？」

【猫ミミ】「聞いてたのかい？」

【長ミミ】「え、だって、その……」

【黒ミミ】「男主人を追いかけるんだろ？ アタシもちょうど氏族から召還の指令を受けてね。まあ、向かう先は一緒ってわけだ」

【長ミミ】「……………」

【黒ミミ】「ほら、これが長ミミの分だよ」

【長ミミ】「この背負いバックは？」

【黒ミミ】「旅行中に必要そうな衣類や道具の一式と数日分の保存食を詰めといた」

【猫ミミ】「黒ミミさん、これはどうするの？」

【黒ミミ】「それでもって、猫ミミちゃんが持ってきてくれたのが、防寒と防熱に特化させた外套だ。

道中で野宿をする時に身を守るのに便利だからな」

【長ミミ】「ありがとうございます（ペコリ）」

【黒ミミ】「アタシには、礼を言われるほどのことじゃないよ」

【長ミミ】「猫ミミちゃんもありがとう（ニコリ）」

【猫ミミ】「礼を言われるほどのことじゃないからね！」

【長ミミ】「……………では、黒ミミさん、ご主人様の所へ参りましよう」

【黒ミミ】「ん、行こうか」

【猫ミミ】「いつてらっしゃい！ 帰ってきたら、また皆でお茶会をしようね！」

【長ミミ】「ええ、副官女様や妖艶女様、白髪女さんもお呼びしましょうね」

【猫ミミ】「ゼツタイだよ！」

【長ミミ】「絶対です」

第123話『騎士娘は、許しを求めている』

草原と平穏の国：草原軍野営地

【騎士娘】「騎士娘です。男主人様はいらっしゃるでしょうか？」

【男主人】「いるよー。何か用があるなら入っておいで」

【騎士娘】「突然失礼します。……ん？」

【男主人】「ああ、これ？ 今日の補給でワインが入ったんで、寝る前にちよつとね。それで何かあったの？」

【騎士娘】「あつ、その、申し訳ありません。軍務ではなく、私用なんですが……」

【男主人】「私用？ まあ、構わないけど……その辺りに腰掛けて」

【騎士娘】「ええと……先日のことを謝罪させて頂きたく、……誠にご無礼致しました！（深々）」

【男主人】「んーと？ 何のことについて、僕は謝罪されているんだ？」

【騎士娘】「それはその勝手に服を脱ごうとした件について……です」

【男主人】「あ……いや、困ったといえば困ったけど、別に害がなか……射手男に弁解するのが面倒だったけど……それくらいだし」

【騎士娘】「いえ！ 私は噂の話を理由に、男主人様の名誉を傷つける行為をしたのです。男主人様が寛容だとしても、自己満足かもしれないですが、私は自分が許せないのです」

【男主人】「と、言われても……そもそも、僕が本当に噂通りに好色な男だったら、どうするつもりだったの？」

【騎士娘】「勿論、身を委ねた上で、しかる後にそれなりの対応をして頂ければ、と考えていました」

【男主人】「……………」

【騎士娘】「何分幼い頃から剣術一筋で……色恋沙汰には見向きもせず、気づいたら、この歳になっていました」

【男主人】「親から縁談の話とかは来なかったの？」

【騎士娘】「私の家では、幼い頃から『何事も自分で決断すること』が家訓とされているのです。その中には、自身で結婚相手を探すことも含まれています。勿論、親に相談すれば、それなりの人を紹介されたでしょう。」

自分で言うのもなんですが、私には剣士としての才能が合ったよ
うで、王都での剣武会でもそれなりの成績を残しています」

【男主人】「と、言われても……なんで僕だったのさ？」

【騎士娘】「こう言っただけでは何ですが、男主人様は強く、かつ家柄も私の家と比べれば格が上であり、申し分ありません。」

難を言えば、好色という噂でしたが……しかし、女性を大事にするという噂どおりなら、一応、私も女ですから……

私は別に愛を求めているわけでもなく、夫には何か尊敬できる所
がいくつかあれば、それ以上を望みませんし……」

【男主人】「なんとなく分かった気がするけど……うーん……ああ、
せっかくだから、騎士娘も飲むのに付き合ってよ。それで謝罪を受
け入れるよ。一人で飲んでるのも、少し寂しくてね」

第124話『騎士娘から、悩みを聞いていた』

草原と平穏の国：草原軍野営地

【騎士娘】「いいれふかあ？ 隊は男せーばかりでえ、女せーがわらひは1人なんれふよあ？」

【男主人】「失敗した……1杯だけでこうなるのか」

【騎士娘】「聞いてまふかー！？」

【男主人】「はい、聞いてます！ 隊は男性ばかりで、女性は騎士娘だけなんだよね」

【騎士娘】「別にわらひはあ、男にきょーみはないけれお、ふつうモテモテれふよねえ？」

【男主人】「まあ、そういう状況なら普通はモテたりする、かな？」

【騎士娘】「モテないんれふ！ られもわらひを……モテないんれふ！」

【男主人】「ええつと……」

【騎士娘】「わらひはあ、女せーとしてのみによくがないんれふ！ らからあ、モテないんれふ！」

【男主人】「いやいや、騎士娘はなかなか魅力ある美人さんだと思うよ？」

【騎士娘】「男ごりゆりんらまあ、わらひはキレイれふかあ？」

【男主人】「うん、綺麗綺麗……隊の男性は、きっと騎士娘が綺麗だから近寄りづらんだよ、きつと」

【騎士娘】「えへへ……男ごりゆりんらまにほめられらー」

【男主人】（そつえば、僕の周りに酒乱はいないな……酒豪は多いけど）

【騎士娘】「…………男ごりゆりんらまあ、わらひにちゅーしたいれふか？」

【男主人】「ぶっ、えーと？」

【騎士娘】「ちゅーするう？（ずいつ）」

【男主人】「しないです（引き）」

【騎士娘】「ちゅーするのお？（ずずいつ）」

【男主人】「だから、しないで！（引き）」

【騎士娘】「ちゅー……（ずずずいつ）………（ぱたっ）」

【男主人】「おおっと（抱き止め）」

【騎士娘】「……くうすう……zzz………」

【男主人】「酔い潰れたか……しかし、この体勢はちょっと良くないな」

【射手男】「男主人様、騎士娘を見かけなかつ………失礼しましたっすー！！」

【男主人】「………僕、何か悪いことしたか？（がっくり）」

第125話『妖艶女は、屋敷に潜入していた』

草原と平穏の国：弟大公邸

【弟大公】『そうか……ああ、打てる手はできる限り……』

【妖艶女】（誰かと話している？　けど、2人以上の人の気配はない……通信系魔術、か？）

【弟大公】『ふむ……人質には手を出すなよ。殺して意味がある者と、殺すと面倒になる者がいる……』

【妖艶女】（！？）

【弟大公】『ふはは、言うまでもなかったか……ああ、すまん、少しばかり気を張ってるようだ……』

【妖艶女】（人質か……。誰に対して、誰を押さえているのかは分からないが……面倒なことだね）

【給仕娘】「貴女、そこで何なさってるの？」

【妖艶女】「え、あ、はい……寝室のシーツを集めて来いと言われてまして……こちらの区画は、どこに寝室があるのか迷っております」

【給仕娘】「そう……その場合の寝室は、客間か従業員室のものよ」

【妖艶女】「そ、そうなのですか？」

【給仕娘】「貴女見かけない顔ね。新人？　この屋敷における規則の説明をきちんと聞いていなかったのかしら？」

【妖艶女】「いくつかは覚えているのですが……ええと……」

【給仕娘】「こっちの区画は、専用の者しか入れないの……そういう規則になっているのよ？」

【妖艶女】「ほ、本当ですか？　き、規則を破ったら、やっぱりお

給金とか減らされちゃうんでしょうか？」

【給仕娘】「……………」

【妖艶女】「あ、あの…………？」

【給仕娘】「基本的に、この屋敷で働けるのは、誰かの紹介が必要なのよ？ 貴女は、何処のお家の縁者なのかしら？」

【妖艶女】「そ、それは、ですね…………」

【給仕娘】「何？ そんなに言えない事なのかしら？」

【妖艶女】「…………その、他言しないで頂けますか？」

【給仕娘】「約束はできないわね。いいから、とつとと話さない」

【妖艶女】「実は…………ここの侍従長さんの元情婦でして…………」

【給仕娘】「じょっ！？ なんてこと…………公私混同もあつたものじゃないわね」

【妖艶女】「精一杯働きますから、できれば、その…………」

【給仕娘】「……………後でまた色々と確認させてもらつね。今は仕事に戻りなさい」

【妖艶女】「はい、失礼します！」

第125話『妖艶女は、屋敷に潜入していた』（後書き）

一応、新キャラなので紹介。

給仕娘

【種族】：人間族 【（外見）年齢】：20歳 【性別】：女性

【一人称】：ワタシ

【設定】：

・弟大公の屋敷に勤めている女性。

第126話『妖艶女の行動は、怪しまれていた』

草原と平穩の国：弟大公邸

SE（扉を叩く音）：コンコンッ

【給仕娘】『給仕娘です。お時間はよろしいでしょうか？』

【弟大公】「ん、給仕娘か？ 入って来い」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、ボタン

【給仕娘】「失礼いたします」

【弟大公】「まだ夜というには時間が早いな。……どうかしたのか？」

【給仕娘】「ええ、ご主人様に確認をしておいた方がよろしいかと思ひまして……」

【弟大公】「話してみろ」

【給仕娘】「先ほど、新入りのメイドが、廊下に佇^{たたず}んでおりました」

【弟大公】「そのメイドに何か問題があるのか？」

【給仕娘】「いえ、問題があるかどうかは明確には分かりません。

本人が言うには、誤ってこの区画に入り込んだ……と申してましたが、違和感が少し」

【弟大公】「そのメイドの身元は？ 誰の縁者だ？」

【給仕娘】「それが……侍従長の元情婦らしく、それとなく侍従長本人に確認を入れましたが、新入りの説明に嘘はないようです」

【弟大公】「ほう、あいつもお盛んだな。私なぞ、お前1人で精一杯だというのに（抱き寄せ）」

【給仕娘】「ふふふ、お戯^{たわむれ}れ言を……“今”はワタシ1人を持て余

しているだけでしょう？」

【弟大公】「それで、私はどうすればいい？」

【給仕娘】「何もしない方がよろしいかと」

【弟大公】「そうなのか？ どうせ小娘１人、お前ならば殺すのは造作もないだろう？」

【給仕娘】「空を突いて遠くにいる龍を呼び寄せるほうが問題です。何も焦る必要はありません。毒で死なぬ龍とはいえ、生き物である以上、死の腕かいなからは逃がれられませんから」

【弟大公】「そうかそうか、お前に任せておけば安心だ」

【給仕娘】「ご理解頂けまして、嬉しく思います」

【弟大公】「話はそれだけか？ ならば、そのメイドの件は頼んだぞ」

【給仕娘】「はい、かしこまりました」

第127話『副官女は、素直さに憧れていた』

草原と平穩の国：男主人邸

【猫ミミ】「いらっしやい！」

【副官女】「……2人はもう出発したのね？」

【猫ミミ】「うん、お昼前に出発したよ」

【副官女】「そっか」

【猫ミミ】「今、お茶を淹れるから、座ってて！」

【副官女】「あつ、私はすぐに………って、しょうがないな（微笑み）」

【猫ミミ】「お待たせしました。このクッキー、あたしが焼いたんだ！」

【副官女】「ありがと。それじゃあ頂きます。フー……（コクコク、サクッ、コクコク）」

【猫ミミ】「……………（ときどき）」

【副官女】「んー、少し茶葉の開きが足りないかな。この葉なら、カップに注ぐ前にもう少し待ったほうが良かったかも？」

【猫ミミ】「あううゝ（しょんぼり）」

【副官女】「でも、クッキーの方は合格ね。人によっては甘さが足りないって言うかもしれないけど、私は甘さが控えめの方が好きだし、お茶菓子としてのクッキーなら上出来よ」

【猫ミミ】「やったあ！　たくさん焼いたから、良かったらお土産にするねー！」

【副官女】「それじゃあ、もらって帰ろうかな？」

【猫ミミ】「うん！」

【副官女】「ところで、猫ミミちゃん……」

【猫ミミ】「なあに？」

【副官女】「良かったら、みんなが帰ってくるまで、私の屋敷で寝泊りしてもいいんだけど？」

【猫ミミ】「ううん、気持ちは嬉しいけど……みんなが帰ってきた時に、あたしが一番にお出迎えするの」

【副官女】「そっか………いいなあ」

【猫ミミ】「何がいいの？」

【副官女】「ん、猫ミミちゃんがね、ちょっとだけ羨ましいなって」

【猫ミミ】「副官女さんもメイドさんになりたいの？」

【副官女】「ち、違って！羨ましいのは、猫ミミちゃんの真っ直ぐな気持ちね」

【猫ミミ】「???」

【副官女】「猫ミミちゃんは偉いなって、褒めたのよ。あーあ、私も頑張らなきゃ」

【猫ミミ】「えっと？副官女さん、頑張れー！ふぁいとー！

おー！」

第128話『上司と部下の父親が、歓談をしていた』

草原と平穩の国：東公爵邸

【東公爵】「わざわざ、お出で頂かなくとも、俺を呼び出せば良かったでしょうに」

【王子様】「いやなに……今回の訪問はあくまで私的なものだからな」

【東公爵】「ほお？」

【王子様】「部下の実家へ食事誘われることなんて、よくある話だろう？」

【東公爵】「まあ、普通の上司と部下だったら無くはない話ですね」

【王子様】「ボクと副官女は、普通の上司と部下だと思ってるけどね」

【東公爵】「王子様を普通の上司と言うには些ちとか抵抗がありますが」

【王子様】「些細なことだ」

【東公爵】「そういうことにしておきましょう。それで？」

【王子様】「それで、とは？」

【東公爵】「部下の家に食事に誘われた上司が、たまたまその部下の父親と話が合う、ということもよくある話なのでしょう？」

【王子様】「ああ、それもよくある話だね」

【東公爵】「お話を聞く前に一つ、うちの娘に可能性はありますか
ね？」

【王子様】「可能性ならあるんじゃない？ ただ……悪いけど、ボクは長ミミ派だね」

【東公爵】「以前の俺の誘惑は功を奏してると言い難いし、娘には厳しい戦いになりそうだ」

【王子様】「さて、その前に片付けないといけない問題があつてね。」

ちょっと相談に乗って欲しいんだ」

【東公爵】「お聞きしましょう」

【王子様】「今回の戦争について、どの辺りが落としどころになると思う？」

【東公爵】「ふむ、今回の戦争は絶対に負けないと仰るのですか？」

【王子様】「地の利と人の利は、こつち側にあるからね。それに男主人なら上手くやってくれるさ。」

こつちの優勢であれば、ボクなりの戦いが必要になるだろ。前もって準備をしておくに越したことはないよ」

【東公爵】「それは、もつともな話ですね」

【王子様】「東公爵はどう考える？」

【東公爵】「王子様は、大陸を統一するおつもりはありますか？」

【王子様】「いいや、ボクの両手は『草原と平穏の国』だけで塞がってるからね」

【東公爵】「そういうことでしたら……」

第129話『黒服女が、勇気を振り絞っていた』

鉦山と武勇の国：宿屋

【黒服女】「……いけ、女は度胸だ……涙が最終兵器だ……（ぶつぶつ）」

【白髪女】「……？」

【黒服女】「……まずは、こうして……ああきたら、こうやって……（ぶつぶつ）」

【白髪女】「もしもし？」

【黒服女】「ひゃっ!？」

【白髪女】「こんな扉の前の廊下で、何してるんだい？」

【黒服女】「いえ、決して部下男様を誘惑して、あんなことや、そんなこと、きやー、わたしの口からは言えないわー!　なんてことをしようなんて、全然計画してませんよ!」

【白髪女】「ふむふむ」

【黒服女】「嘘泣きで落としてダメなら、お酒で前後不覚にして既成事実を作ってやれなんて、もう頭の片隅にでも考えていませんかー!」

【白髪女】「アタシの協力が必要そうかねえ？」

【黒服女】「是非に!」

【白髪女】「おおっ、うちの馬鹿弟子に見習わせたい積極さだねえ」

【黒服女】「はっ!　すみません……少し暴走しました」

【白髪女】「問題はないさ。それで？」

【黒服女】「???」

【白髪女】「アタシたちは、明日の昼前に、この宿を発つ。つまり、制限時間はあと半日だ」

【黒服女】「はい」

【白髪女】「つまり、まだまだ諦めるには早いつてことさ。やることやるのは半刻あれば十分」

【黒服女】「はいっ！」

【白髪女】「さて、その計画だけど……耳を貸しな……（「っしょっしょ」）

【黒服女】「……ええっ……そ、それで……は、はい……」

【白髪女】「で、だから……とすれば、……だろ？ で……」

【黒服女】「ふむふむ……」

【白髪女】「……というわけさ、分かったかい」

【黒服女】「が、頑張ります！」

第130話『意外な事実が、判明していた』

森林と調和の国：草原軍野営地

【男主人】「失礼いたします。今、少しよろしいでしょうか？」

【堅騎士】「おお、男主人殿か。何かあったか？」

【男主人】「明日以降の特務隊の行軍について、少し相談が」

【堅騎士】「ふむ？」

【男主人】「派遣軍本体と合流する前に寄りたい場所があるので」

【堅騎士】「寄りたい場所……。それは今回の戦争に対する策というわけか？」

【男主人】「いえ、寄りたいのは“森の南外れ”です」

【堅騎士】「そこは……。今回の戦争における最初の戦場だな。そこで何か得れるものがあるとは思えないが……」

【男主人】「この目で確かめたいだけです。それと、確かめさせたいただけです」

【堅騎士】「……。まあ、問題はないだろう。別行動を許可する」

【男主人】「ありがとうございます」

【堅騎士】「時に……。特務隊に配属させた2人は役に立っているか？」

【男主人】「ええ、2人とも優秀で、僕は助かっています」

【堅騎士】「そうか（ほっ）」

【男主人】「何か心配ごとでもあったのですか？」

【堅騎士】「いや、大したことではない」

【男主人】「……。そうなのですか？」

【堅騎士】「……。誤魔化されてはくれんか」

【男主人】「ええ、まあ……。もちろん、無理やり聞きだすつもりはありませんが」

【堅騎士】「何、単純な話だ。某と騎士娘は、異母兄妹でな……
… 某が5歳の誕生日を迎えた頃に母がなくなり、数年後に父が後妻
として家に迎えたのが、騎士娘の実母だ。“堅騎士”と“騎士娘”
で名前が似ているだろう？」

【男主人】「…………… 外見は、あまり似てませんね」

【堅騎士】「まあ、某は父と前妻に似て、妹は後妻に似ているから
な。」

まあ、異母兄妹とはいえ、兄妹の仲は悪くはないぞ。某が兄とし
て妹の様子を気にする程度にはな」

【男主人】「なるほど……………」

【堅騎士】「もちろん、騎士娘を特別に他の兵士より贔屓^{ひいき}していた
りはしないがな」

第131話『そこには、非日常の光景が広がっていた』

森林と調和の国：戦場跡

【男主人】「話に聞いていた以上だな……」

【騎士娘】「……………」

【射手男】「男主人様、ここは何なんですか？ わざわざ軍から離れて、特務隊だけで……………」

【男主人】「ここは、今回の戦争で、今の所最も激しく両軍がぶつかり合った場所だ」

【騎士娘】「……………」

【射手男】「野晒しにされた屍のせいで、景観も匂いもヒドイ場所です……………」

【男主人】「できることなら、埋葬してやりたいが……………僕らだけじゃ、手が足りないか。」

……………騎士娘、大丈夫か？」

【騎士娘】「だ、だい……………うつ……………失！ 礼しま、す！」

SE（走り去る音）：タタタタツ……………

【男主人】「ま、耐えた方だな……………」

【射手男】「あの様子じゃ、胃の中が空っぽになるのは確実っすね」

【男主人】「射手男は？」

【射手男】「おれも結構きてるっす。とはいえ、おれの場合は人の死体は初めてじゃないから……………野盗退治の任務に付いていたこともあるっす」

【男主人】「そっか……………」

【射手男】「男主人様、荒療治っすか？」

【男主人】「……………」

【射手男】「おれはともかく、騎士娘は初めての戦争っす。いきなり戦場に出ると、恐慌して役に立たないか、場の熱気に流されて異常な興奮状態になるか、どちらになる可能性が高いっす。

冷静な精神状態の時に、この場所に連れて来られたら、極度の恐慌や興奮を起こさないっす。もしかすると、それがこの狙いだったりするっすか？」

【男主人】「それが半分、残り半分は僕の覚悟のため……………」

【射手男】「覚悟？」

【男主人】「ああ、約束のためだけじゃなくて、今度は、僕自身のために人を殺す覚悟を……………」

【射手男】「……………」

【男主人】「……………騎士娘の様子を見てくる」

【射手男】「はい。じゃあ、おれは少し辺りの様子を見てくるっす」

第132話『目指すものを、見失っていた』

森林と調和の国：戦場跡

【男主人】「……ほら、水と手ぬぐい」

【騎士娘】「……ありがとうございます、ます」

【男主人】「……………」

【騎士娘】「……お見苦しい所をお見せしました」

【男主人】「無理はするな」

【騎士娘】「無理はしていません。自分の不甲斐なさに呆れてしま
います……………」

【男主人】「あの光景を見て、どう思った？」

【騎士娘】「匂いもキツかったのですが……焦点の合っていない死
体の目と目があつた時、胃が締め付けられるような嫌悪感と忌避感
を……受けました。」

戦場に来る、ということがどういふことなのかは分かっていたの
に、覚悟が足りてなかったんです」

【男主人】「その気持ちは覚悟とかは関係なく、当たり前のことだ
よ。生物なら、本能的に死を避けようとし、嫌悪するし忌避もする。
夜が怖いのだって、自分の命を脅かすモノがあるかも知れないから
だ」

【騎士娘】「しかし、私は騎士です」

【男主人】「騎士であろうが、初めてなんでしょ。生きてないまま
のヒトを見るのは」

【騎士娘】「それはッ！……………はい、仰る通りです」

【男主人】「国へ帰る？」

【騎士娘】「帰りません！」

【男主人】「堅騎士殿から話は聞いた。騎士娘は、この戦場に来る

必要はなかったんでしょ？」

【騎士娘】「我が家では……戦に出て、武勲を挙げることが、騎士の誉れだと教えているのです。私は女ですから、兄ほど厳しく育てられませんでした。いえ、むしろ、甘やかすように育てられたと思います」

【男主人】「まあ、貴族の家の娘は、有力な家との結びつきに使われるのがほとんどだからね。むしろ、娘が軍に入ることを許す家というのが珍しい」

【騎士娘】「私もそう思います。大人しく儂げな令嬢として育った方が親孝行だったかもしれません。けれど、女だから兄とは違う扱いをされるのが嫌で……気づいたら、騎士を目指していました」

【男主人】「参戦したのは名誉のために？」

【騎士娘】「はい……けど、今は良く分からなくなってきました」

【男主人】「何が？」

【騎士娘】「自分が戦う意味が……敵を……いえ、ヒトを殺して、それが誇れるのかを」

【男主人】「けど、帰らない？ いや、帰りたくない？」

【騎士娘】「……はい」

【男主人】「……………」

【騎士娘】「……………」

第133話『スープを飲んで、温まっていた』

森林と調和の国：特務隊野営地

【射手男】「とりあえず、辺りに人が残っている気配はなかったです。近くに小さな集落があったけど、そこも無人になっていたっす。多分、戦禍を逃れるために避難したんだと思うっす」

【男主人】「ご苦労様……ん、そろそろいいかな？ ほら」

【射手男】「いただきます！」

SE：（焚き火の音）：パチパチ……

【射手男】「ふーふー……（ぱくぱく、ずずつ）……ふう、男主人様、これ、見た目は悪いけど、味は美味いっす！ 魚のスープっすか？」

【男主人】「干し魚と根野菜のごった煮かな？ とりあえず、褒めるならちゃんと褒める……（もぐもぐ）」

【射手男】「美味いっす。ところで、騎士娘は、大丈夫っすか？」

【男主人】「難しいところな……身体の方は大丈夫だけど、ココロというか、気持ちがバツサリ折れちゃったかな」

【射手男】「それで、どうするつもりっすか？」

【男主人】「どうするつもりって？」

【射手男】「ココロが弱っている女性を優しくするのはジゴロの基本っす！ おれは、しばらく離れてた方がいいっすか？」

【男主人】「こら待て、あれだけ説明したのは何を聞いてたのかな？」

【射手男】「建前はいらないっす！」

【男主人】「正真正銘の本音だー！！！」

【射手男】「……え？ 冗談じゃなくてマジっすか？ 男主人様の数々の武勇伝は……」

【男主人】「そんな事実はない！（きつぱり）」

【射手男】「ひどいっ！ おれら男兵士推定3万人の夢とロマンを返せっす！」

【男主人】「知るかつー！」

【射手男】「屋敷に押しかけ美女メイドや獣^{けもちこ}つ娘^{けもちこ}メイドをはべらせ、職場ではお嬢様との宮廷ラブ、下町での年上のお姉さんからの誘惑の全てが、嘘の……嘘の情報だったんすかー！」

【男主人】「……………」

【射手男】「……………」

【男主人】「そ、そうだよ？」

【射手男】「……男主人様、なんであからさまに目を逸らしてるっすか？」

第134話『騎士娘は、強さを求めていた』

森林と調和の国：特務隊野営地

【男主人】「起きてるか？」

【騎士娘】「……はい。申し訳ありません、今日は失態を晒してしまつて……」

【男主人】「とりあえず、ご飯。まだ暖かいからさ」

【騎士娘】「わざわざすみません……けど、今は食欲が……」

【男主人】「無くてでも食べる。これ、隊長命令ね」

【騎士娘】「そんなことでっ!？」

【男主人】「重要なことだよ。全部吐き出してからは、水を少し含んだくらいでしょ？」

【騎士娘】「え、ええ……」

【男主人】「汁物だし、味付けは薄くしたから、食べれるだけでも食べることに」

【騎士娘】「（はむはむ、ずずつ）……これは、射手男が作ったのですか？」

【男主人】「いや、僕が作ったんだけど、味とか変だった？」

【騎士娘】「いえ、懐かしい味がします。干した魚で出汁をとっていますね？」

【男主人】「分かったか。東の領地の郷土料理を元にしてるからね」

【騎士娘】「もっとも我が家で作る時は、もっと安い魚で出汁を取っていましたけど」

【男主人】「ふうん……」

【騎士娘】「……男主人様は……」

【男主人】「何かな？」

【騎士娘】「どうして、そんなに強いんですか？」

【男主人】「それは、どういう意図での質問？」

【騎士娘】「男主人様は、あの戦場跡を見て、まったく動揺していませんでした……知っていたんですよね。あそこが、ああいう状況になっていることを。」

それを当たり前のように……受け止めた強さが知りたいです」

【男主人】「それは強さなんかじゃないよ。ただの経験と諦めかな」

【騎士娘】「経験と諦め？」

【男主人】「そう……僕は人が死んで動かなくなるを何度も見てきただけ」

【騎士娘】「何度も……」

【男主人】「そうするとね、感情の一部が麻痺してくるんだ。だから、死体を見て何も思わないっていうのは、強さなんかじゃない」

【騎士娘】「でも……」

【男主人】「それに、僕が強くなる方法を口で説明したとしても、多分、本当の意味で騎士娘は強くはなれないと思う。他人の考え方を聞くのはいいけど、それに倣うだけじゃダメだよ、きっと。」

本体に戻って合流するまで、……少し時間をかけて考えて、自分なりの答えを出して欲しい」

第135話『皇都に、人の声が溢れていた』

鉾山と武勇の国：郊外の丘

SE（群衆の叫び）：ワアアアア……

【部下男】「此処までヒトの声が聞こえてくるなんて……」

【白髪女】「うん、どうやら始まったみたいだねえ」

【部下男】「この様子なら、成功しそうですね」

【白髪女】「成功するだろうさ。お姫様も言っていたじゃないか、この国における最大の戦力を味方にしたって」

【部下男】「1万の兵士を味方に入れるより、20万の民衆を味方に……」

【白髪女】「もちろん、黒騎士殿が軍部の方にも色々細工をしているだろうけどねえ。それに兵士なんて言っても、そのほとんどが民衆と変わらないさ」

【部下男】「国で一番力があるのは、団結した民衆……か」

【白髪女】「この国の民衆は7年前と今回なる戦争で色々と溜まっていただろうからねえ。」

【部下男】「確かに、オレらが情報を集め回っていた時も、国への鬱憤^{うつぶん}は高まっていました……しかし、これはクーデターとは言えないのでは？」

【白髪女】「ああ、これはクーデターではなく、“革命”だねえ。

お姫様も上手く焚き付けたもんだ……」

【部下男】「お祖母様、かくめい、とは？」

【白髪女】「ああ、クーデターが短期決戦で国の元首に取って代わるための政変ならば、革命は国の形態そのものへの政変というところかねえ」

【部下男】「それはつまり……」

【白髪女】「今回の件が終われば、民衆は自分達に力があることに気づくだろうさ。そうなれば、貴族ではない一般民からの政治への介入が始まるだろうね」

【部下男】「それじゃあ、鉄皇女様の計画は失敗じゃ……」

【白髪女】「いや、そこまでを考慮しての選択だろうねえ。あのお姫様は、国を手に入れると言いながら、自分自身の権力に対して、それほど興味を示していなかった……そういう意味では、馬鹿弟子と似ているかもしれないねえ」

【部下男】「男主人様と？」

【白髪女】「ああ、自分自身の地位や影響力について気にしてない辺りかねえ。もっとも、お姫様の場合は、自分自身の影響力を知った上で気にしてないってところは、馬鹿弟子とは違うけどねえ。」

さて、無事に街を抜け出したんだ。アタシたちは、やるべきことがある場所へ向かうとしようかねえ」

【部下男】「……はい」

【白髪女】「なに、黒服娘なら心配は要らないだろうさ？　ああ見えて腕は悪くなさそうだからねえ」

【部下男】「べ、別に黒服娘のことを心配してたわけじゃ！」

【白髪女】「この一件が終わったら、ゆっくりと考えればいいさ」

【部下男】「……………」

【白髪女】「オマエがどんな道を選ぶのが、アタシは応援してあげるからさ。せいぜい頑張りなよ」

第136話『己の無力に、涙を流していた』

森林と調和の国：特務隊野営地

【射手男】「こんな所で何をしてるっすか？」

【騎士娘】「っ！……射手男、か？」

【射手男】「……なるほど、1人で泣いてたっすね」

【騎士娘】「……………ふんっ」

【射手男】「結局、答えは見つかったっすか？」

【騎士娘】「なんでそれをつ！？」

【射手男】「はっはっは、おれの聴覚をなめないで欲しいっす！
天幕一枚程度簡単に……………いぎっ！？」

【騎士娘】「盗み聞きとはいいい趣味ですね。殴りますよ」

【射手男】「……………そういうのは殴る前に言って欲しいっす（自分で頭をなでなで」

【騎士娘】「ゲンコツ一回で許しますから、ありがたく思ってください」

【射手男】「へーい……………」

【騎士娘】「……………」

【射手男】「……………」

【騎士娘】「で？」

【射手男】「ん？ 何か用っすか？」

【騎士娘】「それは私の質問です！ 何か私に用があって探してたんじゃないんですか？」

【射手男】「そこはそれ、同じ隊のメンバーとして心配してるっす」

【騎士娘】「ありがとうござ……………」

【射手男】「ただでさえ3人しかない部隊なのに2人になったら、仕事が増えたら面倒っす」

【騎士娘】「貴方は！ 私をバカにしているんですか！！」

【射手男】「軽くしてるっす」

【騎士娘】「！！！！！！」

【射手男】「……何を怒っているっすか？ 街で人を殺せば人殺しっす。けど、戦争で敵をたくさん殺せば英雄っす。……殺す覚悟も、殺される覚悟もなしに戦場に来てただなんて、問題外っすよ？」

【騎士娘】「……………」

【射手男】「例外は戦争に巻き込まれた一般民だけっす。おれからすれば、今の騎士娘は、ただの足手まとっす。軍に寄って集まってくる娼婦の方が、士気の高揚に役立つだけマシっす」

【騎士娘】「貴様……………（ギリッ）」

【射手男】「甘えないで欲しいっすね。男主人様が優し過ぎるからおれが代わりに言っただけっすよ？ っと、また殴られる前に退散させてもらっす！」

【騎士娘】「くっ！！……………くう、なんで、なんでっ……………」

第137話『“棘”の集落で、本軍と合流していた』

森林と調和の国：“棘”の集落（草原軍本部）

【堅騎士】「おお、男主人殿、戻られたか」

【男主人】「はい……ただ、少し問題が……」

【堅騎士】「問題？」

【男主人】「僕は、南の戦場跡に向かったのですが……そこで騎士娘が、戦士としての壁に……」

【堅騎士】「軟弱な……」

【男主人】「申し訳ない」

【堅騎士】「いや、男主人殿は何も悪くなくろう。むしろ、妹が、このまま実戦に出ていたらと思えば……兄としては感謝の念が堪えん（深々）」

【男主人】「頭を上げて下さい。僕には僕の原因があつて、偶々なのですから」

【堅騎士】「しかし、それでは、特務隊の任務に支障が出るか……誰かを割り当てるから、しばらく時間を頂けるか？」

【男主人】「いえ……僕が目指す所が定まりました。目処が立つまでは、このままで……」

【堅騎士】「ふむ。それがもし、騎士娘のことを庇つてのことならば……」

【男主人】「それは……全くないとは言いませんが、僕の気持ちによる問題です」

【堅騎士】「真に忝い（かたじけな）深々」

【男主人】「ですから、頭を上げてください」

【堅騎士】「しかし、如何なる心算で？（いか）しんさん」

【男主人】「近く……「鉾山と武勇の国」に政変が起ります」

【堅騎士】「!?!?!」

【男主人】「その一報が敵軍に届いた時……」

【堅騎士】「敵軍は、様々な思惑によって、分裂するでしょうな」

【男主人】「ええ、幾つかの有力氏族の私兵、一般民の徴兵、傭兵などの混合軍における弱みですね」

【堅騎士】「となると、その情報がいつ敵軍に届くかですが……」

【男主人】「その情報については、僕の方で抑えてあります。タイミングを見計らい、積極的に噂を流しましょう」

【堅騎士】「某たちは………勝てるでしょうか？」

【男主人】「勝ちましょう」

【堅騎士】「そうですね。勝ちましょうぞ」

第138話『射手男が、手紙を読んでいた』

森林と調和の国：“棘”の集落（特務隊天幕）

【射手男】「……………」

SE（紙を強く握る音）：クシャ……

【男主人】「ただいま。いるのは、射手男だけか？ ……ん？ それは手紙か？」

【射手男】「っ！ 男主人様、おかえりなさいっす。団長とのお話は終わったっすか？」

【男主人】「ああ、とりあえずね。2人にも話しておこうと思ったんだけど」

【射手男】「騎士娘は、お茶をもらいに行ったただけなので、すぐに戻ってくると思うっす」

【男主人】「そうか、じゃあ少し待とうか」

【射手男】「ちなみに、これは恋人からのラブラブ便りっす！ 男主人様がどうしてもっていうなら、幸せのおすそ分けをしてあげるっすよ？」

【男主人】「いらんっ！！」

【射手男】「ほらほら、とっても可愛い文字っすよ？ けど、本人はこの文字の百倍は可愛いっす！」

【男主人】「あー、何だろう……こう、唐突に《劫炎撃槌》フレイムハンマーを唱えたい気分」

【射手男】「何言ってるっすか！！ しれっと、攻城戦用魔術を行使しないで欲しいっす！！」

【男主人】「大丈夫大丈夫、ぜんぜん疲れないから朝飯前ダヨ？」

【射手男】「男主人様の疲労の心配はしてないっす！」

【男主人】「じゃあ、この、軽くイラッとした気持ち^{ふっしょく}をどう払拭^{はら拭}しろと？」

【射手男】「申し訳ありませんでしたっす！ 心から謝るので、その似合わない爽やかな笑顔をやめて欲しいっす！！」

【男主人】「まてい！！ 謝る場所が違うだろ！ しかも、サラッと僕に笑顔が似合わないと言っうな！！」

【射手男】「誤解っす！！ 笑顔が怖いって言いたかっただけっす！！」

【男主人】「……………ふむ？ まあ、そういうことにしておくか」

【射手男】「い、命の危険を感じたっす」

【男主人】「はっははは、面白いことを言っうなあ。僕が不必要に人殺しをするわけないでしょ？」

【射手男】「も、勿論っす」

【男主人】「それに死んじやったら、苦痛も感じないしね」

【射手男】「……………」

【男主人】「……………今の笑う所だよ？」

【射手男】「あは、あははは……………っす」

第139話『すでに、答えは出ていた』

森林と調和の国：“棘”の集落（特務隊天幕）

【男主人】「や、お帰り」

【騎士娘】「あれ、男主人様だけですか？ 射手男は？」

【男主人】「ん、少し騎士娘と話をしたくて、席をはずしてもらった」

【騎士娘】「！？」

【男主人】「えっと、話というのは……」

【騎士娘】「そのっ！ お茶を……話の前に淹れますね」

【男主人】「ああ」

SE（お茶の準備をする音）：カチャカチャ……トポトポ……

【騎士娘】「どうぞ」

【男主人】「ありがと。（ずすっ）ん、悪くないね……」

【騎士娘】「それとこれ、砂糖菓子ですが、補給係の人にもらいました」

【男主人】「もらっていいの？」

【騎士娘】「ええ、もらったのは良いんですが、実はあんまり好みではないので」

【男主人】「（カリッ、ずすっ）……」

【騎士娘】「……………（ずすっ）」

【男主人】「で、話だけだね。答えは、出たかな？」

【騎士娘】「……………」

【男主人】「……………」

【騎士娘】「答えは、出ませんでした」

【男主人】「敵を殺せない？」

【騎士娘】「いえ、相手が敵というならば……殺します。いや、殺せる、とは思います」

【男主人】「何を悩んでいるの？」

【騎士娘】「……………敵でなければ、殺さなくても良いのだと、気づいてしまったからです。」

あの戦場跡で死んでいたのは、敵だけじゃありませんでした。味方も大勢死んでいた！ 敵だって、戦争で、戦場で出会わなければ、笑って語り合えた人だったかもしれない！

馬鹿だったんです……………戦争に出れば、騎士としての誉れを得れる……………私はその過程に気づいてなかった……………。

敵は殺せても、人は殺せません……………殺したくありません」

【男主人】「きつとそれが、君の答えなんだよ」

【騎士娘】「そうなのでしょうか？ だとしたら、もうダメですね……………」

【男主人】「ダメじゃないさ。じゃあ、できるだけ人を殺さない戦争を始めようか（にこり）」

【騎士娘】「……………はい？」

第140話『停戦、という名の理想を語っていた』

森林と調和の国：“棘”の集落（特務隊天幕）

【射手男】「それで、どうするつもりですか？」

【男主人】「これは堅騎士殿にも話したことなんだが、「鉾山と武勇の国」で政変が起こる」

【騎士娘】「政変っ！？ それは正確な情報ですか！？」

【男主人】「ああ、近いうち新しい皇帝が生まれ……いや、もしかすると、皇帝じゃないかもしれないけど、「鉾山と武勇の国」のトップが入れ替わる。」

そうなれば、鉾山軍も、このままここで戦争を続けるわけには行かなくなる」

【射手男】「その混乱を付いて攻めれば、こっちの勝利っすね！！」

【男主人】「……いや、攻めない。停戦、もしくは投降を呼び掛ける」

【射手男】「なっ！？ それは甘くないっすか！」

【男主人】「客観的に見れば、甘いかもしれないけど……けど、できるだけ人を殺さず、この戦争を終わらせるんだ。それが一番面倒で、一番力ツコイイだろ？」

【騎士娘】「……………」

【射手男】「そんなの理想どころか、妄想に近いつす！！ そもそも、おれらは援軍であって、実際に戦っているの森林軍っすよ？ この戦争は一方だけを収めても終わりにはならないっす！」

【男主人】「勿論、分かっているさ。この作戦を取るためには、まず森林軍の総大将である“棘”の氏族長に会って、理解を得る必要がある」

【射手男】「その通りっす！ こんな状況で協力してもらっことな

んてきつと不可能っす！」

【男主人】「僕は、戦場跡で覚悟は決めたって言っただろう？ もし何かを望むなら、自分から動かなければ、その望む何かを動かせる可能性はないま^{ゼロ}まなんだ」

【騎士娘】「……………」

【射手男】「……………」

【男主人】「とまあ、偉そうなことを言った所で、2人の同意も得られないような作戦は、失敗するかもね」

【騎士娘】「……私は、その……男主人様が言ったとおり、無駄に人が死なずに戦争が終わるならば、その作戦を信じてみたい。ろくに剣も力も振るうことのできない私だけど……………」

【男主人】「騎士娘、人を守るために必要なことは、剣でも力でもない、まずは気持ちだよ」

【騎士娘】「男主人様……………」

【射手男】「……分かり合った顔で見詰め合って、結局、籠絡されてるっすね」

【騎士娘】「なっ、何を言う！ 私は男主人様の考えに感銘を受けただけであってな……………」

【射手男】「おれは、どっちでもいいっすよ？ 反対はしたっすけど、やれるものならやってみろ、っていう気分っす。…………それに、男主人様だったら、氏族長や敵軍兵士も簡単に口説き落としそうっす」

【男主人】「2人とも、ありがとう……………」

【射手男】「お礼を言うのはまだ早いっす。全てが終わってから、言っただけいいっすよ」

「幕間」『兵士達』

森林と調和の国：鉾山軍野営地

SE（茂みの音）：ガサガサッ

【見張兵】「ひゃっ!？」

【巡回兵】「落ち着け、オレだ」

【見張兵】「な、なんだよ……脅かすなよ」

【巡回兵】「大丈夫か？ この間、夜中になされてただろ？」

【見張兵】「……怖いんだ。いつ敵が襲ってくるのか、もしかしたら、あの木の陰から矢が飛んでくるんじゃないかって……お前は怖くないのかよ？」

【巡回兵】「オレだって怖いさ。けど、ここは軍の側面だ。まだ安全な方じゃないか」

【見張兵】「そうは言ってたてな！ いつ、全面衝突になるのか分からないんだろ!？」

【巡回兵】「そりゃ、そうだが……」

【見張兵】「俺はよ……農家の三男でさ、村に徴兵令が出たときに自分から志願したんだ。軍に来れば、それだけ食い扶持が減るだろう？ だからさ……」

【巡回兵】「オレだって似たようなもんさ」

【見張兵】「死ぬのはやっぱイヤだ……けど、このまんまじゃ、いつか死ぬ……だったら、いつそ、軍から脱っそ」

【巡回兵】「言うな！ それ以上言うなら、オレはお前を止めなくちゃならない」

【見張兵】「っ!？ いいじゃないか、どうせだったら、一緒に……」

【巡回兵】「言うなつて言つてんだろ！！やるなら、オレに関わらないようにやってくれよ。失敗した時にとばっちりを食らうのは勘弁だからな」

【見張兵】「……………」

【巡回兵】「バレたら、その時点で死ぬぞ。バカなことを考えずに、このまま生き残ることを神に祈った方が懸命だぜ？」

【見張兵】「けどよ…………こんな恐ろしい夜を、あと何日過ごせばいいんだ…………」

【巡回兵】「そんなこと、オレに分かるかよ…………」

【見張兵】「…………ヤギの乳で作ったチーズをさ」

【巡回兵】「ん？」

【見張兵】「火で少し焦げるくらいに炙って、酢漬けのキャベツと一緒にパンで挟んで食うんだ」

【巡回兵】「…………美味そうだな」

【見張兵】「ああ、俺の好物だ」

【巡回兵】「オレは、あれだな。塩をたくさん振った鶏肉に、小麦粉の衣をつけて、油で揚げたヤツが好きだな。アツアツを頬張ったところに、なみなみとジョッキに注いだエールに口をつけるんだ」

【見張兵】「それは、俺も一度、食ってみたいな」

【巡回兵】「食えるさ。そう信じていれば、きつとな」

第141話『偉い人たちを、説得しようとしていた』

森林と調和の国：森林軍本部

【主人公】「皆様、私の急な申し出にも関わらず、お集まり感謝いたします」

【偉ミミ】「英雄である主人公殿の頼みだ、無下にはできん。それで、我々森林軍の幹部を集めての話とはなんだろうか？」

【主人公】「この度、一つの案を持って参りました。それについて、皆様の同意を頂きたい思います」

【老ミミ】「7年前と同じく火計を用いるつもりか？」

【主人公】「……あの時の策により、エルフ族の宝たる森に傷を負わせてしまい、もっと良い策があったのではないかと、忸怩たる思いです」

【老ミミ】「昔のことについては、すでに決着がついておる。ワシらとていまさら蒸し返すつもりはない。しかし、それを再びとなる……」

【主人公】「安心をしてください。今回の案も戦争を終わらせるための策ではありますが、火計ではありません」

【偉ミミ】「その策を用いれば、此度の戦争も勝てるか？」

【主人公】「いいえ、私が提案したいのは、戦争に勝つための策ではありません」

【偉ミミ】「……しかし、戦争を終わらせると……」

【主人公】「はい、戦争は終わらせます。皆さん、今回の戦争を“無条件で停戦”することを認めては頂けないでしょうか？」

SE（ざわめく音）：ザワザワツ……

SE（台を叩く音）：バンッ！！

【偉ミニミ】「無条件で停戦」だっ！？　それがどういう意味なのか分からぬのか！？」

【男主人】「分かっております」

【偉ミニミ】「いいや、分かっていたらそんな言葉が口から出てくるものか！　仕掛けられた戦争に、こちらから停戦を申し込むなぞ、それは敗北を宣言したのも同じではないか！！」

【男主人】「いいえ、同じではありません……此方から、向こうが“停戦することを許してやる”のです」

【偉ミニミ】「『停戦してやるから戦うのをやめよう』といって聞く相手が攻めてきたりすると思っただけか！？　敵をどうやって説得させる！？！」

【男主人】「私が説得させます」

【偉ミニミ】「もし、仮に説得ができたとしても。我々の、踏み躪られた兵士や田畑はっ！　今回の戦争に置ける損害の賠償はどうなるっ！！」

【男主人】「……分かりました。賠償については、向こうとの交渉の場を設けさせましょう」

【偉ミニミ】「そういう問題ではないっ！！　そもそもが戦争を仕掛けられたのは我らが国であって、男主人殿は部外者であるから、そのような提案ができるのだ！！」

【男主人】「確かに、私が属している国は「平穏と草原の国」でありましょう！　しかし、「森林と調和の国」とは盟友たる国であり、私も戦争を憂う者として……」

【偉ミニミ】「戦争をしているのは、我らが国と「鉾山と武勇の国」だ！！」

それとも男主人殿は我が国に一兵として仕えてみるか？　その気概が少しでもあるならば、話の続きを聞いてやる。もっとも、今回のように我々氏族長に意見できるようになるまで、何年かかるかは

分からぬがな」

【男主人】「っ……」

第142話『長ミミさんが、秘密の作戦を持っていた』

森林と調和の国：森林軍本部

【長ミミ】「お義父様に申し上げます。それならば、次期氏族長としての発言ならば、如何でしょう？ 範例としては、緊急時において、氏族長と次期氏族長には、ほぼ同等の権限が与えられるはずす」

SE（ざわめく音）：ザワッ

【長ミミ】「（小声）お待たせいたしました。ご主人様」

【男主人】「（小声）待つてないよ！？ とうか、何でここにいるのかな？ それにお父様って！？」

【長ミミ】「（小声）もちろん、メイドですから……ご主人様、私に話をあわせてくださいませ」

【男主人】「（小声）え？ お、おい……」

【偉ミミ】「長ミミっ！ いくら氏族長直系の1人娘とはいえ、範例に従えば女性は氏族長にはなれん！」

【長ミミ】「そのことにつきまして、諸氏の方々には失礼なれど、この場を借りて発表したいことがあります。

男主人様、先日……“私の耳に触れたい”と仰られましたよね？」

【男主人】「ああ、確かに言ったが……」

【長ミミ】「その話、此の場を持ってお受けしたいと思います」

【男主人】「……？」

【偉ミミ】「っ！？」

【老ミミ】「ほお……」

【長ミミ】「範例に従えば、氏族長の第一子が女性だった場合、その伴侶を次期氏族長に据えるとあります。お義父様……」

【偉ミミ】「何を言う！！ 人間族が次期氏族長などと認められるか！ そもそも、いくら男主人殿とはいえ、お前と人間族との婚姻を認めん！！」

【長ミミ】「範例には、人間族が氏族長になつてはいけないとは、一言も伝わっておりませんか？

それに、男主人様はエルフ族の古き慣習に従つて“耳問^{みみと}い”をして下さり、私がそれを受けたのです。過去にもエルフ族と人間族と結ばれた前例はあり、範例にも問題はないはずです」

【偉ミミ】「だがっ！！」

【老ミミ】「まあまあ、偉ミミ殿……そう興奮召されるな。まあ、どという経緯はあれど、男主人殿がこの場において発言を続ける権利を得た。そういうことで、良いかの、お嬢さん」

【長ミミ】「老ミミ様の寛大なご配慮に感謝いたします」

【男主人】「（小声）……長ミミ、後で話がある」

【長ミミ】「（小声）かしこまりました。ひとまずは、私が支援できるのは、ここまでです。頑張ってくださいませ、ご主人様」

第143話『戦争の悲しみを、説いていた』

森林と調和の国：森林軍本部

【老ミミ】「さて…… 男主人殿、話の続きを聞かせてもらおうか」

【男主人】「それでは、失礼して…… 皆様方に質問があります。この戦争はどうすれば終わるのでしょうか？」

【偉ミミ】「それは、もちろん、敵軍を打倒し、我らが勝利すれば終わる」

【男主人】「確かに7年前は、私たちの勝利で終わりました。しかし、また彼らは攻めてきたのです」

【偉ミミ】「ならば、今度こそ完膚かんぷなきまでに叩きのめしてやればいい――！」

【男主人】「もし、逆に私たちの軍が完膚なきまでに叩きのめされたらどうしますか？」

【偉ミミ】「そうになったら、一矢を報いるために、雌伏しふくの時を過ぐす――！」

【男主人】「…… 相手もそうであると、何故考えないのですか？ それとも、気づいていて、知らぬ振りをされてるのですか？」

【偉ミミ】「なん、だと？」

【男主人】「偉ミミ様は、子供に向かって、剣を振れ、敵を殺せと教えるのですか？」

【偉ミミ】「さつきから、ぬらりくらりと本意を避けるような発言ばかりして！ 男主人殿は、何が言いたいのだ！」

【男主人】「戦争を続けるということは、人に憎しみや恨みを教える、ということです。そして、恨みの連鎖は、止めるべくして止めなければ、何処までも何処までも繋がっていきます。」

今ならば、それを止めることができます。

偉ミミ様……皆様も考えてください、敵軍にいる彼ら全員が憎いのですか？ 彼らのうち、どれだけが本当の意味で、私たちを憎んでいるのでしょうか？」

SE（静寂）：シーン……

【男主人】「私は確かに、今回の戦争も直接的な関係者ではないかもしれない。けど、私は子供やこれから生まれてくる幼子おさなこに、自分たちの恨みを継がせたいとは考えません。

この気持ちは、私と皆様で同じではないのでしょうか？」

【老ミミ】「……男主人殿、ワシから一つ聞きたい。男主人殿は、ワシらと同じように、敵軍の将を全員説得させるつもりか？」

【男主人】「いいえ」

【老ミミ】「説得をせず、どうやって、敵軍を停戦へと導く？」

【男主人】「私が『いいえ』と言ったのは、説得する相手が“敵軍の将を”と訊かれたからです。私が説得しようとしている相手は“敵軍の全兵士”です」

第144話『2人の視線が、色々と語っていた』

森林と調和の国：“棘”の集落（特務隊天幕）

【長ミミ】「おかえりなさいませ、ご主人様。どうぞ、こちらにお座りください」

【男主人】「あ、ああ……」

【騎士娘】「……………（じい）」

【射手男】「……………（じい）」

【長ミミ】「ただいま、お茶を淹れますね。お二方もお代わりはいかがでしょう？」

【騎士娘】「いや、私はまだ残っているので、大丈夫です」

【射手男】「じゃあ、おれは頂いていいですか？」

【長ミミ】「おや、お湯の方が切れているようですね。ご主人様、申し訳ありません、少々お待ちください……（ぱたぱた）」

【騎士娘】「（ずずっ）うん、お茶が美味しい……」

【射手男】「……えーと、おれが代表して質問ますけど、いいですか？」

【男主人】「いや、待て、先に僕のほうから話をさせろ、というかするぞ」

【射手男】「横暴っす！」

【男主人】「そっちの質問は大体分かるから！ こっちの話を先にさせろ！」

とりあえず、会談の方は大分上手かった。しばらくの間、猶予がもらえた感じだ。後で計画の詳細について話すが、この会談で計画の半分は上手くいったと考えていい」

【射手男】「それはすごいっす！ 男主人様なら、きっと残り半分以上も上手くいくに決まってるっすね」

【騎士娘】「私も協力できることでしたら、なんでも言ってく下さい！」

【男主人】「もちろん、2人にも色々協力してもらっ予定だからね」

【射手男】「で、あのエルフの美女とはどういう関係っすか！？」

メイド服を着せて、ご主人様と呼ばせるなんて、最近ちょっとどうかあ、と思っていた男主人様のこと見直したっす！」

【男主人】「……地味にダメ出しもらった！？　というか、長ミミは2人に自己紹介とかしてないの？」

【射手男】「あ、名前は聞いたっす！　男主人様とは『ただならぬ関係ですが、詳しくはご主人様から聞いて欲しいです。私の口から……ばっ』って言っただっす！！　最後の『ばっ』て何なんっすか！？」

【男主人】「口に出して、わざわざ『ばっ』って言ってる辺りで色々間違っていることに気づいてっ！！」

【騎士娘】「その……私には『男の甲斐性は大目に見ますので、悪いようにはいたしません』と言われたのですが、なんで“男の甲斐性”の話を、女性の私に言うんでしょうか？」

【男主人】「うん、君はそのまま騎士娘でいて欲しいな（疲）」

【騎士娘】「えっ……ど、どういことですっ！？　わ、私は頑張りますから！　見捨てないで下さい！！（ひしっ）」

【男主人】「い、いや、見捨てるとか、そういう話じゃなくてっ！？」

【長ミミ】「ただいま戻りまし………戻ってくるのが少し早すぎたでしょうか？」

【男主人】「変な空気の読み方をするなー！！」

第145話『計画のために、根回しをしていた』

草原と平穩の国：王宮（王子執務室）

【副官女】「失礼します」

【王子様】「お？ どうした？」

【副官女】「いま少しよろしいでしょうか？ 男主人様からの手紙が届きました」

【王子様】「そっちの方が重要だな。見せてくれ」

【副官女】「こちらです」

【王子様】「（ピツ）……………むう（悩）」

【副官女】「……………いかがされましたか？」

【王子様】「副官女、今、担当している中で急ぎの仕事はあるかな？」

【副官女】「3人分の日常業務とたまに2人への後方支援を行なっています、とくに急ぎの仕事は……………」

【王子様】「よし、1つ仕事を任せた！ お父上の東公爵と相談して、この仕事に当たってもらいたい」

【副官女】「えっと、この仕事と言われましても……………」

【王子様】「この手紙を読んでみる」

【副官女】「拝見させていただきました……………これは、本当の情報でしょうか？（悩）」

【王子様】「男主人がボクたちに嘘をつく理由がない、それにその手紙には、ちゃんとボクと男主人の間にしか分からない符丁が書かれているから、偽造とも考えにくい」

【副官女】「しかし、「鉾山と武勇の国」の政変が起こるから、それに合わせて戦争を停戦に導くなんて……………」

【王子様】「可能、だろうね」

【副官女】「……………」

【王子様】「どういう手段がとるかは分からないけど、鉦山軍総勢約8万人のほぼ全てを投降させるつもりだ」

【副官女】「投降させた場合、食料などにその帰国に要する必需品の準備と支給支援、ですか……………」

【王子様】「うん、すつごく面倒そうな仕事だよね」

【副官女】「……………」概算でも相当な予算が必要になりますか」

【王子様】「まあね、仮に兵士1人あたり帰国に2万イエン掛かるとして、約16億イエンか」

【副官女】「準備にも諸経費が掛かりますから……………」まず、その予算をどこから捻り出すか」

【王子様】「第十一師団に秘密の隠し予算とかあったりしない？」

【副官女】「ないとは言いませんが、“飢えたクマに一粒の小麦”という感じになります」

【王子様】「あ、そっか……………」あるところから出させればいいんだ」

【副官女】「心当たりがあるのですか？」

【王子様】「ん、叔父上はこの国でも有数の資産家だからね。この際、快く協力してもらおう」

第146話『再会した日が、昔のように感じていた』

森林と調和の国：“棘”の集落（特務隊天幕）

【男主人】「さてと……」

【長ミミ】「お疲れ様です。ワインなどをお持ちしましょうか？」

【男主人】「いや、いらない……というか、色々と話が聞きたいんだけど。まず、なんでここにいるんだ？」

【長ミミ】「馬に乗って来たからでしょうか？」

【男主人】「いや、そうじゃなくて！ 屋敷で、僕の帰りを待つているって話じゃなかったっけ？」

【長ミミ】「その件については明確な返答をしておりませんが？」

まあ「いつてらっしゃいます」とお見送りをしましたので、その事が誤解を招いた可能性については、主観の違いかと思われます」

【男主人】「ええい、予算会議の文官長の真似か！！」

【長ミミ】「いえ、商工ギルドの副ギルド長の真似でしたが」

【男主人】「そんな違いが分かるかっ！！」

【長ミミ】「ポイントは、“可能性”という単語を多用する所です」

【男主人】「無駄な知識過ぎる！ まあ、ここにいるのはいいでしょう。昼の件は一体どういうことかな？」

【長ミミ】「ご主人様が苦境に立たされていたようでしたので、思わず援護を……と」

【男主人】「……確かに、あの時は討論のアドバンテージをとられて困っていたし、概ねこっちの思惑通りに話は決着したけど……その部分については感謝している」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「で、“耳^{みみ}問^とい”って、何のこと？ すくなくとも、僕は初めて聞く単語だったんだけど」

【長ミミ】「以前、「エルフ族の女性は、異性が耳に触ると子供ができる」という話をしたのを覚えていらっやいますか？」

【男主人】「昼にも言われたけど、僕が長ミミに“耳を触っていいか”と聞いた時の話だよね？　なんだか、懐かしい感じだけど、長ミミが僕の屋敷で働き始めた頃の話だから、そんなに昔の話でもないか」

【長ミミ】「その俗説になった元となるエルフ族の古い慣習が“耳問い”なのです。例えば、エルフ族では一生涯の友人を“同じ耳をしている”など、耳を重要視する風習があります。

耳に触らせる行為は、同性同士なら不破の友情や忠誠を意味し、異性同志の場合……その、子を生す様な関係になることを意味します」

【男主人】「……つまり、“耳問い”ってのは、求婚みたいなもの？」

【長ミミ】「みたいなではなく、まさに求婚、そのモノです」

【男主人】「あー……」

【長ミミ】「……知らずに言っているというのは気付いていました、あの時は、本当に内心すぐドキドキしていたんですよ？」

【男主人】「うっ……その割には、“性的興奮は催しません”とか平気な顔をしてたような」

【長ミミ】「何を言っているのか分からずに、口走っていただけです。それに、あの時だって、イヤだとは、一言も、その、言いませんでしたし……」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「魔術師さん……………私を、お嫁さんに、もらってください、か？」

第147話『エルフ族の儀礼服で、着飾っていた』

森林と調和の国：“棘”の集落（特務隊天幕）

【男主人】「では、今回の作戦の説明をしたいと思う」

【射手男】「えーと、男主人様？ その、作戦の説明はいいんですけど、後ろに立っている長ミミさんは、いいんすか？」

【長ミミ】「射手男様、私はメイドですので、調度品のように扱ってくださいませ」

【男主人】「いや、それは理由になってないし。一応、長ミミも今回の作戦について、協力してもらってから問題はない。そもそも“棘”の氏族長の娘らしいから、関係者といえば関係者なんだ」

【射手男】「……なんで、そんな人にメイドにしてるっすか？ 勇者過ぎるっす！」

【男主人】「語るに語れない事情があるんだ、とりあえず、察しろ！！」

【射手男】「お、おおっ！？ なんか、分からないけど、分かったっす！ で、それと逆に騎士娘はどうしたっすか？」

【男主人】「ああ、騎士娘には、重要な役目があるからな。事前に確認のため、用意してもらってるんだ……そろそろかな？ 長ミミ、連れてきてもらっていいか？」

【長ミミ】「かしこまりました」

【騎士娘】「（部屋の外から）お、押すな。す、少し心構えというものが欲しいっ！」

【長ミミ】「（部屋の外から）こんなことで心構えなど必要ありません。さあ、入ってください」

【騎士娘】「うあっ!？」

【射手男】「お？ おおゝ！」

【男主人】「ん、いい感じじゃないか？ 少し時間が掛かっていたみたいけど」

【長ミミ】「私が薄化粧を施しまして、後は本人が入るのに少しゴネまして……」

【騎士娘】「うううつ、なんで、こんな格好を……」

【長ミミ】「こんな格好と言われましてもは、“棘”の氏族の女戦士がまとう儀礼服ですが？」

【騎士娘】「だからと言って、こんな白くてヒラヒラとした服装なんて……」

【射手男】「別に肌が見えているわけじゃないのに、なんで、そんなに恥ずかしがっているっすか？」

【騎士娘】「や、夜会用のドレスみたいで恥ずかしいじゃないかって……」

【男主人】「うん、似合っているんだし、問題はないみたいだね」

【騎士娘】「あううつ……」

【男主人】「何でもやりますって言ってくれただろう？ 今回の作戦の主役は、騎士娘なんだから、頑張ってもらおうよ」

第148話『鉾山軍に、不安が広がっていた』

森林と調和の国：鉾山軍野営地

SE（馬が駆ける音）：パカパツ、パカパツ、パカパツ……

【早駆兵】「緊急っ！ 緊急っ！！」

【小隊長】「おい、どうしたっ！？」

【早駆兵】「司令部の天幕はどちらですか！？ 皇都にて、クーデター及び一般市民の反乱が発生、至急、指令部への取次ぎをお願いします！！」

SE（ざわめく音）：ザワツ……

【巡回兵】「クーデター？」

【見張兵】「反乱……？ お、皇都に何があったんだ？」

SE（ざわめく音）：ザワザワ……

【小隊長】「司令部は、こ、こっちだ！！」

【早駆兵】「ありがとうございます！！」

【弟皇子】「バカなっ！？ 鉄皇女がクーデターを起こしただと！？」

【早駆兵】「はっ、私が皇都を発った時には、すでに現皇帝様と兄王子様の身柄は拘束されたとの情報が飛び交っております」

【洞將軍】「何かの間違えではないのか？」

【早駆兵】「私が最も早く到着したようですが、後に続報が届くかと思われます。真偽はそこで分かるかと……」

【岩將軍】「……皇都が落ちたとなれば、補給もままならん。下手すれば我らは、このまま立ち往生しかねんぞ」

【弟皇子】「ならば、どうするのだ!!」

【洞將軍】「今は、正しい情報が届くのを待つべきかと」

【岩將軍】「そんな悠長な暇があるか！ 今すぐ撤退の準備をするべきかと存じます!」

【洞將軍】「何を浮ついているやら、戦場の情勢は常に変わっているのだ。正しい情報を持たずに動けば、手痛い損害を受ける」

【岩將軍】「傷に気づかねば、致命傷にだってなるのだぞ！ 早いうちに対処すべき問題だ!」

【弟皇子】「くそっ……くそっ……」

【小隊長】「申し上げます!! 野営軍上空に、光の怪物が出現しましたっ!……!」

第149話『彼らは、覚悟を決めていた』

森林と調和の国：鉾山軍野営地

SE（ざわめく音）：ザワザワ……

【見張兵】「……………」

【巡回兵】「……………」

【見張兵】「…………ど、どうすればいい？」

【巡回兵】「どうすればいい、ってオレに聞かれてもなあ」

【見張兵】「さっきは、本当の話かな？」

【巡回兵】「皇都でのクーデターか……………」

【見張兵】「俺の村は、皇都から結構近いんだ」

【巡回兵】「今、司令部のほうでお偉いさんが会議をしてるだろ？
オレら下っ端の考えることじゃないさ……………」

【見張兵】「あんたは不安じゃないのかよ！　もしかしたら、この
まま……………」

【巡回兵】「しっ、今は誰が聞いているか分かんないんだぞ」

【見張兵】「俺、夜が明けに紛れて、脱走しようかと思う」

【巡回兵】「……………」

【見張兵】「あんたも、一緒に逃げないか？　その、あんたには感謝
してるんだ」

【巡回兵】「……………」

【見張兵】「俺はさ、剣術なんて好きじゃないんだよ。訓練だって
死にそうな思いでやってたんだ。訓練の時だけじゃなくて、野営地
でもさ、色々と助けてもらった恩は忘れてない」

【巡回兵】「…………止せよ。オレは、別に恩を売ったつもりはな
い」

【見張兵】「あんたから見れば、些細なことだったかもしれないけど、俺には十分、恩だと思えることだったんだよ。だからよ、一緒に逃げてくれないか？」

【巡回兵】「……………」

【見張兵】「……………」

【巡回兵】「…………少し休むぞ、逃げるためには体力を温存しなきゃな」

【見張兵】「っ！？」

【巡回兵】「一つ言っておくがな、オレも剣術は好きじゃないんだ（ニヤッ）」

【見張兵】「あは、あはははは……………」

【巡回兵】「ふ、ふふふふ…………ん？」

【見張兵】「どうした？…………！！！？…なん、だ？あの、巨大な光る蛇みたいなのは……………」

第150話『女騎士は、人の思いと力を信じていた』

森林と調和の国：鉾山軍野営地

【男主人】『拝聴せよ……』

【見張兵】「声が……聞こえる？」

【男主人】『我は、“救森の魔術師”と呼ばれる者なり、鉾山軍及び森林軍全ての兵士に告ぐ』

【巡回兵】「救森の…… “不死の魔人” の声かつ！？」

【見張兵】「それは、7年前の戦争の……（ゾクリ）」

【男主人】『拝聴せよ！ 我が主^{あるじ}より、この場にいる全ての兵士向けた言葉を！』

【騎士娘】『初めまして皆さん……』

【見張兵】「今度は女性の声と姿が……見える」

【巡回兵】「オレもだ……」

【騎士娘】『私は、草原と平穏の国の騎士娘と言います。皆さんにお願いがあります。武器を捨ててください。』

この戦争は、私と“救森の魔術師”の名の下に預らせてください』

【見張兵】「預かる……？」

【騎士娘】『……人は群れなければ、弱い存在です。群れには“決まり”があり、“決まり”がなければ、群れることはできません。しかし、皆さんは、自分が群れの一員であると同時に1人の人間

であることを自覚していますか？

この戦争は片手に足るほどの人数の意味で、起こされたものでしょう。

しかし、その戦争を続けているのは、皆さん1人1人の意思であるはずです。

1人が武器を捨てただけでは戦争は終わらないかもしれませんが、10人でも無理です。100人でも足りないかもしれません。1,000人が武器を捨てたならば、少しだけ争いが減るかもしれませんが。10,000人が武器を捨ててくれたら、戦争が終わるかもしれません。

1人と10,000人の違いはどこでしょうか？ 私はそこに大きな違いはないと思います。

10,000人が武器を捨てると言うことは、武器を捨てる勇氣を持った1人が10,000人いたと言うことです。

だからこそ、私は、皆さんにお願いをするのです。武器を捨ててください、と』

第151話『作戦が一段落し、ドタバタしていた』

森林と調和の国：草原軍野営地

【騎士娘】「……武器を捨ててください、と」

【男主人】「……………」

【騎士娘】「……………」

【男主人】「……よし、もう良いよ」

【騎士娘】「はぁ〜き、緊張しました。ただ、大丈夫でしたか？（ぶるぶる）」

【男主人】「うん、大丈夫大丈夫、上出来だよ」

【騎士娘】「け、剣武会の準決勝よりも緊張しました。少し怖かったですし……ほら、まだ手が震えてます」

【男主人】「でも、その騎士娘の頑張りは無駄にはならないよ」

【騎士娘】「私は頑張りと言える程のことはやっていません、全部、男主人様に言われたとおりによっただけです」

【男主人】「それは違うよ。僕は、戦争をやめるように訴えかけて欲しいと、騎士娘に頼んだだけだ。さっきの言葉は、騎士娘が自分で考えて紡いだ言葉だろう？

そうじゃなければ、怖いと思うほど緊張することなんてないさ。

そして、本音で語った言葉はきつと届く……僕ではなく、騎士娘がこの戦争を終わらせるんだ。ま、失敗したら、僕のフォローが悪かったってことで、また次の作戦を考えればいいさ（微笑）」

【騎士娘】「あう……………」

【男主人】「ん？ どうしたの？」

【騎士娘】「い、いえっ、なんでもっ、ありません！」

【男主人】「そう？ 疲れたなら、ここで休憩してて。僕は堅騎士殿の所へ、様子を伺いに行くから」

【騎士娘】「疲れていません。疲れていたとしても休んでなどいられませんか。私も向かいます」

【男主人】「じゃあ、一緒に行こう」

【騎士娘】「えっと……すみません、その前に、いつもの服に着替えたいのですが」

【男主人】「せっかくだし、そのままでもいい」

【騎士娘】「こんな軽装では心許こころやすみないです」

【男主人】「んー。でもそれ、エルフ族の技術で織られた特殊な布を使われているから、下手な鎧より丈夫だよ？」

【騎士娘】「ええっ!？」

【男主人】「衝撃や斬撃にもある程度耐えれて、一般的な魔術師の攻撃魔術なら威力を半減以下にするし」

【騎士娘】「う、うそですよね？」

【男主人】「一揃いで800万イェンくらいじゃない？」

【騎士娘】「脱ぎますっ、今すぐ脱いでお返ししますー!!」

【男主人】「うわあ、人の目の前で脱ぐなあー!!」

【長ミミ】「……………(うんうん)」

【男主人】「長ミミっ、静かに入って、頷うなずいただけで、出て行かないでー!!」

第152話『妖艶女は、忍び込んでいた』

草原と平穏の国：郊外の屋敷

【妖艶女】（つたく、こんな盗賊紛いのこと、本当はアタイの役割じゃないんだけどね、っと）

【妖艶女】（近くに人の気配はない……例の人質がいるのは、確か2階の廊下の突き当たりの部屋……階段はどっちだ？）

【妖艶女】（……………？）

【妖艶女】（……………どういうことだ、これは？ 人の気配がなさ過ぎる）

【妖艶女】「もう、移動した後なのか……」

【給仕娘】「いいえ、彼女はまだここにいますよ」

【妖艶女】「……!?」

【給仕娘】「ワタシの指示で、見張りは全員この屋敷から出て行ってもらったけど、彼女は2階の廊下の突き当たりの部屋で、静かにしているわ」

【妖艶女】「ア、アンタは……なんで、ここに居、ぐっ」

【給仕娘】「くすくす、男を誑（こ）（たら）し一込むのが自分だけの専売だと思わないで欲しいわね。もっとも、ワタシは聞き出すためじ

やなくて、聞かせるのが目的だったけど」

【妖艶女】（ヤバイ、これは……畏に嵌められた……）

【給仕娘】「思っていた以上に素敵ね、アナタ。“戦い方を知らない”割には、よく、ワタシの殺気に耐えているわ」

【妖艶女】（殺気だって……？ 殺気だけで、こんなに重圧が……手足が動かない……）

【給仕娘】「そんなに人を化け物のように見ないで欲しいわね。アナタは、ワタシと同じ化け物の手駒なんでしょう？」

【妖艶女】（化け……物？）

【給仕娘】「分かってないの？ それとも知らない振りかしら？ アナタの飼い主は、男主人なんでしょう？ ワタシが化け物なら、カレだって十分化け物よ。ううん、カレはワタシ以上の化け物よ……（くすくす）」

【妖艶女】「……！」

【給仕娘】「怒っちゃった？ でもね、アナタよりワタシの方がカレのことをよく分かっているのよ。だって、ワタシはカレと同じ化け物なんだから……」

【妖艶女】「……それ以上口を開くな！ アナタの話はこれ以上聞きたくない……！」

【給仕娘】「ふふふ、ワタシの殺気を打ち破るほど、精神が高揚しちゃったのね」

【妖艶女】「アナタの目的は何なんだ……！」

【給仕娘】「目的なんかないわ、生きているのだって、ただの暇つぶしですもの……さあ、悪い化け物の呪縛から抜け出した王子様は、囚われの姫の元へ向かう権利があります。どうぞお通り下さい（優雅に一礼）」

【妖艶女】「くっ……」

第153話『囚われの姫を、救出していた』

草原と平穏の国：郊外の屋敷

【給仕娘】「おや？ どうしたのかしら……？ 囚われのお姫様が
いる部屋は向こうよ？」

【妖艶女】「……急に、どうぞお通り下さいと言われて、どうもど
うも、と進めるわけがないだろ」

【給仕娘】「ん〜、望み通りサツクリ殺してあげてもいいのだけ
ど……」

【妖艶女】「！？」

【給仕娘】「アナタを殺そうと思えば、いつでも殺すことができた
の。そんなことも分からないのかしら？ おバカさんは、ちよつと
ワタシ好みではないわね」

【妖艶女】「一つ聞かせてもらおうか、なんでアタイを見逃す……
？」

【給仕娘】「ああ、そつか、そんなことを気にしてたの！
アナタが男主人の手駒だと分かったからよ。同じ化け物として、
カレには敬意を払っているの。」

別にアナタだけなら、さつさと殺してもいいんだけどね。カレが
関わっているから、サービスしてあげているのよ？ 運が良かった
わね……これ以上ワタシをイライラさせるつもりなら、話の続きを
聞く？」

【妖艶女】「……いいえ、あなたの気まぐれかも知れないけど、一
応感謝するわ」

【給仕娘】「ふふふ、どういたしまして」

【妖艶女】（運が良かった……^{しや}瘡^{くず}だけど、今は人質とやらを確認す

るのが先だ)

SE (扉を開く音) : カチャ、キィ……

【人質娘】「誰……、ですか？」

【妖艶女】「夜分に失礼します。安心してください、アタイは貴女の味方だ。起きていてくださってちょうど良かった。ここから逃げるぞ」

【人質娘】「ダメ、わたしが逃げたら、あの人に迷惑が掛かつちゃう」

【妖艶女】「逃げたら、迷惑が掛かる？」

【人質娘】「ええ、わたし逃げたら、あの人にヒドイことをすると……」

【妖艶女】「……なるほど、それには逆もあるな。きっと、その貴女がいうあの人も、貴女のことを盾にして、何か脅されているんだ」

【人質娘】「そんな……じゃあ、わたしが大人しくしていたことは無駄、だっただんですか？」

【妖艶女】「いや、それはそれで良かった。もし貴女が暴れたり、反抗しようと思ったら、貴女がひどい目に合わされていたな。とにかく、アタイを信じて一緒に逃げてくれるか？」

【人質娘】「……はい、分かりました」

【妖艶女】「ところで、貴女のアの人とやらは、いったい何処のどいつなんだ？」

【人質娘】「ええ、あの人の名前は……」

第154話『戦争は、停戦に向かっていた』

森林と調和の国：草原軍野営地

【男主人】「堅騎士殿、状況はどうなっている？」

【堅騎士】「おお、男主人殿。見事な扇動だったな……状況は概ね予想以上の効果が及ぼしている。すでに5千人以上の投降者が出たと思われる。ああ、騎士娘もよく頑張った」

【騎士娘】「はっ、ありがとうございます。師団長」

【部下男】「失礼します。こちらに男主人様がいらつしやると」

【男主人】「おっ、ここだここ。ご苦労だったな。堅騎士殿、騎士娘……紹介します。第十一師団のナンバー3の部下男で、今回の作戦におけるもう1人の立役者です。それで、首尾しゅびは？」

【部下男】「任せてください。鉦山軍の司令部の天幕に催眠香を焚いてきましたから、敵の首脳陣は、全員しばらく意識が戻らないでしょう。眠りから覚めた時には、もう遅いと思います」

【堅騎士】「ほう、敵の中心部まで忍び込んだと言うのか？」

【部下男】「まあ……種を明かせば、敵の正式な武装一式をまともに、堂々と乗り込んだだけです」

【堅騎士】「そうだとしても、それ自体は並大抵の度胸ではできないことだ。素晴らしい」

【射手男】「失礼するっす。堅騎士様、敵の投降者がそろそろ8千人に超えたしそうつす。あ、男主人様たちもここにいたっすか」

【堅騎士】「敵の1割が投降したか、この調子なら、完全に鉦山軍は瓦解しそうだな」

【射手男】「男主人様の作戦が大成功っすね」

【男主人】「みんなの協力のおかげだよ」

【騎士娘】「そんなことはありません！ 確かに私たちも力を貸したかもしれませんが、男主人様がいなければ、今回の作戦は、そもそも提案されることすら無かったと思います！」

【射手男】「その通りっす……だから、残念っす。男主人様は、この戦争では手柄を立てないで……欲しかったっす」

SE（短剣が肉に刺さる音）：ドスッ……………

【射手男】「男主人様には、毒が一切効かないと聞いてるっす。この短剣は、毒ではなく……“呪い”によって、相手を殺すものらしいっす。

……おれらのために、死んでくれっす」

【男主人】「っ！？」

【射手男】「男主人様が手柄を立てた時、立ててしまった時に戦場にいる間に刺すように言われたっす。」

きつとおれもすぐに後を追うから先に逝って欲しいです。

……おれは、自分が生きて帰るのが大事っすけど、人質娘の命の方が何倍も大事っすから」

SE（人が倒れる音）：ドサッ……

第155話『飛び乗って、起こされていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【半ミミ】「……………えいつ（ボスッ）」

【男主人】「うわぁっ!？」

【半ミミ】「わわわっ!？（コロン）」

【男主人】「…………半ミミ？ いま、寝ている僕の上に飛び乗ってこなかった？」

【半ミミ】「…………おはようございます！ とおさま！」

【男主人】「…………半ミミ、いい子だから、教えて欲しいんだけど、僕に飛び乗った？」

【半ミミ】「はい！」

【男主人】「なんで？」

【半ミミ】「ねてたから！」

【男主人】「僕は寝てる人に飛び乗っちゃダメって言ったよね？」

【半ミミ】「でも、かあさまが、なかなか起きなかったら、やつちやてもいいって…!」

【男主人】「半ミミは、とおさまと、かあさま、どっちの言うことを聞くのかな？」

【半ミミ】「かあさまです！（きつぱり）」

【男主人】「ぐふっ…………あれ、目から汗が…………」

【半ミミ】「あー、とおさま、またねたー！ おきてくださーいー
!」

【男主人】「僕はもうだめだー。半ミミが、ほっぺにキスしてくれないと起きれないー」

【半ミミ】「まあ、しかたありませんねー（ちゅ）」

【男主人】「おおっ、元気になってきたぞ」

【半ミニ】「きょうは、とくべつですよー」

【男主人】「はい、ありがとうね。かあさまたちは、食堂かな？」

【半ミニ】「猫のおねえちゃんと、いつしよに朝ごはんを作ってました！ だから、わたしが、とおさまを起こしにきました！」

【男主人】「それじゃあ、一緒に行こうか。今日のご飯はなんだろうね」

【半ミニ】「わたしはイチゴのジャムがいいです！」

【男主人】「そうだね。まだ残ってたはずだから、出してもらおうか」

【半ミニ】「わーい」

SE（扉の開閉音）：ガチャ、ギイ、ボタン

【男主人】「おはよう」

【猫ミニ】「おはようございます、旦那様」

【半ミニ】「かあさま！ とおさまをつれてきました！」

【長ミニ】「お疲れ様、半ミニちゃん。それと、おはようございます、あなた」

第156話『緩やかな時が、流れていた』

草原と平穏の国：男主人邸

【男主人】「……………あれ？」

【長ミミ】「どうかしましたか、あなた？」

SE（お茶の準備をする音）：カチャカチャ……………トポトポ……………

【男主人】「今さ、僕のことを呼んだ？」

【長ミミ】「いいえ……………空耳じゃないですか？ はい、どうぞ」

【男主人】「ありがとう。……………空耳、かなあ？」

【長ミミ】「ええ、半ミミちゃんは、猫ミミさんと一緒に部下男さんの家へ行っていますし」

【男主人】「（ずずっ）あー、そういえば、久しぶりに2人きりだなあ」

【長ミミ】「なんだかんだで誰かがいますからね。半ミミちゃんも、まだまだ手が掛かる子ですし。」

くすっ、半ミミちゃんと言えばプロポーズされたみたいですよ。それも2人から」

【男主人】「ぷ、ぷろぽーずっ！？ あ、相手は誰だ！？」

【長ミミ】「もちろん、王子君と黒下君ですよ」

【男主人】「くっ、たとえ王太子といえど、簡単にうちの娘はやらんぞっ！ 今度の座学の際にとつちめてやる」

【長ミミ】「大人げない。あなた、子供同士の可愛らしいごっこ遊びみたいなものですよ？」

【男主人】「うー、そう言っただってなあ？」

【長ミミ】「そんなことばかり言っていると、半ミミちゃんに『

とおさま、ジャマ!』とか言われますよ?」

【男主人】「ぐはっ……………それは死ぬる。主に心理的に……………」

【長ミミ】「まったく……………2人きりの時くらい、私のことを見てく
ださいませんか?」

【男主人】「あー、うん、その、だな?」

【???】「……………さ……………ま……………っ」

【男主人】「……………あっ」

【長ミミ】「いきなり辺りを見回されて、どうしたのです?」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「あなた……………?」

【男主人】「ああ、そっか、うん、そういうこと……………か」

第157話『幸せな呪いから、目を覚ましていた』

森林と調和の国：“棘”の集落（氏族長宅）

【男主人】「ん、んん……………」

【長ミミ】「！？ ご主人様！ 気が付きませんでしたかっ!？」

【男主人】「ああ、戻ってこれた……………」

【長ミミ】「戻って？」

【男主人】「それより、僕が倒れてから、どのくらい経ってる？」

【長ミミ】「今はもう日が落ちるくらいです。…………無理に起き上がらないで下さい!!」

【男主人】「大丈夫、思ったよりは悪い気分じゃない。状況は？」

【長ミミ】「…………堅騎士様が中心となって、投降兵の収容と鉾山軍との調停の準備をしています。最も事態を收拾させる途中で、一般兵による上官への殺傷行為などがあり、まだ少し混乱が残っているようです。」

それでも、今回の戦争は停戦に向かう流れです。ご主人様が仰っていた「鉾山と武勇の国」の政変が決め手だったようです。

この後は三ヶ国同士の上層部による話し合いによって決着をつける形になると思われます」

【男主人】「そっか…………僕の出番は、もう終わり、かな？」

【長ミミ】「はい、ですから、ゆつくりと休まれてください。怪我は私が魔術で治せたのですが、今まで正体不明の“呪い”のせいで、ご主人様の意識が戻らなかったのですから……………」

【男主人】「いや…………多分、もう大丈夫だよ。“呪い”はもう解けていると思う」

【長ミミ】「ご主人様が解呪されたのですか？」

【男主人】「なんとかね」

【長ミミ】「流石さすがです」

【主人公】「（小声）……多分、僕1人の力じゃなかったけど」

【長ミミ】「何か仰いましたか？」

【主人公】「いいや……喉が渴いたな。お茶もらえる？」

【長ミミ】「あ、はい、ただいまっ！！」

SE（駆けて行く音）：パタパタパタ……

【主人公】「“欲望を以って心を閉ざす呪い”といった所か……それで、あんな空想に囚われた」

【主人公】「いや、まったく……自分の過去の失態を見せ付けられたみたいで、少しばかり恥ずかしいな」

【主人公】「……………戦争は終わった、か」

第158話『草原と平穏な国へ、帰ってきていた』

草原と平穏の国：王宮（王子執務室）

【男主人】「失礼します。ただいま帰りました」

【王子様】「ん、ご苦労様。よく帰ってきたな……」

【男主人】「ええ、お陰様で無事に帰ってきました。後方支援、ありがとうございました。僕が向こうを出る頃には、ずいぶんと落ち着いていました」

【王子様】「お礼なら、今まで予算を取っておいてくれた、叔父上に言ってくれ」

【男主人】「……まさか」

【王子様】「話をしたら、快く協力してくれたぞ。今回のような時のために残しておいた予算の全て出してくれた」

【男主人】「ははっ、それはずいぶんと胴回りがスッキリしたことでしょうね」

【王子様】「お礼なら妖艶女にも言っておくれ、今回はずいぶんと無茶なことをしたようだぞ」

【男主人】「そうですか……」

【王子様】「ところで、一つ聞きたいことがあるんだが」

【男主人】「何ですか？」

【王子様】「……この「鉾山の武勇の国」からの書状、読んでみる」

【男主人】「……」

【王子様】「今回の戦争における双方の不幸な行き違いウンヌンと、簡単に言えば『うちは新しい国になったから、良いお付き合いをしたい。そのための大使として、男主人さんじゃなきゃ、イヤよ（はぁと』というところか？」

【男主人】「……」

【王子様】「先手を打たれた感が拭^{ぬぐ}えないな。まあ、それよりもだ……どうやって鉄皇女と知り合いになった？　なんで、お前が口説かれる！？？」

【男主人】「口説かれてませんよ！！　『殿方は少しくらい不器用な方のほうが良いですね』って、扱いやすそうだからって、暗に書かれてるじゃないですか、ここに！」

【王子様】「ばっか、口説き文句にしか見えないぞ！　なんて羨ましいー！」

【男主人】「邪推のしすぎです！　っていうか、美女妹に言いつけますよ！」

【王子様】「お前っ、それは卑怯だろ！！　それに今は大事な時期なんだから、変に興奮させるなよ！　流産したらどうする！！」

【男主人】「はっ！？　流産！？！？」

【王子様】「おっと、驚かせようと思ってたのに……半年後には伯父さんだな、お義兄さん」

【男主人】「十分驚きましたよ…………やることはやってたんですね」

【王子様】「もちろん、愛すべき奥さんだからな」

第159話『女2人で、ヤケ酒を呷っていた』

草原と平穩の国：男主人邸

【妖艶女】「おっと、グラスが空になったな、ほら……（トポトポ）」

【副官女】「ああ、ありがとうございます。では、ご返杯（トポトポ）」

【妖艶女】「で、えーと、なんの話をしたわけ？」

【副官女】「長ミミさんが庭に出て行ったけど、追わなくていいんですか？　っていう話です」

【妖艶女】「そうだった。アタイよりもアンタはどうなのさ？」

【副官女】「……雰囲気、違うんですよ。こう、帰ってきてから、明らかに男主人様の彼女を見る眼差しが！　いくら疎い私だってピンと来ます！」

【妖艶女】「そうだね。アタイも半分は賛成さ。けど、まだ男と女の関係にはなっていないね。そこに付け入る隙はあると見たよ」

【副官女】「なっ、なんて、はしたないなことを！」

【妖艶女】「ふんっ、アンタも何を言ってるんだい。愛して欲しいって事は、そういうことだろう？　貴族ならなおさら、早いうちに跡取りが必要だったりするんじゃないかい？」

【副官女】「そういう話をしているわけじゃありません！　婚前にそういうことをすること自体が……」

【妖艶女】「アンタの男主人様への愛は、そんなもんなのかい？」

【副官女】「そんなことはありません！」

【妖艶女】「よーし、よく言った！　なあに2人がかりで押さえ込めば、コッチのもんだろ」

【副官女】「ふ、2人がかり？」

【妖艶女】「そうだよ、アタイが下半身を押さえるから、アンタが

上半身を押さえて……」

【副官女】「それじゃあ、私が不利じゃありませんかー!」

【妖艶女】「ほ、どこがどう不利なのか、教えてもらうか?」

【副官女】「そ、それは、上の方にはなくて、下の方にあって……」

【妖艶女】「しょうがない、それじゃあ、下の方は先にアンタへ譲
つて……」

【副官女】「そもそもですね!　そういう話をしたいんじゃない
!　はあ……（ゴクゴク）」

【妖艶女】「いい飲みっぷりだね!　アタイも負けられない（ゴク
ゴク）」

【副官女】「ぷはっ、いいですか?　まず……」

【妖艶女】「おっと、グラスが空になったな、ほら……（トポトポ）」

【副官女】「ああ、ありがとうございます。では、ご返杯（トポト
ポ）」

【妖艶女】「で、えーと、なんの話をしてたっけ?」

第160話『月明かりの下で、想いを受け止めていた』

草原と平穏の国：男主人邸（裏庭）

【長ミミ】 「ご主人様、こんな所にいらしたんですか」

【男主人】 「長ミミか……みんなはどうした？」

【長ミミ】 「猫ミミちゃんは、はしゃぎ疲れて眠ってしまいました。副官女さんと妖艶女さんは、まだ飲んでいましたが……」

【男主人】 「2人とも大丈夫かなあ……」

【長ミミ】 「いい大人ですし、二日酔いなどになっても自業自得でしょう」

【男主人】 「まあ、それもそうだけど。なんか、やっと帰ってきたという気がするな」

【長ミミ】 「そうですね。私も……そう思います」

【男主人】 「月が綺麗だな……」

【長ミミ】 「ええ……そう思います」

【男主人】 「この間の話、だけど……」

【長ミミ】 「いつの話でしょうか？」

【男主人】 「あの「森林と調和の国」の集落で再会した時の夜の話し？」

【長ミミ】 「ええ……」

【男主人】 「……」

【長ミミ】 「……」

【男主人】 「先に、少し自分の話を、していいかな？」

【長ミミ】 「どうぞ」

【男主人】 「もっと以前にさ、僕は自分の子供が生まれるのが怖いって話をしたじゃないか？」

【長ミミ】 「ええ……」

【男主人】「だから、誰とも結婚もしないし、付き合う気もない、みたいなさ……」

【長ミミ】「覚えて……います」

【男主人】「まあ、裏を返せば、怖がっているのは、それだけ求めているから……なんだよね」

【長ミミ】「求めて？」

【男主人】「ヒトはさ、必要が無いと思っているものや興味がないものには無頓着むとんちゃくになるんだよ。

憎んでいる、怖がっている、嫌っている……どれも悪いイメージがあるけど、その気持ちが強ければ強いほど、対象に対する想いは深くなっている。

憎んでいるのは愛せなかったから、怖がっているのは手に入れないことへの嘆き、嫌っているのは好きになってもらいたい証……という面もあるはずなんだ」

【長ミミ】「そうなのですか……？」

【男主人】「なあ、長ミミ……」

【長ミミ】「はい？」

【男主人】「月が綺麗だな……」

【長ミミ】「その言葉は先ほども聞きました……」

【男主人】「……」

【長ミミ】「……」

【男主人】「なあ、長ミミ……」

【長ミミ】「はい？」

【男主人】「“耳に触ってもいいかな？”」

【長ミミ】「それは、どういう意味で、ですか？」

【男主人】「うっ……」

【長ミミ】「（じい）」

【男主人】「……」

【長ミミ】「……」

【男主人】「……長ミミ、僕と結婚してくれないか？」

【長ミミ】「そこ、疑問系なんですか……？」

【男主人】「長ミミ、結婚しよう」

【長ミミ】「その前に聞きたい言葉があるのですけど？」

【男主人】「……………僕の子供を生んでくれ？」

【長ミミ】「違います。“あ”で始まる言葉です……………」

【男主人】「……………」

【長ミミ】「……………」

【男主人】「……………長ミミ」

【長ミミ】「はい？」

【男主人】「愛してるよ」

【長ミミ】「ええ、知ってます」

【男主人】「僕と一緒に生きて欲しい」

【長ミミ】「私もです」

【男主人】「結婚しよう」

【長ミミ】「ええ、喜んで」

最終話『手紙が届いていた』

草原と平穏の国：？？？

白髪女おばーちゃんへ

この前は、おみやげをありがとうございました。

おばーちゃんへは、初めて手紙を書きます。

ご主人さまと長ミミさんが、けっこんして、半ミミちゃんが生まれて、色々となやんでいる時に、おばーちゃんに相談できて良かったです。

今だから言えますが、きっと私の初恋は、ご主人さまでした。

こわくて、さびしくて、つらくて、そんな私を助けてくれたのが、ご主人さまでした。

その時のご主人さまは、とってもかっこ良かったです。

……今のご主人さまは、半ミミちゃんにデレデレで、少しかっこ悪いけど。

でも、ようえん女さんみたいに、りゃくだつあい(?)とかは思ってます。

ご主人さまの、およめさんは、やっぱり長ミニさんだと思っからです。

ご主人さまに、やとってもらって、長ミニさんには色々教えてもらって、とっても楽しい毎日でした。

あ、紙がのこり少なくなってきました。

えっと、新しい仕事を、教えてくれてありがとうございました。

ご主人さまや半ミニちゃんは、さびしがっていましたが、がんばります。

それでは、またお手紙書きますね。

猫ミニより

【若主人】「……………」

【猫ミミ】「……………」

【若主人】「えっと…………もう一度、言ってくれる？」

【猫ミミ】「では、こほん…………お初にお目にかかります。獣人族の猫ミミと申します、ご主人様」

草原と平穩の国の物語（本編）　　ゝ完ゝ

あとがき

終わった……。この作品を書き終えた時の気分は、まずこの一言に集約されます。

おかげさまで1度の休みもなく毎晩連続で更新しました。
なけなしの拙い執筆力を、搾り出し続けてきた苦労の全てが報われた気分です。

無事に本編の完結できたのは、見に来てくれた皆様のご声援があったことです。

この場を持つて、感謝の意を伝えたいと思います。
本当にありがとうございました。

ここで『エルフがメイドさん』の裏話を一つ。

【主人公】「耳に触らせてもらっていい？」

【長ミミ】「ご主人様、エルフ族は耳を弄られても安易に性的興奮は催しません」

【主人公】「そ、そうなの？」

この3行のネタが、全ての始まりでした。

「ファンタジーなエロいネタで、エルフの女性が耳を弄られると、性的に興奮するってあるじゃん？ クールなエルフのメイドさんが『ご主人様。それは幻想です』とキツパリ切り捨てるのって面白い？」

とまあ、「あるあるネタ」をネタにしただけの3行が、まさかここまで長い話になるとは思っても見ませんでした。
何があるか、本当に分かりませんね。

さて、話はつきませんが、ここいらで今後の予定を。

すでにお気づきの方も多いと思いますが、『攻撃魔術が使えない魔術師』というシリーズを書き始めています。
よければ、そちらの方も応援いただければと思います。

最後にあとがきを読んでくれた方に、オマケとして、次のページに1話分を載せています。
読んで、ニヤリとしていただければ幸いです。

では、改めて、ここまで読んでくれた皆さんありがとうございました！

ひとまず、これにて失礼いたします！

オマケ『君と一緒にいることを、約束していた』

森林と調和の国：草原軍野営地

【幼ミミ】「あの……」

【魔術師】「ん？ ごめんなさい、起こしてしまいましたか」

【幼ミミ】「ううん、眠ってなかったから……」

【魔術師】「そうですか。僕ももう寝ますから、幼ミミも早く寝なさい。そうじゃないと明日が大変ですよ」

【幼ミミ】「その……」

【魔術師】「どうかしました？」

【幼ミミ】「いっしょに寝ていいですか？」

【魔術師】「……」

【幼ミミ】「ダメ……ですか？」

【魔術師】「ダメじゃないですが、まあ、しょうがありませんね」

【幼ミミ】「……ありがとう！」

【魔術師】「もう少しで、大きな集落に着きます。そこだったら、幼ミミのおじさんかお婆さんがいるでしょう。だから、安心してください（ぎゅ）」

【幼ミミ】「もし、わたしのおじさんもお婆さんもいなかったら？」

【魔術師】「そうだね、そうしたら僕たちと一緒に来る？ 僕が面倒を見てあげるよ」

【幼ミミ】「ほんとっ！？ ずっとわたしと一緒にいてくれる？」

【魔術師】「ええ。でも、大丈夫ですよ、きっと幼ミミのおじさんかお婆さんは見つかるから……」

【幼ミミ】「（小声）……見つからなければいいのに」

【魔術師】「何か言いました？」

【幼ミミ】「ううん。一緒にいてくれるんだよね？ 約束？」

【魔術師】「もしもの時は、ですよ？」

【幼ミミ】「うー……」

【魔術師】「ほら、早く寝なさい」

【幼ミミ】「……はい、おやすみなさい（ぎゅ）」

【魔術師】「おやすみなさい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0347o/>

草原と平穏の国の物語

2011年9月24日16時49分発行